

シルヴァリオ メタモル  
フォシス ~シルヴァリ  
オ ラグナロク  
Side:Capricorn~

斎藤2021

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——創生せよ、己が”勝利”の真実を。

何故、この世にはこれほどまでに地獄が満ち溢れているのか。

ただ一歩前へ進もうとするだけで、奈落の底へ落ちていかねばならないのか。

どうすれば、ただ易しいだけの世界で生きていくことができるのか。

分からない。分からない。辿り着きたい”勝利”への道筋は、今だ不明瞭なまま。

だから私は、今日も摩耗しながら死んだように生きていくしかないのだ。

そんな痴れた生き方しかできない、

しかし同時にそのすべてが、第十北部駐屯部隊・瞬圧山羊、副隊長の人生そのものな

のだ。

シルヴァリオシリーズで語られることのないなかつた黄道十二星座部隊が一角、第十北部駐屯部隊・瞬圧山羊カブリコーンの独自解釈二次創作です。

既存キャラも何人か出てきますが、ほぼオリジナルキャラでお話が進行します。

原作との矛盾点など粗い箇所が多々目立つかと思いますが、寛容なお心でお付き合いいただければ幸いです。

※注意

こちらの作品は「シルヴァリオラグナロク」及び、シルヴァリオシリーズの多分のネタバレを含んでおります。

ヴェンデッタ、トリニティ、ラグナロク、すべてプレイし終えてから読むことを推奨致します。

# 目次

Chapter 0	奈落の渦中に生誕	1
Chapter I	第十北部駐屯部隊	5
Chapter II	酒席と私と隊長と	21
Chapter III	鋼の戦友／Ove	38
Chapter IV	出立、そして／T	49
Chapter V	副隊長の務め／D	67
Chapter VI	斯くして車輪は廻	74
Chapter VII	愛する貴女の幸福	98
Chapter VIII	真実へ／Real	112
Chapter IX	代価、願い、そして	124
Chapter X	貴方の優しさは／Your heart	139
Prologue	無間地獄／int	
h e l l		
Chapter 0	奈落の渦中に生誕	1
Chapter I	第十北部駐屯部隊	5
Chapter II	酒席と私と隊長と	21
Chapter III	鋼の戦友／Ove	38
Chapter IV	出立、そして／T	49
Chapter V	副隊長の務め／D	67
Chapter VI	斯くして車輪は廻	74
Chapter VII	愛する貴女の幸福	98
Chapter VIII	真実へ／Real	112
Chapter IX	代価、願い、そして	124
Chapter X	貴方の優しさは／Your heart	139

Chapter X	運命開戦／Wit	Chapter XV	曇る心は重なつ
h s w o r d s	160	て／C l o u d y	h e a r t s
Chapter XI	奈落の渦中で得た	244	
真相(こたえ)／The answer	173	Chapter XVI	“勝利”の在
Chapter XII	二人の始まり／F	り処／Alvin	r o b e r t s
a t e f u l	e n c o u n t e r	264	
Chapter XIII	重ねた時間	Chapter XVII	天頂の星々
191		／H e r o e s	291
Chapter XIV	私の運命(え	Chapter XVIII	運命はい
206		つも唐突に／The	n e x t
いゆう)／Not	a l o n e	1	h e l
221		308	
Chapter XV	龍虎相搏つ／		
Capricorn	V S		
J a d e			

Chapter XX	黄金腕輪／Dr	Chapter XXV	創生せよ、己
Chapter XXI	神聖魂泉／U	Chapter XXVI	創生せよ、己
Chapter XXII	魔獣変造／	Chapter XXVII	ヒカリ差す世
Chapter XXIII	さようなら、陽溜まりの貴方／Good bye	Chapter XXVIII	貴方と
Chapter XXIV	羽撃け、人界	Chapter XXIX	貴方と
Chapter XXX	の青空へ／To the skyfie	Chapter XXX	生きる新西暦(せかい)／Silver
Chapter XXXI	550	Chapter XXXI	Metamorphosis
Chapter XXXII	453	Chapter XXXII	528
Chapter XXXIII	403	Chapter XXXIII	494
Chapter XXXIV	372	Chapter XXXIV	472
Chapter XXXV	348	Chapter XXXV	472
Chapter XXXVI	348	Chapter XXXVI	472
Chapter XXXVII	348	Chapter XXXVII	472
Chapter XXXVIII	348	Chapter XXXVIII	472
Chapter XXXIX	348	Chapter XXXIX	472
Chapter XL	348	Chapter XL	472
Chapter XLI	348	Chapter XLI	472
Chapter XLII	348	Chapter XLII	472
Chapter XLIII	348	Chapter XLIII	472
Chapter XLIV	348	Chapter XLIV	472
Chapter XLV	348	Chapter XLV	472
Chapter XLVI	348	Chapter XLVI	472
Chapter XLVII	348	Chapter XLVII	472
Chapter XLVIII	348	Chapter XLVIII	472
Chapter XLIX	348	Chapter XLIX	472
Chapter L	348	Chapter L	472
Chapter LI	348	Chapter LI	472
Chapter LII	348	Chapter LII	472
Chapter LIII	348	Chapter LIII	472
Chapter LIV	348	Chapter LIV	472
Chapter LV	348	Chapter LV	472
Chapter LVI	348	Chapter LVI	472
Chapter LVII	348	Chapter LVII	472
Chapter LVIII	348	Chapter LVIII	472
Chapter LIX	348	Chapter LIX	472
Chapter LX	348	Chapter LX	472
Chapter LXI	348	Chapter LXI	472
Chapter LXII	348	Chapter LXII	472
Chapter LXIII	348	Chapter LXIII	472
Chapter LXIV	348	Chapter LXIV	472
Chapter LXV	348	Chapter LXV	472
Chapter LXVI	348	Chapter LXVI	472
Chapter LXVII	348	Chapter LXVII	472
Chapter LXVIII	348	Chapter LXVIII	472
Chapter LXIX	348	Chapter LXIX	472
Chapter LXX	348	Chapter LXX	472
Chapter LXXI	348	Chapter LXXI	472
Chapter LXXII	348	Chapter LXXII	472
Chapter LXXIII	348	Chapter LXXIII	472
Chapter LXXIV	348	Chapter LXXIV	472
Chapter LXXV	348	Chapter LXXV	472
Chapter LXXVI	348	Chapter LXXVI	472
Chapter LXXVII	348	Chapter LXXVII	472
Chapter LXXVIII	348	Chapter LXXVIII	472
Chapter LXXIX	348	Chapter LXXIX	472
Chapter LXXX	348	Chapter LXXX	472
Chapter LXXXI	348	Chapter LXXXI	472
Chapter LXXXII	348	Chapter LXXXII	472
Chapter LXXXIII	348	Chapter LXXXIII	472
Chapter LXXXIV	348	Chapter LXXXIV	472
Chapter LXXXV	348	Chapter LXXXV	472
Chapter LXXXVI	348	Chapter LXXXVI	472
Chapter LXXXVII	348	Chapter LXXXVII	472
Chapter LXXXVIII	348	Chapter LXXXVIII	472
Chapter LXXXIX	348	Chapter LXXXIX	472
Chapter LXXXX	348	Chapter LXXXX	472

Prologue 無間地獄／in the hell

何故、この世はこんなにも地獄なのだろうか。

何故、この世はこんなにも艱難辛苦に満ち溢れているのだろうか。

何故、この世は生まれただけで幸せになれるほど易しくできていないのか。

ああ、本当に。この世がこれほど生き辛い地獄だというのなら。果たして、生を全うするという行為に意味などあるのだろうか？

どれだけ必死に生きていこうと前進したって、運命という悪魔は、そんな安寧を許さない。下卑た絶笑をけたたましく響かせながら、踏破困難な壁を次々と私たちの前に置いていく。苦勞してそれを乗り越えたとしても、次の困難が。また乗り越えても、次の、次の次の次の——終着点など見えやしない。

終わらない。終わらない。人生とは無間地獄だ。

どこに視点を向けても、筆舌に尽くしがたい痛苦が待ち受けている。

そんな茨だらけの道を、どうして歩みたいと思うだろうか？

ああ、大和様お願いします。私はこんな地獄で生きていくのはもう嫌です。

この世に生まれてきて「めでたしめでたし」な易しい世界では駄目なのですか？

強者も弱者も平等に幸せを掴める新西暦——それを望むことは、醜く呪わしいことなのですか？ 誰もが望む、当然な祈りではないのですか？ 誰かが救われないセカイなど、間違っているのではないのですか？

大和様あなただがそれを否定するならば——是非もなし。ならば、私がそれを創り出そう。

こんな新西暦セカイは間違っている。人の生とは、もつと笑顔と幸福で満たされているべきだから。

一切の苦痛がない易しい世界で、どこまでも楽に、平穩に、幸せになりたい——それが、リディア・ウォーライラが掲げる絶対鋼鉄の勝利ねがいの形であるがゆえに——

「……だから私は変われない。結局、楽な方へ流れてしまうから」

それが私の本質である以上、己が掲げる理想を成就できることなど未来永劫あり得ない。

何故ならば、今の世界に变革をもたらすということは、否が応にも私自身が努力しなければならぬから。しかも、並みの努力では済まされない。文字通り、血反吐を吐き散らかしながら前進せねばならないほどの艱難辛苦が待ち受ける道のりだと分かっているゆえに……私は今日も拘泥する。結局、現状維持という思考放棄が一番楽だから。これが、負傷を最小限に抑えるための処世術だと、小賢しくも分かっているから。



私は今日も塵屑のまま。一生このまま、変わらない。塵から生まれた塵は、どこまで行っても塵のままなのだ。磨けば宝石になるなど、そんな御伽噺はあり得ない。

「……どうした、軍人さん。さっきまで可愛く啼いていたのに、そんな難しい顔しちゃって。もうバテちゃった？」

「……ううん、何でもない。ねえ、さっきより激しくして。何も考えられなくなるくらい、雄々しく烈しく、私を乱して」

「言われなくてもそのつもりさ」

爽やかな笑みを浮かべながら、今夜の私の逢瀬人——名前は確かリツクだったか——のピストンがより暴力的なものになる。

淫靡な抽出音が粘性を帯びて空気中に響き渡る。それに混じって流れ出す、私の獣じみた喘ぎ声。さきまでの小難しい思考など、この刹那のうちに飴のように溶け切ってしまった。

ほら、結局私なんてこんなもの。眼前に快楽という名の餌がぶら下がっていれば、迷いなく涎を垂らして食らいつく、ただの獣。俗物。取るに足らない木っ端屑。

変わらない。きっと、無意識下に変わりたくないと願っている。何故なら、変化とはすなわち苦痛であるのだから。単純に、現状が変化するというのは人間にとつて良くも悪くもストレスであるから。私は、ストレスを常に抱えながら生きてきたから。だから

もう、これ以上ストレスを抱えて生きたくない。楽でありたい。

だから。ああ、だから。きつと一生このままだ。一生自分が見る景色を変えられることなく、生きる世界に変革を齎すことなく、無意味に無価値に死んでいく。そんな、路傍の石のような人生。

——そんな痴れた生き方しかできない、しかし同時にそれが、リディア・ウォーライラの全てでしかないのだ。

## Chapter 0 奈落の渦中に生誕す／Lydia warlyla

私は貧しい家の生まれだった。

父親はひたすらに塵屑で、無職にも関わらず賭け事と酒に溺れる日々を繰り返し、家の収入の十割は母の労働によるものだった。

しかし、それも微々たるものだ。

当時幼かった私を育てながらの片手間で稼げる銭など、高が知れている。そんなけなしの稼ぎでさえ、父親の娯楽に全て溶かされる。文句を言ったり抵抗をしようものなら、問答無用で殴られた。私が泣きながら母を庇った時も、およそ子供に振るつていいとは思えない力で頬をぶっ叩かれた。

死んでしまえばいいと思った。こんな塵屑、生きてる価値など毛ほどもありはしない。

死ぬ。死ぬ。死んでしまえ。でなければ、どこか遠い場所へ消えていってくれと。

毎夜毎夜、腫れる頬に熱い滴を垂らしながら、第二太陽かみさまに願っていた。

だからだろうか。

そんな私を哀れに——いや、あるいは、愉快に思ったのか、私が十六歳の誕生日を迎えた日に、その惨劇は訪れた。

父に、犯された。

母が仕事に出掛けている時を見計って、二人きりの時に。あまりにも唐突に。母譲りの自慢のブロンドヘアを馴れ馴れしく撫でながら。欲に塗れた瞳を向けて。

綺麗に育ったな。そうか、お前ももう十六か。ならそろそろ男つてものを教えてやらないとな。何、これも父親としての義務だ。

気にするなよ、俺たち家族だろ——？

などという今思い出しても糞尿を胃袋に流し込められるような不快極まる台詞を羅列しながら……

私は無理矢理脱がされ。股を開かされ。

はじめて  
処女を奪われた。

痛い嫌だと叫び散らした。

その度に殴られた。

やめてやめてと懇願した。

その度に首を締められた。

お前なんか死んでしまえと呪詛を吐いた。

その度に悪魔はけたたましく高笑いした。

……何だこれは？

何故、どうして、私ばかりがこんな惨い目に遭わなければならない？

私は何か、神様に嫌われるようなことをしたか？ それほどの大罰を背負って生まれ落とされた存在なのか？

どうして人は皆平等に幸せになれるのか？

私がこうして犯され痛苦に苛まれてる今も、どこかの誰かは幸せに笑ってるなんて、そんな——理不尽だろう。

おかしいだろう。こんなのってない、有り得ないだろう。

なんで、どうして——

いや、もういい。考えるのは辞めだ。

もう、疲れてしまった。どうとでもなってしまうと、私は抜き差しされる父の肉棒を下腹部に感じながら、今にも崩れ落ちてきそうな古びた家の天井を眺めた。

何もかもがどうでもいい。考えたところでもうにかなる訳でもない。抵抗するほど事態が悪化するだけだ。ならばこのままこの獣けだもののやりたいようにやらせればいいだろう。

そう、私はこの瞬間に悟った。悟ってしまった。

人生とは流されることなのだ。

自分の力ではどうしようもできない困難うんめいに立ち止まってしまった時、人は流されるしかないのだ。

踏破することが出来る者など、選ばれし勝者のみ。

私は惨めな敗北者。ゆえにこの現実を前に、なす術などあるはずもなく。

私はただ無抵抗に、運命に蹂躪うづされるしかない。

……

……

……

あれから、どれだけ時間が経っただろうか。

部屋には、息を荒くした父の下卑た笑い声と、パチユ、パチユ、という粘性の高い抽出音が響くのみだ。

それ以外、何も耳に入ってこない。

何も感じない。

世界の一切を、知覚したくない。

このまま私、塵屑ちりみたいは無価値に死ぬのかなあ——と漠然もくぜんと思った刹那。

絹を裂くような絶叫が、遙か遠くから木霊した気がした。

……いや、気のせいではない。これは、母の声だ。

一拍遅れて私がそれを知覚した瞬間、父の喉仏から刃物が生えてきた。

後ろに視線を飛ばせば、そこには未だかつて見たことがないほど憤激に濡れた母の顔が。

突き刺した刃物を垂直に引き抜いた次瞬、父は屠殺された豚のような断末魔を上げながら血泡を吹き散らかして絶命した。

世界に静寂が訪れる。静寂に包まれているというのに、何故だかその静謐さが不快なほど五月蠅く感じた。

「お母さ、ん……」

耐えきれなくなった私は、カラカラに乾き切った喉を震わせ母に呼びかける。すると母は父に殴られた時のように激しく身体を痙攣させた。しばし茫然としていたかと思えば、おもむろに裸の私と、血の海に沈んだ父を交互に見て、見て、見て見て見て——

ピキリ——と。何か、母の中の大切なものに決定的な亀裂が入る音を、私は確かに耳にした。

罅が刻まれれば、瓦解するのに時間は必要ない。

母は、父の命を断つた血塗れの包丁を流れるような所作で自分の首元にあてがい、そして最期に、本当にごめんない、という心の底からの謝意をその美貌に浮かべて——「こんな残酷な世界に産んでしまつて、ごめんね、リディア。愛しているわ——どうか、幸せになつてね」

父にしたように突き刺した包丁を何の躊躇も無く真横に引き抜いた。

花火のように飛散する血飛沫。先まで確かに目前にあつた、母の命が地獄の底へ流れていく。

そして私は、血袋と化す母をただ白痴のように眺めていることしかできなかつた。

後に残るは、二つの血塗れの肉塊と、無様にも地獄に取り残された屑同然の糞餓鬼のみ。

……否。母の骸の、その傍らには。

H a p p y   B i r t h d a y   L y d i a !

と、血の文字で刻まれた、屍のようにグチャグチャに潰れたバースデーケーキがあつた。



——これが、リディア・ウオーライラの人生の全てだ。  
血塗れ糞塗れの、どうしようもなく救い難い喜劇に他ならなかった。

……

……

……

もう少しだけ私の過去について語らせて貰うとしよう。

と言つても、聞くほどの価値があるかと問われれば否と言わざるを得ないが。

だがせめて、最後まで聞き届けてほしい。そしたら、あとは悲劇だと泣き叫んだり喜

## 劇

だと笑い飛ばしたり、好きなようにしてくれればいい。

とにかく、誰かに聞いてくほしくてたまらないのだ。

あわよくば、そして私を助けて——なんて、水面の月を掴むような夢を見ながら。

その後、両親が死亡した私は、当然ながら一人で生きていかねばならなくなった。

生きていくということは、銭を稼がねばならない。ゆえにどこでもいいから労働でき

る場所を探し求めていたのだが……

十六といえど、所詮は世間知らずの乳臭い糞餓鬼。どこも私を雇ってはくれなかった。

私が男ならばまた話は違ったのかもしれない。しかし、性別という先天的なことを問  
答し

ても如何ともし難い。

結局ここでも行き詰まり。

ここまで人生思い通りにいかない、まるで神様が私に「死ね」と囁いているように  
感

じてしまった。

そんな途方に暮れ切って私に——救済の糸は、思いもよらぬ方向から垂らされたの  
だっ

た。

ある日、家に見知らぬ女性が訪ねてきた。

年齢は母と同じくらい。煌びやかな服装を見に纏い、蜂蜜のように甘ったるい香水の  
匂

いを振りまいている。

瞬で私は、この人の職業が水商売系であることを看過した。

そして、彼女は嫺やかに微笑みながらこう告げた。

「貴女のお母さんの元同僚よ。リディアちゃん……だったかしら？　行くアテがないなら、私のところで働かない？」

この時、母が娼館で働いていたことを私は初めて知った。

本当に母には苦勞をかけてばかりだったのだなと悔恨と感謝の二十螺旋の感情に苛まれ

たのも一瞬のこと。

私に、選択権などありはしなかった。

「働かせてください」

そうして私は、母の跡を継ぎ、娼館で働くことになった。

無論、一六では娼館で働けない。

娼館で働くには、最低でも二十を過ぎていなければいけないのだが。

母の娘という理由で鼻屑にしてみらい、特別に年齢を詐称し、働かせてもらうことと相

成った。

……同情、憐憫という気持ちが多分に含まれていたのは言わずもなだが、それも仕方

がないし、文句も言えない。

働かせてもらえる以上、贅沢は言っていられない。いくら哀れまれようが、生きていければ私の勝ちだ。

そうして、私の娼館勤めの生活が幕を上げた。

どうせ肉親に処女を奪われたのだから、二回も三回も十回も変わらない。

そう割り切り、私は何人もの男とまぐわい、一夜だけの愛を交わし合った。

その娼館の客は比較的紳士な男性客が多かったが、無論例外中にはいる。

異常性癖を拗らせたプレイを強要してくるのはまだ可愛い方で、こちらが少し拒絶の意

を見せるだけで怒鳴り散らし殴ってくるような気狂いもいた。

当然そのような輩は問答無用で出禁になる。

しかし、いくら出禁にしようが、奴らのような人種は蠅の如く跡を絶たず次から次へと

現れる。

日々を暮らす金銭にはまったく困らなくなつたが、反比例するように心の方は徐々に

徐々に擦り切れていった。

何より、父と歳が近い男性客が必然的に多いせいで、あの日のトラウマがフラッシュバックしてしようがないのだ。その客がいかにか紳士的であろうとも、行為に及ぶと嫌

もあ

の日の光景が目蓋の裏に甦る。

そんな毎日を繰り返していれば、当然精神が廃人に成り果てていくのは必定だろう。

しかし、この娼館を後にしたところで、他に働くアテはあるのか？ またあの惨めな

日々

に逆戻りするだけではないのか？ ならば、今は現状維持に努めひたすら歯を食いし

ばり我

慢するべき時ではないのか？

そうだ、いつか、いつか私は幸せになるはずだ。

何故なら、今までこんな不幸な目にあつてきたのだから。その分報われなければ、こ

んな人生嘘だろう。

よって私は、待つて、待つて、待ち続けた。

自らの運命が舞い降りる、その瞬間まで。

——そして、天啓は降り注ぐ。

それは、私が二十を迎えた日のことだった。

おめでとう。君は星辰奏者エスベラントの適正に選ばれたのだ。

そう告げられた時、幻聴でも何でもなく、確かに祝福の福音が私の頭上で鳴り響くのを

聴いた。

よって、私の勝利はここに確定する。

アドラーの軍人など、娼婦とは比べるべくもない高給取りではないか。

今私がいるこの地獄から抜け出し、天国のような環境に身を置ける事実。

軍人ということは、常在戦場が当たり前になるといふことだが。戦場に身を置く恐怖

や

精神的痛苦など、見えない知らない聞こえない。

だって、私は今まで様々な地獄に身を置いてきた。それ以上の地獄なんて、この世の

ど

こにもありはしないだろうから。

きつと、これがわたしにとっての最後のチャンス。これを逃せば、私は未来永劫幸せ

に

なることなど出来はしない。

そして私は、盲目的に帝国アドラーの軍人となった。

訓練兵となつてからは、ひたすらに努力研鑽を繰り返した。

戦闘経験など二十年の人生で一度も無かつた私は、ただ愚直に己を鍛え続けた。政治も

学んだ。

寝る間も惜しみ、ただひたすらに前へ、前へと突き進んだ。

全ては己が輝かしい未来の為に。

全ては、最高の幸せを掴む為に。

どうやら私は、戦闘面での才能が元々あるタイプだったらしい。地頭も良かったおかげで、座学でも優秀な成績を毎度修めていた。

よつて、努力は順風満帆に実を結び、そして――

「リディア・ウォーライラ。貴君を、黄道十二星座部隊、第十北部駐屯部隊瞬間山羊の副隊長に任命する。これからもより一層の活躍を期待しているぞ」

もはや言うことなしかつた。

そう、私はこれを狙っていた。

黄道十二星座部隊には、その名の通り十二の部隊が存在する。

その中で私が配属を狙っていたのは駐屯部隊。

制圧部隊や、特務部隊の裁剣天秤ライブラなどに配属されるのは絶対に御免被りた

いところであった。

更に加えるならば、駐屯部隊の中でも、東部に配属されるのだけは避けたい。何故な

ら

ば、単純に東部は激務だからだ。

必要以上に苦しんできた人生に加え、一生分の努力を費やし、更には新たな職場でも

忙

殺されるなど冗談ではない。

私はもう、これ以上不幸を積み重ねたくない。これから先の人生は、楽に幸せになっ

て

やるのだ。

その為にも少しでも仕事量が少ない部隊への配属を切に望んだのだが……

まったく、何だこれは？

上出来すぎるではないか。

しかも、副隊長だと？



最高だ。隊長など真つ平御免だが、駐屯部隊の副隊長くらいならば喜んで引き受けよう。

基本は隊長の補佐だ。そこまで苦痛ではないし、何より副隊長クラスともなれば給金が一

気に何倍も跳ね上がる。

ああ、最高だ最高だ。

「有り難き名譽でございます。不肖、リディア・ウォーライラ。帝国の盾として、全身全霊を尽くすことをお約束致します」

笑みが溢れて止まらない口端を隠しながら、それっぽい言葉を並べながら嘘っぱちの忠

誠を誓って見せる。

帝国の盾？ 馬鹿が、なるわけなからうそんなものに。

全ては己の幸せのため。無論最低限の職務はこなすが、それだけだ。必要以上の労力は

費やさないと決めている。

これから私には薔薇色の幸せみらいしか待っていない。

まさに幸せの絶頂期。

この瞬間が未来永劫、命が消えるその時まで続くかと思うと、下腹部が疼いて仕方がない。

死んだように生きていた今までだったが、私は今間違はなく生きている。生を謳歌している。

ありがとうございます、ありがとうございますお母さん——天に感謝を捧げながら、しかしこの時の私はまだ気づいていなかった。

これがまた、別の地獄の始まりであることに。

## Chapter I 第十北部駐屯部隊／Capricorn

「今日は楽しかったよ、レディ」

娼館前で私を見送りながら、リックは私の手の甲に優しい口づけをした。流れるような甘い所作の数々は、なるほど、ここいらでも特に値の張る店なだけはある。乙女をときめかす行動の一つ一つが洗練されており、無駄なく無理なく様になっている。

ベッドの上の遊戯に關しても満足のいくものだった。元々娼館で働いていたこともあり経験としてはかなりのものである私にしても、彼の腕前は相当のものであると認めざるを得なかった。事実、何度もイカされたわけだし。おかげでいいストレス発散になった。ここまで欲求を解消できたのは久々だ。

「こちらこそ。最後まで素敵なエスコートをありがとう。次来た時も、また指名させてもらうわね」

今日一日のお礼とばかりに、腕に抱き着き頬に口づけをプレゼントする。

すると彼はやはり嫌みのない爽やかな笑みを浮かべ、またのお越しをお待ちしております、とだけ口にした。

営業用スマイルであることに変わりはないが、だからといってそこに打算や嫌な感情は一切含まれていない。いい男だ、きつとさぞかしモテることだろうなと思いつながら、私は娼館を後にするのだった。

……

……

……

「……はあ」

娼館を後にしてから、何度目の溜息をついただろうか。

一時的に気を紛らわすことはできても、深層心理で燻る苦心に依然変わりは全くなく。帰路につく足取りは、鉛のように重たかった。

「……もう辞めたい。逃げちやいたいよ、こんな生活」

黄道十二星座部隊が一角、第十北部駐屯部隊・瞬間山羊に配属され、はや一年と半年……私は、できることなら一日、いや、一秒でも早くこの軍人生活から抜け出したいと毎日毎秒考えていた。

盲目的に軍人となった私を待ち受けていたのは、極楽浄土の楽園でもなんでもなく、ただの地獄そのものだった。つまり、今までとなんら変わらない。

駐屯部隊だからそこまで忙しくないだろう？ 副隊長だからお気楽気まま？ そんな風に思っていた一年半前の自分を思いきりぶん殴ってやりたい。これのどこがお気楽気ままなのか。

軍生活の日々は、常に多忙を極めていた。街の視察や貿易の管理、最近では下の育成に力を注ぎ始めたのか、訓練兵への指導なんかもやらされたりしている。

冗談じゃない。前者はともかく、後者なんかどう考えても自分よりもあの光狂いの馬鹿隊長の方が向いているだろう。そりゃ私よりも多忙だから時間が割けないのは理解しているが、だからといって自分のような小娘に任せるかよ普通。帝国の人手不足はどうなっているんだと喉から吐き出る愚痴には際限がない。

甘く見ていた。たかが統治、治安維持が駐屯部隊のすべてと思ひ込み、悔っていた。これは普通にストレスが溜まる。

国のことなどどうでもいい、自分さえよければ——と考えていたが、それもできない。職業柄、どうしても国のことを第一に考えなければいけないのだ。それが仕事だから。自己中では話にならない。無責任だと誹られて、責任問題に発展し後々面倒なことになる。だから、懸命に国のために心身ともに捧げなければいけないのだ。

こんなことなら制圧部隊に配属された方がマシだったか——とも思ったが、私ごときが血風飛び交う戦場を生き残れるはずもなし。臆病な鼠は、血に飢えた獅子に食い殺さ

れてそれで終わりなのだ。

だから極論、私は軍人になるべきではなかった。星辰奏者エスペラント適正に選ばれたからといって増長せず、身の程をわきまえて娼館で働き続ければよかった。

地獄からの解放を求め軍人となったのに、これでは何も変わらない。娼館で身をすり減らすストレスに比べれば若干マシではあるものの、それも誤差だ。生き地獄に変わりはない。

できることなら早く退職してしまいたい。だが、退職したとしてそのあとはどうなる？ 今の地獄から逃げて、また別の地獄が待っているのではないか？ 結局何も変わらないのではないか？ そう思う心が止められず、今もこうして動けない。何もできない、成せない、木偶の坊の塵屑娘。

私に、逃げ道なんかありません。

「……どこを見ても八方塞がり。誰か、私を助けてよ」

吐き出した泥のような言葉は、しかし誰の耳にも届くことなく、夜の空気に溶けていく。

優しく広がる満天の星々ですら、今の私の苦心を慰撫することは叶わなかった。

：

……  
……

「よお、ウォーライラ。こんな夜遅くに会おうなんて、奇遇だな」

「……げええ」

「なんだ、その心底嫌そうな顔は。普通に傷つくぞ」

兵舎に戻った私を待ち構えていたのは、先に話した光狂いの馬鹿隊長——アルヴィン・ロバーツその人だった。

180cm超えの長身。吊り上がった鷹の如き鋭き眼光。夜空の下で眩く煌めく、雪のような銀の髪。纏う雰囲気はどこか冷たく鋭く、冬の氷柱を思わせる。

この男こそが、黄道十二星座部隊第十北部駐屯部隊・瞬圧山羊カプリコーンの隊長を務める傑物であつた。

そんな規格外の豪傑が、しかし纏う鋭利な空気感とは裏腹に、柔らかい苦笑を浮かべながら私を見つめ、言葉を投げってくる。

「まあこんな夜中に四十手前のおっさんに出くわしたともなれば嫌な顔一つ溢したくなるか。ましてやウォーライラ、お前みたいなら若き乙女なら尚のことな」

「いや、別に嫌な顔なんてしたつもりないですよ。ただ『うわ、なんでこの人このタイミングでここにいるんだよ最悪うう、ばーか！』って心の声が思わず漏れてしまっただけ

です」

「嫌がつてんじやねえか。一応俺、年上で上官だぞ？　もうちよい敬意とかさあ」

「何言つてるんですか。私が配属初日に挨拶に行つたとき、『固いぞ、ウォーライラ。隊長副隊長の間柄だ、家族みたいにくだけて付き合おうや』つて言つたのはどこの誰ですか」

「ははは、違くない。そう考えると、お前大分俺に遠慮とかなくなつてきたよな。いい傾向だ、その調子で雑に絡んでくれ」

……とまあ、このように。

口を開けばこれだ。鋭利な雰囲気？　氷のような男？　冗談きついわ。それはあくまでも、この人を外面だけで判断した時の話。真実を開帳すれば御覧の通りと言うやつで。

そう、アルヴィン・ロバーツという男は、鷹揚で優しい人柄の持ち主なのだ。どこまでも心が広く、仲間想いで、部下のメンタルケアに割く時間すら惜しいとも思わない、底なしの好漢である。

無論、軍人としての能力も申し分なく。政治力、戦闘力、どちらをとつても傑物と評する以外形容ができない。民草を守り、国を繁栄させることに至上の幸福を心の底から感じている、人格者にして軍人の鑑……まさに完璧超人。あらゆる欠点が排斥されてい



る。

ゆえに部下からの信頼や人気も絶大だ。その人気っぷりは、私が訓練兵のころからも知られていた。瞬<sup>カブリ</sup>庄山<sup>コロン</sup>羊に配属されたら、「当たり前」だ……などは当時よく言われていたものである。一部の女性の間——特に年下の女子——では、何でもファンクラブのようなものまで設立したとかしてないとか。

……まあとにかく、目の前で呑気に笑っているこの人は、偶像かよってくらい人気なのだ。いや、本当にあり得ないくらい。……好意を寄せる気持ちも、分からなくはないが。

逆に私はこの人が少々得意ではなかった。苦手とまではいえないが、好意を寄せるとまでもいかない……そんな微妙な感情を、私は彼に持っている。

というのも、前述したとおり、彼は完璧すぎるのだ。あらゆる点で洗練され、完成している。だから、そんな彼を見ていると、どこまでも中途半端な自分と比べて、自分がとても惨めに見えてくるのだ。嫌な現実を、むぎむぎと突きつけられる。それがたまたまなく、きつかった。

勿論、これは私自身の問題だ。隊長は何も悪くない。だから同時に申し訳なくも思っているのだが……こればかりはどうしようもない。だって、私はどこまでいっても塵屑だから。ごめんなさい、隊長。貴方はとてもいい人だから、自信を持ってください……

なんて、もう何度目かに分からない溜息を吐いた刹那。

「悩み事か、ウォーライラ」

口笛を吹くかのような気軽さで、隊長は私の凶星をずばりと言い当ててみせた。

……ああ、本当にこの人は。こう見えて滅茶苦茶聡いんだから。そういうところも含めて、得意じゃない。自分が、恥ずかしくなってくるから。

「……隊長に話すようなことじゃないですよ」

目をそらし、ぶつきらぼうに言い返す。言えない。言えるわけがない。自分が所属している部隊の隊長……しかも自分の一番身近な上官に。『軍人を辞めたいです』なんて。

いくら温厚優男といえども、国のため民のためと命を燃やすこの人のことだ、激昂するのはまず間違いないだろう。

隊長の怒っているところなど今までに見たことがないが、そうなる未来は容易に想像できたからこそ、私には口を閉ざす以外の道がなかった。

そんな私の反応を見て、何を思ったのか隊長は「ふむ」とだけ軽く頷いて。

「ウォーライラ、これから時間あるか？ 夜の街へパトロールと繰り出そうじゃないか」

「……はぐ。」

そんな訳のわからないことを口にしたのだった。

…

…

…

「夜だというのにまだ活気づいているな。いいことだが、この辺は飲み屋や娯館といった娯楽施設が多い。どうしても治安が少々悪くなるな。やれやれ、酒は飲んでも飲まれるな……とは確か、旧暦の諺ことわざだったかな」

アドラー帝国北部、旧・アイルランド領であるダブリンの街に軍靴の音色を響かせながら、隊長は呆れるように苦笑を溢した。

隊長が言っていたように、ここダブリンは娯楽施設——特に飲み屋が非常に栄えている。なんでも旧暦のころ、アイルランドはビールの製造が盛んだったらしく、ここダブリンにも『ギネス・ストアハウス』という、ギネスビール製造の博物館なるものが観光スポットとしてあつたらしい。

ゆえに、その名残なのか、ビールを中心とした酒の製造工場が、帝国北部ではとても栄えている。

飲み屋が多いのもその影響だろう。近場で様々な種類の酒を取り寄せられるため、帝

国全体を見渡しても、ここダブリンの街の酒の販売価格は非常に安価だ。

結果として酒飲みのための街のようになってしまっているが、無論それはこの街の側面に過ぎず。

飲み屋だけじゃなくカフェの数も多いから昼間はまた夜とは違った意味でお洒落な活気に満ちているし、旧暦から残る聖パトリック大聖堂も市民から愛される観光スポットに——ついでいやそうじゃなくて。

……なんだこれ。何ですかこの状況。何故私は、大して親しくもないロバーツ隊長とこんな風に横並びで夜の街を歩いているのだ。

隊長が軍服を着ているからまだしも、これで私服で歩いていようものなら完全に男女の逢引きと勘違いされていただろう。いや、それならまだいい。私と隊長の年齢差から、援助交際を疑われてもおかしくはなかっただろう。

それほどまでに、この状況は主観的にも客観的にもおかしな光景と言えた。

「……ていうか、私も何で素直についてきちゃったんだろ」

別に無理に付き合う義理などなかった。隊長も部下に無理強いするような性格ではないため、やろうと思えば断ることなどできたはずだ。

それなのにこうやってなんだかんだ隊長に付き合ってしまうあたり、彼の人徳が成せる技なのだろう。

「いっそのこと隊長が、所謂『いい人』でなかったならば、にべもなく突っぱねることができただろうに……」

「まあたまにはいいだろう。思えばお前とこうやってプライベートを過ごすなんてこと、今までなかったからな。たまには隊長副隊長として、交流を深めようじゃないか」  
私の小さな呟きが聞こえたのか、隊長は爽やかに笑いながら語りかけてくる。

「いやまあ確かにそうだが、無理をして交流を深める必要があるのだろうか……」  
隊長としても、こんな乳臭い小娘を相手にしたところで面白くもなんともないだろうに。

「……ていうか、何で急に夜の街へ繰り出そうなんて言い出したんですか？ 息抜きとかなら、私を誘う必要なんてなかったんじゃないか……」

偶然居合わせたから誘っただけのことと言われたらそれまでなのだけれど。隊長の様子を見る限りそうでもないらしい。

私のその考えを肯定するように、視線を夜空へ向けながら隊長は言葉を発した。

「俺は別に息抜きなんか必要ない。軍人として生きているだけで、俺は満たされているし幸せだからな。むしろ、それが必要なのはお前の方だろう、ウォーライラ」

「……まさか、それが理由ですか……？」

私がおかしく悩んでいるのを見て、それを少しでも解きほぐそうとするために……？  
「悩みを明かせないのならそれでもいい。俺はそれを無理に問おうとは思わない。だつたらせめて、メンタルケアをするのが上官の務めだろう。部下の思い悩み苦しんでいる顔を、俺は見たくない。部下に限った話ではないが、アドラーの民には、いつだって笑顔でいてもらいたいからな」

「……それで夜の街を散歩ですか。そんなもので私の心が晴れると思つてゐるなら、安く見られたものですね」

気持ちには有り難いが、その程度で私の苦心が雲散霧消するようなら、そもそもここまですぐに思ひ悩んでいない。

私の苦悩は表層的なものではなく、もつと根が張つて深いものなのだ。一時的に忘れることはできたとしても、根本的な解決には、きつと未来永劫至らないのだろう。

……なぜならば。生きることそれ自体が、私にとっての地獄なのだから。

「手厳しいな。だが、何もせず部屋に引き籠るよりはマシだろう。誰かと一緒にいた方が、心も幾分か明るくなるというものだ。……まあ、その相手が四十手前のおっさんというのは、申し訳なくはあるが」

と、隊長はやや自嘲気味に肩を竦めて苦笑いを浮かべた。一応、そこらへんの自覚はあるらしい。

「まあ確かに隊長はおじさんですけど、それでも部隊内の女の子たちからの人気高いんですよ？ 多分私がこうやって二人きりで歩いているところを見られたら、普通に羨ましがられます」

「マジかよ。嬉しいような寂しいような……いや、うん、やっぱ駄目だろうそれ。俺みたいな枯れたおっさんにキヤーキヤー言う暇あるなら、もっと若くていい男ひっかけろって伝えておいてくれ」

「多分徒労に終わりますよ、それ」

今の言葉をそのまま伝えたらきつと、「そういう紳士的なところが素敵！」とかいって余計ヒートアップするだろう。

気持ちは分からなくもないが、本人も言う通り本気でやめた方がいいと思う。普段は優しく紳士的だけど、この人の本質は熱苦しい光狂いなだけだから。幻滅する前に身を引いた方が……と思ったがギャップ萌えだとか言ってるんだかんだと結局黄色い声が上がるのは避けられないだろうなと気づいてしまい、私は嘆息した。

「そういうお前はどうかなんだ？ 今気になってる男とかいないのかよ」

「いませんよ。仕事が忙しくてそれどころじゃ……ていうかそういう隊長はどうなんですか。もういい年でしょう。そろそろ結婚のこととか考えておかないと、一生独り身ですよ」

「耳に痛いな。だが俺も生憎と、そういった運命とは巡り合えていない。まあ、俺は仕事人間だからな。別に一生独り身でも構わないと思ってる」

「その考えどうかと思えますよ……っていうか、あの限界突破オーバードライブでさえ妻子持ちなんですから、隊長ならその気になれば奥さんの一人や二人」

実際、好いてくれている女の子は沢山いるわけだし。

「『その気』がないからなあ、俺には。つうか、いいんだよ俺のことなんぞ。それよりウオーライラ、お前はしつかりといい男捕まえて幸せになるんだぞ。家族はいいもんだ、うん」

「独身が言っても説得力ないですよ」

本当にさつきから何なんだこの人は。一にも二にも私のことばかり。もしかして私の方が好きなのか？ ……いや、十割あり得ないな、この人に限って。

どちらかというと、この人が私に向けている感情は父親の娘に対するそれなのだろう。保護的な思いというか。少なくとも、男女のそれで向ける感情ではない。

「……家族、か」

思い起こされるは昏き過去の惨劇。

思い出したくなくても、あの光景が今も、瞼の裏にこびりついている。凝固した油のように、あるいは、呪いのように。



ああ、そうだろう。きつと、客観的に見て家族とはいいいものなのだろう。温かく、優しく、安心できる陽だまりのような概念。

けど、私にとって家族とは、忌々しい闇の記憶に他ならず。

勿論のこと、父はともかくとして、母の愛情を忘れたことなど、一瞬たりともありはしない。私も母を愛していた。心の底から、誰よりも。

母は私の生涯の中で、唯一心から信頼を向けることができた存在で、今でも愛していると言つても過言ではない。

それでも、あの日の悲劇は、どう言い繕つても「トラウマ」としか形容ができないものだった。それほどまでに、あの出来事は私の心に深い爪痕を残している。

……思い出したら、気分が悪くなってきた。やはりついてくるんじゃないかな。

隊長には悪いけど、一足先に軍舎に戻るとしよ——

「よし、着いたぞ。今日は俺の奢りだ。好きなもの頼めよ」

「え、何のことです……」

急に声をかけられ、ハツとして顔を上げると、私の眼前にはお洒落な外装をした飲み屋があった。装いの、大衆居酒屋というよりかは、少々大人向けな、所謂ちよつとお高めなお店だ。

え、ていうか隊長は今なんて……？

「お、奢りつて……まさか、入るんですか？」

「ああ。お前にはいつも世話になってるからな。こんなことでしか返せなくて申し訳ないが、代わりに好きなだけ飲み食いしてくれ。何、安心しろ。これでも高給取りだ。金ならいくらでもある」

言いながら財布を取り出し、悪戯気に微笑む隊長。確かに隊長格についている隊長は私よりも更にいい給料をもらっているのは間違いないだろうし、そのへんの心配はしてないのだが、いや、それよりも――

「……なるほど。ここにつれてくるのが本命だったというわけですか」

「ああ。前にジェイスと来たことがあったんだがな。酒も料理も一級品で、客層も上品で落ち着ける空間とあらば、気に入らない道理なんてないだろう？」

「……本当、隊長つてジェイス隊長のこと好きですよ。あの人とサシ呑みとか考えられないですよ」

私なら、あんなものを一対一で相手にしていたら暑苦しすぎて辟易する<sup>へきえき</sup>こと間違いなしだ。

あんな手合いと仲良くできる隊長も、やはりぶつ飛んだ変人だと再認識させられる。

「ていうか、その……流石に悪いですよ、奢りなんて。私、別に普段から大した貢献なんて……」

「あー、そういうのいいからさ。上官が奢ってやるって言ったら、黙って『財布を空にしてやるから覚悟しろ』って宣戦布告すりゃいいんだよ。ほれ、行くぞ」

「あ、ちよつと……!?!」

遠慮の言葉を口にするより早く、隊長は私の手を握りしめ問答無用でお店の扉を開けた。

……基本は紳士的なくせにたまにこういった強引さを見せるのが、隊長の厄介なところだ。肝心な局面で断れない。

「……まあ、たまには悪くないかな」

隊長のこと、嫌いではないし。……好きでもないけど。

でも、いい人なのは間違いないし。客観的に見て、魅力的だとも思っている。

何より、楽しそうに微笑む邪気のない隊長の横顔にあてられて、後ろめたい気持ちなんて夜空の星々に吸い込まれてしまった。

——こうして、瞬<sup>カブリ</sup>庄<sup>リ</sup>山羊<sup>コーン</sup>の隊長副隊長たる私とロバーツ隊長の、二人きりの酒席が幕を開けたのだった。

Chapter II 酒席と私と隊長と／Time o  
f peace

「……美味しい。隊長が絶賛する理由が分かりました」

鴨肉のカルパッチョをシャンパンで流し込みながら、私はここ最近で一番の感動を覚えていた。

なるほど、隊長の口にした通り、確かにこれは絶品だ。お酒も料理もレベルが高い。値段はやはりそれ相応といった具合で、お世辞にも安いとは言えないが、しかしこのクオリティであればこの値段設定も納得だろう。むしろ、値段以上の価値があると断言できる。ロバーツ隊長やジェイス隊長が気に入るのも理解できる。

「そうだろうか？　ぶっちゃけ、俺とジェイスは食にこだわりがあるってタイプじゃないんだが、この店には見事にハマってしまっただけな。初めて来た日なんか、感動してワインボトル二十本も開けちまったんだよな」

「……馬鹿でしょ、あなた達」

いくら星辰奏者が内蔵機能を強化されているからと言って、それは飲みすぎだ。店側からしてもたまったものじゃないだろう。

まあ、なんだかんだと二人ともTPOは弁えるタイプなはずだから店に迷惑は掛けないと信じていた。ていうか、かけていたらきつと今頃出禁になっているはずだから大丈夫だったのだろう。多分。……うん、多分。

「おやあ、お客さん、今日は女の子連れですかあ？　いつもの暑苦しい御仁はもうお払い箱ですか？」

「てつきり身持ちが固いそつちの人だとばかり思っていたのですが、そういうわけではなかったみたいですね。薔薇色の匂いを感じたのですが、ティナは残念でなりません」  
——と、呆れながらシャンパンを傾けていた束の間。フレンドリーに私たちに話しかけてきたのは、容姿や声まで瓜二つの金髪美女——なんでも、この飲み屋の名物双子と言われている、ティナさんとテイセさんだった。

どうやら常連の隊長とはとっくに打ち解けているらしく、友人のように話を弾ませている。

「残念ながら両方外れだ。限界突破はただの戦友で、こつちはただの俺の部下だ。色っぽい関係なんて微塵もない。どちらも、かけがえのない俺の仲間というには変わりないがな」

「……リディア・ウォーライラです。その、いつもうちの馬鹿隊長がお世話になっていま

す」

自己紹介しつつ、ペコリと二人に頭を下げた。二人とも私よりも年下なのだろうが、こんな馬鹿隊長をよくしてもらっている手前、思わず敬語で話しかけてしまった。

いや、だってそうだろう。ロバーツ隊長とジェイス隊長、あのトンチキ二大巨頭を相手に毎回接客しているかと思うと、そりや尊敬の念も自然に浮かぶというもの。

しかしティナさんとテイセさんはそんな苦労はまったく言いかぶるかの如く、むしろ小悪魔のような笑みを浮かべながら隊長のことを語り始めた。

「全然そんなことないですよ〜！ むしろアルヴィンさんはご来店されては景気よく散財していく格好のカモ——もとい大事なお客様ですからね〜。今後もどうぞ御鼻屑にししし」

今この子カモって言ったぞ。仮にも一部隊の隊長相手に。不敬どころの騒ぎじゃないが、本人は「ははは」と爽やかに笑っているものだから私からはもう何も言えない。可憐な見た目に反して、中々に強かな双子なようだ……

「そりやあこれだけ美味しい酒や料理を出されたら景気よく金を出したくなるってものだ、その方が経済も回るしワインワインだろう。なあ、ウォーライラ？」

「否定はしませんが、ちよつとは自重してくださいね。でも、確かにここのお酒にお料理、本当に美味しいですね。コックさんにも伝えておいてください」

「ありがとうございます、それを聞いたら店長もきつと喜びますよ」

私の言葉に、控えめに微笑むティナさん。

なるほど、ティセさんは快活よりな性格で、ティナさんはどちらかというとおしとかめな性格らしい。双子らしい、対極的な性格だとは思うが、しかし――

「ほらほら、アルヴィンさん、彼女さんもこう言ってることですし、もつともつとじゃんじやか注文しちやつてよ」

「はい、女性の手前、格好つけねば男が廃るといふもの……まさかこれで終わり、なんて腑抜けたことはいけませんよね？」

……強かで強欲な部分は、一寸のぶれなくそつくりだった。

うん、一人で来るのは絶対にやめよう、と私は心に強く誓った。

「ははは、相変わらず客を煽るのが上手な嬢ちゃんたちだ！ お前さんたち、将来いい嫁さんになるぜ。それじゃあその煽りに乗りまして、と――とりあえずさつきと同じ銘柄のシャンパンのボトルを二本、ワインも一番高いやつだ、三本持つてきてくれ」

「ちよ、ちよちよちよちよ、隊長!!？」

「確かウオーライラ、お前さつき鴨肉のカルパッチョ美味いつて言つてたよな？ じゃ

あ、それを二人前と、アイリツシユシチュも追加。シェパードパイにラム肉のグリル……あとは今日のおすすすめを適当に持つてきてくれ」

「ちよッ——!?!」

『はあい、ご注文ありがとうございます。ごきいまくす♪』

私が静止する間もなく、注文を済ませ満足げな顔をしている隊長と、爆速で厨房の奥へと消えていった強欲<sup>テイナ</sup>双子<sup>テイセ</sup>。

いや、確かに美味しいとは言ったがさすがに考え無しに注文しすぎだろう、自分が払うわけでもないのに、会計の時が恐ろしくてたまらない。

「……本当、馬鹿ですよね隊長」

「安心しろって。高給取り舐めんな」

そういう問題だけじゃないんだよ馬鹿。こちらの胃袋も考えてほしい。そんなに注文されても、おそらくそこまで食べきれない。

まだまだ胃袋に余裕はあるが、それでも今注文された食べ物を食べられる自信は微塵もなかった。

「……はあ」

それでも、これだけ美味しい料理を振舞われて、しかも奢られまでするのだから、残すなんてことは断じて許されない。

明日の業務に支障がでなければいいなあ、とぼんやり考えながら、私はヤケクソ気味にシャンパンを胃の中に注ぎ込むのであった。



…

…

…

「今日はありがとうございました、隊長」

「何、気にするな。また気が向いたら言ってくれ、今度はジェイスと三人で行こうや」

「いや、ジェイス隊長は結構です」

「つれないな。泣くぞ、あいつ」

いや、あの人がだつたらむしろ何々大笑するだろう。

そういうわけで。宴もたけなわ、なんとか馬鹿隊長が注文したお酒や料理を完食完飲した私たちは、軍舎まで戻っていた。

……会計のことは聞かないでほしい。覚悟はしていたが、本気で目玉が飛び出るかと思つた。

しかも青ざめていたのが私だけで、双子姉妹は満面の笑みを浮かべているわ隊長は手を叩いて爆笑するわでこいつら揃いも揃ってイカれているんじゃないかと冗談抜きで思つてしまった。

……まあともかく。

「明日から更に忙しくなるでしょうからね、いい気分転換になりました」

「そうだな。俺も繁忙期前のいいリフレッシュができた。……まあ、本当に大変なのは俺らっていうより、魔弓人馬マジタリウスのやつらだけだな」

——そう。ジェイス隊長含めた北部制圧部隊、魔弓人馬マジタリウスは現在カンタベリーへの侵略行為のため、現地へ偵察に向かっている。

明日、一旦アドラーアドラーへ戻ってきて、正式に書類を提出、手続きののちカンタベリーを制圧するつもりらしい。

「アンジェリカ・フォン・アクトレイテ……彼女の言うことを、本当に信用してもいいのでしょうか」

——そう。今回の制圧作戦が稼働したのは、今しがた口に出したカンタベリーの聖座信仰監視局の執行官からアドラーの北部部隊へコンタクトがあったからだ。

カンタベリーの、しかもあることか自国の裏切り者を誅する機関、その重役からの秘密裏のコンタクト。受け渡される、“神祖”という眉唾な存在の情報。

単純に考えればアクトレイテ殿の逆行行為、裏切りということになるが、そう易々とそれらの情報を信じるアドラーではない。

それはアクトレイテ殿も分かっていたのだろう。その後、何度かアクトレイテ殿とコンタクトを取りつつ、魔弓人馬マジタリウスを中心とした工作員の偵察により、アクトレイテ殿の証

言が真実だとほぼ確定した。

よって、あとはトントン拍子だ。今回の最終偵察を終えたのち、正式にアクトレイテ殿と魔弓人馬サジタリウスは同盟を結び、神祖滅殺を実行に移す。

そう、カンタベリーを制圧する……のだが。私は未だにその「神祖」だとかいう眉唾な存在が信じられずにいた。よって連鎖的に、アクトレイテ殿のことも信用できずにいる。

まあ私はアクトレイテ殿と対面したこともなければ実際に会話したことすらないからどの口が、といった話だが……

そこで、実際に無線越しで幾度かアクトレイテ殿と話したことがあるロバーツ隊長は「気持ちにはわかるが」と前置きしながら口を開いた。

「俺も最初は訝しんだ。いや、本音を言えば、今でも神祖という存在に関しては眉唾物だと思っっている。だが、無線越しでも伝わる彼女の溢れんばかりの殺意。そして、何が何でも己が信念を貫かんとする底なしの熱量。あれらが嘘とは、俺には到底思えない。よって、信じる価値があると判断した。それに仮に彼女の言うことが真実だとするならば、放っておくわけにもいかなないからな」

「自国を裏切つてまで成し遂げたいことがある、それが神祖の滅殺ですか……どうしてそこまでして」

「曰く、『生まれた責任を取らせたい』そうだ。詳しい事情はジェイスの方が詳しいだろうが……これ以上は俺の口から語るのはやめておこう。無事作戦が終了して、アクトレイテ殿と会う機会があったら、直接訊いてみるんだな」

「いや、まあ別にそこまでして知りたいわけでは」

単純に、自国を裏切るといふハイリスクを冒してまですることなのか？　と思つてしまふのだ。どういう事情があるにせよ、自国を裏切つたなど、それこそ神祖にでもバレたらただではすまないだろうに。

それだけ、アクトレイテ殿は現状地獄に己が身を置いているということなのか。地獄から抜け出すには、神祖を殺し尽くすしかない。だから危険を冒して、決意して、努力して、行動に移して、と……

……私とは大違いだ。確かロバーツ隊長曰く、アクトレイテ殿は年端もいかない少女らしい。私よりも幼いというのに、生き様は私の万倍は立派だ。

こうやって作戦の渦中にいる私なんて、どこか他人事に『面倒なくつつがなく終わりますように』と無責任に願っているというのに。

……ああ、本当に。私という塵屑は。

「しかしあれだな、魔弓人馬サジタリックスの連中ばかりに頼るのは申し訳ない。できれば俺も出動したいんだがな」

「いや、それ駐屯兵の意味ないですから。何のための制圧部隊と駐屯部隊ですか、堪えてください……それに、どのみち今回の侵略、ジェイス隊長以外には不可能なんでしょう？ ていうか、ジェイス隊長を推薦したのロバーツ隊長じゃないですか」

「推薦したうちの一人つてだけだ。奴の星辰光だけが、神祖とかいうのを突き崩せる唯一の特効だからな。むしろ俺らに加勢に加わっても、足手まといになるやもしれん」

今しがた話した通り、ジェイス隊長は元々隊長格の人物ではなかった。

しかし、今回の制圧作戦にあたり神祖を突き崩せるであろう星辰光を所持しているのがジェイス・ザ・オーバードライブただ一人であったため、部隊長の合議により、急遽隊長に抜擢され、今作戦を担う要となったというわけだ。

元々ジェイス隊長と深く長い交流のあったロバーツ隊長は、それはもう全部隊の隊長の誰よりもジェイス隊長のことを推薦したそうだ。

この人、本当に口を開けば今は亡きヴァルゼライド総統閣下やジェイス隊長への称賛の言葉しか口にしないからな……

やれヴァルゼライド閣下は真の英雄だだのジェイスこそ隊長となり光の後継者となるに相応しい男だなど……本当、ホモだろうこの人。そりゃあ結婚もできないわ。女の話をしているところなど、見たことがない。

たまに隴隊長への称賛やヴィクトリア隊長への同情——主に東部での惨劇の後始末

のあれこれへの——を口にするだけだ。

本当に仕事人間で、色恋を中心とした自分のことへの関心が薄いのだなと感じてしま  
う。

……そして。

業務の話をしつつ、やはり私は心の中で嘆息した。

満腹感とほどよい酩酊感のおかげでいい気分となっていたが、やはり仕事の話となる  
と億劫になってしまう。

今回の大規模な制圧作戦により北部一帯は多忙を極めること間違いなしなだけに、面  
倒だと思いう気持ちが出まらない。

「……どちらにせよ、平穩に終わることを願うばかりだよ」

隊長に聞こえない小声で、そう呟いた。

どうか明日は、今日よりも易しい地獄でありますようにと願いながら、私と隊長は別  
れ、自分の部屋へと帰宅するのだった。

## Chapter III 鋼の戦友／Overdrive

「——報告は以上だ。それで、何か異論はあるかい、戦友よ」

「あるわけないだろう。眉唾だと思っていたが、なんだよこれ、黒を通り越して真っ黒じゃねえか」

「ああ、まったく同感だぜ。守るべき民を駒同然としか見てないんざ、塵屑も同然よ。一体どういう理念があつて、んなことしてるかはまだ分からねえが——帝国に害成すつてんなら一も二もねえ、殴り飛ばすだけだ」

「——痺れるぜ、無敵の限界突破<sup>オーバードライブ</sup>」

俺もできれば加勢に加わりたいと思っていたが……お前がいるなら心配はないな。必勝確実だ」

不敵に豪胆に微笑みながら、鳴殺<sup>シューリンクス</sup>笛は、限界突破<sup>オーバードライブ</sup>が提出した書類に判を押した。

此処、アドラーの北部部隊が続べる旧クライストチャーチ大聖堂、そこを改造した軍舎の一室、隊長室にて、二人の魔人はこれから始まる大きな闘争に業火の如き怒りと戦意を燃焼させていた。

「まあ、ともあれ。現地で何かあればすぐに連絡をしてくれ。裁剣<sup>ライブラ</sup>天秤にも話を通して

いるから俺たち瞬<sup>カブリ</sup>庄山羊の出番はないと思うが……まったく、こういうとき、自分が駐屯兵なのが恨めしくなってくる」

「そう言うなつて。お前さんたちが治安維持や統治をしてくれるおかげで、制圧部隊の俺たちが立ち回りやすくなってるんだからよ。」

でもまあ確かに。お前が戦場で隣に並んでくれたなら、それ以上に心強いものはないけどな」

「よせつて。俺なんか限界突破<sup>おま</sup>や裁剣女神<sup>アストレア</sup>に比べれば、どこまで行っても二番煎じだ。過大評価はやめてくれ。」

だが、いつでも力を貸すのには違いない。何かあればすぐに言ってくれ。俺にできることなら尽力しよう」

「……そうだな。なら早速で悪いんだが——」

…

…

…

「……どうしてこんなことに」



突如ロバーツ隊長から呼び出しをされ訓練場に来てみればこれだ。一体全体どういうわけだか分からない。

私の目の前には、両拳を鳴らしながら獰猛な笑みを浮かべている限界突破オーバードライブと、狩人が如く弓アダマント矢を携えながら鋭利な眼光をギラつかせている鳴殺シューリンクス笛が、一触即発の空気を漂わせていた。

何でもジェイス隊長きつての頼みで、神祖制圧の前の最終調整として、ロバーツ隊長との模擬戦を申し込んだらしい。

無論、ジェイス隊長大好きうちの馬鹿隊長がそれを無碍にするなどあるはずもなく……こうして、何故か私が立会人として選ばれてしまつというわけだ。

やばい、帰りたい。

「悪いなアルヴェイン。こんな一方的な我儘を聞いてもらつてよ」

「気にするな。いやなに、本音を吐露すればな……久々にお前とやり合えると思うと、胸が昂つて仕方がない。」

殺すつもりでいくぞ、お前相手に温い真似は許されんからな」

「はッ、上等だぜ。互いに加減は無しだ。模擬戦とはいえ、これは死合い。戦友だからこそ、ぶつける力と想いに、嘘偽りがあつてはならねえからなアッ」

……などと両者は私を置いてけぼりで盛り上がるばかりで。

本当、男って馬鹿だなど思わずにはいられない。

何なんだこの人たち、本当にホモなんじゃないのか？ ジェイス隊長の妻子持ちっていうのも実はフェイクで、男色家がこの人の真実なんじゃないかとも思ったが、ひとまずそんなおどろおどろしい思考は片隅に追いやって。

「ではこれより、私、リディア・ウオーライラ立ち合いのもと、模擬戦を開始します。

両者、構えてッ」

私が声を張り上げた瞬間、改めて両者の戦意に炎が宿る。覚悟が決まる、死を携える。眼前の戦友は、今だけは討滅すべし敵と意識を切り替え、ロバーツ隊長とジェイス隊長は、己が牙を嚙猛に鳴らしていた。

そして――

「――始めッ！」

『――推して、参るッ!!』

次の刹那、大気を燃焼させんが如き鋼の闘志が噴火し、爆撃じみた炸裂音を轟かせながら、限界突破と鳴殺笛の死闘の口火が切られるのだった。

…

…

.....

「天昇せよ、我が守護星——鋼の恒星ほむらを掲げるがため」

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

必殺の絶拳と穿通の弓矢が火花を散らした次瞬、両者はまったく同時に起動詠唱ランゲージを奔らせ、星の励起を敢行した。

基準値アベレージによる様子見など一切不要。何故なら互いが互いに、眼前の敵が強者の星に座していることなど百も承知だからだ。様子見などという日和つた真似をしようものなら即座に命を刈り取られるであろうことは考えなくても理解していた。

だからこそ、初手から必殺、全力全霊。相手をこの上なく信頼しているからこそ油断も加減も毛ほどもない。余すことなく全力を開放し、勝利をこの手に掴むため、二人は互いの星を太陽の如く煌めかせた。

「鏃から半身半馬を蝕む告死。永劫終わらぬ多頭竜ヒュドラの毒が、不死身を捨てろと囁くもの、取るに足りぬわ。片腹痛し。

蹄を鳴らせ、弦を引け、矜持を胸に地平を駆ける。苦悶と嘆きにこの強弓が朽ち果てるなど有りはしない。なぜならば、耳を澄ませば聞こえてくるのだ——天に轟く雷霆

が」

爆轟する気合。増幅していく勝利への執念。

両者ともに掲げる覚悟の熱量は常人のそれを遥かに突破しているが、特に異常なのはジェイスの方だ。

覚悟への振り切れ方が、アルヴィンの二枚、三枚は上を往っている。

アルヴィンが脆弱なわけでは断じてない。前述したとおり、アルヴィンも十分な規格外、傑物である。だがこのジェイス・ザ・オーバードライブという鋼の戦士は、それすらも軽々と乗り越える。その名前の如く、己に限界などないと笑い飛ばすかのように。上昇を続ける鉄の想いに、際は限はない。

「おお、遥かに煌めく天頂神よ。星座となるには早すぎる、まだ戦えと言ってくれるのか。ならば我が身は全身全霊、すべてを懸けて応えるのみ。爛れた血肉は切除した。鋼の四肢を取り付ける」

そして、纏う星の空気が、明らかにアルヴィンのそれとは異なっている。

拡散していく魔の気配。孕む死の香りは、爆発寸前のニトロのようだ。

そう。彼は純正の星辰奏者<sup>エスベラント</sup>に非ず。彼こそは、不死身を掲げる最新鋭の人造惑星<sup>プラネテス</sup>。第三世代型魔星の到達点、その究極。

完成された光の烈火が、あまねく悪を誅殺すべく唸りを上げる。

「穢れた血潮は総じて無用、燃える油と入れ替えようぞ。」

御許へ召され星座へ列するその時まで。さあ戦友よ。轡を並べていざ往かん」

ゆえにいざ、刮目するがいい。限界突破はここに在り。

もはやこの身を蝕む破滅もろじくなど、怖くもなければ取るにも足りない。

脆弱たる五体など不要、すべてはこの鋼の心と共にある。

今日の笑顔を守り抜き、涙を砕き明日への架け橋とせんと願う限り。彼に敵はいないのだろう。たとえ悪魔や神が相手でも、彼は無辜たれの民かの明日を必ずや守護する笑顔の盾となる。

「約束された誓いを掲げ、邪悪を穿つ矢を放て」

——そう、必ず。何があろうともだ。

何故ならそれこそ軍人ジェイスの本懐。彼が願う“勝利”の形。

その願いが朽ちぬ限り、限界突破は無敵であり続けるのだ。

「Metallnova超新星——Overdrive Sagittarius天光礼賛、限界突破の鋼魔弓！」

そして、稲妻の如く轟き閃く魔星の権能。

神の恩寵さえ破碎する殲滅力を宿した魔拳を、肉薄する矢の大群に向けて放った瞬間、目を疑うような現象が発生した。

「な——これはッ……!?!」

リディアは、初めて実際に目の当たりにするジェイスの星光彩の破壊力に思わず声を漏らして瞠目した。

そう、アルヴィンの放った弓矢がジェイスの拳に殴り飛ばされた瞬間、それらすべてが例外なく結晶化して砕け散ったのだ。

これがジェイスの宿す魔星の輝き、不死さえ穿つ限界突破、その正体。

接触対象を極めて脆い結晶構造へと強制変換し、問答無用に木っ端微塵に粉碎してしまおうという恐ろしい能力だ。

所謂、「当たればそこですべてが終わってしまう」類の力である。

ジェイスを相手に、ただの一度も失敗は許されない。一撃でも掠つてしまえばそこで終わり。幕を閉じる。デッドエンド

ゆえに、アルヴィンはジェイスの接近を封じながら立ち回る必要があるのだが——  
「ふははははは、あーっはっはっはっはアアッ!!」

絶笑で大気を震撼させながら進撃する限界突破は止まる気配を見せなかった。

すでにアルヴィンが投射した弓矢の数は総数三桁を突破していたが、ジェイスはそれら九割を殴り飛ばし、残りの一割は被弾必至と甘受しながら、恐るべき戦意で肉薄を続けていく。

この調子ではあと二十秒もあればアルヴィンに敗北の未来が訪れるのは想像に難くない。

しかし、そんな未来は訪れないとも言うのか、アルヴィンはジェイスと同じように口元の笑みをより強烈に深めるばかりだ。

ジェイスの尋常ならざる強靱さを認めつつも、自身の勝利を、何よりも疑っていない。「最高だぜジェイス、駐屯兵つてのは中々戦闘の機会に恵まれねえからなあ——たまにはお前みたいな強者と鎬を削らなきゃ、俺の腕も鈍るつてもんだア！」

機関銃の如く弓矢を連射するアルヴィンの手元が閃いた瞬間、その現象は起こった。アルヴィンの手元を離れ直進していた弓矢が、突如上方へ向けて屈折した。

それも一本や二本ではない。総数十七本の矢が、まるで糸で操られているかのように踊り始めた。

先まで直線的な軌道しか描かなかった弓矢が突如変則的な動きをしてきたことにより、ジェイスの拳のキレにも乱れが生じ、必然として手傷も増える。

しかも、異常事態はそれだけに留まらず。

ジェイスの脇腹を貫通した弓矢が、旋回しながら再び膝裏を貫通した。

これは通常、あり得ないことだ。

本来であればジェイスの肉体を貫通した瞬間、弓矢の運動エネルギーは減衰し、大地

に墜落する。それが普通であり、覆せない自然の理。

しかしアルヴィンの異能は「そんなの知ったことか」と言わんばかりにその不条理を  
実現していた。

すなわち、アルヴィンの異能の正体とは――

「投射金属操縦能力……使い手の技量に左右される星をよくここまで使いこなせるもんだ。流石だぜ、鳴殺笛ツ！」  
シューリンクス

縦横無尽に乱舞する弓矢に五体を切り刻まれながらも、ジェイスは他意のない称賛の言葉  
をアルヴィンに吼えた。

そう。アルヴィンの宿す星の力――それは、弓から投射する金属に星の力を付与し、  
運動エネルギーはそのままに自在に操縦するといふもの。

アルヴィンはアダマンタイトである弓から金属製の矢を投射し、それらを無限に操縦  
することにより戦闘を行っているのだ。

一見すると応用が利き利便性が高く、遠距離から敵を圧倒できる類の異能に感じるか  
もしれないが――それは否。先にジェイスが言ったように、この異能は使用者の技量に  
左右される星なのだ。

投射された金属は、何も自動で敵を攻撃するわけではない。

放たれた弓矢、真実一本一本を、アルヴィン自身が操縦しているのだ。



この星の力はどこまでもアナログであり、ゆえにこそ使い手が凡庸であれば宝の持ち腐れしてしまうであろうピーキーなものに他ならなかった。

雑に使って強いなどは、口が裂けても言えない、応用力の高い——悪く言えば、扱いが難しい星辰光と言えた。

しかし、見るがいい。アルヴィンはこれを苦も無く使いこなしている。

戦況を鷹の如き広い視点で見渡し、自らの投射した弓が今現在どこにあり、どう動かせば敵手に痛打を与えられるかを常に思考回路を大回転させながら考えている。

加えて、追撃の弓矢を放つことも忘れない。この一連の動作を一秒単位で行っているのだから、彼もまたジェイスと同じく規格外の魔人と評することができるだろう。

事実、先まで前進を止めなかったジェイスが停止を余儀なくされ、殺到する弓矢の暴嵐の対処に追われている。

一発一発は致命傷にならずとも、塵も積もれば山となる。蝗いなせの大群のように群がる弓矢すべてを受けてしまえば、すぐさま戦闘不能に陥るのは猿でも理解できた。

よって、それは必然と言えるだろう。

この勝負、アルヴィンに軍配が上がるだろうとリディアは確信した。

現状を見てもアルヴィンが圧倒しているのは明らかだし、そもそも両者の能力の総合力を鑑みても、ジェイスに勝ちの目がないことは試合が始まる前からなんとなく察して

はいた。

Alvin Rovers

基準値<sup>AVERAGE</sup>: B

発動値<sup>DRIVE</sup>: A

収束性: C

拡散性: A

操縦性: A A

付属性: B

維持性: B

干渉性: C

Jace the Overdrive

基準値<sup>AVERAGE</sup>: C

発動値<sup>DRIVE</sup>: A A

収束性: A A

拡散性：D

操縦性：A

付属性：C

維持性：D

干渉性：E

……これだ。

ジェイスが能力値で優っている点は、出力と収束性のみ。つまり単純な火力、必殺性のみと捉えられる。

しかしその必殺力も御覧の通り。封殺してしまえばなんのことはない。

接触したら終わりと言うのであればそもそも接触されなければ何も問題はないのだ。

よってリディアは瞳を閉じ、勝負の決着を確信した——次の瞬間。

「いいや、まだだッ！」

「ッ……!?!」

大気を劈いた爆発じみた大喝破が、リディアの意識を釣り上げた。

視線を飛ばせば、なんとそこには依然闘志を燃やして戦闘を続行するジェイスの姿が。

何をやっているのかあのバカは。もう勝負はついただろう、負けるのが悔しいのかな

んなのか知らないが、無駄な足掻きはもうやめて——

「……なんで。嘘……」

倒れない。ジェイスは未だに拳を振り続けている——どころか、攻撃の回転率がさつきよりも上昇しているのは、一体どういう理屈なのか？

よつて、趨勢は逆転する。ジェイスが覚醒を遂げたことにより再び二人の距離が縮められていく。まるで鼻歌でも刻むかのような気楽さで、ジェイスは己が不利な状況を蹴り飛ばしてみせたのだ。

「ははははッ！ それでこそ限界突破！ オーバードライブ 勇気と気合と根性があれば、どんな未来も切り拓ける……それが神様が男に授けた、最大最強の武器つてなア！」

「おうよ、男にはこんなにも無敵な機能が備わっている——十分に活かしてやらなきゃ、男として名折れつてもんだらうよオツ！」

暑苦しい言葉の応酬を繰り返しながら、そしてアルヴェインもまた当たり前のように覚醒した。投射する弓矢の数、操縦する弓矢の数、両方とも滝登りに向上していき、より洗練されていく。

無駄が一秒単位で削られていき、すべての行動が最適化されいくのだった。

両者の攻撃の回転率、破壊の規模が増したことにより、発生する余波が訓練場の壁面を容赦なく削り取り始めた。

大地どころか大気すらも絶叫を迸らせ、ジェイスとアルヴィンを中心に世界は徐々に破壊の渦に呑み込まれていく。

そんな空前絶後の死闘をただ一人見守るリディアはというと――

「あの人たちは……頭おかしいんじゃないの」

ただただ、戦慄していた。

なんだ、この怪物たちはと。なにゆえそこまで戦意を滾らせ、闘争に身を投じることができる？ 何故、呼吸をするように一秒前の自分より強くなれる？ 散歩感覚で覚醒できる？ おかしいだろう？ 道理に合わぬ、いや、それより何よりも――

「ジェイス隊長は……なんで、笑えているの？」

何故、ああも楽し気に、何の痛痒も感じていないかのように戦闘を続けられている？ おかしいだろう？ だって、彼は基準値と発動値がかけ離れているから、今この瞬間も全身を熱した鉄の棒で掻き混ぜられているかのような激痛に苛まれているはずなのに。同じ事情を抱えた者として、その事実が何よりも恐ろしい。

確か全身の何割かをサイボーグにする強化手術を受けたとか聞いたが、その影響だとも言うつもりか？ いいや、決してそれだけじゃないだろう。何故なら、ジェイスの身を襲っている激痛は内部からだけではない。今この瞬間も、アルヴィンの放つ穿通の弓矢が秒単位にジェイスを切り刻んでいる。痛くないはずないだろう。

そんな内からも外からも激痛の波に苛まれているというのに、この男は何故そんな素振りを一切見せない？ まだ戦おうと拳を振るえる？

「……化け物だ」

ぼつり、と。率直な恐怖の言葉を吐き出した。

自分はこうはなれない。なりたくない。これが努力の果てに行き着く人間の末路だとしたら、自分は絶対こうはなりたくない。

確かにリディア・ウオーライラが持ち合わせる異能は「化け物」と評す以外ない力だが……だからこそ、心までは人間のままでいたい。

そう、強く願う。

「うおおおおおオオツ!!」

瞬間、徐々に距離を詰めていたジェイスがあらうことか大地を蹴り上げ後方へ飛び退いた。

まさかこのタイミングで後退を選ぶなどとは露にも思っていなかったのだろう。一泊、アルヴィンの意識に空白が生まれ、弓矢の群れはジェイスから遠ざかる。

ジェイスは勢いそのままに城壁面まで跳躍、そして――

「――おらああアツ!!」

「ちよツ――はああああ!!」

壁面を渾身の力で蹴り上げた。当然のように壁面は崩壊を起こし、微塵となって砕けていく。

修繕費用とかどうするんだと頭を抱えるリディアを他所に、蹴り上げた反動で弾丸の如く前方へ吹っ飛んだジェイスは、アルヴィンの弓矢をすべて掻い潜り、結果として一瞬で間合いに滑り込むことに成功する。

唸る拳。叫ぶ魔の星。今決着の一撃が、ここに森敵しんげんと振り下ろされ——

「——いやまだだッ!!」

そう咆哮した瞬間、アルヴィンはあることか己がアダマントイトを放り捨てた。

リディアの顔面が驚愕に歪む。ジェイスも少々面食らったような顔をしているが、それも道理だろう。

この状況下で自らの武器を放棄するなど、自殺行為以外の何物でもない。アダマントイトを手放したことにより出力も発動値から基準値へ低下。

これで真実、アルヴィンの敗北は確定したかに思われたが——

「何、拳闘ステゴロに弓矢なんて邪魔だろう?」

思いきり拳を握りしめ、ジェイスの鳩尾へ向けて全力で殴りつけた。

「ッ……!」

意識の虚を突かれ、ブレるジェイスの拳。アルヴィンの心臓を穿つはずだった鉄拳

は、肩口を結晶化するだけに留まり、予想外の反撃を受けた。ジェイスは大きく後方へ吹っ飛んだ。

「はははははッ！ やっぱり男は拳だよなア、ジェイス！ 贅沢言うなら俺も肉弾系の星辰光が欲しかったぜ！」

「くはッ——ああ、今のが一番効いたぜアルヴィン！ その拳、腐らせておくにはもったいねえ！ お前の星辰光、どうにかステゴロに応用できねえか技術班に相談しろよ！」

「ああ、真剣に考えようと思っている！ そしたらジェイスよオ——俺に徒手空拳の稽古つけてくれやッ！」

「おうよ、お安い御用だ！ 言つとくが俺はスパルタだけ、覚悟しろ！ くははははッ！」

そして再び始まる、絶拳、弓矢の大応酬。限界という概念を遥か彼方に置き去りにしたまま、光に焦がれた男たちは破壊の規模を激化させていく。

そんな歓喜乱舞の破壊合戦は、轟いて止まない衝撃音に何事かと軍舎の兵士たちが集まってくるまで、半永久的に続くのだった。



## Chapter IV 出立、そして／To each road

「ありがとうよ、アルヴィン。制圧作戦前のいい肩慣らしになった。魔星の煌めきに翳りはねえ。」

まあきつとアレだ、作戦中に交戦が予想される使徒や神祖なんかよりも、お前の方がよっぽど手強かったってなるのがオチだろうぜ」

「そうなることを願ってしよう。」

勝てよ、ジェイス。殉職することだけは許さんぞ。お前にはまだ、拳の稽古を付けてもらわなきゃならんからな」

そう言い、血塗れになった二人の隊長は熱苦しい男の握手を交わした。

両者は共にご満悦の様子で、その強面の顔面に気持ちが悪いほどの満面の笑みを浮かべている。

……あの後、何故か二人は星辰光を解除し、徒手空拳での殴り合いを始めてしまった。

ジェイス隊長の稼働チェックじゃなかったのかよと突っ込みたいたいところだったが、曰く「興が乗った」とのこと。興が乗って素の殴り合いが勃発してしまうってどんな思考

回路していればそうなるんだ。頭の中に剣闘士でも飼っているのかよと思う。

ともあれ、結果勝利したのはジェイス隊長だった。

当然だろう。星辰奏者としての戦いならいざ知らず、ステゴロにおいての戦闘ならばジェイス隊長の土俵なのだから。普段弓矢を主要武器としてるロバーツ隊長に勝ちの目があるはずもなく——それでも信じられないほどに善戦してたが——お互い満身創痍になりながら決着が告げられたのだった。

いや、ていうかちよつと待ておい。

「握手してる場合ですかこのダブルトンチキ隊長ズツ！」

すぐ医療室へ向かってください、特にジェイス隊長！ 出血量エグイですつて。ロバーツ隊長、無遠慮に切り刻みすぎです！ 模擬戦って言うてんのに加減なく本気で星をぶつける馬鹿がどこにいますか！

あくくくというかジェイス隊長の吹っ飛ばした壁面の修繕依頼もしなきゃだし本当にもうこの大馬鹿たちは——!!」

『はははははは』

「何呑気に笑ってんですかぶち殺すぞコラアアアア——ツツ!!」

神よ。何故私に平穏を与えてくださらないのですか。

夕焼けに染まる天を仰ぎながら、私は自分の胃袋が爆散する音を体内から聴いた。

いっそ殺してくれ。いや、マジで。

…

…

…

「それじゃあ行つてくるぜ。留守番よろしく頼むぜ、シューリンクス鳴殺笛。それと、ウォーライラの嬢ちゃんもな」

あの模擬戦から一週間。ついにカンタベリー制圧作戦の幕が上がるうとしていた。

作戦決行にあたり、ジェイス隊長は今日付けでアドラーを後にし、カンタベリーに乗り込み制圧を開始する。

神祖や使徒といった存在を甘く見るわけではないが、ジェイス隊長なら楽々完勝してしまうのではないかという気がしてしまう。あんなぶっ飛びっぷりを見せられたら、そう感じてしまうのは道理だろう。

何せ、味方の私ですら恐怖と戦慄を覚えてしまった。

身も蓋もなく言えばドン引きだ。ジェイス隊長への苦手意識がより跳ね上がったのは語るまでもない。

アルヴィン隊長にも同じことが言えるが、何よりジェイス隊長に対し異常に感じたの

はあの出力差での洗練された立ち回り。挙句鼻歌を歌うような気軽さで覚醒を連発するのだから、『化け物』と形容するしかない。

こんな頭のおかしい男と結婚するとか、奥さんはどこまで豪気な性格なのか。それとも男が見る目がないのか。どちらにせよ、二人の子供がかわいそうだ。

……………いや。

「私なんかよりはマシか」

小声でつぶやく。

いやむしろ、ジエイズ隊長はなんだかんだ面倒見いいし、義理堅いところがあるから、子供たちは幸せだろう。すくすくと立派に育っていくに違いない。

私みたいな、塵と違って。

「何度も繰り返し返して悪いが、本当に何かあればすぐに連絡してくれ。どんな些細なことでもいい。速攻で力になってみせる」

「頼もしい限りだ、ありがとうよ。作戦が終わったらよ、また呑みに行こうぜ。」

ああ、そうだ。今度はコールレインの旦那もつれてきていいか？ アルヴィンは確か面識なかったろ」

「いや、面識自体はあるぞ。だが、話したことは一度もない……」

噂の裁剣女神<sup>アストレア</sup>お抱えのコールレイン元少佐殿か。こりや楽しみが一つ増えたな。仲良くしてもらえると光栄なんだが」

と、私が暗い感情を渦巻かせているのも露知らずか。相も変わらず二人の隊長は唯一のこの場の乙女たる私をガン無視してイチヤイチャしている。

ホモどもが。嫌がらせに今度二人のカップリング本でも作ってやろうか。

などと頭の悪いことを考えていると、何故か、ジェイス隊長がこちらへと歩みを進めてきた。

まさか私の腐りきった姦計がバレたかと肝が冷えた次の瞬間、予想だにしていな言葉が、ジェイス隊長の柔らかない笑みと共に吐き出された。

「お前さん、無理はしすぎるなよ。一人で背負いこんで解決できることなんざ何もねえんだ。いつそのこと、全部アルヴェイン<sup>あ</sup>にぶちまけちまえよ。安心しろ、嬢ちゃん<sup>い</sup>が危惧しているようなことは方に一つも起こらねえさ。アルヴェインはそういうやつだからな。強くて優しい——光<sup>シューリンクス</sup>を愛する山羊<sup>クス</sup>なのさ」

「——ッ……」

呼吸が止まる。心臓が止まってしまいそうになる。

呟かれた言葉の端々には、なにゆえか私を気遣うような慈愛に満ちていた。

まさか。ジェイス隊長は、私が軍人を辞めたがっているのに気づいて……？

「なんだよジェイス、ひそひそと。うちの副隊長引き抜こうたってそうはいかねえぞ」  
「ちつ、バレちまったなら諦めるしかねえか。」

……ああ、そうだな、アルヴィン。お前にもちよいと言っておきたいことがあるんだ。わ。しっかりとしてそうでお前も意外と危ういところがあるからなあ、自覚あるのか分からんが」

「? ああ、何だ? 遠慮なく何でも言つて——」

動揺する私を余所に、ジェイス隊長は踵を返し、再びロバーツ隊長の方へ向かっていく。

そして——

「——」  
何事かを、ロバーツ隊長の耳元でささやいた。

詳細は委細聞き取れなかったが、隊長の顔も私ほどではないにせよ動揺に歪んだ。いや、困惑と言った方が具体的か。

言葉の意味が理解できない、といった表情だ。

「……そうか。分かった、肝に銘じておこう」

「ああ、そうしてくれや」

しかし、それも一瞬。言葉の意味を表面上だけでも咀嚼したのだろう。ロバーツ隊長が真剣な表情で頷くと、ジェイス隊長も満足げに首を縦に振った。

そして真実その言葉を最後に、ジェイス隊長はアドラーの地を後にするのだった。

## Chapter V 副隊長の務め／Daily wo

rk

アドラーが誇る黄道十二星座部隊が一角、第十部隊・瞬圧山羊が駐在する旧オランダ領に荘厳と聳え立つアムステルダム王宮。

外観の壮烈さ、気品に満ちた神々しさは然ることながら、内部に至っては旧西暦の建設時そのままに、シャンデリアや大理石の床など、軍隊の駐屯地とは思わせぬほどに重厚で優美な内装に彩られていた。

その駐屯地の一室を改造した訓練場。

そこには逆に、煌びやか豪華絢爛な装飾品は皆無であった。

存在するのは訓練用にと武骨に壁面へと掛けられている数十本の剣のみであり、壁面や天井などは簡単に壊れてしまわぬようにと最高品質の素材でコーティングされている。

——まあ、その最硬質を誇る鋼でさえ、ジェイスの蹴撃により一部を木端微塵にされてしまったのだが……

そして、そんなまさに戦うためだけに用意された闘技場とも言える場所にて、二十数



名の兵士と——彼らが固唾を飲み見守る、一組の男女がいた。

誰一人として口を開くことなく、静謐且つ張り詰めた空気がこの場に流れている。

相対している男女は、共に剣を構えていた。

気合十分といったように瞳を凛々と輝かせ戦意を滾らせている男は、己が発動体である銀剣を両手で握りしめ、中段の構えを取っている。

彼を焰と例えるなら、女の方は氷だった。

焦ることなく、逸ることなく、剣に通ずる殺人の技に、情熱など一切不要というかのように、吹雪の如き極寒をその身に纏いながら瞳を静かに閉じている。

右手に握るは己が大剣——ではなく、訓練用に常備されている通常サイズの剣、所謂ロングソードと俗に呼称される得物を、その細腕に握っている。

静寂ばかりが木霊し、吹き抜けの風すら吹かぬ重厚で無機質殺風景な訓練場は、今や兵士全員の緊張で暴発寸前の風船のようになっていた。

今から始まる最後の模擬戦。この一戦、果たして彼は——ジュード・シモンという名の新兵兵士は、どこまで彼女に食らいつけるのか、と。

どこまで彼女に——第十北部駐屯部隊・瞬間山羊副隊長であるリディア・ウォーライラに善戦できるのかと。

皆が期待し、そして同時に待ちわびている。

さあ、次はどのように、この副隊長は華麗に勝利するのだろうか。

ジュード・シモンとどれほど練度の差を見せつけ、圧勝するだろうか。

見せてくれ、その輝きを。

我々と年齢もそう変わらぬだろうに、なにゆえそこまで強く気高く、光輝き、煌めくことができるのか？

その一片でもいいから、どうか我々にもっと、もっと、もっと、見せてほしい。

いつか私達も、貴女の背中に追いついて、肩を並べて、アドラーのために戦ってみたいからと。

憧憬の視線が、リディアに集中している。

そして注目の的であるリディアは、この場にいる誰にも気づかれないほどの小さな溜息を溢し、眠りから覚めたようにゆっくりと瞼を持ち上げた、次の瞬間。

「始めましょう、ジュードくん。どこからでもどうぞ、遠慮なく来てください」

「——よろしくお願いますッ！」

静かに放たれた開始の合図を吹き飛ばすようにジュードが吼えた刹那、二人の剣戟舞踏の幕が上がったのだった。

…

…

…

場内に高らかに響く、鋼と鋼が衝突した金属音、劍戟の調べ。

ジュードくんの真つ向馬鹿正直な突貫を何の苦も無く弾いた私は、そのまま一気呵成に攻めに転じる。

斬る、突く、薙ぐ、抉る——多種多様、変幻自在な攻め方を秒単位で披露してやれば、先までの勢いはどこへやら、彼は守勢に入らざるを得なくなつた。

勢いも熱量も大事だし結構なことだ。それらを馬鹿にする気は毛頭ないし、事実気合と根性だけで理解不能な強さを発揮する化け物を私は二人も知っている。しかも両方北部担当の隊長格とかいう地獄……なんで北部だけと思うがまあしかし。

それも、それだけでは意味がない。

気合という熱を強さに直接変換ができなければ、それはただの無用の長物だろう。むしろ、そういった概念は、こと命を削ぎ合う戦場では時に致命の隙を晒す死神に成り得る。

何故なら、そういった感情は総じて己が酔いやすいからだ。

ああ、己はこんなにも頑張っている。こんなにも熱量に満ち溢れている。

勝つぞ、勝つんだ。そう、気合と根性は素晴らしい……これほどまでに無限の力が湧き上がってくるのだから……！ とまあ、このように。

ようは、アドレナリンが馬鹿みたいに分泌されるのだ。よつて、興奮状態に陥り視野が狭くなる。現状を冷静に判断できなくなる。

光狂いのようなトンチキならいざしらず、ジュードくんはまだ新米兵士、実力は当然だが私より下だ。

そんな彼が気合と根性を頼りに馬鹿正直に突っ込んでくればどうなるかというところ。

「ぐ……く、ううウツ……い！」

このように、苦も無く反撃を許され、斬撃の雨を浴びせられている。

なんとか防ぎきっているのは見事なもの、それもあと十数秒で瓦解するだろう。

だが、私はそれをしない。

何故なら彼を倒すのが私の仕事ではない。彼に戦いを教えるのが、私の仕事なのだ。

面倒だし業腹だし、なにより何で私なんかこんな業務を任せるのかと腹の底から浮上する不満に際限はないが、仕事である以上ごちやごちや言つてられないし、こればかりは手を抜いて誤魔化せることではない。

ゆえに、私は斬撃の手を緩めながら、息を吹きかけるようにゆつくりとした口調で言

葉を投げた。

彼の頭がこれ以上沸騰しないように、と。

「ジュードくん、一回落ち着いてください。戦場では常に視点を二つ持つこと。己を客観視するということのを忘れぬように。俯瞰、とも言えますかね。そうすることで視えてくるものが……戦場に置いての“勝利”が実像を結ぶはずです。さあ、実践してみましよう」

「は、はいッ……」

余裕なさげに返事をしたのを皮切りに、私は攻撃の手を完全停止させ、二歩、三歩、四歩と彼から後退した。

疾風怒濤の斬撃の風が止んだことにより、崩れていた体幹を調整し、再び足裏で強く大地を踏みしめ剣を構えるジュードくん。

己の爆発する脳みそに冷水をかけるように深呼吸を一つ、二つと繰り返し、やがて十数秒が経過したその後に。

「——行きます」

「どうぞで」

先とはまったく逆——冷たい蒼炎を宿した瞳で、こちらの間合いへ踏み込んできた。

ふむ、なるほど。指摘すればすぐ軌道修正できる対応能力は大したものだ。先ほどの

何倍も集中できている。

現に今しがた打ち込まれてきた袈裟斬りは、数瞬間に放たれた唐竹割りとは何もかもが違っていた。

振りぬかれる速度、付与する力、何よりもこちらの腕を切り落とすという明確な目的と共に抜刀された一撃は称賛に値するものだった。

「はああああアツ！」

防がれることは予測していたのだろう。彼は間断なく第二撃へ移行した。

防御されたという事実ごと切り伏せるように剣は私の足元まで振りぬかれ、返す刃で逆袈裟を放ってくる。

続けて難なくそれを躲すと、左足を軸とし回転蹴りを繰り出して、繋げて拳、剣、蹴撃、斬、突、薙、壊——

巧みに計算された連撃が、霰のように私に襲い掛かっている。

だが、いずれの攻撃も私を捉えるには至らない。勇猛果敢に攻めかかってくるジュードくんとは対称的に、私はどこまでも冷静に余裕を以てして彼の猛攻を凌いでいた。

驕るわけではないが、まあこの程度当然だ。伊達に副隊長を拜命されたわけではない。

むしろ新米兵士に後れを取る副隊長など、まさに名前負け以外の何物でもない。

軍人など早く辞めてしまいたいと切に思っている私ではあるが、これでも一応自己鍛錬は毎日欠かさず行っている。……本当はしたくないが、こういったことはサボるとすぐにつけが回ってくるし、何より万が一の有事の際、自分の命を守るのが自分の手腕である以上、磨かない訳にはいかなかった。

だから当然、私は彼より優っているし、こうして教導を行えているというわけだ。

「くッ……！」

「焦る必要はありません。いい筋ですよ、基礎鍛錬を愚直に繰り返しやってきたのが手に取るように分かります。だからこそ自分を信じて、冷静に。攻撃が悉く当たらないからといって気を急いではあつという間に足元を掬われますよ、このように」

焦燥により僅かに生じた間隙、それを縫うようにして私は彼の左足首にローキックを放った。

それは見事に命中し、決して無視できない痛苦となり彼の注意力、集中力を更に散漫にさせることに成功する。

「今のが斬撃なら足首を断たれていましたね。これが戦場だった場合、恐らくその激痛で意識は漂白され、ジュードくんは負けていたでしょう。」

夢中になり、熱くなるのは構いません。ですが、言ったはずです。客観視しろ、と。全身の神経を鋭敏化させ、五体にくまなく眼球を張り巡らすような感覚です。

そうすれば、晒す隙は最小限まで抑えられます」

「ぐツ……は、はいッ！ 二指摘ありがとうございます！」

馬鹿正直に礼を言いながら、彼は負けじと胆力で苦痛をねじ伏せながら再びこちらへ斬りかかってきた。

そして三度始まる剣戟繚乱、鋼の奏でる二重奏。

ジュードくんは依然余裕なさげに肩で息をしながらこちらを叩き切らんと迫ってくるが、攻撃の回転率は先よりも明らかに向上していた。

なるほど、きちんと熱量を力に変換するということも身体が覚えてきているらしい。

となるとやはり今後の課題は熱量の制御、己の客観視にあるなど結論付けた私は。

「ここらへんで幕にしましょうか」

静謐に言い放った刹那、私は渾身籠めて地を蹴り上げ、上段で振りかぶってくるジュードくんの懐に一瞬で潜り込んだ。

しまった、とジュードくんは己が失策に対し不覚を悟るが、もう遅い。この一瞬で、勝負は既に決している。

顔と顔がくつつきそうなほどに接近した私は、ジュードくんの右腕を捻り上げ勢いをそのまま反転させるように背負い投げ——訓練場に響き渡る鈍い衝撃音を合図に、模擬戦最後の決着が告げられるのであった。



「お疲れさまでした。指摘したらすぐにこちらの意図を汲み昇華できる対応力は素晴らしいですね。基礎訓練もしっかりしていますし、センスも抜群です。

なので、今後改善すべきはメンタルの部分でしょう。熱くなりすぎず、眼前の敵ではなくまずは己自身を鑑みる。何度も言うようですが、客観視を忘れずに。

あと、右足の踏み込みが左に比べて弱いように感じました。筋肉のつきかたに左右で差がついているのだと思います。真面目で愚直なジュードくんのことですから、恐らく筋トレは頻繁にされているのでしょうか？ でしたら、負荷を右足に合わせて今後は鍛えるようにすることを推奨します。左右均等であればあるほど、踏み込みも安定しますし、その分攻撃の精度も増すでしょう。今後も頑張ってください」

「……………あ、は、はいッ！ ご指導ありがとうございます、ウォーライラ少佐ー」  
私が淡々と告げたアドバイスに対し呆然としていたジュードくんであったが、時間をかけてそれらを咀嚼したのか、すぐさま立ち上がったかと思うと馬鹿正直にこちらに深にお辞儀をしてきた。

本当に、今時には珍しい真つすぐな男の子だ。多分私と同一年か一つ下くらい年齢だろうが、どう育てられればこうにも純粹に成長できるのだろうと思う。

芯まで捻くれている私とは大違いだが、きつとその性格上、貧乏くじを引かされることが今後は多いだろう。

まあめげずにその調子で頑張ってくれと無責任に心の中で激励して、と。

「さて、これで本日の訓練は終了とします。皆さん、お疲れさまでした」

『(指導、ありがとうございました！)』

二十数名の兵士の、鼓膜を叩き割らんばかりの大音声が訓練場に轟いた。

身体の芯が揺さぶられる。本当に元氣だな、と年寄りみたいな感想が浮かんでしま  
う。

私なんて早く帰りたいとか思っているというのに。温度差に風邪をひいてしま  
うだ。

「一応全員分マンツーマンでアドバイスをさせてもらいましたが……何か質問などはあ  
りますか？ 遠慮なくなんでも聞いてください」

本音を言えばこのまますぐに帰りたいので質問などしないで欲しいのだが。

指導不十分とかで始末書とか書かされても面倒だ。思いつく限りのやれるだけのこ  
とはやっておく。

「は、はいッ！ ウオーライラ少佐、よろしいでしょうか」

「……ジュードくん。まだ何か疑問が？」

さつき散々教えたろうと心の中で愚痴りながら、拳手したジュードくんを指名する。

この猪突猛進ぶり、彼も光狂いの才能があるのだろうか、と禍々しい予感が胸中で渦

を巻いてしまい吐きそうになる気持ちを抑えた。

もう本当に勘弁してくれ。あんな光狂いは隊長たちだけで充分だ……

「い、いえ、質問というわけではないのですが……その、恐れながらウオーライラ少佐。できれば……なのですが。敬語はやめていただけると有難いです。我々はまだ新米も新米、少尉の身分です。それを少佐階級の方に敬語を使われると恐れ多いと言いますか……自分たちのような新参に、そのようにへりくだった態度は不要ですので」

「……あー……」

なるほど。私自身あまり意識してなかったが、確かに私はデフォルトで敬語を使っている。それは上司であろうが部下であろうが変わりなく、基本的にタメ口をきく相手は絶無と言ってよかった。

確かにジュードくんの指摘通り少佐階級となれば、少尉の新米兵士に敬語を使うなんてこと普通はしない。そんなことをしている少佐階級の人間など、恐らく軍内で私だけではないのだろうか。

……いや、まあでも。

「ごめんなさい、こればかりはどうしようも……改善するようにはしますが、なにぶん私も皆さんと年齢がそう変わらない若輩の身です。それに私自身、別に大した人間じゃありませんから。上司風を吹かす、というのがどうにも性に合わないんです」

「な、何を仰いますか、大した人間じゃないなんて！ ウオーライラ少佐の伝説は聞いていますよ。士官学校を卒業して即副隊長に任命された、帝国近年稀に見る天才だと！」  
「……いや、まあ……それは事実ですが、天才というわけでは……タイミングが良かっただけというか……」

そう。私は士官学校を卒業して速攻でこの瞬<sup>カブリコーン</sup>庄山羊の副隊長に就任したという異例の経歴を持つ。

当時は、こんなにも気軽に飛び級で少佐階級になれるものかとなんとなく思っていたが、どうやらそれは私の認識違いだったらしく。

当然だが、いくら優秀な軍人であろうとも士官学校を卒業したらどこかしらの部隊に配属され、まずは少尉の身分からスタートを切るといふ。

どれほど運が良くても中尉、更に人数を絞って大尉、いきなり少佐階級など異例も異例、だからそういう意味で私はちよつとした有名人だった。

それこそ、ヴァルゼライド閣下が生前血統派を肅正する前は、家柄のみで少佐中佐大佐、果ては将官階級にまで即就任する者もいたらしいが……

私のように、成り上がりで即上位階級になれたものは、本当に希少らしい。

軍人としての才能もあつた。士官学校時代、人並み以上の血反吐を吐くような努力を繰り返してきた。そして、私が天より授かつた星<sup>アステリズム</sup>辰光も、軍内でトップクラスに強力

だったこともあり……つまり、総合力において極めて優秀だったために、私は今の地位に座することができたのだ。

加え、ヴァルゼライド閣下が逝去した影響の人手不足も深刻だったのだろう。

特に、東部と北部はそれが顕著だったと聞く。東部はかの審判者やヴィクトリア隊長などの傑物が揃っていたため、当時隊長格がロバーツ隊長だけだった北部に、私が配属に相成ったというわけだ。

だから実際、私が凄いかと言われると別にそういうわけじゃなく。

もちろん自身の努力が五割を占めていると胸を張れるくらいには頑張ってきたという自負はあるが、それでも残り五割は運によるところが大きいだろう。

……その運によって齎もたらされた副隊長という役職も、今では私を縛る手枷足枷となっているわけだが。

「謙遜なさらなくてください。事実、ウォーライラ少佐は凄いお方です。こうやって我々二十人近くの個人稽古に付き合ってくださいした後でも息一つ乱していないですし、アドバイスも的確ですべてが的を得ています。

ウォーライラ少佐の体術や剣捌きも流麗且つ無駄がなく、自分たちとしてもとても参考になります」

「……いい、いや……そんな」

「ジュードの言う通りです！　しかもウオーライラ少佐、滅茶苦茶努力家じゃないですか。毎日訓練場で自己鍛錬をしているのでしょう？　同僚が何回か見かけたと言っていました。天才で努力家にも関わらず謙虚でクールで部下にも優しい……本当に理想の上司つて感じですよ！　俺たち、早くウオーライラ少佐やロバーツ隊長と肩を並べて戦えるように頑張るので、これからもご指導よろしくお願いします！」

「……………は、はい……………こちらこそ」

胃が痛い。万力で締め付けられているかのようにキリキリする。

皆が一樣にキラキラとした視線を飛ばしてくるが、その瞳が眩しくてたまらない。

ああ、ごめんなさいごめんなさい。私、本当に大した奴じゃないんです。

この仕事だつて本当に、ほんつつつとうに仕方なくやっているだけで、本音を吐露すれば一刻も早くこんな軍隊とくろから去りたいと思つている俗物なんです。

自己鍛錬を欠かさないのも自分の身をいざというときに守れるようにするため、保険に他ならない。

貴方たちにアドバイスをちゃんとするのは、後々面倒なことにならないようにするため、誓つてみんなのためやアドラーの為なんかじゃなく、結局私自身がこれ以上不幸にならないようにするための処世術。とても褒められたものじゃない。

だから頼むからそんな綺麗なものを見る目でこちらを見ないでくれ。

貴女のようにになりたいと憧憬を向けなくてくれ。光に溺れて窒息してしまいそうになる。

私が今あなた達に見せているこの一面は、真のリディア・ウオーライラの姿ではなく、虚飾されたものなのだ。

しかしそんな仮面の下の私の本性を彼らが知るはずもなく、だからこそ疑問に浮かぶのは。

「……なんで、ジェイス隊長は」

小声でつぶやく。誰にも聞こえないように。

そう、少なくとも同部隊内の部下たちは私の本性、本音、本質などに気づいていない。ゆえにこそ今もこうやって私への称賛を数多に口にし、尊敬の眼差しを向けている。

……やはりあれは、ジェイス隊長の観察眼ゆえの賜物だったのだろうか？

だとしても何故分かった？ 私えんせいてきのロバーツ隊長やジェイス隊長のような光狂いに対する辟易とした態度からか？ 厭世的な態度からか？

いやだが、それだけでは理由にならない。そんなことを指摘すれば、ヴィクトリア隊長はどうなる。

あの人も纏う厭世的なオーラを隠そうとしていないし、極めて優秀な人ではあるが面倒ごとが嫌いなダウンナー寄りな人だ。だが、帝国を守るといふ己の役割は全うしている

し、それに誇りを抱いているのは言わずもがな。

……では何故、分かってしまったのか？

……駄目だ、いくら考えても詮無きこと。幸いなのは、そのジェイス隊長が今は北部に不在ということだ。

これ以上私の隠したい真実をつつかれることはない。

……だがやはり一番謎なのは、彼が去り際に放った一言だ。あれって、一体、どういう意味なのか——と思考を巡らせようとした瞬間。

「は、はい！ ウォーライラ少佐！ 僭越ながら私もよろしいでしょうか」

「！ ……あ、ああ、はい。どうぞ」

その思考は響くソプラノボイスに断ち切られた。挙手したのは栗色のボブヘアの小動物を思わせる女の子だった。年齢は私よりも下と思われる。

名前は確か……ソフィーちゃん、だったかな。

指名されたソフィーちゃんとはしばらく口をモゴモゴとさせていた。

何だ、そんなに聞きづらいことなのかと私が頭にハテナマークを浮かべていると、とんでもない爆弾発言がその小さな口から解き放たれた。

「ウオ、ウォーライラ少佐って、ロバーツ隊長とお付き合いられてるんですか!？」



「……………はい? ……………はああああああああつ!!」

言葉の意味が理解できず一瞬赤子のようにポカンとしてしまう私。そして数秒後、自分の声とは思えない絶叫が喉の奥から飛び出てきた。

いやちよつと待てどうしてそういう発想になるていうかなんで私があの人と!?

「い、いやいやそんなあり得な——」

「こ、この前私見ちやつたんです! ウォーライラ少佐とロバーツ隊長が二人きりで夜の街を歩いていて、酒場に入っていくのを! あれつてつまり、そういうことなんじゃないんですか!」

私の否定の言葉を塗りつぶすように早口で捲し立てるソフィーちゃん。

焚きつけるような言葉を言い放つもんだからみんなは各々黄色い声を張り上げ桃色の空間がもの見事に爆誕してしまった。

ねえちよつと待って頼むから私の言うことを聞いて??

「やつぱりウォーライラ少佐とロバーツ隊長ってそういう関係だったんですか! いや、俺もそうなんじゃないかなーって思っていたんですよ。だってウォーライラ隊長普段ツンとしてクールなのに、ロバーツ隊長といるときだけなんか雰囲気違いますもんね!」

滅茶苦茶毒吐きますし心なしかちよつと楽しそうな……」

「い、いや待つて楽しくなんか——」

「そういえばロバーツ隊長もウォーライラ少佐のことよく口にしてるもんな！」

『ウォーライラは本当に優秀だ。本当に北部うちに来てくれてよかつたよ。いやあ、いい嫁さんになるぞあいつは』って言つてたし！」

「お、お願いします皆さん、私の話を——」

「うう……密かにロバーツ隊長とワンチャンないかなとか思つていたけど……そうだよね、お似合いですもんねお二人……ああ、私の儂い恋は泡沫うんかたとして散るのです……」

「畜生、ロバーツ隊長も隅に置けねえよなあ！ ウォーライラ少佐みたいな見目麗しい女性のおっぱい毎日揉めるんだろ!? そんなのつてないよなあ、不公平だ！」

「アンドレくん、あとで隊長室に来てください。セクハラの罪状で始末書を書いてもらいます」

「そんな!？」

数分前の緊張感に満ちた空気から一変し、今では明るい音色の笑い声が訓練場に木霊している。

あーもう滅茶苦茶だ。結局誰も私の話聞いてくれないし。死にたいな。いやもう死のう。あの人の恋人扱いとか何それ嫌だ。勘弁してくれ、あんなのが恋人だったら暑苦しくて手を繋いだけで焼死してしまうわ。

……いや、まあ確かにあの人はいい人だし人情味あふれているし優しいし紳士的だし客観的に見てとても優良株だというのも頷けるしきつと将来いいお父さんになるんだろうなあということとは想像に難くないが——

「おあ、ウォーライラ少佐の頬が赤い！ きつとロバーツ隊長のこと考えてるんだ！ ヒューヒュー！ 熱いつすねえ、結婚式には呼んでくださいよ！」

「……いいでしょう、アンドレくん。構えてください特別補講です。四肢を切り飛ばし達磨にしたあとでたつぷりと説教してあげますからそのつもりで」

「い、いえそんなちよつとした冗談じゃないですかウォーライラ少佐、んな鬼の形相浮かべなくても……」

「……いや、ちよつと待つてください少佐、え、冗談つすよね!? なんて抜刀の構え取って——って危なッ!? ちよ、本気で殺す気でしたよね今の！」

「動かないでくださいアンドレくん。致命傷から外れると余計苦しむことになりますよ」

「いやああああアア——ッ!? 殺されるうううう——!!?」

うるさい黙れよ。別に私相手にかしこまった態度をとる必要なんか皆無だし尊敬してくれとも思わないが、貴様は違う話が別だ。私の逆鱗に触れすぎたゆえに、地獄の底まで落としてやる。

まあ、叩つ斬るのは冗談としても、関節技をキメて締め落としてやるくらいはしてもバチは当たらないだろう。

一切慈悲無し、あまねく助平死ぬがいい——と今まさに変態男に天誅を下そうとした、その時。

「おお、なんだか盛り上がっているな！ やはり若人が和氣藹々わきあいあいとしているのはいつ見ても活力になるなあ」

「……げえ」

『——お疲れ様であります、ロバーツ隊長！』

今まさに話題の中心となっていた男、アルヴィン・ロバーツ隊長その人が訓練場へと足を踏み入れた。

私達のドンチャン騒ぎを微笑ましそうに見守りながら、こちらへと近づいてくる。

そして、そんなロバーツ隊長を眩しそうに見つめながら嬉しげに挨拶をする新兵のみな。

それに対し隊長もフラットな調子で「おう、お疲れ」と返した。

……最悪のタイミングだ。なんでこの瞬間に現れるんだこの馬鹿隊長は。

「おお、どうしたウオーライラにアンドレも。もしかしてまだ模擬戦の途中だったか？ それにしては、なんとというか緊張感のない感じだが」



「……それで、なんで隊長はここに？ 仕事の方はいいんですか」

「ああ、一区切りついたから休憩がてら様子を見にな。」

みんな、頑張っているみたいだな。お前たちは帝国の未来を担う期待のホープだ。より一層今後も励み、精進してくれ。何か悩み事とか相談があれば、いつでも俺に言うんだぞ。俺でよければいくらでも力になる」

「あ、ありがとうございます隊長！」

「いつか肩を並べて戦えるように頑張ります！」

と、先とはまったく違ったベクトルの黄色い悲鳴が各所で響き渡り始める。

……本当に隊長は人気者だな、とつくづく思う。

まあ、こんなに部下に対してフレンドリーで距離を感じさせず、且つ親身になってくれる隊長格の人なんてそうそういないだろうから人徳が厚いのは道理と言えるか……

しかも仕事面でも驚くほど優秀だし。ただ優しいだけではない、軍人としての強さもしっかりと備えているからこそその皆の尊敬の対象になるのだ。

そして、しばらく新兵のみんなと雑談を交わしていた隊長であったが、ふと思い出したようにこちらへ振り向くと。

「ああ、そうだウオーライラ。今日の夜時間あるか？ もし暇だったら、今から二時間後あたりに俺の部屋まで来てくれ。ちよいとばかし付き合ってもらいたいことが……」

て、ウオーライラ?」

……そんな、火に油を注ぐようなことを言うものだから。

「——やっぱり、お二人つて付き合っているんですか!」

「お似合いですよ、私は応援します!」

「挙式はいつですか!」

「子供は何人欲しいですか!」

私と隊長を中心として、色恋の話題に目敏い新兵のみんなは、ハイエナの如く群がってきた。

……ああ、もう、本当に。

「……空気読めよ、馬鹿隊長」

「……? なあ、ウオーライラ。みんなは一体何のことを言っているんだ? 俺と

ウオーライラが……? 結婚? なにゆえだ?」

「もういいから黙るか死ぬかしてくださいよこの大馬鹿隊長」

結局、私と隊長の間には何も無いということを説明し終えるまでに一時間もかかってしまった。

機会とチャンスさえあれば、今度この馬鹿隊長も締め落としてやろうと、私は心に強く誓うのだった。

## Chapter VI 斯くして車輪は廻り出す／For

## Justice

「……で。付き合ってもらいたいことつてのは結局酒盛りこですか。ならそう言ってくださいよ、おかげで皆さん勘違いしたじゃないですか。

……ていうか、なにゆえまた呑みに……」

「決まってるだろ。ジェイス率いる魔弓人馬サジタリウスの出立記念だよ。勝利を祈って乾杯、つてな」

「普通作戦完遂したあとにするものでしょこういうのつて……しかも肝心のジェイス隊長たちはいないし……」

あの後。言われた通り隊長の部屋まで訪れた私はまた件の酒屋へと問答無用で連行されていた。

曰く、ジェイス隊長出立記念と称して。

なんだろう。もうこれパワハラじゃなからうか。

独り身四十近くのおじさんが、夜な夜なうら若き乙女を居酒屋に連れまわす……字面だけ見たらパワハラどころか事案だ。



隊長が人格者だから私もまだ許容しているものの、これが下心の丸出しの親父ならこ  
うはいかない。

本当、「優しい」って美德でもあるが卑怯な武装だなど溜息を吐きながらモヒート  
流し込んでいると、隊長はお得意の爽やかスマイルを浮かべながら開口した。

「もちろん祝勝会もやるぞ？」 ちよつと手狭になるかもだが、この店を貸し切りにして  
北部部隊全員でパーツとな」

「あのですね。キャパを考えてください、入るわけないでしょう。どちらかの部隊に  
絞つても難しいでしょうに……ていうかもうそこまで考えてるんですか。必勝前提な  
んですか？」

「当たり前だろう。ジェイスが負けるわけがない。

それに、今回ジェイスが引き連れていった連中も、みんながみんな誇り高き鋼の使徒  
だ。彼らの束ねた光を前に、たかが神様とその飼犬が勝てる道理なんて有りはしない  
だろうさ」

「……本当に。今回の作戦に参加を希望した傷痕軍人の皆さん、正気の沙汰とは思えま  
せんね」

「正気でも狂気でも、俺は彼らの決意に敬意を表する。手足、はわわた腑欠けたとて、軍人とし  
ての誇りや矜持は失わない……死ぬまで、否、死んでも帝国の為と在らんとするその姿、

まさしく軍人の鑑だ。

今回の作戦で無事帰還できたとしても、彼らは高度なサイボーグ化により寿命の九割を捧げているゆえ、謳歌できる生はそう長くはない。きっと彼らはそれでも幸せなのだろうが、せめてそれでも、凱旋は上げるべきだろう。

『アドラーのために奮闘してくれたこと、心から感謝する。貴君らはヴァルゼライド大統領が誇る最高の部下だ。大統領閣下は永久に不滅、アドラー万歳』……と、杯を打ち付けながら祝杯を挙げるのは、俺の中で決定事項だ。誰にも文句は言わせんぞ」

「……まあ、そうですね。立派ですよ、本当に。祝杯についても、ええ、もう隊長に全部お任せします」

立派なのだろう。無意味に死ぬよりも、徒花あだばなでもいい、せめて魂の一片でも帝国の役に立てたら……と奮起する姿は、胸の奥が締め付けられるほど立派だし、凄まじいことだ。私には到底真似できないが……真似したいとも思えない。

だって、単純に怖すぎるだろう。

手足を失って苦しいのに、更に人体改造をして寿命を削って更なる苦痛の渦中へ飛び込むだと？

冗談じゃない。死ぬならせめて楽に死なせてくれ。

本当に、ヴァルゼライド大統領閣下に瞳を焦がされた連中は一体どうなっているんだ。

何が己をそこまで駆り立てるのか、意味が不明だ。

真に一番大切なのは、自分の命なのではないのか？ 命よりも大切な誇りや矜持があつたとて、自身の命がなければそんなものは無用の長物だろうに。

そういった決意や覚悟が尊いものだと客観的に理解はできるものの、私個人としては理解もしたく無いしあなりたいとは思えない。

私は一生、人間のままでいい。英雄ガゲモなんかになりたくない。

「ヴァルゼライド総統閣下も罪な人だよ……」

死して尚この支持のされつぶりなのだから余程凄まじい人物だったのだろう。

……いや、厳密に言えば特異点とやらで未だ閃奏という極スファイア晁星を描き、存命しているらしいが、そこに関してはもはや私は考えることをやめた。

ていうか、理解の範疇を超えていたのだ。何だよ、極晁星に特異点に閃奏つて。

頼むからこの世の言語で説明してくれ、と当時その話を聞いた時私は思ったものだが……まあ、そんな頭がおかしくなるようなことを聞かされた時点で、一度も軍内で面識が無かつた私でも、ヴァルゼライド総統閣下は凄絶な人……いや、化け物だったのだなと思ひ込まされてしまった。

無論、彼が挙げた功績などは私が軍に入る前から知っていたし、一般市民の頃、遠目

からとはいえ何度か本人を見かけたこともある。

しかし、やはり間近で見えてみなければその彼の持つ具体的な凄絶さを体感できないというもの。つまり、彼が憧憬を向けられる理由だ。

私が軍に入ったところは既にヴァルゼライド大統領閣下はこの世を去っていたため、終ぞ顔を合わせる機会には巡り合えなかった。

一度でも対面し、会話を交わしていれば彼らの光狂いつぶりにも一定の理解は示せていたのかもだが……いや、臆病な私のことだ。恐怖して終わりだろう。

近づきたくない、こうはなりたくない、って肩をガタガタ震わせながら、二度と関わらないように心に決めるに違いなかった。

現に今でも密かに、「頼むから特異点からこの地上へ戻ってくるような真似はしないでください」と祈りを捧げているのだから。

「……そういえば、隊長は、何がきっかけでヴァルゼライド閣下を尊敬するようになったんですか？」

「ん？ いや、特にきっかけとかがあったわけじゃ……俺が軍に入って、東部戦線である人と出会って、今までにない凄まじい御仁だと心を奪われて、この人と共に帝国と民を護り、未来の笑顔を咲かせることができたらな、と……まあヴァルゼライド大統領に焦がれた他の奴らとそう変わらんさ。一目惚れってやつだな」

「その表現やめてください、今度からマジでホモって呼びますよ」  
 「心外だな、俺はれっきとした異性愛者だ。」

お前もヴァルゼライド閣下を実際に目の当たりにしたら俺の気持ち分かるって。まあ安心しろ、押し付ける気はない。俺がヴァルゼライド閣下を慕う気持ちは本物だが、それを他人にまで強要しようとは思わんよ。ましてや、『ヴァルゼライド閣下ができたのだから、お前もできるだろ?』などという審判者イカのような価値観カを押し付ける気も更にあり得ない。あの人を基準にするなど愚の骨頂だ」

ヴァルゼライド総統閣下への敬意とは対照的に、かつて審判者ラダマンテユスと呼ばれた男への僅かな怒りを露わにする隊長。

あるいは、止めることができなかった自分の無力さへの怒りか。

……確かに、私もさつきは光狂いがどうだのとぶつくさ愚痴を垂らしたが、審判者のような頭の螺子と一緒に道徳観念も吹き飛んだような光の亡者よりも、ロバーツ隊長やジェイス隊長のような“しっかりとした大人な価値観と考え方”を持っている者の方が、万倍もマシだ。

何より、他人に迷惑をかけていない。むしろ、その他人を守るために何よりも命を燃やしている。

ヴァルゼライド総統の詳しい人柄は知る限りではないが、どちらを好むかなど、語る

までもないだろう。

「まあ、かく言う俺も、一時期は『ヴァルゼライド総統閣下のようにになりたい』と思つていた時期があつたし、それを本人に伝えたこともあるんだが……」

「なんて言われたんですか？」

「愚行だ。俺のような塵屑には成るんじゃない』つて切り捨てられたよ。まあ、今考えれば当然だし、閣下に言われて俺も思い直したよ。俺が成すべきは英雄になることじゃない。この国と民を守ることだってな」

「それは……まあ、懸命な判断ですね。しかし本当に……噂に相違はなかつたんですね。ヴァルゼライド閣下がびっくりするほど自己評価低かつたのつて」

先ほど散々こき下ろすようなことを言つたが、そこまで自分を卑下する必要などないだろうに、と思う。

眞実、このアドラーを一番に憂い、愛し、繁榮させてきたのは紛れもなく歴代でヴァルゼライド閣下だろう。

怪物じみた伝説を数々も打ち立ててきたのだから、むしろ少しでもそれらを鼻にかけないというのは一種の薄気味悪さを感じさせるが……

「ああ、本当に自己評価が辛辣な人だった。だがまあ、逆に言えば自分のことを徹底して客観的に見て自覚できていたのがあの人だ。」

ヴァルゼライド閣下は紛れもなく「英雄」であり、アドラーの光だ。死して尚その事実に揺るぎはない。俺個人としても彼を敬愛しているし、今でも愛している。

だがそれはそれとして……ああ、そうだな。あの人は、良くも悪くも光に狂った「化物」であり、破綻者だった。

一度決意したら止まらない。往くと決めた路の道中、たとえ自身の絆や愛が立ち塞がろうが、必要と在らば撃滅する……そんな哀しい人でもあつたんだ。

自覚しているのに疾走を止められない……まるで不治の病だ。確かに俺が同じ境遇に立たされたら、自分を屑と誹りたくもなる」

言いながら、隊長はワイングラスを静かに傾け、僅かに瞳に浮かんだ哀愁ごと赤の液体を喉に流し込んだ。

悲しき宿命に囚われたヴァルゼライド閣下を慮つての言葉だったのだろうか……気のせいだろうか？

一瞬隊長の表情に、そんな哀れなヴァルゼライド閣下を「羨ましい」と思うような影が……

「そーいや、話は変わるんだが」

と、その影は刹那のうちに霧消してしまった。

そして、意外な角度から言葉の刃は私の心臓に突き立てられた。

「昨日、ジェイスに何を言われたんだ？　まさか本当に引き抜こうってわけじゃなかったんだろ？」

「——ッ」

心臓が大きな音を上げて加速する。ウインナーに伸ばそうとしていたフォークの手が止まる。微かに感じていたアルコールによる酩酊感が、一瞬にして蒸気のように蒸発してしまった。

何故——何故それを今聞くのだ？　まさか、ロバーツ隊長も私の「本心」に勘付いているのか？

嘘だ、そんな馬鹿な——ジェイス隊長だけでなく、ロバーツ隊長にまで？

なんでだ、どうして、どうして運命とはこれほどに残酷なのだ？

ただ生きているだけで、次々と新たな地獄が大口を開けて私を飲み下さんとしてくるのだ？

おかしいだろう、だって、こんな、こんな……！

咄嗟に言葉を紡ごうにも、口の中が乾いて言葉がうまく出てこない。

まずい、早く何か言わなきゃ。じゃなきゃ怪しまれる。聡い隊長のことだ、こうやって思考しているコンマ一秒の間隙にすら違和感を覚えるだろう。

何か、何でもいい、嘘でもいいから、何か言わなきゃ——



『いっそのこと、全部アルヴェインあにぶちまけちまえよ。安心しろ、嬢ちゃんっが危惧しているようなことは万に一つも起こらねえさ。

アルヴェインはそういうやつだからな。強くて優しい——光シユールを愛する山羊クなのさ』

想起するは、先刻ジェイス隊長に囁かれた不気味なほどに優しい言葉。

全部、ぶちまける？ 正直に？ 隊長に？

私、もうこんな生活嫌です。国のために責任を負うのも、国のために仕事をするのも、自分以外の誰かのために命を捧げるのも、全部全部全部——軍人が成すべきものみなすべて嫌だから、やめさせてください。私を買ってくれたのは嬉しいですけど、一部隊の副隊長なんて私には荷が重すぎます。

こんな塵屑でごめんなさいこんな塵屑でごめんなさい——隊長のこと、嫌いじゃないけど、貴方を見てしていると罪悪感で死にそうになるんです。だからお願い、こんな地獄から一刻も早く解放させて——って？

それでもロバーツ隊長は許してくれると、優しい顔を崩さないと……ジェイス隊長はそう言うの？

本当に……？ ロバーツ隊長は、こんな糞のような、脆弱な私のすべてを許してくれるというの……？

「ウォーライラ？ どうした」

私は……

……私、は——

「……いえ、作戦が終わったなら、三人で呑もうって言われただけです。それだけです」

「……そうか」

——言えない。言えるわけがない。

ジェイス隊長はロバーツ隊長を買いかぶりすぎだ。

確かにロバーツ隊長は底なしに優しい。私が出会ってきたどんな人よりも、下手をす  
ると私の母のように優しい。この人の優しい父性に触れていると、自分の心の棘が軟化  
していくのが分かるほど、ロバーツ隊長は懐が深い。それこそ山羊のように、鷹揚で、穏  
やかで、慈悲深い。

でも、それでも。この人は軍人なのだ。仏でもなければ神様でもない。

軍人としての使命を放棄しようとしている自分を、この人は許しはしないだろう。

そうして変に関係を拗らせれば、私を待ち受けるのはより苛烈と化した生き地獄だ。  
それだけは嫌だ、私はもうこれ以上の地獄なんて味わいたくない。

だったら、今の易しい地獄でいい。妥協する。そうするしか道がないなら、歯を食い  
しばって、耐えるだけだ。今までもそうしてきたから、慣れっこである。

大丈夫、大丈夫……もうこんな地獄ものは、慣れている。

「そうだな。祝勝会は勿論だが、折を見て三人で呑みに行くか。ウォーライラ、ジェイスのことを嫌だとか言つて逃げるような真似はもうさせないからな。」

観念しておつさん二人に囲まれて——」

「——すみません、隊長。私、気分がすぐれないんで先に帰ります。これ、少ないですけどお会計の足しにしてください。今日はありがとうございました、それじゃっ」

「あ——おい、ウォーライラッ」

捲し立てるように言いながら、財布から数枚の紙幣を叩きつけ私は足早に店を後にした。

隊長が控えめに伸ばしてきた手が視界の隅に見えたが、私はそれに一切斟酌することなく、夜の街へと消えていくのだった。

——ああ。本当に。ごめんなさい。

……

……

……

「……………行っちゃった、か」

「ありやりや、アルヴィンさん、フラれちゃいました?」

「ははは、そう簡単な話ならよかつたんだがな」

頭の後ろをポリポリと掻きながら、苦笑いを浮かべアルヴィンは今しがたりディアが叩きつけるようにテーブルに置いていった紙幣をぼんやりと眺めていた。

俺が誘ったのだから金のことなんて気にしなくていいのに。捻くれてるように見せて根っからの真面目なんだよな、あいつも……と思つたのも一瞬。

「自己評価が低いのはお前もだぞ、ウォーライラ」

絞りだした声音は、かつてないほどに低いものだった。

その顔に浮かぶのは、憤怒か、悲哀か、それとも――

眉間に深い皺を刻みながら、アルヴィン・ロバーツは プライベート「私用」の顔から ぐんじん「仕事用」

への顔へと切り替える。

そして眠りに目覚めた獅子の如く、ゆらりと席から立ち上がり、熱い鉄を打つかの如く。

「俺もいつまでも、逃げてはいられないか」

熱に浮かされた決意を滾らせ、リディアを追うように飲み屋をあとにするのだった。

——斯くして、瞬<sup>カブリ</sup>圧<sup>リ</sup>山<sup>コー</sup>羊<sup>ン</sup>の運命は回りだす。

駆動し始めた運命の車輪が導く未来は、皆が笑顔になれる喜劇か、それとも凄惨極まる惨劇か……その結末は、未だ誰も知る由がない。

## Chapter VII 愛する貴女の幸福よ／My precious

「リディア、本当にごめんね。お母さんがもつと稼げれば、美味しいものも沢山作ってあげられるんだけど……」

「いいよ、お母さんの作る野菜スープ、美味しいもん。それに、お母さんというだけで、私幸せだよ」

「……ありがとう、リディア。私も、幸せよ」

私は精一杯の虚勢を張りながら、母の作った野菜だけのスープを飲んで笑顔を作った。

ここしばらく、食事はずっとこれだ。美味しいのは事実だが、味には正直飽きてしまったというのが私の本音だった。

我が家のお金は、ほぼほぼ父が握っている。よって、食費にあてられる額など、そういうものじゃなかった。ましてや、肉や魚などのたんぱく源を買い余裕など、月に二、三回あるかどうか。

だから、我が家の食事は、今思い返しても本当に質素極まるものだった。よくこれだ

けの栄養で飢餓状態に陥らず生きてこれたものだと思う。

それでも……母と二人きりで過ごせる時間は、本当に嘘偽りなく幸福な時間だった。

なぜなら私は母を誰よりも何よりも……愛していたから。

だからこそ、私が理解できなかったのは。

「ねえ……お母さんは、なんでお父さ……あの人と結婚したの？ あんな塵屑、お母さんには勿体ない、釣り合っていないよ。どうして」

あの人を父と呼ぶのにはさすがに抵抗があった。

あれを父と認めたくない。物心ついた時から、私は自然とそう考えるようになっていた。

私の無遠慮な言葉に、母は苦笑する。自分でも、本当に後悔していると言うかのようには失笑して。

「ええ、本当に……なんでかしらね。あの時の私は……どうかしていたみたい。

それでもね、リディア。私は、あの人に感謝していることが一つだけあるの」

「それって……？」

そんなものがあるものかと思っていた私を、しかし母は天使のように慈悲深い笑みを浮かべながら抱きしめる。

そして、当たり前のことを言うかのような口調で、私の耳元で囁いた。

「それは、リディアに出会えたこと。あの人と結婚していなければ、私はリディアとは出会えてなかった。そのことだけは、本当に心の底から感謝しているの」

「お母さん……」

それは、母の嘘偽りのない愛の言葉だった。

その言葉をささやかれたとき、瞳の奥が熱くなつたのを今でも覚えている。

なんで。どうして。おかしいだろう。なんでこんなに優しい人が傷つきながら生きていかなければならないのか。こういう人こそ、笑顔だけを咲かせ続けながら人生を歩んでいかなければならないのではないか。

神様は意地悪だ、理不尽だ。

どうしていつも、私たちにさも当然のように地獄を与えるの？ 善性に満ちた母を苦しめるの？ 楽に幸せになれないの？ 地獄から、逃げられないの？

世界が憎かった。壊してやりたいと思った。母が幸せになれないなど、間違っていると思つた。

母が楽に幸せになれる世界を作りたいと思つた。でも、どうやって？ こんな残酷な世界と、私はどうやって戦つていけばいいの？

分からない、分からないよ。



「お母さん……お母さんは、どうすれば幸せになれるの……う。」

気づけば、私は涙を流していた。

何もできない自分が悔しくて。母を救えない自分が悔しくて。

母を救ってくれない神様が憎くて。私たちを不幸にする世界が許せなくて。

ただただ、滂沱の涙を垂れ流すしかなかった。

それでも母は、そんな負の感情に満ちていく私を、強く優しく抱きしめながら。

「私はね。リディアが幸せになってくれたら、それだけで幸せなの。親つて言うのはそういうものなのよ。」

だから、いざれこの家を出て、自立して……幸せになるのよ、リディア。それまでは、何があっても私が貴女を守ってみせる」

毅然と言いつつ母に、しかし私は悲しくなった。

私を想ってくれる気持ちは嬉しいが、だけどそれならば母はどうなる？

私がこの家を出ていったとて、残された母は？ ならば私と一緒に、と思っただが。

「駄目よりディア、駄目なの。あの人をここに繋ぎとめるために私もここに残らないと、あの人はずぐに私たちを見つけて連れ戻しに来るわ。前もそうだったでしょう？ あの人からは、逃げられない」

そうだ。あいつからは逃げられない。まだ私がこの頃より小さいとき、母が私をつれ

て家から逃げ出したことがあったが……一晩後に、連れ戻された。

そして、母をしこたま殴り、蹴り、罵声を浴びせたのだ。

逃げ出せるならとうの昔に逃げ出していた。それができないから、こうやって拘泥していたのだ。

地獄に、鎖で繋がれたまま。

「でも、いいのよ、それで。私は、リディアが幸せになってくれればそれでいいんだから。他に望むことなんて、何もありませんわ。

だからお願い、リディア——何が何でも幸せになって。必ず、必ずよ。

苦しいのは今だけだから。地獄から抜け出すまでは、私が必ず守ってあげるから。

私からの、たった一つのお願い事よ」

「……………うん、分かった。私、幸せになる。私が幸せなら、お母さんも幸せになるんだもんね。

なら、絶対に幸せになってみせる……一緒に幸せになろう、お母さん」  
「……………ええ、ありがとう、リディア。愛しているわ」

——そして、母は宣言通り、私を守るために命を散らした。

でも、ごめんね。お母さん。

私はまだ、今も、地獄の渦中。地獄から、抜け出せていない。

お母さんのこと、幸せにしてあげられていないや。

……お母さん。

私、お母さんがいるだけで幸せだったんだよ。

どんな不幸な目に遭っても、お母さんが傍にいてくれるだけで、無限に耐えられる気がしたんだよ。

お母さんが、そこにいる。ただそれだけで、私は幸せだったのに。

母がいなくなつてしまつたあの日から、私は地獄を彷徨い歩いている。

母という救いはもう真実、この世のどこにもいないのだ。

幸せに満ちていた日々は、二度と戻つてこない。私の世界は、永久に奈落に閉じたまま。

永遠に、私は地獄で、迷子のままだ。

……

……

……

「ツ……!! つ、はあっ……! はあ、はあ、はあ……」

息が詰まるような圧迫感を覚え、今しがた見ていたばかりの夢の残滓を振り払うように、私はベッドから飛び起きた。

今は亡き母との会話、幼き日の思い出、幸せの憧憬、その記憶。

かつての幸福の景色を夢幻として見せられていた私は、たとえそれが夢と分かっても記憶の中の母へ『行かないで』と叫ぶように虚空に手を伸ばしていた。

母こそが、私を地獄から救い出す唯一救済の糸、一縷の希望。

しかし、その希望はもはやどこにもありはしない。どれだけ必死に手を伸ばしたところで、失った命を黄泉から掬い上げることなど、逆立ちしたってできやしないのだ。

……ああ。なんで。お母さん。

私を置いて、死んでしまったの。

「……………くそツ……………」

やり場のない怒りと慟哭が胸の奥を中心に全身へと伝播していく。

溢れ出して止まらない感情を無理矢理抑え込むようにシーツの両端を握りしめるが

——当然、効果などあるはずもなく。

ロバーツ隊長と別れて数時間の間、私は徹底した負の感情の津波に心を蹂躪されていた。

勢いあまつて飛び出してきてしまったが、怪しまれたりしなかつただらうか？

いや、そんなもの論じるまでもない。怪しまれたに決まっている。

となれば、やはりロバーツ隊長は私を追ってくるだらうか？

いや、しかしあれから三時間近く経っているが、ロバーツ隊長が現れる気配はない。それどころか、あの後私は軍舎に逃げ帰り、現実逃避をするようにこうして泥のように眠っていたのだから、そもそも追いかけてきているのなら今頃とつくに叩き起こされている。

それをされていないということは額面通り本当に具合が悪いと思われてそつとされているのか、もしくは――

「……見限られちゃったかな」

もう勝手にしろ。面倒見切れん、と匙を投げられたかのどちらかだ。

隊長がそのようなことを言うのは想像できないが、今の私はとにかく思考がマイナスに振り切れている。

そんな被害妄想を易々と思いついてしまうほど、今の私の精神状態は不安定であった。

「……ていうか、そもそも……」

ジェイス隊長は、私が軍人を辞めたいと思っているのを勘づいている？ だとしたら

ば、何故私を咎める言葉を浴びせない？ それどころか、あんな優しい表情と声音でア  
ドバイスをしてくれた？ 挙句、アルヴェインに頼れ、などと……

ジェイス隊長に私の本音がバレているなら、それはまあ、しようがない。隠している  
つもりとはいえ、厭世的な私の空気感から何か感じ取ったのだろう。そこは己の未熟と  
甘んじ受け入れるが……だからこそ、何故だ……？ 一切、理解が及ばない。

「ああ、畜生ッ……！ これだから光狂いの考えることは分からない……」  
考えれば考えるほど訳が分からなくなってくる。

そもそも、ジェイス隊長やロバーツ隊長は私のことをどう思っているのだ？

ただの部下？ 娘みたいに手のかかる存在？ 便利な手駒？ まさか、仲間だなんて  
思ってくれているのか？

ああ、もう、分からない。分からない。

……何より、一番訳が分からないのは――

「ロバーツ隊長に期待しちやつている……私自身だよッ」

あんなにロバーツ隊長を疑っていた癖に、彼を信じたいと強く思ってしまったている自  
分がいることに動揺が隠せない。

馬鹿かお前は何を言っている？ 散々今まで自分の中で結論を出しただろうが。

軍人を辞めたいなどと無責任なことを言ったら、いくら優しさの塊であるロバーツ隊

長でも、激昂し私を糾弾するだろうと。

だからこの想いを打ち明けるべきではない。ジエイズ隊長に背中を押されたとしてそれは変わらない。目に見えている未来だからこそ、私のこの選択は間違っていない、これが結果的に、今以上の苦痛を味わわないための処世術なのだ……分かつているはずなのに。

彼の優しさに、縋ってみたいと思っっている自分がいる。

彼を信じてみたいと思う自分がいる。

思えば、この数日で随分とロバーツ隊長と距離が縮んだ気がする。

元々話さない訳でも仲が悪いわけでもなかったのだが、ここまで一緒に過ごす時間が多いことは過去に一度もなかった。

その中で今までなんとなく不鮮明だった隊長の人となりも、かなり見えてきて理解もしてきた。

そう、彼の優しきは本物だ、と。

他者を慮り気遣う心の強さに、嘘偽りなど一片とてありはしない。

そして、軍人として捧げる己が矜持も。誇り高く、天頂の星のように煌めいている。

本当に、素敵な人だ。底なしにいい人だ。

私の思い上がりでなければ、こんな塵屑さえ……リディア・ウォーライラというどう

しようもない小娘のことさえ、気にかけてくれている。

だからこそ、隊長ならば、あるいは……と。

私が軍人を辞めたいと口にしても、優しく包み込んでくれるのではないかと、期待してしまっている自分がいるから、それが情けなくて恥ずかしくてたまらない。

たまらないのだ。

そんな、彼の優しさにつけこむかのような真似をしようとしている自分自身が、何より醜く臆病な化け物ひきょうものに感じてならない。

……ああ。先の模擬戦で、私はジェイス隊長を“化け物”と評したが。

未だ自分の歩むべき道すら定められず、どっちつかずにふらふらして地獄を彷徨い歩いている、心の腐りきった私こそ、真の醜い“化け物”ではないか。

「……駄目だな。もう。やっぱり私は変わらないや」

塵はどこまでいっても塵のまま。

これ以上の思考は時間の無駄だと切り捨て、今まで頭の中で思い描いていた一切の小難しい事柄を漂白した。

どうせ考えたところで、私のような塵屑ちりこぼしに明日みらいを変えられる答えなど出せるはずもない。

結局現状維持。より凄絶な地獄に落ちないため、今の地獄を甘受するまでだった。



……とはいえ、やはり心にかかったモヤはそう簡単に完全払拭とはいかない。

仕方ない、いつもの手だ。娼館へ向かうとしよう。

獣のように激しく乱れて交われれば、強制的に嫌なことなど記憶の彼方へ吹っ飛んでしまふ。

それが一時的なものでも、ストレス解消には効果的だと私は知っているから、そうと決まっただけからの私の行動は迅速に、なる、はずだった、のに。

「……………どうして」

ロバーツ隊長のことが、頭から離れないのか。

今まで、ストレスを感じたらまず娼館のことで頭が埋め尽くされていたはずなのに、どうしてそれ以上にあの人のことを考えてしまふのか。

どうして、どうして？

分からないよ——お母さん。なんで、私は——

「……………助けて、ロバーツ隊長」

こんなにも、あの人に己の運命しあわせを求めてしまふのかな——？

## Chapter VIII 真実へ／Real face

「本当に……何をやっているの、私は」

右手でこめかみを抑えながら、私は喉からせり上がる苦汁のような愚痴を奥歯で噛み潰す。

気が付けば、私は夜の軍舎をふらふらと彷徨い、ロバーツ隊長の部屋の前まで訪れていた。

何度も煩悶し、心の中でもう一人の私が「やめろ、やめておけ、傷つくだけだ」と警鐘を鳴らしていたにもかかわらず……救いを求める子羊が如く、私はこの場所に導かれたのだった。

今でも尚嫌な想像が脳みその中で渦を巻き、私の精神を轢殺せんと心に潜む悪魔たちが哄笑を響かせるが……

「もう……まで来たら……逃げられない」

そうだ、逃げられない。いいや、もう逃げない。

ちゃんと、ロバーツ隊長と向き合うと決めた。

否定されようが罵倒されようが、私はもうこの地獄から抜け出すのだ。

だから、今夜必ずケリをつける。

震える指を鎮ませて。戦慄く唇を然りと閉めて。

いざ——部屋の扉をノックしようとした、刹那。

「——ウオーライラ？」

突如予想外の方向から、今しがた対峙すると決めた人物の声が聴こえ、私の心臓は火にあぶられた子豚のように跳ね上がった。

声のした方に瞳を向ければ、そこには——ロバーツ隊長の姿が。

「隊、長……」

「丁度よかった、今からお前に会いに行こうと思つてたんだ。本当はもっと早くに何う予定だったんだが……すまん、さつきそこでジュードに会つてな。相談に乗つていたんだ」

いつもの調子で、事も無げに私に話しかけてくる隊長。

よかった、少なくとも私の先刻の非礼については怒つていないらしい。

いや、というか、今隊長は……

「ジュードくん……ですか？」

ジュードくんといえば、今日の模擬戦で私が最後に手合わせをした熱血思考の新米兵士の彼のことだ。

努力家なうえにセンスもいいという伸びしろの感じられる子だったが、少々危うげな精神構造をしていたためその点について指導したばかりだった。

「ああ。あの模擬戦の後、お前のアドバイスを基盤に更に稽古に励んでいたらしくてな。訓練場で精を出しているのを見かけて声をかけたら、『隊長、一人で稽古していても改善できているか実感がなかったので、お付き合いたいだけでもよろしいでしょうか?』なんて律義に言われてさ。

だから一緒に、汗を流してきたというわけだ」

そう言いながら隊長が銀の髪をかきあげると、額にはうつつすらと玉の汗が浮かんでいた。

まさか、この人は。

「え、わざわざ実践稽古をつけてあげてきたんですか……!?!」

「まあな。百聞は一見に如かず、と言うだろう? アドラーのこれからを担う期待の新人だ。そんな輝かしい若人に頼られたとあつては、全力で応えなくちゃな」

「……たつた一人の、部下のために……? わざわざ、隊長自らが時間を割いて……?」  
「俺にとつては当然だよ。瞬庄山羊カッリコンの一人一人、俺にとつては大事な家族みたいなものだ。いや、瞬庄山羊に限った話じゃないがな。

お前らみんな、俺の部下である以前に、アドラーには欠かせない大事な大事な国民の

一人……宝物だからな。

そんな、俺の守るべき国民……しかも直属の部下がだぞ？ 『隊長、俺もつと強くなり  
たいです！』って言うてきたら、胸の一つや二つ貸さなくてどうする。そこまで度量の  
狭い人間になった覚えはないぞ俺は」

……本当に。この人は。どこまで私を驚かせれば気が済むのだろう。

この人は当然のように言うているが、そんな常軌を逸した献身、誰でもできる所業  
じゃない。

この人は、部下全員を家族だと言った。

瞬庄山羊の隊員の名前など、きつとこの人は全員記憶しているのだろう。どころか、  
その人がどんな人物で、何が得手不得手で、何に悩んでいて……そういったものもすべ  
て把握しているのだろう。

そして、助けを求められれば迷わず隊長の方から手を伸ばす。

……本当に、絵本の中から飛び出してきたかのような白馬の王子……英雄だ。

あのヴァルゼライド閣下を目指していたというのも、伊達じゃない。

そんな輝きを目の当たりにしても、しかし私は……本当に大丈夫なのだろうか、とい  
う疑念を完全に拭い去ることができなかった。

期待しつつも信じきれない……どこまでも半端な精神を持つ自分に、とことん嫌気が

差してしまう。

「まあ、というわけで遅参したんだが……俺の部屋の前にいたってことは、お前も俺に何か用か？」

「つ……ええ、はい……はいっ」

及び腰になるが、もはや後に引ける状況ではない。

私は覚悟を決め、隊長の言葉に強く頷く。明らかに動揺が声に出てしまつて恥ずかしくなるが、隊長はさして気にした様子もなく、やはり軽い調子で私の肩をポンと叩き。

「立ち話もなんだ。お前がよければ、俺の部屋で話をしよう」

ごく自然な流れで、私を自室へと促してきた。

私は再び、強く頷くのだった。

……さあ、ここからすべてを始めよう。私の幸せへの一步を、踏み出すために。

…

……

……

「何も無い部屋ですまん。適当にかけていてくれ。飲み物は……赤ワインでいいか？ アルコールっていう気分じゃないなら紅茶かコーヒーもあるが」

「い、いえ、そんな……悪いので……お構いなく」

「遠慮するなよ。どれか選べ。じゃないと逆に困る」

「……隊長はどうします?」

「ちよつと呑み足りないと思っていたから、俺はワインにするよ」

「……じゃあ、私もワインで」

「了解つと」

どこまでも私を氣遣う隊長の言葉に恐縮しながら、私は言われた通りベッドの上に腰かけた。

かけてくれと言われたが、座る場所など隊長のプライベート用の机とベッドしかない。机の方には隊長が座るだろうから、必然的に私はベッドの方に腰かけるしかなかった。

というか、言葉通りに、本当に殺風景な部屋だ。

ぐるっと見回しても、ベッドと机と本棚が二つと……あとは男性にしては珍しく、キッチンが設備されていた。

基本的に個々人の部屋にキッチンは常設されていないのだが、階級がそこそ以上であれば申請すれば融通を利かしてもらえるのだ。

まさか隊長はプライベートで料理をしたりするのだろうか?

……いや、まさか。ただでさえ完璧超人だというのに、料理まで一人でこなせたらそれこそ真実隙が無い。

第一隊長は四十近くの親父だ。しかも独身。そんな人が料理なんて、普通面倒くさくてするはずもない。

……いや、しかし隊長ならあるいは。

「待たせたな。ほら」

「あ、ありがとうございます」

キッチンの奥から戻ってきた隊長から、真紅の液体が注がれたワイングラスを受け取る。

手に取った瞬間、芳醇な葡萄の香りが鼻孔をくすぐった。

……匂いを嗅いだけで分かる。これ、高いやつだ。

これから軍を辞めたいなんてぶっちゃけるといいうのに、こんなにもいいお酒をいただいてしまっているのだろうかと思っていると。

「あとこれ、酒のつまみによかったら食べてくれ。おっさんの手作り料理が、乙女の口に合うかは分からないが」

照れるように苦笑しながら、隊長は更に綺麗に盛り付けられたラビオリを小机に置いてきた。



トマトソースの濃厚な匂いがふわっと漂い、否応なしにこちらの食欲を刺激される。いや、ていうか、ちよつと待て。

「た、隊長……今、手作りって……」

「あー、やっぱりおっさんの手作り料理なんて嫌だよな。すまん、確か棚の方にナッツの袋があつたからそれ持ってくるわ」

「い、いやそうじゃなくて！……隊長、もしかして普段から料理する人なんですか？」「ん？ ああ、多少はな。つつても凝つたものは作れんし、大した腕前じゃないがな」

……そのまさかだった。

やっぱりキッチン持ちは伊達ではなかつたのか。

ていうか、凝つたものは作れないと言つたが、ラビオリなんて凝りに凝っているだろう。少なくとも短時間で作れるようなものでもない。

しかもこの綺麗な盛り付け。具ははみ出すことなく、 pasta 生地にしつかりと包まれており、見栄えが良くなるようにパセリまで振りかけてある。

見ているだけで涎が垂れてきそうだな。

「……いただいてもいいんですか？」

「ああ、勿論。口に合わなかつたら許してくれな……つと、とりあえず乾杯するか。」

ほい、本日二度目の乾杯」

「か、乾杯……です」

グラスとグラスがぶつかり、小気味いい音が室内に反響する。

……そうだ。隊長のゆるい空気感で忘れかけていたが、私は先ほど隊長から一度逃げ出して、無礼を働いてしまっている。

だというのに隊長は気にするどころか笑顔まで浮かべて私をもてなしてくれて……どこまで懐が深いんだ、この人は。

今から打ち明ける私の真実に、胸がきつく締め付けられる。

罪悪感ごと流し込むように、私はグラスに注がれたワインをくいつと喉に注ぎ込んだ。

液体に舌が触れた瞬間、感じたことがないほどの深い渋みが口中に広がった。

それも、嫌な渋みではない。確かに旨味と感じられるワイン特有の渋み、それを追いかけるようにあとから葡萄特有のフレッシュな甘みも感じられる。

……味の極みだ。こんなもの、本当にタダで吞んでしまってもいいのだろうかという気さえしてくる。

しかし隊長はお決まりのどこ吹く風と言ったような何でもない表情でワインを口にしている。

どころか、どこか気まずげにしている私と目が合った瞬間、くすつと微笑を溢してき

た。

「口には合ったか？　そこそこいいワインなんだが」

「……今までで呑んだワインの中で一番美味しいです。こんなの、私ごときが呑んでいいんでしょうか」

「はは、そこまで言ってもらえるとはな。取っておいてよかつたよ。じゃんじゃん呑んでいいぞ、ウォーライラ。心配するな、俺がいいって言ってるんだから気にせず飲めよ。つうかお前なあ、前から言おうと思っていたが遠慮しすぎなんだよ。俺相手に遠慮するな。言つたら？　お前らは家族だって。まあ、お前捻くれてるように見えるけど結構真面目だからな……普段は遠慮ない物言いしてきても、いざつて時に一歩引いてよお」

「う、うるさいですつ。勝手に人を分析しないでください、すけべ」

「ほら、な？　こういうときは遠慮なくせにさあ」

「も、もう！　揚げ足を取らないでください馬鹿隊長！」

ああ、もう、何なんだ。本当に調子が狂う。

これでは一人緊張している私が馬鹿みたいではないか。

落ち着け、リディア・ウォーライラ。目的を違えるな、私は隊長と談笑してきたわけではない。それだけならどれほどよかつたろうかとも思うが、もはやそんな懦弱は許されない。

すべて隊長にぶちまける。吉と出るか凶と出るかは分からないが、ひとまずこの緩んだ空気をぶっ壊して――

「ほれ、隙だらけだぞつと」

「ん、むぐつ!?!」

と決意しかけた瞬間。気の抜けた掛け声とともに隊長は私の口の中に何かを突っ込んできた。

トマトソースの旨味が口腔いっぱいになり、次いで挽肉と野菜、チーズの素材の味がジュワつと舌先で踊った。

……え、なにこれ。滅茶苦茶美味しい。

味付けがシンプルなだけに、余計な雑味を一切感じない。

お店のような味、というよりも家庭的な、どこか落ち着くような味付けだ。変に気取らず、安定している。

……隊長……もしかして私より料理美味いんじゃないかと、そこで私は思考を停止させた。

駄目だ、これ以上は女としてのプライドを蹂躪しつくされてしまう。よって私は、餌付けされるペットの如く、隊長がぶち込んできたラビオリをむぐむぐと咀嚼した。

「味付けはどうだ?」

「……悔しいけど美味しいです。隊長、料理まで上手いだなんて、部隊の女の子たちが知ったらまた黄色い声が上がりますね」

「大げさだろ、このくらい。しかしそうか……ウオーライラのお墨付きとあれば、今度訓練兵の奴らにも作ってやるか。」

しかしそうだな、大人数用の料理か……煮込み系がいいな、訓練後の身体には染みるだろう。喜んでくれるといいんだが」

「隊長の手料理なら、みんな無条件で喜ぶますよ」

「ははは、だといいがなあ」

照れるように無邪気に笑う隊長に、不覚にも釣られて口角が上がってしまった。

なるほど、この人、料理が得意という以前に料理すること自体が好きらしい。

いや、というよりも、誰かに尽くすことが好きだからあんなに嬉しそうな表情を作ったのだろうか？

部隊のみんなの為に、今も何を作ろうかと画策している隊長の笑顔は、子供のように浮かれている。

……本当に、いい人だな。だからこそ、ああ、やつぱり。

「……駄目だな、結局。言えないや」

弛緩しきった空気にあてられ、私の先まで燃えていた決意は、冷水を浴びせられたか

の如く鎮火してしまった。

何が今夜でケリをつける、だ。何が幸せを掴んで見せるだ。

お前はいつもそうやって、傷を最小限に済ませるために逃げて、逃げて、逃げ続けてきた。

瞬間山羊カブッコーンに配属されてからの一年半など、その最たるものだろう。

軍人なんて本当はいますぐにでも辞めたいくせに。

でも、言い出すのが怖くて、また新たな地獄に放り込まれるのが恐ろしくて。

隊長にこれほどまでに輝かしい優しさを施されても、変われず進めず歩みを止める、木偶のろくでなし、それが私、リディア・ウオーライラという凡俗以下の畜生なのだ。

一時的に覚悟を燃やし運命に挑もうとも、いざ壁を目の前にすれば御覽の通り。

結局尻込みしたまま、昨日と何も変わらぬ日々じじくを受け入れる。

……そう。死ぬまできつとこのままだ。私は未来永劫、地獄の底で溺れたまま……  
「ウオーライラ」

先のおどけた緩い態度から一転。隊長の声が、真剣味を帯びて私に投げられた。

向ける視線も、鋭利に細められている。

まるで心の底まで見透かされているようだった。無意識に、心臓を握られたように錯覚する。

「それで、話つて言うのは何なんだ？ 何か話したいことがあつて来たんだろ」

「……………それは、あの」

来た、と思つた。

そうだ、私の方から逃げ出したとて、残酷な地獄うんめいは私を逃しはしない。

下品な大笑を響かせながら、私を地平の果てまで追いかけてくるのだ。

ならばもはや逃げられる手立てではなく。いつそ、すべて白状してしまつた方が楽なのは言うまでもなかつたが、それでも言葉は紡げなかつた。

臆病者を拗らせた私は、無言の絶叫を隊長の部屋へ響かせる。

それに対して、隊長は。

「…………いや、すまん。この期に及んでお前の口から言わせようとするのは意地が悪かつた。謝罪させてくれ、悪気があつたわけじゃないんだ。」

ただ、ウォーライラの口から言つてもらえた方が、お前自身の負担も少ないんじゃないかといかといか……早計だつた。

本当にすまん」

何故か渋面を作つたかと思えば、深刻な顔でこちらに頭を下げてきた。

…………は？ 何だ。この人は何をやっているんだ？ 皆目訳が分からない。

何を一人で勝手に納得して、私なんかを頭を下げるなんて言う怪奇行動を平然と実行

している？

ともあれ、頭をあげさせなくては。こんな私に、隊長のような高潔な人が頭しんを垂たれる道理などないのだから——と、私が言葉を抉り出そうとした、次の瞬間。

隊長は下げた頭を元に戻して。毅然とした態度で。でも、声色はどこまでも優しく透き通して。

「ウォーライラ。お前は、軍人を辞めたいんだな？」

私の隠された本音しんじつを、迷いなく看破したのだった。



# Chapter IX 代価、願い、そして貴方の優しさは ／Your heart

「ウオーライラ。お前は、軍人を辞めたいんだな？」

きつと、こうなるだろうなという予感があつたからだろうか。

予想以上に、私の心は平静を保っていた。

隊長のその言葉を聞いた瞬間、「ああ、やっぱり」というある種の安心感を覚えると同  
時、それでもやはりこれから死ぬほど糾弾されるのだろうかと思うと、胃を素手で鷲掴  
みされるような圧迫感と吐き気を催してしまふ。

暫時流れる重たい沈黙。それを引き裂いたのは、鉄球のように重たい私の一言だっ  
た。

「……いつから、気づいていたんですか？」

震える唇でなんとか言葉を紡ぎ出す。

もはやこの人を相手に誤魔化しなど通用しないだろうから、正面切つて腹を割つてす  
べてを曝け出すと私を覚悟を決めたのだった。

そんな私の決死の一言を受け、しかし隊長は何故か申し訳なさげに苦笑いを浮かべな

がら、言葉繋いできた。

「告白すると、初対面の時からだ。確信に至ったのはさっきの呑みの時だがな。」

しかしな、お前が配属になった日、隊長室まで挨拶に来たろ？ その時に、なんとなく俺は予感していたんだ。『この子はきつと、軍人には向いていない』ってな」

「……あは、は……なんだ、最初からお見通しだったんですか。必死に隠そうとしてきた私が馬鹿みたいですね」

これではまるで道化じやないか、と私は私を心の中で嗤った。

傑作だ。バレないように、バレてないはずだと怯えながら過ごしていた私の本質は、なんと隊長格の二人にはすべて筒抜けだったという真実。

いや、ジェイス隊長に関しては明言してはないが、ロバーツ隊長にバレていたことに加え先のあの一言……見抜かれていたと思つて間違いないだろう。

だからこそ、私が分からないのは今この瞬間もたった一つで。

「……なんで、隊長は……そんなに申し訳なきような顔をしているんですか。ここは、私を責めるべき時じやないんですか。軍人として、副隊長として、無責任にもほどがあるって」

一向に私を責めたてる気配がない、どころか、依然私を気遣うような視線を向けるロバーツ隊長だった。

なんでだよ。まったくもって意味が分からない。ジェイス隊長といいこの人といい、何故そうまで私に優しい瞳を向けてくる？

そうじゃないだろう？ そうじゃないだろう……？

貴方が私に向けるべき視線は、もっと苛烈で辛辣であるべきで。間違ってもそのような、私に安らぎを与えてくれるような温かい目線であるわけが……

「すまなかつた、ウォーライラ。俺は隊長失格だ」

そしてこの人はあろうことか、私へ非礼を詫びるような真摯な態度で頭を深く下げた。

……は？ 何だよこれは……どうして？

「——なんで、そうなるんですか……！」

思わず私は掛けていたベッドから立ち上がり、喉からせり上がってきた疑問の言葉が大熱と共に吐き出した。

この局面で憤怒を露わにすべきは隊長であるはずなのに、臨界点を突破した不可解な行動にさしもの私も限界を迎える。

何もかもがちくはぐだ。隊長が私に頭を下げる理由などどこにも存在しないはずなのに、何故か彼は「すべては自分のせいだ」と本気で思っているかのような深刻な表情で今も私を見つめてきている。

やめろ、やめろ、やめてくれ。何だそれは皮肉なのか、それとも私を遠回しに馬鹿にしているのか？

そんな瞳で私を見るな。そんな優しい眼で私を見るな。頭がおかしくなってしまう。「責めないんですか……？」副隊長を拜命された身分でありながら、無責任に辞めたいだなんて思ってる私を、誹って罵倒して死んでしまえと言ってやりたくないんですか？隊長には私を弾劾する権利があるでしょう？なのに何で……怒るところか隊長は、私に頭を下げているんですかッ」

「……怒る？俺が？何故？むしろ、謝罪すべきは俺の方だろう。お前が責められる理由がどこにある」

「……は、あ……う？」

心の底からそこが分からないと言った風に隊長は首をかしげる。

私の言った言葉の意味が理解できていないというように。

自分自身にこそ非があつて然るべきだと信じて疑わぬ優しい光の使徒は、己自身を罰するように更に言葉を並べていく。

「俺は、お前が軍人を辞めたいというのは何となく察していた。本質的に、きつと軍人も向いていないだろうことも看破していた。」

だというのに俺は、ウォーライラの本心を考慮せず、今の今までお前を苦しめてしま

うことになった。そんなつもりは微塵もなかった……というのも、ここまで来てしまえばただの言い訳だろう。この瞬<sup>カブリ</sup>圧<sup>リ</sup>山<sup>コウ</sup>羊<sup>ン</sup>が、お前にとつていい場所になればと思つて、あえてそのことを今まで触れずに過<sup>カブリ</sup>ごしてきたのだが……

結果、それらがお前を苦しめていたというのであれば、それはすべて俺の不徳だ。部隊長として恥<sup>カブリ</sup>ずべきことなんだよ。これでは俺は、隊長失格だな」

「——ふざけるなッ！」

怒号が、天を貫くように轟いた。

窓越しに聴こえていた夜気混じりの昆虫たちの合唱さえ、私の張り上げた憤激の声に塗り潰される。

許せなかった。理解できなかった。悪いのはすべて弱い私なのに、そんな塵屑のような私に頭を下げて己を恥<sup>カブリ</sup>じている隊長が。何より、そんなことをさせている自分自身が。

呪わしくて、許せなくて……今すぐにも死んでしまいたいという、惨めな想いが私の心を攪拌させていく。

「隊長が悪いなんてこと、万に一つもあるわけないじゃないですか……どうしてそんなんですか、どこまでお人よしですか！ 私のことを庇<sup>カブリ</sup>っているつもりならやめてください、私にそんな価値はありません！ せめて、一言私を叱<sup>カブリ</sup>ってくださいよ……」

『軍人であるのなら、その使命を全うしろ』とか、『軍人ならそんな無責任なことを言うな、民を守る盾になれ』とか……」

「ウォーライラ、お前は軍人である前に、一人の人間で、女の子だ。ならば己の幸せを追い求める権利がある。違うか？」

「……何を」

言っているのかと、問うことはできなかつた。

私に向ける感情が、余りにも『リディア・ウォーライラの幸せを心の底から願っている』ように感じて、圧倒されてしまったから。

言葉が、何も、出てこない。

「確かに俺は軍人であり、そのことを誇りに思っている。だからこそアドラーとその国民を心から愛し、本気で守り抜きたいと心の底から思っている。その為だったらこの命幾ら捧げても惜しくはないし、それこそが軍人の在るべき姿だと、俺は信じて止まないのだ」

「……なら、余計」

自分勝手に軍人を辞めてしまいたいと思っている私など、許せないのではないかと疑問が浮上してきたが。

「だが、これはあくまで俺個人の思想であり、アルヴィン・ロバーツという一人の軍人の

幸せだ。だから俺はこの考えを誰かに押し付ける気なんて欠片もないし、そんな権利は微塵もありはしないんだよ。

何故なら、幸せの形とは人それぞれ違っているからな。俺とウオーライラは同じ人間だが、持ち合わせている“個性”<sup>キヤラクター</sup>は異なっている。

育ってきた環境も、軍人となった経緯も……究極的に言えば性別だつて異なっている。だつたら己が掲げる価値観が違うのは当然というもの。それが人間だ。

だからウオーライラ。お前が軍人を辞めたがつていることにそう後ろめたさを感じるな。お前の幸せが軍人であることではなく、別の場所にあるというのなら、俺はその後押しをしよう。軍人を辞めるな、などと俺が言うと思つていたのか？

そんなわけないだろう。これはお前の人生だ。どんな道を歩み、どんな幸せを掴むか……すべてお前が決めることなんだから、それを阻む権利は、俺にはない」

だから安心しろ、と私の肩に手を置いて、優しく包み込んでくる隊長。

添えられる手はどこまでも優しく温かく、私のささくれだつた心を溶かし軟化させていく。

……隊長は馬鹿だ。こんな自分勝手な塵屑に、救いの糸を垂らしてくれるなんて。

何故私が軍人を辞めたいかなどを一切問うことなく、ただ私が苦しんでいるという事実を知っただけで、こうまで無償の優しさを捧げてきている。

それどころか、幸せになれ、と言って背中を後押ししてくれるこの人の精神構造は一体どうなっているのだろう。

理解が及ばなかった。意味が不明だった。それでもただ一つ確かなのは、私がこの軍人生活から解放されるということだった。

「……いいんですか、本当に。私が、軍人を辞めたいと願っても……本当に、辞めてしまっても」

「それがお前の望みならな。無論、辞めると言ってもそう簡単にはいかない。

本当に申し訳ないが、今すぐに退職、とはいかないだろう。少なくとも北部の制圧作戦が終了してからだな。

それまでは悪いが辛抱してくれ。それから各所への手続きやら天秤への報告もあるが……まあ、職権乱用のようだが、俺の部隊の隊員だ。処遇は基本的に俺が決めさせてもらう。

一定数の糾弾もあるかもしれないが、何、余さず俺が守って見せよう。

何も心配するな、ウォーライラ。お前の人生は、まだ始まったばかりだ。絶望するにはまだ早い」

「……そうじゃ、なくて。理由とか、聞かないんですか？ 何で辞めたいのかとか、何が



不満だったとか……ほかにも、色々……」

「話したいなら話すといい。だが、話したくないなら話さなくてもいい。

ずっと話せず蓋をしてきた事情だ、そう簡単に口を割れることでもあるまい。ならば俺は無理には問わんよ。

可愛い部下が苦しんでいる。なら理由はどうあれ俺は手を差し伸べるだけだ。俺が重要視するのは事実のみ、理由や過程など二の次なんだよ」

「……は、はは……本当……隊長は、馬鹿ですね。大馬鹿ですよ。私みたいな、こんな自分勝手な塵屑に、手を差し伸べるなんて……お人好しもそこまでいけば病気ですよ。私、隊長にそこまでされるほどのことをした覚えは……」

「あるとも。お前が北部に来てからの一年半、俺は毎日お前に支えられていた」

「……嘘ですよ」

「嘘じゃない」

きつぱりと隊長は断言する。頼むからそんな哀しいことを言うな、と訴えるように。

……兎にも角にも、私はこれで無事アドライバー軍人を退職。その後はどうなるかは分からないが、ひとまず現状私を苦しめている地獄からの解放が全面的に約束された。

……腑に落ちない感情が心の中で逆巻いているのは、何の代価も無しに安寧を施されたからだろう。

こんなものは初めてだった。無償の奉仕など、私は母以外から施されたことなど今までの人生で皆無だった。

人とは、打算的な生き物だろう。何の報酬も無しに誰かに善意をプレゼントしてやることなどないだろう。

母だって、私が家族だったからこそその無償の愛だった。だから私もそれを抵抗なく受け入れられたし、私も母に永遠の愛情を受け渡していた。

だが、この男は何なのだ……？

前々から異常なまでの奉仕心を持ち合わせている人だとは思っていたが、何故他人のためにそこまでできる？

私は、ロバーツ隊長にとって他人だぞ？ それも、付き合いなんて一年とちよつとの友とも呼べない間柄だ。

そんな小娘を相手に、何故そのような優しい表情が浮かべられる？ 何故そのような私の苦楽を自分のことのように感じられる？

分からない、分からない——この人は、“化け物”だ。

優しさという鋼に身を固めた善意の化身。与える善意にギブアンドテイクなんて一切求めていないから、理性的でないゆえ、私はそれが恐ろしかった。

初めて私は、ロバーツ隊長に心の底から恐怖を覚えた。

震えが止まらない。この人の優しさが常軌を逸しすぎていて、人の感情ソレとは思えなかった。

だからこそ、私はこの無償の愛を受け取るわけにはいかなかった。

私に無償の愛を捧げていいのは、生涯にたった一人……母さんだけだ。

よつてロバーツ隊長のこの「無償の奉仕」を「代価のある公正な取引」とするべく、私は軍服の上着を脱ぎ捨てた。

「……ウオーライラ？」

訝しむ隊長の声。しかし私はそれを無視して、己のシャツのボタンを次々と外していく。

ネクタイを緩めて、ベルトを外して……そして、数多の衣擦れ音が止み終わったところで、私は表情を「女」のものへと切り替えた。

ロバーツ隊長の知らない、娼婦おんなとしての私の表情カオへと。

「お、おいウオーライラ何をしているんだ。服を着ろ、年若い乙女がそう易々と男に肌を晒しては——」

「……隊長は、何がお望みですか？」

「……何？」

「私の苦心を慮おもんばかつてくれてありがとうございます。ロバーツ隊長の優しさには感服しました。

でも、このままではロバーツ隊長が一方的に損をするだけでしよう。失うだけ、それじゃあ割に合わないじゃないですか。

だから——私のこと、好きにしてくれていいですよ。私の願いを叶えてくれる代わりに、今晚から私が軍を去るその日まで、好きに私を性欲の捌け口にしてくれて構いません。これでも元娼婦なので、どんなプレイにも応えますよ。ねえ、アルヴェインさん」

甘ったるい声音で隊長の鼓膜をくすぐりながら、私は下着姿のまま隊長に接近した。そう、無償の奉仕を私が納得できないならこうしてしまえばいい。

ようは、私から代価を支払えばいい。

私を軍から解放してくれる代わりに、隊長は私の肢体を好き勝手にできる。

これでギブアンドテイクは成立する。果たして隊長が私のような乳臭い小娘に満足してくれるかは分からないが、男である以上悪い取引ではないだろう。

少なくとも私は母の血統を継いでいるためこちらの女性よりよっぽど美しいという自負があるし、夜の遊戯だつてそれ相応の経験がある。軍人だつて相手にしたことがある。

だからきつと、ロバーツ隊長も満足してくれるはずだ。出来の悪い部下からの、最後

の寄金でも思つてほしい。

こんなことでしか恩を返せない、自分が憎くて仕方がないけど。しょうがない、塵屑ができる献身など、精々この程度だから。

「アルヴィンさん……」

隊長の名前を呼びながら、下着越しに胸を押し付け首に両腕を絡ませる。

背伸びして首に抱き着くような恰好だから隊長の表情は見えていないが、まあ女慣れしてなさそうなこの人のことだ。少し顔を赤らめているかもしれないな。

そう思うとちよつと可愛いな、表情が見られないのは惜しいな、と思いながら、左手を下腹部へと滑らせる。

ベルトを外し、隊長のモノを慰めて、私の女としての有用性を示そうとした——その瞬間。

私は隊長に、あらん限りの力を以て両肩を掴まれ、そして引きはがされた。

「た、隊長……痛つ、何を……!?!」

「——ウォーライラ」

痛みと突然の出来事に困惑する私の言葉をすり抜けるように、かつてないほどに怒りに濡れた重低音が私の両耳をぶつ叩いた。

含まれた感情の過多具合に思わず背筋が凍りつく。心臓を握りつぶされたような圧

迫感を覚える。

恐怖しながら眼前に目を向けると、そこには……怒りとも嘆きとも言い難い、あるいはごちゃ混ぜにしたような凄絶な相貌をしたロバーツ隊長がいた。

そして隊長はただ一言、私の瞳を強く深く見つめて。

「自分のことを、もっと大事にしろ」

そう言つて、自分の上着を私に被せてきた。それ以上肌を見せるな、とでも言うように。

そして隊長は私に背を向けながら、厳しい口調で言葉を続ける。

「自分の価値を下げるような真似はするんじゃない、ウオーライラ。」

お前のことだ、どうせ、〃自分のワガママを聞いてもらうのだからせめて隊長にお返しを〃……とかそんなことを考えての行為だったのだろうか……馬鹿野郎、論外だ。

それに、お前からはこの一年半で充分すぎる恩を貰った。むしろ返しきれないのは俺の方だ。軍を辞めた後でも頻繁に支援しよう。星辰奏者の管理に関して、昔ほどではないがアドラーは厳しいからな。監視役などは瞬厶山羊からなるべく選出するよ、俺も時々様子を見に行つて——」

「……分かりませんよ。ねえ隊長……どうして……」

どうして、この人はいつも私の想像を超えてくるのだろうか。思い通りになつてくれ

ないのだろうか。

今まで出会って来た男すべて、私が少しそれっぽい態度を見せて女としての武器をチラつかせるだけで、涎を垂らして食いついてきたというのに。

何なんだそれは。どういうことなのだ。

発情するでもなく、食いつくでもなく、私の身を案じてくれるなど——男という生き物は馬鹿ばかりだと常々思っていたが、この人は特別に大馬鹿だ。しかも他の男と違うベクトルの馬鹿さ加減。

この人は、狂っている。

「そんなに私の身体に魅力がありませんでしたかッ！ 自分で言うのもなんですけど、私結構見た目には自信あるんですけど……！」

「ああ、ウォーライラ。お前は美人だよ。とても魅力的だ。娼館勤めって言ってたよな。だからだろう、美意識の高さも伺える。体型は丁度良く維持できているし、肌の質感なんかも一切荒れることなく綺麗に保たれている。そういう努力家なところも、俺は素敵だと思ってる」

「……ッ、なら抱けばいいじゃないですか！ いい子ちゃんぶる必要なんてないんです！ 私がいいって言ってるんですから、好きなように……！」

「ウォーライラ。お前は、俺に抱いてほしいのか？」

「え……？　いやそれは……私はただ、隊長のために……」

「だとしたら余計なお世話だ。お前が魅力的なのは覆しようがない事実だが、俺はお前を抱きたくない。いや、そんな理由では抱けない、と言った方が適当か。

とにかく、軍を抜けることにその後ろめたさを感じるなウオーライラ。これはお前の人生だ。どんな道を歩もうが、それはお前の意思であり、お前の自由だ。

お前の幸せがここでないどこかにあるというのなら、今すぐ探していくべきだ。俺もその手伝いをさせてくれたなら、俺はもうそれだけで十分なんだよ」

「……なんで」

次々に言葉を並べていく隊長に、私はようやく口を挟めた。

気づけば、私の頬には大熱を宿した雫が流れていた。孕む想いは、悲哀？　憤怒？　それとも歓喜、悔恨だろうか。

解読不能な感情の奔流に蹂躪されるまま、私は思いの丈をぶちまけた。

「なんで隊長は……私のためにそこまでしてくれるんですか。こんな、情けなくて無価値な他人の小娘に、そこまで親身になってくれるんですか……守ろうとしてくれるんですか。私なんて、私なんて——！」

生まれてこない方がよかったのに。声にならない絶叫は、隊長の耳に、心に届いたのだろうか。



真実は、部屋の窓越しの夜の帳に溶けて消えてなくなってしまったが、隊長は変わらぬ微笑を月光で照らしながら。

「それこそ当然だ。言つたらう、瞬<sup>お</sup>庄山羊<sup>ま</sup>の隊員<sup>ち</sup>は俺の家族だと。一人一人が、アドラーの宝である」と。

ならば親身になつて何が悪い。家族というのは、見返りを求めないものだ。だからお前が俺に対して後ろめたさや申し訳なさを感じているなら、それこそ阿呆、気にするな。そんな些細なことで断ち切れるほど、俺の絆は甘くない。

だから安心して胸を張れ、ウォーライラ。お前が無価値であるものか」

——そんな、私のような屑には勿体ないほどの優しい言葉を口にしたのだった。

「……隊長つて……本当に馬鹿ですよね……」

目が熱い。涙があふれて止まらない。

ああ、馬鹿なら私も同じだろう。こんなみつともなく、赤子のように涙を流して……  
本当に、馬鹿みたいだ。

誰かの優しさに感動し落涙したことなど、今まで母以外にいなかったし、母以外に生涯現れることなどないだろうと思つていたのに。

「ははは、馬鹿を拗らせなきや部隊長など務められないさ」

この人は、その難行をいとも容易く乗り越えてきてしまった。

私の冷えた心を、その温かい優しきで緩く、緩く溶かしてきている。

……けど。それでも私は……

「……でも、駄目なんです、隊長……お願いしますから、私に何かさせてください……でない……」

そう……私が愛していたのは、母だけだから。母以外からの無償の愛を受け取るなど……それは母との唯一の絆を否定するも同義。

心の中の母の存在こそ、私を支える無二の拠り所。母はこの世にもういないけれど、だからこそこの心に残る呪縛しあわせだけは捨てたくない。

これさえなくしてしまったら、真実私はどこにもいけなくなってしまうような気がするから、だから……

すると隊長は、弱ったな、というように後頭部をポリポリと掻き始めた。

自分でもクソ面倒なことを言っている自覚はある。だが、これだけは私の中で譲れない問題なのだ。

隊長の行為は有り難いが、貴方に母の代わりはやらせない。いや、誰であろうともそれだけは許さない。

私の絶対は、母だけなのだから。

「……よし、じゃあこうするか。ウォーライラ、とりあえず服を着ろ」

「え……」

「いいから着ろ。俺に何か要求されたいんだろ？ なら叶えてやる、服を着終わったら、訓練場まで足を運ぶぞ」

「ちよ、ちよつと待つてください。それは構いませんが、何を……」

「着いてから話すさ。さあ、早く着替えるんだ」

言うや否や、隊長は私を急かしてくる。

先までの柔らかい態度はどこへやら、一転して有無を言わさぬ鋭い口調となった隊長に困惑しながらも、言われた通り脱ぎ散らかした服を羽織り、身なりを整えていく。

……ていうか、結局脱ぎ損か。前職柄、男性の目の前で下着姿や裸体を晒すのには抵抗はないが、それでも口バーツ隊長に見られたという事実は……なんというか、少し照れ臭い。

「準備はいいか？ それじゃあ行くぞ」

「あ、ちよつ……！」

着替え終わったと同時に、問答無用で私の手を握り自室から退出する隊長。そして迷いない歩調で、瞳に光を携えたまま訓練場へと向かうのだった。

…

……  
……

「よし、着いたな」

訓練場へ到着すると同時、隊長はようやく握りしめていた私の手を開放してくれた。解かれた手のひらには未だ隊長の体温が残留しており、その熱を感じるたびに、何故か安心してしまふ自分が怖くなるが、しかし……

反対に、夜の訓練場には氷のように冷たく静かな空気が充満していた。

深夜を回ろうとしている時間だからだろう、場内には私と隊長を除けば人っ子一人おらず、隊長の鳴らす軍靴の音が余計に甲高く空気を震わせている。

そして隊長は到着するや否や、壁面にかけている刀剣を二本手に取ったかと思うと、片方を私の方に無造作にぶん投げてきた。

「わ、つと……！」

何の声掛けも無しに投げ渡されたものだから危うくキャッチし損ねるものの、かろうじて受け取ることに成功する。

しかし、何のつもりだ。隊長はここにくるまで無言だったし、未だに何をしたいのかわからない。不明瞭だ。

訓練場まで足を運び、こちらに剣を手渡して自分もそれを握っている……

……隊長は、いや、まさか……

嫌な予感が雷のように閃いた次の瞬間、的中してほしくなかった予想が見事に射抜かれるのであった。

「構えろ、ウォーライラ。剣と共に、今宵は存分に語り明かそう。お前の想いを、すべて俺にぶつけに來い」

噴火するように溢れる殺気、凍えた闘志。

隊長が向けてきた剣の切っ先に映る標的は、再認するまでもなく無論私だった。

隊長の美德である優しさはもはや見る影もなく霧消し、向けられてくる視線には軍人  
斯く在るべしと言わんばかりの鋼の焰と膨大な光を宿している。

まるで、『勝つのは俺だ』と言わんばかりの瞳に、背筋がゾツと寒くなる。

やはり。隊長が私に求める代価とは――

「それってつまり……隊長と戦ってことですか……?」

「ああ、そうだ。共に死力を尽くして、本音を余さず晒そうや」

最悪な想像が現実に見える結んだ刹那、瞬圧山羊の隊長と副隊長けつぷつ やによる決闘の戦端が  
ここに幕を開けるのだった。

## Chapter X 運命開戦／With sword

S

「……冗談でしょう?」

ようやく絞り出し声は、自分でも驚くほどに震えていた。

否が応でも現実を否定したいという私の想いとは対照的に、しかし隊長はどこまでも本気だといった調子で剣先を私に向けながら熱の籠った声を浴びせてくる。

「冗談であるものか。俺が求めるお前への見返りはこれだ。」

思えば、お前と手合わせしたのも、配属されてからすぐのあの日以来か。

丁度いい。お互いどれだけ成長したのか確かめるいい機会だ。

といつても、今回は前回のようにアダマンタイトでの模擬戦ではなく、訓練用の剣での実践となるが……」

「ま、待つてください!……! た、確かに私は何かさせてくださいって言いましたけど、何も戦う必要なんてどこにも……」

「安心しろ。何も殺し合いをしようってわけじゃないさ。それにアダマンタイトでない以上、星辰光の発動もできない。お前に能力を使用しろって言うてるわけじゃないんだ

ぞ。お前が自分の能力を嫌っているのは、俺も知っているからな」

「……………でも」

確かに能力を使つての戦闘じゃないと聞いて安心はしたが、だからといって矛を交える必要がどこにあるのだ？

隊長の目的は何なのだ？　そういえばさつき、今宵は存分に語り明かそうとか訳の分からぬことを口にしていたが……

「剣を交えることでしか、拳を交えることでしか語れないこともあるだろう。

日常では口に出せない、不満、思想、熱意、己が考える『勝利の形』……戦いの中で、互いにそれをぶつけられるのが、闘争の醍醐味であると、俺は考えている。

だからウオーライラ、剣と共に、お前の想いを俺にぶつけてこい。

何でもいいんだよ。お前の半生を語るもよし、この一年半の間の俺への不満をぶつけるもよし……興が乗ったなら、軍人を何故辞めたいと思つたのかを語るのもいいだろう。俺個人としては、お前の幸せの形なんかも聞いてみたいかな」

これから私と戦えることが楽しみだともいうかのように、更なる灼熱を闘志へと注ぎ込んでいくアルヴィン隊長。

一方的に投げられてくる熱意と想いはどこまでも無遠慮で、子供のような無邪気さに

満ちている。

だからこそ私は退路を断たれた。

平時の隊長は文句のつけようもない、慈愛と奉仕心に満ちた紳士だが、こうなつてしまった隊長はどこまでも強引に突き進んでいくため、その疾走を止めることなど凡人の私にできるはずもなく。

ああ、本音を言えばこんなことしたくない。

隊長と戦うなんてこと……だつて私に勝ちの目なんかあるはずもないのだから。

それに戦うということは物理的に傷つき、痛みを伴うことであるのだから、進んでやりたいと私のような臆病者が思えるわけがない。

だが、これでギブアンドテイクが成されるのなら……

これが、私が地獄を抜け出すための、最後の地獄だというのなら。

踏破してみせる。逃げるのが最初から選択肢にないというのなら、もはや力任せに押し通るしか道はない。

ならば奮えよりディア・ウォーライラ。これがお前の最後の戦いだ。

約束した、母との幸せを手中に収めるために……いざ。

「……覚悟が決まったな、ウォーライラ。いい瞳めをしている。



——さあ、お前のすべてを俺に晒せ。思いの丈をぶつけてこいッ！」

「——行きますッ！」

そしてここに戦端は開かれた。

互いの目的は交わらないまま、熱量すらも大きく差を付けながら、ここに私の最後の地獄たにかいが始まったのだった。

……

……

……

「ああああああアッ！」

裂帛の気合と共に剣先を縦横無尽に走らせる。空気を裁断しながら放たれる本気の攻勢は、先の模擬戦で見せたそれとは格が違う。

「当然だ、あの時は格下を相手にしていたのだから手加減も手心を加える余裕があったし、何より殺す気などなかった。

だが今は別だ。私の眼前に立つこの益荒男ますらお——アルヴィン・ロバーツは私より遙か格上に君臨している戦闘者なのだ。

であればこちらに余裕など一寸もないのは言わずもがな。

私は自身が今選択できる最良の手段を常に見極めながら、遮二無二剣の穂先を躍らせていた。

今現在私が開帳できる己の精一杯。全力全霊。

並みの兵士であれば十回以上は細切れにできているであろう剣閃の瀑布は、しかし—

「この一年半で更に練ったな、ウォーライラ。努力の賜物だな、本当にお前は凄いやつだよ」

この傑物は、苦も無くそれらを躲し、いなし、弾いて見せていた。

何が「お前は凄いやつだ」だ。それは嫌味か何かなのか？

本当にこの人は頭がおかしい。

だってそうだろう。この人の普段の主要武器は弓なのだぞ？ 断じて剣などではない。

だというのに、普段から主要武器が剣の私と互角に渡り合う……どころか余裕を見せているこの人の怪物っぷりには怖気が止まらない。

きつとこの人がその気になれば、私など数分もかけずに屠り尽くすことができるのだろう。でも、彼はそれをしない。曰く、私に想いを語ってほしいから、と。

だが――

「語るべき想いなんて、私には一切ないッ!」

悲痛な叫びと共に放たれた串刺しの一閃は、やはり隊長には涼し気に躲されてしまつた。

ああ、そうとも。私に語るべき想いなんてない。晒す価値のある覚悟なんて微塵もないのだ。

私の心に渦巻いているのはいつだって醜い感情、負の気を纏つた恨み言と泣き言だけ。

ロバーツ隊長ほどの高潔な人に見せられるような高貴な想いなんてもの、私は一つも持ち合わせていないのだ。

「それは違う。お前は心が無い無機物なんかではないだろう。俺と同じ人間だ。だつたら心の底で渦巻いている感情が山のようにあるはずだ。どれだけ醜い想いでもいい、恥の多い想いでもいい、残さず俺にぶつけてみる、俺はそれを嗤つたりしないッ!」

高らかに吼えながら、隊長は守勢から攻勢へと移行する。

電光石火の速度で放たれた横一文字の斬撃、繋げて袈裟斬り、足払い――常にこちらの挙動を隙間なく観察し、僅かな隙を摘み取ってくる所作は本当に称賛に値するものだ。

それは隊長の戦闘スタイルから磨かれた賜物だった。曰く、鷹の眼光。彼の状況把握、掌握能力で右に出られるものはアドラーにおいてもそう多くはないだろう。

現に私も今こうして、すべての迎撃の根を摘まれ、一方的に剣の雨を防ぎ続けるだけのサンドバッグと化している。

このままでは敗北必至なのは言うまでもないが……いやそれ以前に……隊長は今何と言った？

「……同じ、人間……？ 私と隊長が？」

隊長の剣撃を弾きながら、自嘲じみた笑いが口端から零れた。

同じ？ 高潔たる軍人な隊長と、屑の子種から生まれた屑である、この私が？

「貴方のような傑物と、私みたいな塵屑を、一緒くたにするなアアッ！」

隊長の刺突一閃を逆袈裟斬りで上方へ大きく弾きながら、私は涙声で訴えた。

冗談じゃない、貴方のような完璧超人と、何もかもが中途半端で性根の腐った私ごときを同列にしないほしい。

息が詰まって死にそうになる。やめてくれ、やめてくれ。

それに、だ。この人はまさか、まさか——

「隊長……貴方まさか、自分と私が同じ境遇だとか思つてませんか？」

鋭剣が強制的に上へ持ち上げられたことにより隊長は隙を晒す。

その間隙へ致命の一撃を叩きこむべく、お返しだとばかりに隊長に倅い牙突の構えで突貫する。

これで決まるとは当然思っていないが、意表を突くことはできただろう。このままこちらが主導権を握り戦いに幕を下ろすのだ。

案の定、隊長は横っ飛びに私の突撃を回避し返しの刃をこちらへ振りかぶってくるが、甘い。読んでいるんだよ、そんなことくらい。

「ッ……！」

斬撃が放たれる数秒早く、私は隊長の手首めがけて横蹴りを放っていた。

再び弾かれる剣先、遅れが生じる攻勢行動。勝ちの目はここにあり。

私は再び隙だらけの隊長めがけて鋭剣を一閃させようとした、瞬間。

「甘いぞ、ウォーライラ」

「ッ！ な、アッ!？」

隊長はあろうことか、弾かれた反動を逆に利用して振りかぶり、そのまま剣をこちらの顔面目掛けて投擲とうてきしてきたのだ。

咄嗟の奇行に反応が半拍遅はんぱくれてしまったが、ギリギリのところまで弾くことに成功した。

この人、殺す気はないとか言つときながら今の一撃完全にその気だったろ……！

僅かに私がたたらを踏んでいる暇いとまに、隊長は手早く弾かれた刃を回収し、こちらへ向かい再び一撃を見舞ってくる。

そうはさせじと私も刃の銀光を奔らせる。刃と刃がぶつかり合い、鋼の摩擦音が訓練場へと大きく響き渡った。

……ああ、そうだよ。こんなにも戦闘のセンスも隔絶している。人としての器も、神様から与えてもらった才能も……何もかも。すべて、この人は私と違うんだ。

「……さっきの話に戻りますけど。隊長、貴方私と同じ境遇だとか寝ぼけたことを思っているんじゃないでしょうね？」

冗談じゃない。馬鹿にするわけじゃないですけど、隊長っていいとこ育ちのお坊ちゃんなんでしよう？ 部下の子から聞いたことがありますよ……ロバーツ家、代々優秀な軍人を輩出している名家、所謂貴族の家系だって。

アルヴィン・ロバーツ隊長……貴方は、そんな恵まれた家系から生まれた、約束された勝者ですよ。皮肉でも何でもなく、もうその時点で勝ち組と言つてもいい。人生薔薇色ですよ……それで、片や私は？」

隊長と幾度も幾度も切り結びながら、私の心から闇の言葉が吐き出されていく。

こんな醜い言葉を並べたところで、私の境遇がなかったことになどならないのに、分かっているのに、止まらない。

私の慟哭は、大気を伝って流れ出していく。

「生まれた家は貧乏そのもの。父親はドがつくほどの畜生で、ギャンブルと酒に狂って我が家のなけなしのお金を貪り尽くして……私の大好きだった美人で優しい母さんも、そいつに笑顔を壊された！ もう散々でしたよ、ねえ？ 隊長、想像できます？」

毎日飛び交うお皿と怒号、少しこつちが反駁はんぱくすれば殴る蹴るは当たり前。お母さんだろうが子供の私だろうが、容赦なく力でねじ伏せてきた！ 理不尽の極みでしょう、温室育ちの貴方にこの苦しみが分かりますかッ！」

もはやここまで来れば八つ当たりだろう。

今まで封をしてきた想いを少し溢してみたら御覧のあり様、手のつけようもないほど怒りと嘆きが溢れ返ってくる。

どこに発散させればよいのか見当もつかなかった天元突破の苛立ちを、お門違いと分かっているのにロバーツ隊長にぶつけて、ぶつけて、ぶつけまくる。

涙と刃に乗せて、この悲哀ごと、切り裂くように。

「その挙句ですよ……？ 私、父親に犯されたんですよ……初めてをね、実の父親に、しかもあんな糞つたれに奪われたんですよ！ ははは、ここまで来ればもう喜劇ですよねえッ。」

それだけで終われば良かったのに……母さんは、私を守るためにあの屑を殺して……そして、すべてに耐えられなくなった母さんは自殺して、私はそれつきり孤独の身!

何で、母さんが死ぬ必要なんてどこにも無かったのに! 私は、母さんが生きているだけで、それだけで幸せだったのにイ!

風船のように膨れ上がったていく嘆きに乗せて、渾身籠めた一撃をロバーツ隊長へと振り下ろす。

感情的極まる稚拙な一閃だったが、この戦闘以降一番威力が乗った斬撃だと確信も持てた。

それを隊長は躲すでもなく、全力で受け止めてくる。未だその口を、横一文字に閉じたまま。

「……ね? ほら、どこが同じ人間ですか? 隊長は勝者、私は敗者。生まれてきた環境も違えば、お互いの性質だって正反対ですよ。」

隊長は光を目指して誰かの為にと努力するのが好き、私はどれだけ楽に自分が幸せになれるかしか考えていない。

……どうです、同じ人間なんて口が裂けても言えないでしょう? それとも、それでも隊長は、『俺とお前は対等だ』とか言っちゃうんですか?

そんな歯の浮いた台詞、私の苦しみを全部理解してから言い直せえツ!



大喝と共に剣に更なる力を注ぎ込み、その甘ったれた認識ごと断ち切らんと刃を真下に振りぬいた。

一際大きい金属音が訓練場を揺るがす。ダメージを負わせることはできなかったが、膂力任せの一撃は隊長の足先の踏ん張りを弛緩させることに成功した。

すかさず放つ足払い。いつもの隊長であれば難なく躲せるこの一撃も、今の状態じゃそれも満足にできないだろう。

私の目論見通り、足場崩しは功を成し、隊長は後方へと倒れていく。もはやここから先の攻撃は躲せない、回避不可能。よっては私の勝利は揺ぎ無く。

「終わりです、隊長」

冷たく言い放ちながら大上段から唐竹割りを解き放った。

無論殺すつもりなど毛頭ない、寸前で停止させるつもりだ。たかがこのような模擬戦もどきで人の命を奪えるほど私の神経は太くないし、何より隊長を殺す理由がどこにも無い。傷つける理由も、どこにも。

私はこれから退役する身だからこのようなこと言う資格などどこにもないのかもしれないが、隊長はこれからのアドラーに必要な人だ。

みんなから慕われている、とても素敵な人。だから私ごときが消えた程度で何の影響もないだろう。

だからこれからも変わることなく、その眩しい瞳でアドラーの未来を駆け抜けてくれ……と、心の中でロバーツ隊長に別れを告げる折……何故、だろうか。

一瞬、心が、モヤついたような……気がした、次の瞬間。

「——まだだッ！」

——噴火するような喝破と共に、勝利を手にする魔法の言葉が轟いた。

Chapter XI 奈落の渦中で得た真相（こたえ）／  
The answer

「——まだだッ！」

「ッ……!?!」

業火を宿した雄叫びが、大地を割かんと轟いた。決意という名の特級の灼熱を纏った地響きの如き咆哮。ロバーツ隊長は、この勝負をまだ諦めてなどいなかった。

勝つのは俺だ、と……どこまでも愚かしく、輝かしく信じている。

そして、眼前に飛び込んでくるあり得ない景色。

なん、だ……この人は一体何をしている……!?!

「真剣……白刃取りッ……!?!」

「おうともよ、ウォーライラ！一回やつてみたかつたんだぜこれ、男の浪漫なんだよなアッ！」

手のひらから滴り落ちる赤血を真つ向無視しながら嬉し気に隊長は叫んでいるが、こちらは馬鹿かお前はという感想しか浮かんでこない。

だってそうだろう、寸止めするなんて少し考えれば分かることだろうに馬鹿正直に受

け止めに来る奴がどこにいる？

それもそんな古典的な……旧西暦から存在する浪漫的な概念の塊をこの局面で喜んで使用するなどもはやギャグすら通り越して狂気、一種のホラーだろう。

やっぱりこの人は幾つか頭の螺子が外れていると思つていた束の間、隊長は私の刃を受け止めたまま口を開いた。

「ウオーライラ、さっきの話だがな……ああ、まったくお前の言う通りだよ。

俺とお前は対等だ、などとは口が裂けても言えない。加えて、温室育ちのぼんぼんのはきつと、お前の苦しみは永劫体感できないのだろう。真の意味で理解するなど、それこそウオーライラからしてみれば侮辱以外の何物でもない。

お前の感じた痛みはお前だけのものであり、それを俺が我が物顔で語るなど、許されざるべき悪道だ。断じて許されていい行いなどではない」

迫る白刃を受け止めながらそれでも語る言葉を絶やさない隊長の言葉は、本気そのものだった。私の耳障りのいいことを吐いておこうだとか、適当なことを言つて茶を濁そうなどという半端な気持ちは見受けられない。

どころか、どこまでもどこまでも、呆れるほどに真摯に私の心と向き合っている。

嘘偽りのない真の言葉で、気持ちで、丸裸のまま、私という一人の人間と対峙しているのだ。

「そう……だから俺とお前は対等なんかじゃないんだよ。何故ならウォーライラ、お前の方が俺なんかよりもよっぽど凄いい奴だからな。俺は心の底から、リディア・ウォーライラという人間を尊敬している。今の話を聞いて、より一層その気持ちが強烈なものになった」

「——ふざけるなよ貴様アアツ!!」

並べられたあり得ない賛辞の数々に、思わず私は声を荒げて刃を握る手に力を籠めた。

皮肉か？ 嘘か？ その場しのぎの戯言か？ いいや、違うのだろう、煌めく瞳が、本音に他ならないと告げている。

だからこそ分からない、その理由が。貴方ほどの凄い人が、何で私みたいな取るに足らない塵屑に……!!

「当然だろう。お前の言う通り、俺は温室育ちのぼんぼんのお坊ちゃまだ。何の不自由もなく幼少期を育てられ、父の背中を指して軍への入隊を希望し、夢も無事叶えた。

障害という障害は幾つかあったが、ウォーライラのそれと比べればカスも同然だ。比べるにも値しない。

……ああ、そうだよ。恥ずかしながら、俺は今まで大きな障害にぶつかることなく生を謳歌してきた。多方面に喧嘩を売る言い方をすれば、何不自由のない生活ってやつ

だ。

「どうだ、馬鹿にされている気分になっただろうか？」

手のひらから更に酷い出血をしながら自嘲じみた笑いを浮かべる隊長。

自嘲することなどないだろう、素晴らしい人生ではないか。私はそれが今でも欲しいし、そんな人生を送ってきた隊長を羨ましく、そして妬ましく思う。

何で貴方ばかりそんなにも恵まれているのか。対して私は、こんなにも恵まれていないのか。

ああ、やつぱり神様は糞つたれだ。糞が、糞が、死んでしまえ——！ 吐き出る呪言を奥歯で噛み潰しながら、しかし私は続けて告げられた隊長の言葉に驚愕することとなる。

「対してウォーライラ、お前は如何ともしがたい困難だらけの人生を送って来たんだな。お前の苦しみを理解してやれることはできないが、その心中は察して余りあるというものだ。辛かつたらう、本当に。」

だからこそだよ、凄いのはそのこだウォーライラ。普通ならばそんな滅茶苦茶な人生を送れば、悪道に逸れたり、犯罪に手を止めてもおかしくはない。いや、そうなるのが普通だろう。そうなっていたとしても、俺は一概にそれを糾弾できん。抛よんじり無き理由だからな、真つ当に生きろという方が無理というもの……だけどウォーライラ、お前はそう

はならなかつたんだよ。

悪に手を染めなかつた。真つ当なまま生きたいと願つたのだろうか？ 凄いいことじゃないか。悪いが俺はそんな人生を送つたら、今のような人格になれたかは正直怪しい……いや、なれなかつただろうな。断言できるよ。

だからその時点でお前は、俺より凄いいんだよ。胸を張れ」

「ッ……違う！ そんな、褒められるようなことじゃない！ だつて私は約束したから、お母さんと！ 幸せになつて見せるつて！ そうすれば、お母さんも幸せだからつて、それで……！」

「亡き母君との約束を今でも大事にしている。輝かしいことじゃないか、その想いは宝だぞ、ウオーライラ」

「ち、違う、違うッ……！ 私は凄くなんかないッ！ だつて私は隊長と違つて自己中で、自分ひとりが幸せになればそれでいいつて思つていて……！」

「己が幸せを望むことの何がいけない？ 自分の幸せを追いかけるのは人として当たり前営みだ。恥ずべきことなんかじゃない」

「でも、私はッ！ 給与にくらんで軍人になつた！ 此処に入れば、私は幸せになれると信じて！ 民の平和とか笑顔とか、そんなのはどうでもよかつた！ ただすべては私の

ため、私の幸せの為だけに！ 入隊して、副隊長にまでなつて……幻滅でしょう！ 信頼していたはずの部下の本性がコレですよ、典型的な俗物で、見るに堪えない自己中心的！ 軍人失格、私のことぶん殴つてやりたいって思うでしょう!!」

「思うか、阿呆。あのなあ、ウォーライラ。お前が国民のことをどう思おうが、国を憂うが憂うまいが、俺はどちらでも構わないと思つてゐる。

何故ならお前は、軍人としての責任を全うしているじゃないか。こなす仕事はすべて完璧、十分すぎるほど国に貢献しているだろう。

それが表層的なものだろうと、国に多大な益を齎しているのは紛れもない事実だ。

何より、お前が来てくれてから圧倒的に俺の負担が減つたんだよ。目に見える変化、功績だろう？

しかも軍人としての鍛錬も弛まず行つてゐる……お前、本当に凄い奴だよ。何度でも言いたくなる。俺の自慢の部下だ」

「ち、ツ……違う違う違うツ！ 全部見当外れなんだよもうそれ以上しゃべらないでくださいッ！」

おかしいだろう。何だこの状況はと、震える心が止められない。

私、こんなに隊長に認めてもらつていたんだ、という微かな喜びが浮上するも、一瞬にして闇の感情に葬られる。



そうだ、私は認められる価値なんてないのに。

すべて晒した後でも、隊長は同じことが言えるだろうか……？

何故か恐怖しながら、私は己の素顔を次々と晒したてていく。

「だからッ、それも全部自分の為ですよ！ だって適当な仕事をするあとで始末書  
 だったり責任問題に発展して面倒くさいから！ 自分の首をしめないために一生懸命  
 取り組んでいるだけです、それ以上の理由なんてない！ 鍛錬だって同じですよ、いざ  
 というとき自分の命を守るため、国民の命なんて二の次……ていうかぶっちゃけ戦い  
 たくすらありませんから私！ だから駐屯部隊に派遣されて安心しましたよ私は！

ほら、ほら、全部自分の為！ 隊長の言うような凄い奴なんかじゃ、私——」

「いいや、お前は凄い奴だ。これだけは譲らん、何があろうともだッ！」

天下に誇るかの如く喝破した刹那、隊長は受け止めていた刃を腕力で無理やり跳ね除  
 けてみせる。

その後全身を独楽のように回転させたかと思うとバク宙をして私から距離を空けた。

鋭利な視線と、熱い瞳が、溶け合い、絡む。お互いの意地を突き通すために。

「そもそもウオーライラ、お前は自分のことを凄い奴じゃないとか塵屑だとか自虐を繰  
 り返しているが……自己評価が低すぎるんだよ。閣下のことを言えた立場じゃないぞ。

ウオーライラ、年長者として教えてやるがな……本物の屑を舐めるなよ。

そもそも塵屑っていうのはな……お前みたいに「ちゃんと仕事をしよう」なんて思わないんだよ。

周りへの迷惑とか建前とか一切切関係ない、自分だけ甘い蜜を吸えていればいいと本気で考え、心を痛めることなく平気な顔で悪事に手を染める……血統派がまだ跋扈していた時代、俺はそんな屑どもを何人も見てきた」

鋭い眼光でこちらを射抜きながら、隊長は私との距離を縮めるようにゆつくりと進撃してくる。

躲せばいいだろう、避ければいいだろう、でなければますます反撃の態勢を——頭では分かっているのに、身体がまったく言うことをきかない。

まるで総身を鈍重な鎖で絡めとられているかのような圧迫感を受け、私は大地に縫い付けられていた。

「だから断言できるんだよ、ウォーライラは屑じゃない。屑なんて誰が呼ばせるか。

嫌なことをわざわざ努力するなんてな……そんな凡夫どもにはできやしないんだよ。

いいや、そんな屑どもどころか……普通の精神力の人間では、まずできない。できないんだよ、やりたくないことに努力することなんて。単純に、楽しくないからな。

その是非は問うべきではないが、それが人の心理なんだ。当然の帰結、責めることができない人間の本能……だというのに、お前はどうか？

きつと、嫌だったのだろう。軍人という仕事だ。給与に目が眩んだのだろう。自分の幸せの為だったのだろう。国民やアドラーのことはどうでもよかつたのだろう。

ただお前は、真実アドラーに尽くしてくれていたんだよ。

有事の際用の民間人のための避難経路地図を作ってくれた。

夜の街で暴れている迷惑な酔っ払いを鎮めてくれた。

部下たちの訓練指導を手を抜くことなくやってくれた。

護身のため、ひいては有事の時の為、毎日鍛錬を繰り返していた。

まだだ、語り尽くせない。一年半、お前は本当によく働いてくれたよ。

この実績を前に、お前の本心がどうだのと……少なくとも、俺が気にするなど言っているんだ。ならウオーライラも気にするなよ。

誰が何と言おうと、リディア・ウオーライラは俺の自慢の部下であり……アドラーの宝だ」

隊長の言葉が一つ一つ、無防備に晒された私の心に沁みこんでいく。

もはや、剣を振りかぶることなどできなかつた。

何故なら、理解してしまつたから。どうしようもなく悟つてしまつたから。

私は、この善意の化身に勝てない。

隊長はきつと、心の底から私のことを認めてくれている。並べる言葉に裏表などな

く、本気の本気で私を凄<sup>こ</sup>い奴だと、自慢の部下だと、宝だと言<sup>つ</sup>てくれている。

私の身勝手な願<sup>ねが</sup>いを聞き届<sup>と</sup>けたくうえでも、それでもいいと、むしろそれは人として当たり前のことだと……どこまでもどこまでも、優しく私のすべてを肯定しながら包み込んでいた。

……ははは。本当になんだ、何なんだよこの人は。

勝<sup>か</sup>てないよ。勝<sup>か</sup>てるわけがないよ、こんな……善意と優<sup>やさ</sup>しさとかいう、打ち破<sup>やぶ</sup>りようがない装甲で全身を纏<sup>まと</sup>った人。

どうすればいいって言うんだ。

ぶつける言葉はすべて優<sup>やさ</sup>しく包まれて。こちらを屑<sup>くず</sup>だと誹<sup>こ</sup>つても、こちらが納<sup>な</sup>得<sup>とく</sup>するしかない理由で悉<sup>ことごと</sup>く論破<sup>ろんぱ</sup>してきて。

……無敵だ。私がどれだけ自分を否定しても、隊長はその三倍、四倍はこちらを肯定してくるのだから手の施<sup>せ</sup>しようがないとはまさにこのことだろう。

よつて詰<sup>つ</sup>んだ。詰<sup>つ</sup>まされたのだ。

私は、隊長に、敗北<sup>ばいはい</sup>した。

……でも。いいや、だからこそ——

「——まだ、だ。私の本音<sup>ほんね</sup>は、こんなものじゃない」

勝<sup>か</sup>てないと分か<sup>わ</sup>かっているでも、垂<sup>た</sup>れ流<sup>なが</sup>すマイナスの言葉の数々はまだ尽<sup>つ</sup>きていなかっ

た。

いや、今真に、改めて気づかされたというべきか。自分でもなんて最低なことを口走るつもりだろうと思っているが、もはや知るかよ、どうでもいい。

隊長は私のすべてを晒せと言った。ならばいいさ、余さずすべて、残り滓一つ残さず開帳してやろうではないか。

この人にこれ以上、私のことを認めさせない——！

「大体……隊長は。何で……何でッ。」

そんなに優しいんですか！ 隊長が優しくなかつたら、私は今頃こんなに拘泥こうでいしてないッ！ ふざけるなアッ！」

ふざけているのは一体どちらなのか。あまりにも理不尽な物言いを口走りながら、脱力した両手に再び力を籠めなおし、刃を隊長の胴体へと薙いだ。

緩やかに歩を進めていた隊長も停止を余儀なくされ、迅雷の踏み込みと共にこちらへカウンターを放ってくる。

そして再度始まる剣戟の応酬、鋼の烈風が巻き起こった。

反響する死を乗せた音色すらも置き去りにしたまま、互いが互いに神速の剣技を披露していく。

同時に、私も呪いの言葉を吐き出していく。まるで私と隊長の繋がりに、汚泥をかけ

るように。

「いつそ見た目通りの冷たい人なら良かったのに！ 私みたいな塵屑、死んでしまえと罵つてくれればよかったのに！ そういう、私にとつての地獄そのものである人ならば、私は潔く軍人を辞めることができた！ だつてそれは明確に『地獄』だから！ 私はもうこれ以上苦しみたくなかないんだ！ 幸せになりたいんだよッ！」

爆発する嚇怒は、一体誰に対して吼えたものだったのだろうか。

字面だけで判断するなら間違ひなく隊長への非難ということになるが……それさえも、今は分からない。

心が赴くままに、感情を吐き出していく。必殺の剣の連撃と共に。

「でも隊長は『いい人』だつた！ どこまでも優しく温かくて……だから結局、軍人としての責務が嫌でも、この易しい地獄をずっと甘受してきたんだ！」

中途半端にも居心地がよかつたせい！ 軍を抜ける勇気が、決断が！ ずっとできなかつたんだ！ 隊長が優しすぎるから——隊長のせいで！」

叫び散らす傍ら、私は頭の片隅で自分を自分で嘲つた。

こいつは一体何を偉そうに、そんな理不尽極まりないことを言っているのだろう。

自分の優柔不断さとヘタレさを隊長のせいにして、責任転嫁もいいところだろう。隊長からすれば「知つたこつちやない」って感じだし、私も現にそう思う。結局私が全面

的に悪いのだから、その咎を隊長に差し向けるのはお門違い、まさに屑の所業に他ならないと分かつてはいるが……これは、紛れもない私の本心だった。

間違っていることだとは無理解しているが、感じた想いに嘘偽りはまったくなく。本当にそう感じたし、思ったのだ。私の心は紛れなく。

だって今も現にほら、私はこんなに苦しんでいる。

そもそもおかしな話だろう。だって私は、この人を信用しきれていないのに信用したがつていた。

その癖いざ隊長がこちらを一切責めることなく救いの手を差し伸べてきたら私はそれを必死に拒んでいる。

矛盾しているにもほどがあった。結局私はどうしたいのか、自分でさえも分からない。

そう、私は未だにどこにも定まらずゆらゆらと幽鬼のように揺れているのだ。

中途半端に、どこまでも無様に、自分が何をしたいのか、するべきなのかすら見定められないまま……だから動き出すことができず、言動行動すべて余さず矛盾だらけ。

その癖垂れる愚痴と不満だけは一丁前で……ああ、本当にどこまで塵だよ私は。

流石にこれにはさしもの隊長も呆れるだろうなと、ちらと表情を伺ってみれば——この優男は、あろうことか微笑んでいた。

「すまん。本当に申し訳なく思う。」

臃にも何度が指摘されたことがある。『お前は甘すぎる』、とな。

傍目から見たら、俺が今ウオーライラに掛けている言葉の数々は甘ったれたものなのかもしれない。臃だったら一喝していたかもしれない。いや、臃だけでなく、俺以外のアドラー部隊長陣も、もしかしたら叱責したかもな。

だが俺から言えるのはやはりこの言葉だよ。すまなかつた、ウオーライラ。俺の性分のせいでお前にいらぬストレスを与えてしまったこと、深く詫びる」

薄く苦笑い臉を閉じ、しかし激化していく攻撃の激流には対応しながら、隊長はこちらを慮る心情を吐露した。

……ああ。どこまでもこの人はこれなのだ。

真にこの人は、私を救済しようとしてくれている。救いの手を差し伸べている。

幸せになってくれと、心の底から願っている。

ああ、そうだ。私もそうしたい。そうなって楽になりたい。

こうなることを望んでいたから、私もロバーツ隊長に己の運命しあわせを求めたのではないか。

では何故、私はこんなにもロバーツ隊長の言葉の数々を否定しにかかっているのだろうか？



矛盾している。矛盾しているんだ、何もかも。

でも……いいや、だからこそ気づいてしまったのだ。

リディア・ウォーライラの真実に。私ですら知らなかった……否、気付かないフリをしていた真実に、私は辿り着いたのだった。

「隊長……言つてくださいよ、お願いしますから。」

それは違うとか、我儘言うとか、矛盾しているとか……何か、何かあるでしょ」

嗚咽を漏らしながら、懇願するように隊長へと言葉を結んだ。

もはや何を指して、何のために剣を振るっているのか分からない。

ただ私は駄々を捏ねる幼子のように、顔面にみっともなく悲哀の雨を降らせながら、必死の想いで言葉を吐き出していった。

「お願いだから——言つてくださいよオ！ 全部、お前が悪いんだって！」

……そうだ。

私が幸福になれず地獄に幽閉されたままなのは、母との幸せな日々にもいつまでも囚われているからだ。

陽だまりの中のような、優しく温かい安らかな日々。

その幸せの象徴である母は、もういない。

だからそもそも、母が死んでしまった時点で、母と私の幸せは永久に地獄に閉ざされたままなのだ。これでは、未来永劫幸福になどなれるわけがない。

ただ生きていくだけで、突風に巻かれる枯れ木のように、どこまでもどこまでも擦り切れていくしかなかった。

今まで場所や人間関係、外的要因にばかり目を向けていたから気付けなかったが、これは結局自分の心の問題だったのだ。

過ごした環境にも私にとつての「地獄」の原因は大いにあつたと思うが、一番は結局のところ私の心の在り方だった。

よつてすべては自業自得。

母と過ごした日々を過去と割り切れず、いつまでも引きずるように抱きかかえている私に、輝かしい未来など訪れるはずはなく……

母と過ごした時間以外の幸せは認めないと心が絶叫している限り、私は前に進めやしないのだ。

あの日から一歩たりとも、未来へ足を踏み出していない。

それを、心のどこかで分かっているながら。

けれど、そんな現実は見たくなかったから。

それでも……それでも、どれほど残酷な現実しんじつだろうと、直視して向き合わないことは未来を拓くことなど永劫できないから。

いつか誰かに、『お前が悪い』と指摘してもらいたかったのだと、今になって気付いたから――

「――隊長ッ!」

この人ならと。私は有らん限りの期待と願いを込めて悲痛な絶叫を迸らせた。

貴方に否定みとめてもらえなかつたらされなかつたら、誰が私を救ってくれるの？ 誰が私に現実を見せてくれるの？ いい加減に未来へ進めと、背中をぶつ叩いてくれるの？

貴方しか、そう、私には貴方しかないのだと、誰よりも優しい私の英雄に託した、一縷いちるの悲願は。

「お前は、悪くない」

――望んだものとは正反対の返答が、私の鼓膜へと泥のようにこびりついた。

瞬間、私の中で、何か大切なものに亀裂が走る音を聞いた気がした。

世界のすべてを、知覚したくない。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア——ッ!!」  
気づけば私は猛獣のような咆哮を撒き散らしながら、隊長を真実殺さんと飛びかかっていた。

その時垣間見た隊長の瞳は——まるで、遙か遠くの時間軸へと飛ばしているような、懐かしさと哀愁が刻まれたものだった。

## Chapter XII 二人の始まり／Fateful encounter

「本日付けで、瞬<sup>カブリコーン</sup>庄山羊に配属になりました、リディア・ウォーライラと申します。

ロバーツ隊長の下で帝国の盾となれること、我が身には余る名誉でございます。

未熟な身ではございますが、これから何卒よろしくお願いいたします」

生真面目な表情でこちらに頭を下げてくる少女を見て、俺が第一に浮かべた印象は、「ああ、この子はきつと軍人には向いていない」という身も蓋もないものだった。

なるほど、臍<sup>はら</sup>が言わんとしていたことはそういうことだったかと、手元にある彼女の資料に目を配る。

そう。これが、瞬庄山羊部隊長たる俺、アルヴィン・ロバーツと……その副官を務めるリディア・ウォーライラの出会いだった。

…

…

…

「……何？ 瞬庄山羊に？」

ヴァルゼライド閣下が逝去してから早三年近く経ったある日のこと。

全十二部隊の隊長による合議がつつがなく終了した後、俺は臙から個人的な呼び出しを受けていた。

その内容は、俺が率いる北部駐屯部隊・瞬庄山羊に新たなる人員を増強するというものだった。

人員の補強自体はとても助かるし願ってもいない提案だった。

不幸自慢をするつもりはないしそんな趣味もないが、北部はアスケレビオス蛇遣い座の大虐殺以降、常に人員不足の危機に晒されていたからだ。

よって臙からのその報告は正直に言えば俺にとっては吉報に他ならず笑顔を浮かべ喜んで然るべきことなのだが……俺はしかし眉間に皺を刻んでいた。その理由は、たった一つ。

「ああ。先日士官学校を卒業した彼女……リディア・ウオーライラをアルヴィン、お前の部隊の副隊長に推薦したいと考えているのだが、どうだ？」

「どうだ、と言われてもな……さて、どこから突っ込んでみるやら」

俺が頭を抱えている理由は、臙の今しがた放った言葉に他ならなかった。

突つ込むべき点はいくつかあるが、第一に引つ掛かったのは無論のこと……

「士官学校を卒業してすぐに副隊長に任命するなど正気か？　と考えているのだろうか？

なあ、アルヴィン」

「まあ、悪いがそうだな。いや、臚。お前が冗談を言うような質たちじやないのは分かっているさ。

だからそうだな……俺はこう尋ねるべきかな。彼女は、そんなにも優秀なのか？」

臚が推薦しているということは、それだけの理由があるのだろうと俺は考えた。

そうでなければ、何よりも実力主義の体現たる臚が新兵を副隊長に推薦までしてくる道理がない。

現天秤の長を務めるこの女傑は、自他ともに厳しい鋼の軍人だ。よつぽどでなければ彼女から高い評価を得るなど難しい。特に新兵ともなれば尚更だ。天に浮かぶ月を掴んで見せろと言われた方がまだ現実味を帯びるといふもの。

そして俺の問いに対し、臚はよくぞ聞いてくれたとばかりに口元の笑みをより深いものにして見せた。

「ああ、極めて優秀だな。軍人としての戦闘能力は言わずもがな、政治力も兼ね備えている。元々才覚があつたのだろうが、もつとも恐るべきは努力の才だ。

士官学校に入学して以降、彼女は何かに取り憑かれたかのように努力を怠らなかつ

た。

毎夜毎夜訓練場で武術の稽古に励み、勉学を叩きこむ時間すらも捻出し……おそらく、睡眠の時間など二、三日に数時間といった具合だろう。とにかく彼女は異常だった」「ほう……凄まじいな。ということとは、なるほど。その気性からして、彼女もヴァルゼライド閣下に焦がれて軍人を目指したのか」

同志が増えるのは喜ばしいことだ、と頬を緩めると、臙は若干苦々しい表情を浮かべつつも、俺の言葉に首を横に振った。

「いや、そういうわけではないらしい。彼女には、光狂い特有の熱量が欠片も感じないんだよ。ヴァルゼライドを特別慕っていたということもないらしい。何らかの使命感に突き動かされて研磨していることは確かなのだが……いや、あるいは彼女の経歴に関係があるのかもしれないが、まあその辺に関しては私もよく分らん。探る気もない」

嘆息する臙に対し、並べられた言葉の数々に俺は驚いていた。

努力を好む気性からつつきりヴァルゼライド閣下の生前の武勇に憧れ、その足跡を辿りたいがために軍人を目指したのかと思っていたが……そうではないらしい。

俺も長年軍人をやらせてもらっているが、その手のタイプの新兵は珍しいなど感じた。

軍人の中で常軌を逸した努力を大いに好む傾向にあるのは、大抵ヴァルゼライド閣下



に尊敬の念を抱き、あの人のようになりたいと憧れた者達だ。

特にヴァルゼライド閣下に憧れているわけではないというのに、それほどまでに努力を好むとは……

とするならば、彼女を突き動かす原動力は何なのだろうかと俄然興味が湧いてきたが、今はそれは置いておくことにする。

そして再び、臍が続きを口にした。

「そして何より……エスベラント  
アステリズム星辰奏者としてこれは外せないだろう」

「……なるほど。星辰光か」

「ああ。軍人として優秀……そして努力家で本人は至つて真面目で謙虚な姿勢……これだけならば私も流石に副隊長に即座に推薦したりはせんよ。

彼女の星辰光、非常に強力だ。能力の資質だけで言えば、我々部隊長クラスともタメを張れるレベルだろう」

「そんなにも強力なのか？ それは素晴らしい、とんだダイヤの原石を発掘できたじゃないか」

「まあ、反動値が高いのが可哀想ではあるがな……それに、うら若き乙女にとつてあの能力はあまりにも……いや、やめておこう。彼女の能力に関しても資料に記載してあるか

ら、そちらに目を通しておいでくれ。

……と、いうわけだ。私が推薦した理由が、少しは分かってくれたか？」

「ああ。要は、すべてが揃っているということだな。総合力に非常に長けている。

しかもまだ若いみたいだし、伸びしろも十分だ。年中人手不足の帝国にとって、これほどまでに優秀な人材なら、下手に一からスタートさせるのではなく、上位階級からスタートを切った方が本人もモチベーションが上がるだろう。

……そこで、だ。今少しだけ触れたが、ここで第二の疑問に繋がってくる。

……何故彼女を、北部に？ これほどまで優秀なら、それこそ天秤や東部に配属させるべきじゃないのか？ 事実上、北部の制圧作戦が起動することはもうないだろう。

蛇遣い座の大虐殺が起こったあの日、魔弓人馬は壊滅したんだからな」

そう。八年前に起きた惨劇、蛇遣い座の大虐殺。あの日、黄道十二星座部隊が一角、第九北部制圧部隊・魔弓人馬は事実上壊滅した。

部隊長率いる鋼の使徒たちは、帝国の未来を守らんと、暴走する二体の災禍の魔星に挑み、そして、その悉くを打ち砕かれたのだった。

再編成することも無論不可能ではなかったが、失った人材は何も魔弓人馬だけではない。い。

すべての十二部隊から殉職者を多数出し……あの天秤の精鋭たちでさえ、半壊に追い

込まれたのだ。

となれば、当時北部への制圧が距離の關係で頓挫していた魔弓人馬の再編成が後回しにされるのは道理であり……しかも、部隊はほぼ全壊だ。

こうして、魔弓人馬は事実上、瞬庄山羊に吸収、合併することと相成った。

その後、瞬庄山羊の隊長は引き続き俺が担当し、魔弓人馬の隊長は俺と隴の二人で兼任するということで落ち着いたのだった。

だからこそ俺の疑問は最もだろう。言ってしまったえば、北部が現在できるのは治安維持と統治、駐屯部隊の範囲に収まっている。

その治安に関しても、至つて良好だ。ここ数年、それほど大きな事件は起きていない。カンタベリー付近ということもあり、日本の遺物が見つかった日には奴さんとバチバチする羽目になるだろうから無論油断などできはしないが、北部に配属させるよりも常に最前線たる東部や、特務部隊の裁剣天秤に所属させた方が帝国の益になると思ったのだが……

「阿呆。どう考えても今一番人手が足りないのは北部だろうが。

天秤には私とサヤ、そして東部にはギルベルトとヴァネッサがいるが……北部の隊長格はお前だけだろう。むしろ今までよく一人で統治してくれていたよ。感謝の念が尽きないと同時に、負担を一身に背負わせてしまいすまなかつた」

「何言ってるんだよ、それこそ気にするな。それに、隊長格が一人って言ったが、臚。お前だつて頻繁に助力してくれたじゃないか。」

それには優秀な部下たちがいたからな。誤魔化し誤魔化し、なんとかなつただけさ。俺一人で背負つたわけじゃ断じてないし、俺一人で成し遂げたことでもない。すべては俺に力を貸してくれたみんなのおかげさ。俺など名ばかりの隊長だよ、本当に非力で申し訳ない」

「……前から言っているが、お前は他者ばかりでなく自分にもつと目を向けろ。じゃなければ早死にするぞ、本当に」

「何、俺ごときが逝去しようが帝国にとつて大した痛手にはならんだろう。何せ俺のほかにも優秀な人材をごまんを抱えているのがアドラーだから……臚にハーヴェス、ヴィクトリア……ジェイスだっている。これだけ傑物揃いなことから、帝国の未来は安泰だ」

「その中の一人にお前も数えられているという自覚を持って、馬鹿者」  
「分かっている。だからといって簡単に死ぬようなへまはしないさ。」

「……しかし、本当にいいのか？ やはり今からでも天秤や東部に——」

「ええい、クドいぞこの優男！ お前は私の認める数少ない人格者の一人だがその他者ばかりを氣遣う神経をもう少し是正しろッ！ たまには我儘の一つも言えというん

だッ」

俺が渋っていると、痺れを切らした臃が左目を見開きながら怒号を飛ばしてきた。

おお、何もそこまで怒らなくても。

ていうか仲間を気遣うな、などこの俺にできるはずがないだろう。

アドラーの守るべき民、そして仲間には優しく……というのが、ロバーツ家の家訓なのだから。

「まあ、そうだな。臃がそこまで気を遣ってくれるなら無碍にしては男が廃るというもの。

では、ありがたくその提案を受け入れさせてもらおう。

……すまん、臃。お前にはいつも恩を貰ってばかりだ。お前こそ間違いなく、帝国が誇る最高のアマツだよ」

「……だから……ああ、もう、いい。きつと何を言っても馬の耳に念仏だろうしな。

……ああ、それともう一つ。ウォーライラに関してなんだが……」

「ああ、何だ？」

「……………いや」

と、そこで。臃にしては珍しく歯切れの悪い曖昧な言葉も吐いた。

何かを言おうとしたのは間違いないのだろうが、その言わんとしたことには自信がない

のか、目線が上の空を泳いでいる。

「どうした、臆？ 伝えることや気になることがあるなら何でも言ってくれ。お前の言うことだ、よつぽどのことでなければ俺は無償で信じるとも。言ってみろ、戦友」

「……ああ。ウォーライラなんだが……何かに恐れているように感じるんだ。

いや、あるいは……何かから、逃げようとしているのか……

そのために、あれほどまで必死に努力してきたのだとすると、それも納得できるが……」

「恐れている？ ……そして、逃げようとしている？ その『何か』というのは、推測できないのか？」

「……すまない、やはり忘れてくれ。変なことを言ったな。

とにかく彼女は優秀でとてもいい子だ。きつとお前の右腕として献身してくれるだろうさ」

「……そうか、分かった。ひとまず頭の片隅に置いておくでしょう。

改めて臆、何から何まで気を遣ってくれてすまないな。いくら感謝しても尽きんよ」  
「礼はもういい、耳にタコができるほど聞いた。

それよりも、彼女は優秀な人材だ。くれぐれもお前のヴァルゼライド語りでドン引きさせて、早々に異動願いを出されないように気を付けるんだな」

「まさか。俺は自分の価値観を他人に押し付けるような真似はせんよ。まあ、戦友達の自慢話なら無限に語れるがな」

「だからそれをやめろと……ああ、もういい。とりあえず可愛がつてやれ。彼女をよろしくな」

鬱陶しい物を払うように手をひらひらと振りながら去っていく臙を尻目に、俺は資料に改めて目を通しながら、このウォーライラという少女と相見える日を楽しみにしていた。

思えば、俺が瞬圧山羊の隊長に就任してから、副官が就くというのは初めての経験であつた。

どう接すればいいのだろうかと迷つたのも一瞬のこと、何、いつも通りだ。

上官や部下といった普遍的な枠に捉われず、俺らしくフラットに、家族のように接すればいい。

客観視してみると、それは軍人的にどうなのだというごもつともな突っ込みが心の中のもう一人の俺から飛んでくるが……まあ別にいいだろう。

瞬圧山羊は、傲然と言いのけてしまえば隊長おれが率いる部隊だ。であれば部隊のポリシーは隊長たる俺が決めさせてもらう。

何より瞬圧山羊に所属する部下のみんな……いや、もつと言えばアドラー軍人に属するすべての愛しい戦士たちには、常に笑顔でいてもらいたいというのが、この俺の願いだ。

アドラーの軍人であることを心から誇ってもらいたいし、アドラーの軍人でよかつたと心の底から感じてほしい。

軍人らしからぬ甘ったれた願いであるという自覚はあるが、無論それだけで終わるつもりは毛頭ない。

軍人として愛する母国を守るという使命も一瞬たりとて忘れず、日々研磨し、帝国の盾となる。自身の掲げる願いと並列して、己が仕事も貫き通すのだ。

それが、アルヴェイン・ロバーツが掲げる勝利の形。そう、思っていたはずなのだが……「……たまに感じてしまう、この空虚さは一体何だというのだ……う！」

自分の胸に不定期に飛来する謎の浮遊感に今日も蓋をして……そして、俺は運命の日を迎えたのだった。

…

…

…



そして時は元に戻る。

隊長室の椅子に腰かけている俺に一礼したウォーライラの表情は硬く強張っており、少し離れた距離からでも緊張しているのが見て取れた。

まあ、無理もないだろう。配属初っ端から副隊長に就任されたうえ、挨拶しに来た隊長がこんなにも強面のおっさんなのだから。むしろよく涙の一粒も浮かべていないと彼女の根気強さを褒めてやりたいくらいである。

昔から自身の顔面のいかつきには自覚があつたし何とかならないものかと改善しようとはしているのだが、やはり、生まれ持った顔のパーツを改造することがそう簡単にできるはずもなく……

恐怖を感じてしまう者には悪いな、とは思いつつ結局この現状に甘んじてしまっている自分がいる。

その被害者の一人に、ウォーライラもどうやら数えられてしまったようだ。

よく観察してみれば、肩もプルプルと小鹿のように震えている。

臙に太鼓判を押されていたくらいだからどんな冷徹な傑物が来るのかと思っていたが——どうやら内面は普通に年頃の女の子らしい。

そうだよな。まだ若い年頃の女の子が、右も左も分からない軍人なんかになってみ

て、初日に上官に会いに来てみたら俺おれみたいなのなののがいたら普通にビビるよなあ。  
 ならばこそ。変な遠慮はいらないだろうと、俺はいつも通りの屈託のない笑みを浮かべ  
 て――

「――固いぞ、ウォーライラ。これからは隊長副隊長の間柄だ、家族みたいにくだけて付  
 き合おうや」

我ながらなんとも力の抜けた締まらない声色で言いながら、席を立つてウォーライラ  
 に握手を求めた。

しばし俺の顔と差し出した右手を反復に見返しながらキョトンとする副隊長ウォーライラ。

しかし視線が交差した数秒。恐れるように彼女もまたこちらへ両手を差し伸べてき  
 て……

「――自己紹介が遅れたな。俺はアルヴィン・ロバーツ。未熟な身ではあるが、第十北部  
 駐屯部隊・瞬カブ庄山羊リコの隊長の任を拝命している。

以降、よろしく頼むぞ、ウォーライラ」

「……はい。よろしくお願ひします。ロバーツ隊長」

ウォーライラは儚はななげに薄く微笑み、こちらの握手に応えてくれたのだった。

彼女は軍人に向いていないのかもしれない。

そもそも、彼女は軍人になりたくてなったわけではないのかもしれない。

何か事情があり、よんどころな 拠無き理由によつて軍門を叩いたのかもしれない。

俺が軍人であることを至上の幸せと感じるように、彼女の幸せもまた、ここではないどこかに存在しているのかもしれない。

それでも構わない。これもまた、彼女の選んだ道だ。彼女が軍隊を去る日が来ても、その時はその時だ。

ならばせめてその日が来るまで。いや、仮に来なかつたとしても。

リディア・ウォーライラというアドラーの一粒の宝物にとつて、こ瞬こ圧山羊が少しでも居心地のいい場所となるべく、俺も努力していかねばならないだろう。

その為の努力を、一瞬たりとて怠けないようにするために。ウォーライラの瞳を深く見つめながら、俺は決意を強く固めた。

斯くして、ウォーライラと二人三脚の日々が、北部の地で静かに幕を開けたのだった。

# Chapter XIII 重ねた時間を想いに変えて ／Memories

「す、すみません、ロバーツ隊長。先日頼まれていた民間人向けの避難地図なんですが、二カ所ほどミスが見つかりまして……申し訳ないです、現地調査まで付き合っていただいたのに、このような体たらく……」

眉間に皺を刻んだウォーライラは、隊長室に入室してくると同時に洗面で俺に深く頭を下げてきた。

どうやら作成を頼んでいた資料に誤りがあったらしい。

まあ配属してから初の仕事だったわけだし、ミスをするのは仕方ないと思う。

極めて優秀だと聞いていたからこのようなケアレスミスをしてしまうのは意外ではあったが、やはり初の軍人業……しかも一部隊の副隊長を仰せつかっているのだから緊張しているのだろう。

そこまで気にする必要もないだろうに、ウォーライラは律義に己の失態を猛省し、俺なんかに頭を下げている。

とても真面目でいい子なのは分かったが、それでももう少し肩の力を抜いてほしいと

は思った。

きつと隊長である俺を畏怖の対象として見ているからなのだろうが、自分のような大したことのない男など別に恭しく扱う必要なんかないと考えている。

だから俺はあくまでも微笑を浮かべ、ウォーライラに頭を上げるように言葉を掛けた。

「気にするなウォーライラ。配属されて初の仕事だったんだ、そりゃあミスの一つや二つあつて当然だ。

部下のミスをフォローするのも上官の務めだ、一緒に修正しよう。一人では骨が折れるだろう、資料、貸してみろ」

「え、そ、そんないけません口バーツ隊長。これは私の過失ですから……それに隊長にもお仕事が」

「部下へのフォローも上官の務めつて言つたらう？ ちよつと来てみる、効率のいい資料作成のやり方を教えよう。こういうの、士官学校じゃ習わなかつたら」

余計なお世話かなと思ひながら俺が自分なりの資料作成のコツを享受すると、ウォーライラは真剣な表情でそれを食い入るように聞き入った。

……こんなこと、聞き流す程度でいいのに、本当に真面目というか、マメな子なんだなと感心してしまう。

初めこそ緊張やプレッシャーで細かいミスを連発していたウオーライラだったが、それでもやはり人は慣れていくもので。

彼女が配属されて二週間経った頃には、ウオーライラは一切のミスをする事がない、鋼鉄の女官として仕上がっていた。

俺への馬鹿丁寧な対応も多少軟化したように思う……多分。

そして配属から一か月後のある日のこと。

軍舎の誰も寝静まったであろう丑三つ時。

星辰光の鍛錬を行うため訓練場へ向かった俺は、思わぬ先客に驚かされることとなる。

「……ウオーライラ」

そう、ウオーライラが鍛錬をしていたのだ。

誰もが寝静まっているであろうこんな時間に研鑽を積むなど俺くらいしかないであろうと思っていたのに。

彼女は懸命に。どこまでも真摯に。己が大アダマンタイト剣を流麗なびに靡かせていた。

動きに目を見張る。

美しい。とても洗練されている。この若さでこの実力、一体どれほどの時間を剣の稽古に注ぎ込んだというのだろう。

そういえば臍が口にしていたな。取り憑かれたように訓練していたと。

何が彼女の原動力となつて居るのかはこの段階では一切分からなかったが、それでも俺はウォーライラの健気に頑張る姿に目を奪われた。

なんて輝かしいのだろう。なんて美しいのだろう。

確かに総統閣下に焦がれた者達特有の光の熱量は持ち合わせていないようだが、それでも彼女が自分の望む明日の為に剣を振るつて居ることは、傍目からでも伝わった。

そう、この子には己が掲げる正義の形があるのだ。

それを成すために、こうして必死に努力をしている。目指す未来がどんな形であれ、それを実現させるためにここまで心血注げるといふのは否応なしに素晴らしいというもの。

クールだと思つていたウォーライラが見せた唐突な熱量ギキツプに、俺はしばしの間銅像のように呆然とし彼女の剣捌きを見つめていた。

「……隊長？」

そしてやがて、俺に気づいたウォーライラは、驚愕の表情を浮かべていた。

まさかこの時間に人が来るとは思つていなかったのだろう。ああ、俺もそう思つていたよ、お互い様だな。

なんて心の中で軽口を叩きながら、玉の汗を浮かべるウォーライラに俺は握つていた

タオルを手渡した。

「お疲れ、ウオーライラ。こんな時間に鍛錬か？ 凄いな、パツシヨン溢れまくりじやないか。感心するが無理はするなよ、休養も大事な訓練の一つなんだからな」

「あ、すみません、ありがとうございます……でも、平気です。士官学校時代もこんな感じでしたから、無理はしてません。むしろ日課なので、やらないと不安で」

ウオーライラは気まずげに目をそらしながら頬を伝う汗をタオルで拭いた。

まるで悪戯が見つかった子供のような表情だ。そんな後ろめたいことをしていたわけでもあるまいし、そんな顔をするこたないと思うんだが。

「それにほら、私つてその、隊長と違って凡人ですから。人以上に努力しないと、皆さんに迷惑をかけてしまうので。これくらいしなないと……割りに合わないと言いますか」

ウオーライラは自嘲気味に、歯切れ悪くそう言った。

「おいおい待てよ何だその自己評価は。凡人つてお前、飛び級で少佐階級に抜擢された奴が言つていい台詞じゃないぞ。」

謙遜も過ぎればなんとやらだが、様子を見るに本気でそう思っているらしい。

……ああ、この子は、自分のことが嫌いなんだな。

理由はまったく読めないが、これは相当根深いものだ。俺は看破していた。

どうにかしてこの自己嫌悪癖を直してあげたい、もつと胸を張れと言つてやりたいん



だが、そう簡単に踏み込んでいいものでもないだろう。

俺がここで「包み隠さず全部話せ」と言ったらそれこそ職権乱用、パワハラだ。そんなことをしたら俺は俺自身を許せなくなる。ポリシーに反する。

だから訊ねるにしてももう少し時間をかけてから……ベストなのはこの子が自分から吐露してくれることだが、性格的に難しいかもな、と考えながら……俺は、今この時思い返せば最悪な一言を口にしてしまったのだった。

「そうだ、ウォーライラ。これから星辰光の訓練をしようと思っていたんだが、よければ付き合ってくれないか。お前の星辰光も資料では確認したが、現物を見たことはなかったからな」

「……え」

「……ああ、すまん。嫌だったか？ 確かにお前の星辰光は反動値が高いからな、訓練とはいえ使用は憚られるか」

発言したあとに俺は気づく。そうだ、ウォーライラの星は強力だが如何せん反動が実際強いものだったと。

基準値：D

発動値：A

収束性 : A

拡散性 : D

操縦性 : A A

付属性 : B

維持性 : C

干渉性 : E

資料によれば、彼女の星の力は収束性と操縦性に重きを置いた汎用性の高いものだった。一度その強力な星光と手合わせしたいと思ったのだが、反動がきつい以上無理は言えないな、とあきらめかけたその瞬間だった。

「……………いえ、大丈夫……………です。隊長の願いとあれば、はい」

その時、ウォーライラの表情に影が差していたことには気づいていたはずなのに。

どうして俺はあの時、自分を止めなかったのだろうか。

何、少し付き合ってもらっただけだから大丈夫だ、身体に負担がかからないところでキリよく切り上げる……………とでも考えていたのだろうか。

間抜けが。少しはウォーライラの気持ちを汲めと、過去の自分をぶん殴ってやりた  
い。

俺の星は反動値が低いゆえに、反動値が高い能力を持つ者の苦痛は体感したことがな

い。

だからウォーライラの自身の能力への嫌悪をまったく理解していなかったのが俺の失態の原因であり……いいや、そもそもそれ以前に。

「——そこまでだ、ウォーライラッ！ 星を解除しろ、今すぐにッ！」

俺は己が発動体アタマシタを投げ捨てて、血反吐をぶちまけながら肩で息をしているウォーライラへと駆けていた。

吐血はしているがそこまでの出血量ではないため命への支障はないだろうが、内臓系にダメージを負っているのは事実。

反動値以前の問題として、あんな能力、構造上身体内部へダメージが掛からない方がおかしいと言えた。

……甘く見ていた。ウォーライラの星がここまで強力で、且つおぞましいものだったとは。

いや、使用するのが俺やジェイスのような男ならばよかっただろう。

むしろ俺たちの性質からするに、はしやぎながらこの能力を使用していたかもしれないが……年若き乙女にとってこの能力はあんまりだ。

反動値の高さもそうだが、何よりこの能力は淑女が使うにはあまりにも激烈すぎる。

臆が口にしていた通り俺たち隊長格の星辰奏者に匹敵する能力ポテンシャルなのは疑いようもないが、これはあまりにも……

「……すまん、ウオーライラ、迂闊だった。お前の能力がこれほどまでに苛烈なものだとは……しかし、責めるわけではないが、断つてくれてよかつたんだぞ？」

模擬戦程度でこの能力を使うのは嫌だつたらう。どうして断らなかつた？」

ウオーライラを怖がらせないために、なるべく優しく問いかける。

するとウオーライラは、袖で血を拭いながら、乱れる呼吸を整えていつもの自嘲気味な様子で呟いた。

「……隊長の、頼みでしたから……部下がそれを無碍にするわけにはいかないでしょう」

「……馬鹿野郎」

ウオーライラに、そして何より馬鹿な頼みをしてしまった自分自身にそう叱咤して、俺は彼女を背中におぶつた。

狼狽する息遣いが聴こえてきたが、何だ、そんな恐れ多いことされる資格自分にはないと思っているのか？ 馬鹿かお前は本当に。

「ウオーライラ。俺を隊長と思うな。瞬<sup>カブリコン</sup>圧山羊のポリシーは、隊員全員家族、だ。

形式上確かに俺はお前の上官だが、どうでもいいんだよそんなこと。遠慮するな、讓

歩するな、言いたいことがあるなら包み隠さず伝えてくれ。

俺はそれらを無碍にしない。一つ一つ真摯に向き合うことをここに誓おう。

俺が間違った行いをしたなら、臆することなく俺のケツを蹴り上げろ。それも部下のお前の仕事だ。イエスマンは美德じゃないぞ、ウォーライラ」

俺の本音をぶつけると、ウォーライラは驚いたような表情を浮かべていた。

俺のような上位階級に就いている人間が言うセリフとは思えない、みたいな顔をしてやがる。

ああ、まあ確かに一昔前の血統派のクソ上官どもなら血も涙もない冷徹な言葉を吐いていただろうさ。

だが悪いが俺はそのような屑たちとは違うんだよ。至らぬ身ではあると自覚はあるが、魂は腐っちゃいないんだ。

そんなザマに堕ちたなら、俺はもう総統閣下に二度と顔向けができなくなるからな。いつまでもアドラーが誇る、光の軍人でありたいんだ。

そしてそんな俺の言葉を受けたウォーライラはしばし沈黙を守っていたが、やがて控えめに口を開いて。

「……分かりました、ロバーツ隊長。今後はその……もう少し、遠慮なく物言いできるよ

うに精進します」

そんな堅苦しいことを言ったのだった。

「精進する必要なんてないんだよ、肩の力抜け肩の力を……ていうかお前滅茶苦茶軽いな。ちゃんと飯食っているのか？」

「た、食べてますよ。余計なお世話ですから」

「おお、やればできるなウオーライラ！　そうそうそんな感じだよ」

「……あつ、す、すみません」

「何謝ってんだよ。いいんだよそれで。ていうか、そっちの方が俺もやりやすいし、嬉しい。お前も早く俺の家族になろうぜ、ウオーライラ」

「……それ、聞く人によってはかなり誤解を招きますよ、隊長」

ウオーライラに星を使わせたのは大きな失敗だったが、思えばこれ以降ウオーライラとの距離感がグツと縮まったような気がする。

決して気は許されていないのだろうが、時が重なるにつれ遠慮ない物言いが増えてきた。

俺を見つめる視線も、徐々に畏怖というものから呆れや面倒だという感情に変わっていった。

好かれてもいないんだろうが、嫌われてもいないだろうという自信もあった。

何よりも、忖度という壁が取っ払われたのは俺として非常に嬉しかった。

嬉しかった。そう、嬉しかったんだよウオーライラ。

お前と共に駆け抜けた一年と半年は、俺にとって得難い思い出と輝きを与えてくれた。

配属された日よりも、仕事をこなすスピードが上がったな。

要領がよくなったな。経験も積んだな。俺のあらしい方が上手くなったな。

教え方もサマになってきたな。部下に慕われるようになったな。笑う回数が、ほんのちよつと増えたな。

お前の何かに怯えている表情が、ほんのちよつとした瞬間に解れていくのが嬉しかった。

お前に、生きることとはもつと簡単でいいんだと教えてやりたかったんだ。

そして、お前にとってこの瞬圧山羊が……この部隊が、居心地のいい場所となるようお願い、そして努力してきたつもりであったが。

ああ、本当にすまない。俺はまた大きな失敗をしてしまったんだな。

あの模擬戦以来、もうウオーライラを傷つけるような真似はしないと誓ったはずなのに、まさかずつとお前を苦しめていたなんて。

すまない、本当にすまない。

また俺の傲慢でお前を傷つけてしまった。

臆が言っていた、ウオーライラが何かに怯え、逃げようとしている風に見えたということ……今なら確信を持って断言できるかも。

ウオーライラ。お前は、自分の身を襲う不幸じしゅくから逃れようとしていたんだ。痛みを避けようとしていたんだな。

初めて対面した時から、お前が軍人に向いていないことを俺は看破していたはずなのに。

俺は、どうすればよかったのだろうか……などと軟弱なことを言うつもりはない。

決まっているだろう。もつと早くにウオーライラと腹を割って話せばよかったんだ。

彼女の懐に深く踏み込むのは無礼だろうと思つてずっとなあなあで過ごしていたが、それがそもそも間違いだった。

何が居心地のいい場所、だ。彼女にとっての地獄に変えて如何とするというんだ。

ああ、お前の怒りは最もだ。いくらでも俺を罵倒してくれて構わない。それで気が晴れるというなら、幾らでも俺にぶつけてきてくれ。

だから、これが俺の、隊長の最後の我儘だと思つて聞いてくれ。

もしかしたら、またお前を傷つけるかもしれない。真実、俺はお前に嫌われるかもし



れない。殺したいと思うほど呪わしく思うかもしれない。

それでもいい、構わないんだよそんなこと。

俺がどうなるうとも、これだけは、絶対に譲れないんだよウォーライラ。

「俺は、お前を、救いたい」

地獄の渦中からその身を救い出し、太陽が燦々と照る陽だまりへ連れ出してやりたいんだ。

その為には、ウォーライラの心に住まう地獄の悪魔どもを殲滅する必要がある。

ゆえに俺は諦めない。負けられないから、己の限界を次々に突破しながら俺は光へ突き進む。

ああ、そうだよ。俺は第十北部駐屯部隊・瞬<sup>カブリ</sup>山羊隊長、アルヴィン・ロバーツ。

隊員全員の父であり、アドラーの民すべてに笑顔を齎したいと思っている、至らない一人の軍人だ。

そうだ。アドラーに笑顔を齎すのだろうか？ 閣下が守り抜きたいと願ったこの国を、

幸福で満たしたいのだろうか？

ならば部下の笑顔一つ守れなくては、その願いが成就する時など永劫訪れやしないだろう。

何より、ウォーライラに幸せになってほしい、笑顔を浮かべてほしいという俺の願い

に、一片の嘘偽りなどないのだから。この想いを、信念を、貫き通すために——！  
「俺は決して、お前の幸福を諦めない。勝つのは俺だ——！」

そして、ウォーライラの輝く未来を取り戻すために。

激憤の涙を迸らせながら猛撃を続ける彼女へと、俺は再び突貫していくのであった。

## Chapter XIV 私の運命（えいゆう）／Not alone

「アアアアアアア——ッ!!」

「おおおおおオオオツ——!!」

斬る。斬る。斬り結ぶ。ただひたすらに、愚直なまでに命へ刃を振りかぶる。

奔る斬光。震撼する雄叫び。高らかに響き合う斬撃の音色は、まるで悪魔の叫喚の如き凄絶さを内包していた。

リディアとアルヴェインの決闘の幕が上がり既に三十分近く経過していたが、依然として勝負の天秤は五分五分であった。

否、正確には覚醒を二度発動させたアルヴェインが若干優勢ではあるのだが、未だに決定打を打つことができない。

それは何故か？ 単純な話だ——リディアの秘めていた激情が、あまりにも規格外だったのである。

それがただの感情の発露で終わっていたならばよかつただろう。如何に怒り狂って猛撃を浴びせたとして、所詮それはただの“感情”に過ぎない。然るべき力に変換できない

ければ、無用の長物であるのだが――

驚くべきことにリディアは、それらの激情を薄片はくへんすら残さずに己が力へと変換していた。

刃に乗せる臂力も。刃を薙ぐ速度も。すべてが覚醒したアルヴィンと遜色ない。どころか、こと剣の技術力だけに目を向ければ、アルヴィンのそれを遥かに突き放していた。

しかもリディアは嚇怒のあまり、これが模擬戦だということを完全に頭の中から放逐していた。

よって、今まさにリディアは真実、アルヴィンを殺害しようとしている。そう、殺す気なのだ。アルヴィンの輝く命の欠片を木端微塵に撃砕し、勝利を手にすると吼えている。

ならばもはや手が付けられないのは言わずもがな。アルヴィンも本気のリディアを前に手加減をできる余裕など完璧に消失してしまったため、何度も己が限界をぶち破りながらリディアの殺人技巧を捌いているのだった。

「……不謹慎だがウオーライラ。俺は今、心の底から嬉しいよ。俺に想いの丈を晒して、こうして全力をぶつけてきてくれている現実が、心の底から嬉しい。

だからお前の想い、一片たりとも無駄にしない！ 俺が残らず地獄から掬い上げる！  
勝つのは俺だ——！」

「黙れッ！ 何で、何で隊長はこの期に及んで私を助けようとしてくれるんですか！

私が悪いって弾効しないんですかッ！ おかしいでしょう、常識的に考えて……！」

早く私を否定しろッ！ 私を屑だと罵れよおオオッ！」

ただ真つすぐに光を指し突進を続けるアルヴィンに、過去の闇をどこまでも引きずり前進をしないリディア。

まるで水と油のように交わることもない二人は、しかし今この刹那だけは互いの想いを真正面から打ち付けながら心の底から殺し合う。

こうして互いの心情を余すことなくぶちまけた今でも、リディアの心は複雑怪奇、曖昧模糊に揺れ、惑い、濁っていた。

今自分が体感している地獄の原因が母との過去に縛られていることなのは理解した。分かったとも。

であるならばなぜ私はロバーツ隊長に助けを求め、それなのに手を差し伸べられたら拒絶し、今こうして彼を殺そうとしているのか？ 分からない、分からない——

すべてが矛盾し、中途半端に曇っている。何故こうなっているのか、一切合切理解できないとリディアは泣きそうなほどに、自身の矛盾だらけの心情に嫌気がさしていた。

しかし、それも無理からぬことだろう。

まず大前提として、リディアはアルヴィン・ロバーツという男を一人の人間として好んでいる。異性としてではない。あくまで一人の尊敬する上司として、仲間として……あるいは、友人として。

この優しさと高潔さの塊であるアルヴィン・ロバーツという男を、心の底から慕っているのだ。

無論、本人はそんなことになど気づいていない。リディアの中で信頼と思慕を寄せることができる人物は、母だけであると結論付けている。

そう、リディアはこの二十数年の人生において、母以外に心を開くことなく孤独に生きてきたのだ。

母ほどに自分に優しくしてくれて、自分のことを想ってくれる人などもうこの世にはいないと思っていたから。結局人なんて自分が一番可愛いものだから、誰も信用しない方がいい。母との絆だけを胸にしまい、これからは独りで生きていこう……と誓っていたはずなのに。

奇しくもアドラー軍人となり、出会ってしまったのだ。

リディアの人生における最大級の規格外イレギュラーに。

彼はどこまでも私を案じてくれた。

彼はどこまでも私に優しかった。

彼はどこまで誇り高い人だった。

彼はどこまでも他人の為に尽くせる人だった……ほかにも、他にも、他にも。

アルヴィン・ロバーツという一人の軍人の魅力にまんまと魅了され、そして彼を好きになつていった。

だが、リディアは自分を塵屑だと思つている。

アルヴィンのように、誰かのために時間も割けない、血も流せない、他人の幸せを願うことなどでできやしない。

そんな自己中心的の鑑とも言える自分なんかと、こんな素敵な人が並び立つ資格などないと思つているのだ。

リディアはアルヴィンを好いている。尊敬している。

だが同時に、自分如きがこの人を好く資格も、好かれる資格もないと心の深奥で考えていたのだ。

ずっと軍人を辞めたいと言いつせなかつたのも、実のところそこが一番の理由だった。

無論絶対に容易なことではないし、まず何より辞めると言つたら十中八九弾劾されるだろうという恐怖もあつたのだが……

何よりリディアは、アルヴィンに嫌われることを恐れていた。軍を抜けると言い、お前など知らんと見限られるのを、自覚しないまま恐れていたのだ。

そしていざ弾劾されず、軍を抜きたいという意思を尊重されてブチぎれたのも、自分如きがアルヴィンに頭を下げさせてしまったことが許せないからゆえであった。

アルヴィンに受け入れられ、認められる度にリディアが激昂する原因は、すべてそこに繋がってくるのだ。

すべては、アルヴィンが好きだから。

だから、そんな好きな人に頭を下げさせている自分が許せない。

私は塵屑で、隊長は素敵な人で、同価値であるわけがない。

貴方のような立派な人に、私如きが認められる価値などないのだから。

好きなのに、自分には好く資格などないと思っている。

嫌われたくないのに、自分なんかを認めてくれる貴方が許せない。

まさに二律背反だろう。これでは板挟みもいいところだ。

よってリディアは今現在もこの二律背反の多重苦に苦悶の喘ぎを漏らしているのだ。

どうしたらいいのか、自分が何をすべきなのか、分からない、分からないと涙混じりの絶叫を響かせながら……



己が芯すら定まらず、どこまでも複雑に揺れ動いているリディアの心情とは真反対に、アルヴィンの決意は一切ぶれることなく一貫していた。

ただただ、この少女を救い、笑顔を齎したい。その一点に限られている。

裏表や打算など絶無。迷いや曇りなど一片もない濾過ろかされた感情は、轟々と燃え盛る烈火の様相を呈していた。

アルヴィン・ロバーツという男に、リディア・ウオーライラのような魂の脆弱性は皆無だった。ゆえに揺れず惑わず、違わない。

目の前で大事な部下が、仲間が、家族が、苦しんでいる。

ならば助けるのが部隊長……いや、部隊長だどうだなんてもはや関係ない。

これは、軍人おれの義務なのだ。苦悶に喘ぎ紛糾している者がいたら、助け救い出すのが俺たちの仕事。誇りだろう。

ましてや彼女は自身の直属の部下だ。こんなところで未来を閉じさせてやる気などない、お前の人生はこれからのだからと、アルヴィンはリディアの心と真つ向正面から対峙する。

その心を覆う闇をすべて、光で焼き尽くしてやるために……

「ぐツ……く、うううツ……！」

よってそれは必然として訪れた。

アルヴィンの覚醒が、ついにリディアの地力を完全に上回り始めたのだ。

それは道理だろう。半端にいつまでも揺れ続けている心と、一寸も芯がぶれず一貫した鋼の心。どちらが強固であるかなど、今更論ずるまでもなく。

勝利の福音は順当に、アルヴィンに鳴らされようとしていた。

「なんで……なんで……だって、全部私が悪いのに……私なんか、隊長に認められる資格なんてないのにイッ」

「違う、お前は何も悪くないんだよウォーライラ。当然だろう？ お前の人生、どこを見渡してもお前が悪い要素なんて何一つないとも。」

どう考えても、唯一の絶対悪はお前の父親だろうが。そして更に言うなら、そんな状況下でありながら助けてあげられなかった俺たち軍人の責任でもある。

だから違えるなウォーライラ！ お前に価値がないなどあり得ない！ お前が間違っているなどあり得ない！ お前はこんなにも理不尽な人生に抗い続け、ここまで生きてきた紛れもない勝者だ！ 胸を張れ、お前の旅路は輝いているんだよ、ウォーライラ！

「違う！ だって、私は……いつまでも過去に囚われている亡者なんだ！ もし私が隊長のように、迷うことなくまっすぐ前だけを向いて未来を歩ける強い人だったなら……」

こんな惨めで、空しい想いは抱えてない！ 過去の幻影に囚われて、いつまでも地獄に閉じ込められたりなんてしてない！」

「過去を想うことの何が悪い!? 己が足跡を辿り、振り返り、想いを寄せることができるのもまた人の強さだ！ 未来を目指して前進を選び続けるだけが強さじゃない！」

ヴァルゼライド閣下もかつてそうして、過去を切り捨て、未来だけを見据え進軍を続け……そして、轢殺した過去の逆襲によりその身を滅ぼした。

ウォーライラ。お前は半端に揺れる自分の心が何より許せないのかもしれないが……いいんだよ。

それが人間だ。強さだけを持っているのが立派なんじゃない。強さも弱さも持ち合わせて、受け入れてこそその“人間”なんだ。己を恥じるなウォーライラ。そろそろ、自分の弱さを受け入れて、許してやれ……！」

「——それでも私は、自分が許せないッ！ だって、だって……！」  
血を吐くような大音声だいかんじょうが迸った。

刹那、世界からすべての音が消え去り、時が停止したかのような静寂が訪れる。

それほどまでに、リディアの心からの叫びは、世界の中心でどこまでも透き通りながら透明に轟いた。

「私が無力な塵屑なせいで、お母さんは死んだんだから！」

「ツ……！　だから、それは違うんだ、違うんだよウォーライラ！　それは——」

そして一瞬。アルヴィンの攻勢が曇りを見せた。

リディアの言葉に反論することに意識を割いたからだだろう。

その僅かな間隙を見逃すほど、リディア・ウォーライラという一人の軍人が築き上げてきた闘争の瞳は濁っていかなかった。

この刹那こそ完全なる勝利への道筋。確勝を嗅ぎ分けた瞬圧山羊副隊長の剣先は、吸い込まれるようにアルヴィンの胴体へと奔り——

「——ツ…………」

その鍛え抜かれた鋼鉄の胸筋を両断した。

噴水のように噴き出る血飛沫。リディアの視界が、薔薇で埋め尽くされたかの如く真つ赤に染まっていく。

一閃した刃は心臓部には達してすらいなかったものの、筋繊維や胸骨を悠に裁断し、アルヴィンに致命のダメージを負わせていた。

甚大なる肉体の損傷。生命活動に支障をきたすほどの出血量。常識的に考えて……いや、常識的に考えなくても一目でわかる。致命傷だ。

そしてそんな致命傷を叩きこんだリディアはというと——

「——ツ」

重傷を負ったアルヴィン自身よりも、その光景に瞠目していた。

違う。違う。そんなつもりは無かったんだ。傷つけるつもりなんて……だってこれは模擬戦で。ましてやこんな重傷を負わせる気なんて微塵も……

そう。リディアは激昂のあまり気づいていなかった。自分がアルヴィンを殺すつもりで刃を振るっていたことに。

心の底ではそんなこと思っても願ってもいなかったのに、一時の感情に身を任せて、こんな現実を招いてしまった。

ああ、どこまで己は塵屑だと……リディアは咲き乱れる血花火の大輪を呆然と見ながら自嘲する。

もはや涙も枯れ果て流れてこない。

きつと、自分にそんな資格はないだろうから。

ただ、大好きな母と、誰よりも尊敬する自分の上官に、心からの謝意を籠めて……

「私なんか、生まれてきてごめんなさい」

そうすれば、母も命を落とさずに済んだし、隊長も傷つくことはなかったのだと、己が生誕に呪いの言葉を吐き捨てた。

もはや、生きるべき光が……見当たらない。

そうしてリディア・ウォーライラの人生は、永久に無間地獄に放逐されようかとした……その瞬間。

「——まだだ、ウォーライラ。俺はお前を諦めないッ!!」

約束された幸福を齎すために、光に燃え盛る決意の大咆哮が響き渡った。

闇に呑み込まれかけていたリディアは弾かれたように首を起こす。

そこには、胸部から多量の流血をし、更には盛大に吐血を繰り返しながらも、太陽の如く瞳を煌めかせ獰猛な笑みを浮かべる瞬圧山羊隊長の雄姿があった。

驚愕を遙かに通り越し、さすがのリディアもこれには苦笑を浮かべるしかない。

いいや、こうなることはきつとどこかで分かっていたのだろう。

そう。アルヴィン・ロバーツは、優しさに包まれただけではない……れっきとした英雄信者、光狂いの一人なのだ。

彼に諦めるという概念がない以上、最初から諦めているこちらに勝利の天秤が傾くなどという道理はない。順当に敗北するだけだ。

だって、こんな……いくら追い詰めても、致命のダメージを与えても、不屈の闘志で無限に立ち向かってくるのだから……

「反則でしょ、そんなの。勝てるわけじゃないですよ」

「ああ、俺の勝ちだなウォーライラ。それはそうとお前、アレだ——齒ア食いしばれッ  
！」

光に灼かれる笑顔から一転——アルヴィンは有らん限りの怒りを以てリディアの懐  
へと大股で踏み込んだ。

握りこまれる鋼の鉄拳。振りぬかれたと思つた次瞬、すでに固められた鋼鉄の拳は、  
リディアの腹部へと熱く突き刺さつていた。

「ゴッ、ふああア——!?!」

かつてない衝撃の波が腹部を中心に全身に伝播していく。

総身を揺るがす暴力の渦に踏ん張りが効かなくなつたりディアは後方へと大きく吹  
き飛び、そして、アルヴィンの勝利が絶対的に刻まれるのであった。

…

…

…

「ぐ、がはッ……ぐ、くふ……うう……!」

ロバーツ隊長に渾身籠めて殴られたどてっ腹を押さえながら、私は地に蹲り苦悶の吐  
息を溢していた。

痛い。熱い。息が詰まる。

全身を疾走する鈍痛の嵐に思わず泣き言を溢してしまいそうになるが、ロバーツ隊長が受けた大怪我と比較すれば、こんなもの屁でもないだろう。

……私は、敗北した。

今こうして無様に地へと這い蹲っているのが、何よりの証拠だった。

……分かつていた、こうなることは。

私なんかロバーツ隊長に勝てるわけないって。でも、それでロバーツ隊長の気が晴れるならと戦いに臨み……結局、八つ当たりのように己が内情をぶちまけ、勝手に憤激し、そして大怪我を負わせた。

なんたる屑の醜態だろう。もはやロバーツ隊長に合わせる顔がない。

私は未だに地に瞳を伏せたまま、顔を上げられないでいた。

いや、だがそれどころではない。

ロバーツ隊長は大怪我を負っているのだ。すぐに医務室へ……いや、この時間は恐らく担当医は就寝しているだろう。ならまず向かうべきは担当医の自室で……しかしなんて説明したものか、と私が思考回路をぐるぐる目まぐるしく大回転させていると、目の前で高らかに軍靴の音色が響いた。

肩が竦み、思わず悲鳴が漏れる。



顔を緩慢に上げると、そこには血塗れのロバーツ隊長が、儂げな笑みを浮かべていた。  
「ロバーツ隊長……」

立ち上がり、すぐに手当てを……と思った束の間。

私がアクションを起こすより早く、隊長は身を屈め私の視線に合わせてきたかと思うと……そのまま優しく、抱きしめてきた。

まるで陶器にでも触るかのような優しい手つきで。先の一撃とは打って変わって。いつもの優しさで私を包み込んで、そして。

「馬鹿野郎」

悪戯を叱る父のような、柔らかい声音で私を罵倒してきた。

……なんだ、これは。どういふことだと困惑する私に、隊長は更に言葉を続ける。

「生まれてきてごめんだ、なんて……そんな哀しい言葉を口にするな。そんな訳ないだろう」

「——ッ」

隊長の一言に息が詰まる。

小さく呟いた涙混じりのあの一言は、どうやら隊長にも聞こえていたらしい。

「……だって。事実じゃないですか。私が生まれなければ……お母さんが死ぬこともなかった。隊長が傷つくこともなかった……だから」

「ふざけるな。もう一度言ったらまた殴るぞ。いくらウオーライラでも、俺の自慢の部下をそれ以上愚弄する真似は許さない」

……それって同一人物ではないか、という突っ込みは、きつとしない方がいいのだろう。

だからといってその本人をぶん殴るといふ理不尽さが、光狂たいちよういらしいと思わず口角が歪に吊り上がった。もはや呆れて言葉が出てこない。

「そもそもお前の母君が亡くなったのは、その糞親父のせいだろう。断じてお前のせいであるものか。」

ああ、お前が悪いなんてことはあり得ないんだよ。お前は一切悪くない。

常識的に考えて、悪いのは全部お前の糞親父……いや、父親扱いされるのもウオーライラにとっては不快か。

……そう、その糞野郎のせいなんだよ。お前が気に病むことなんて、一切ないんだ」  
「……………それ、は……………」

確かに、それはその通りだった。

すべての諸悪の根源はあの糞つたれな父親のせいだ。あいつにすべて、私たちのすべてが壊された。元凶は間違いなくあいつだけど、それでも……

「それでも……………結局私は塵屑で……………何も悪くない隊長に八つ当たりして……………大怪我させ

て……」

「いいや、元はと言えばそんな屑を感知できず野放しにしてしまつていた俺たち軍人の責任でもある。本来はそのような悪党、俺たち軍人が裁いてしかるべきだったのだが……よつて、どのみちお前が気にすることじゃない。お前が俺に弾劾する権利もある。

気に病むなよウオーライラ。本当、お前そうやつて生真面目に考えすぎるところだけは入隊初日から変わつてないよなあ……」

微笑まし気に、まるで赤子をあやすように私の背中をよしよしと撫でてくる隊長。

気恥ずかしさを覚えるも不思議と嫌な気はまったくなくて……私は気づけば、隊長の血塗れの胸に自分の顔を押し付けていた。

熱い雫が、止めどなく溢れてくる。

「……隊長。それなら……私は……どうすればよかつたんでしょうか……」

私の幸せの象徴であるお母さんはもう、いなくて……でも私は幸せになりたくて……でも、どうやつたつて生きていくには地獄ばかりで……自分の心すら矛盾だらけで、理解ができない。分かりませんよ、隊長……私、どうしたら……」

嗚咽と共に、今まで封じ込めてきた弱音を余すことなく隊長へぶちまけていく。

もはや私の虚飾に塗れた心は決壊していた。

ただ私は、分からない、分からないと稚児のように泣き喚くだけの少女と化していた。

そう、何もわからない。どうしていいかも。何をするのが正解なのかも。

何も何もわからない。だから進みようがない。この先どうしたらいいのかという展望も分からない。

だって私の幸せはお母さんただ一つで、それを失ってしまったら、何を希望に生きていけばいいのかずつと分からなくて……だからこそ、私はずつと足掻いて、藻掻いて、血反吐を吐いてここまで進んできたけど……

もう、分からないよ隊長。

そんな、困惑必至の私の泣き言に、隊長は。

「決まってるだろう、ウォーライラ。どうしたらよかったのか……お前が、やるべきだったのはな——」

隊長は一際強く私の身体を抱きしめ、簡単なことだと告げるように——

「誰かに頼ることだったんだ。俺たちは独りでは生きていけない。困ったときに助けてくれと叫べるのが、人間の強さだ。弱さなんかじゃ断じてない。」

ウォーライラ。お前は独りに慣れすぎていたんだ。母君との絆を重んじたゆえの選択だったのだろうが……別に心を開け、信頼しろと言っているわけではないんだぞ？

お前はきつと母君以外の人間を心の底から信頼するということをしたくないのだから

う。それでも構わない。お前はただ、『助けてくれ』と叫ぶだけでよかったんだ。

そうしたらほら、お前の今日の前にいる大馬鹿とかが、あとは勝手に力添えするだけだからさ。

お前は独りなんかじゃない、ウォーライラ。だがそれでも……ここまで独りで、よく頑張りが続けたな。俺は、お前のその強さに敬意を表する」

「……………隊長……………う、あ……………」

——もはや、私は隊長の言葉の数々を否定する気になどなれなかった。

隊長の温かい言葉がただ嬉しくて。無防備に心に沁みこんできて。

心の闇を払うかの如く、ただ熱く爽やかな涙が、頬を伝って流れていく。

「ていうかお前、いつも肩肘張りすぎなんだよ。糞真面目過ぎるといふかなんというか……自分を自己中の塵屑とか言ってるワリにきちんところちの気持ち汲んで忖度したりさ……本当にいい子だよ、お前は。母君の教育の賜物だな。

でもな、ウォーライラ。生きることってのは、もう少し簡単なものでいいんだよ。少しくらい手を抜いて適当にやったって怒られはしないさ

だから。さあ、口に出してみる。お前の、本当の、ホンネ「ホントを」

「……………私、の。私の本音は……………」

ずっと心に閉じ込めてきた本当の本音。

自分が弱いなんて誰よりも分かっている。そんな自分が誰よりも嫌いで。

だからせめてお母さんとの絆と思えば死に抱えて守り抜こうと、独りでボロボロになりながらここまで歩いてきて。

擦り切れながら愚痴を垂れて。それでもどこにも幸せなんて転がってなくて。

もう何が何だか分からなくて。

自分の生きる意味さえ不透明になって。

その度に自分が嫌いになって。過去に押しつぶされそうになって。

いつの日か、本当に自分が吐き出したかった本音よわねすらも忘れて……

その忘却の彼方に追いやった想いを、今、この人に。

私の、英雄に。

震える唇を、きつく締めて。

お腹の奥に、ぎゅつと力を籠めて。

自分の心こゝろに、正直まことになって。

でも、流れる涙は、そのままに。

「隊長……私……もう、どうしたらいいか分からないから……だから……  
助けてくださいッ」

もう、小賢しいことを考えるのはやめだ。

私は本音をぶちまける。

私を地獄から救い出してほしい。そして、私の幸せを見つける手伝いをしてほしいと、心の底から打ち明けた。

なんで、どうして——そんな自問自答は、矛盾だらけの問答は、もはやどこにもありはしない。

私は、ロバーツ隊長が好きだ。

そして私は、この人になら自分の運命を託せるかもしれないと思った。

母以外に心を許すことがなかった私が、ついに己の運命と邂逅したのだ。

私はずっと、隊長のような……孤独の闇に溺死しかけているリディア・ウォーライラという独りぼっちの少女を救済してくれる、私だけの英雄を求めていた。

そう、助けてほしかったんだ。

もう一人じや行き詰まり、どうしようもなく、何をしたらいいのかも分からない闇の渦中。誰か私を太陽の下に連れ出して……と。

願いながらも、誰にも心を許すことができなくて。

でも、ロバーツ隊長は、そんな私の閉ざされていた心を強引に、けれどどこまでも優

しくブチ破つてきて……

そんな光に満ちた満面の笑みで、お前を助けたいなんて言われたら……

私……もう……我慢できないよ。

ねえ、お母さん……

「リディア」

その時、私は確かに、闇の中から澄んだ母の声を聴いた。

私が長くに渡り幽閉されていた地獄の最中、そこでハツとして振り返る。

そこには、ロバーツ隊長と同様、眩しすぎるくらいの優しく温かい笑みを浮かべた母がいて……

「ありがとう。行きなさい、貴女の幸せは、そこにあるわ」

私の背中を、とんと……優しく、押し出してくれた。

瞬間、地獄に差し込む陽の光。

涙に暮れる顔をそのままに、瞳を光へ見上げてみれば――



「——もちろんだ。お前の幸せを見つける手伝いを、俺にさせてくれ。一緒に考えていこう、ウォーライラ」

ようやく吐き出せた鉛のように重い万感の想いごと、私の運命は私のすべてを抱きしめてくれた。

そして——

「もう二度と、自分の生誕を呪うようなことは口にするなよ。」

俺はお前に出会えたことを心から感謝しているよ。

生まれてきてくれてありがとう、ウォーライラ」

——いつの日か母がくれた愛の言葉で、私の心を温めたのだった。

涙が溢れる。止まらない。

生まれたての赤子のように泣きじゃくる私を、隊長はいつまでも優しく温かく、その大きな身体で抱きしめてくれていた。

いつまでも……そう、いつまでも……

私の涙が枯れ果てるまで……いつまでも——

# Chapter XV 曇る心は重なつて／Cloud y hearts

隊長との決闘から一週間。私はいつになく平穏な日常を過ごしていた。

私のせいで大怪我を負ってしまった隊長であったが、エスベラント星辰奏者としての回復性能や光  
狂い特有の気合と根性のおかげによるものか、たったの数日で傷を完治させ、万全な状  
態へと快復したのであった。

その後、私と隊長は今後のことを話し合った。今後のこと、というのは無論、私が軍  
をやめたあとに関するのだ。

そもそも軍を抜かれるのかという疑問もあるが、その点に関しては隊長が幅を利か  
せてくれるらしいので大丈夫とのこと。仮に反発が出たとしても、必ずお前の未来は  
守つてやる、なんて優しすぎる言葉と共に、隊長は夜空の星々のような笑みを浮かべて  
いた。

ひとまず隊長からの提案としては、帝都に向かうのがいいだろうというものだった。

なんでも、帝都のとあるレストランのオーナーが隊長の元同僚らしく、ある程度は顔  
が利くとのこと、いざとなればそこで働けばいいということだ。

早速隊長がコンタクトを取ってくれたところ、その店のオーナー……ロデオンさんは、「丁度最近店が忙しくなってきたて人手が欲しいところだった。あまり多い給金は出してやれないがそれでもよければいつでも来てほしい」と快く私たちの願い出を了解してくれた。

……すべては順調だ。ロバーツ隊長の温かな支援により、私は地獄から抜け出し、己が幸せを掴む一歩手前まで来ている。

本当に私なんかを救ってくれたロバーツ隊長には尽きぬ恩を感じている……のではあるが。

「ウオーライラ少佐、考え事ですか？ 俺なんて片手間程度に捻じ伏せられるとは、上等ですよ、その余裕、完膚なきまでに叩き潰してやりますからッ！ そんな俺が勝った時にはおっぱい揉ませてください!!」

と、その時。

前方から小うるさく響く調子づいた声色が、物思いに耽っていた私の意識を強制的に現実へと引き戻す。

飛んできた声へと視線を向ければ、そこには悪戯つ子のような笑みを浮かべたアンドレくんがこちらへと剣先を振りかぶってきていた。

……確かに意識を余所に割いていた私はアンドレくんに対し失礼を働いたことにな

るだろうから、その点に関しての叱責は甘んじて受け入れるがだからといって何故それがイコールとして私の胸を揉むことに繋がるのだろうか。訳が分からない。下半身と脳みそが直結しているのだろうか？

できることならその直通回路をぶった切つてやりたいところだがきつとこの子の助平根性は死んでも治らないのだろうかなあ、と悟つた私は意識を戦いへと再集中し、そして。

「おお、おおお、うおおおおオオッ!?!」

アンドレくんの剣戟の一切を無力化し、反撃の刃を叩きこんでいた。

突然の一転攻勢に驚愕の表情を浮かべるアンドレくん。まさかこのまま自分は勝つてでも思ってしまったのだろうか？ぬか喜びさせてしまつてごめんなさい、私は確かに若輩の身だが、それでも君のようなお猿さんに負けて卑しい凌辱を受けてしまうほど人として終わつちやいないので。

守勢に入った彼に一切の攻めの隙を与えないため、私は間髪入れずに神速怒涛の勢いで剣突を繰り返す。

アンドレくんはなんとか対応しているものの、先までの下心全開な余裕は雲散霧消し、その表情には焦燥のみが浮き彫りになっていた。

「どうしましたアンドレくん、私の胸を揉むと息巻いていた余裕はどこにいきましたか

?

そんな調子じゃ私の胸を揉むどころか、触ることすらままなりませんよ。ほら、悔しければ反撃の一太刀でも浴びせてみたらどうですか。

ほら、ほらほらほらッ」

「ひ、ひいいいいッ!? ちょ、ウォーライラ少佐、すみませっ……! あ、謝りますからどうかお慈悲をおおッ……!」

「そんな、慈悲だなんて……つれないこと言わないでくださいよアンドレくん。せつかく私がちよつと本気になってあげようって言ってるんですから、最後まで付き合ってくださいッ!」

「ぎゃあああああ!! こ、殺されっ……誰か助けてくれええええっ!!」

阿呆か、自業自得だ。周りを見てみる、誰一人として貴方に同情していない……どころか皆一様に冷めた視線を向けていることに何故気付かない。

ここまで能天気が過ぎるのも才能と言えば才能なのだろうが、軍人としてはどうかと多々感じてしまうので、とりあえず今はお灸を据えておこう。何より皆もそれを強く望んでいるだろうから。

私の連撃の嵐に耐え切れずに尻もちをついたアンドレくんにはじり寄りながら、さて今度はどんな締め技を披露してやろうかと指の骨をバキボキと威勢よく鳴らした、その

瞬間。

「みんな、訓練お疲れ様だ。そんな頑張る若人たちに差し入れ持ってきたぞ……つと。ああ、悪いジュード、机出してもらっていいか？」

鬼気迫る私とは対照的な、なんとも気の抜けた朗らかな声が訓練場に響き渡った。

誰が来たかなど、もはや言うまでもないだろう。

瞬圧山羊隊長・アルヴィン・ロバーツの登場だ。

彼は何故か大きな寸胴を両手に持ちながらジュードくん机を出させていた。

……なんだあれは。何を持ってきたのだろう。ていうか気のせいだろうか、何か煮込み料理のようない匂いが……

「ほい、というわけで差し入れだ。みんな、ビーフストロガノフは好きか？ おっさんの手料理で恐縮だが、よければ食べてやってくれ。訓練後の身体には染みわたると思うぞ」

「……は!? び、ビーフストロガノフって隊長、そんな手間のかかりまくる料理……」

「ま、マジっすか!? 隊長の手料理!? え、お、俺たちなんか食っていいんすか!?」

「そのために作ったんだから、逆に食ってもらわないと困るぞ。いや、勿論無理に食うことはないんだが……」

「い、いや食べます！ 食べさせてください！」

「やったあ、隊長の手料理だ……い」

私が驚愕、というか若干引いている間に、新兵のみんなは群がるようにロバーツ隊長の周りを取り囲んでしまっていた。

先ほど私の反応を見れば分かると思うが、ビーフストロガノフはかなり手間のかかる料理だ。作り方も人それぞれなので時短に作れるやり方もないこともないのだが、何が面倒くさいってとにかく作業工程が多いという点に尽きる。

しかも煮込む時間もそれなりを要するのでオフの日でなければ作ろうなんて気にならない、手間のかかる料理の代表格とも言えた。

それをわざわざ訓練終わりの新兵のみんなのために。隊長だって暇じゃないだろうに、貴重な時間を割いて……そして、みんなに囲まれてあんな嬉しそうな顔を浮かべて……ああ、もう本当にあの人は。

「……敵わないなあ」

だから私はあの人に自分の運命を託すと決めたのだと、口元に微笑を浮かべて呟いた。

「……へへ、ウォーライラ少佐、顔ニヤけてますよ。ロバーツ隊長のことそんなに好きっすか？」

「……アンドレくん、本当に君の精神の凶太さには感服しますよ。それに敬意を払って

きつちりとしつかりと息の根を止めてあげるので覚悟してください。

ああ、絞め技の種類は選ばせてあげますので好きなものをどうぞ、どちらにせよ殺すので」

「本当に冗談通じないっすねウォーライラ少佐!? あ、でもせつかくなんでおっぱいが顔に当たる技とかあれば——」

「分かりました、パイルドライブバーですね。脳漿ぶちまけて死んでください」

「寝技ですらなくなっただんですけど!? あ、いやでもそれ顔が少佐の太ももに挟まるから悪くないかも——って待つて待つて待つて待つてくださいマジでやるんですかちよつとストップやめて少佐ア!! ていうかお前らも笑つてないで助けるよ馬鹿野郎オオオオツ!!」

一番の馬鹿野郎はアンドレくん、お前だよ。私は蛆虫を見るような視線を注ぎながら哀れな抵抗を続ける新兵を脳天から地面へと叩き落した。

次の瞬間、轟く世紀の大絶叫。その一連の光景を見ていた他の新兵のみんなは割れんばかりの拍手を私に送りながら、腹を抱えて笑い出した。

ロバーツ隊長も呆れながらも「二人も早くこつち来いよ、冷めちまうぞ」と手招きをする。

平穏な時間は過ぎていく。何一つ、不自由のないままに。怖いくらいに、当たり前前に。



満たされているはずなのに、何故か違和感がこびりつく、モヤつく私の心だけを置き去りにしながら……

……

……

……

時刻は回り、深夜。日課の自主鍛錬を終えた私はタオルで汗を拭きながら、軍舎の吹き抜けの廊下を静かに歩いていった。

耳を揺さぶる昆虫たちの大合唱。優しく輝く第二太陽<sup>アマテラス</sup>。静寂を慰撫するように吹いてくる夜風が、火照った身体に心地いい。

急速に全身がリラックスしていくに反比例し、しかしやはりというか、私の心は何故か未だに濁っていた。

何故だ？ 理由も、自分ではまったく見当がつかない。

だってそうだろう。今の私には何も不安になる要因が一つもない。

ロバーツ隊長は、私を地獄から救い出し、陽の差す場所へと連れ出してくれた。

軍を抜けた後の生活に不安がないと言えれば嘘になるが、今までの自縄自縛の地獄に囚

われることはもうないはずだ。何故なら私には、ロバーツ隊長がいる。何か困った局面に遭遇してしまつたら、遠慮なくロバーツ隊長に頼ればいい。その時はきつと、あの人も嫌な顔一つせずには……どころか、きつと嬉々としながら、また私に手を差し伸べてくれるのだろう。

本当に、ロバーツ隊長に出会えてよかつた。あの人に出会わなければ、私の人生は永久に地獄に幽閉されたままだっただろうから。

だからこれでいいのだと、私の未来はこれからであり、何も心配する必要はないはずなのに。

この、喉に小骨が刺さつたような拭いきれない違和感の正体は何なのだろう？

私は、この期に及んでまだ何かを望んでいるのか？ そんな馬鹿な、これ以上望むなと贅沢……罰当たりもいいところだ。

だからきつとこの違和感の正体は私の思い過ごし。多分私お得意のネガティブ思考が威勢よく働いているだけで……

何もないんだ、きつと。私は今、十分に満たされている。

そう自分に言い聞かせながら廊下を渡り終えようとしたとき……視界の隅に、見覚えのある人影を映した。

「……隊長」

今しがた頭の中にいたロバーツ隊長が、中庭で黄昏ながら夜空を見上げていた。後ろ姿なので表情を伺うことはできないが、どことなく形容しがたい寂寥感せきりようかんを纏っている。

隊長がこんな場所にいるなんて珍しい。しかも夜空を見上げて黄昏ているなんて。

このまま通り過ぎてしまうのもなんだかもつたいたいと思つた私の足は、自然と動き出していた。

月下に揺れる隊長の銀髪。特別な手入れをしているわけでもないだろうに、何故ここまで魅力的な輝きを醸すことができるのだろう。妙に色つぽいというか、惹かれるというか……

私の雑草を踏む足音に気づいたのだろう。隊長はゆっくりとこちらを振り返つてきた。

浮かべていた表情は——もの哀しさに満ちていた。

いや、表情自体は真顔に近かったのだが、夜空の下で揺れる瞳に、どこか哀愁が宿っている。

まるで、何かに満たされなくて不満足である……とでもいうかのように。

しかし、それも一瞬のこと。私の姿を瞳に捉えた隊長は、すぐさまいつもの爽やかな

笑みを浮かべた。

「ウォーライラか。いつもの鍛錬か？ 本当に偉いなお前は。訓練後の夜風は冷えるだろう、風邪をひかないように気を付けろよ」

「ご心配ありがとうございます。でもそれは隊長ですよ。」

どうしたんですか、こんなところでぼーっと夜空なんか見上げて。隊長にしては珍しいですね」

「ん、ああ……まあ、な。ちよつと考え事をしていた」

「考え事？」

こんなところにいること自体が珍しいと思っていたが、まさか物思いに耽っていたとは余計珍しい。

隊長が仕事以外で物思いに耽っているところなど見たことがない。

光狂いの質なのか知らないが、基本的に隊長はうじうじと悩み思い詰めるようなことはせず、決断も思いきりがよく且つ迅速だ。

仕事中に判断に悩む選択を迫られた時も思考時間はとても短い。それだけ頭の回転が早く、悩む時間を無駄と切り捨てているのだろう。仮に悩んだとしてもすぐさま私や部下の子に意見を求めたり、助けを請うことを厭わない人である。

そんな隊長が物思いに耽るとは、よほど甚大な悩み事なのだろうか。

「深刻な表情で覗き見る私の視線に気づいたのか、隊長は苦笑いを浮かべながら手を振ってきた。

「そんな難しい顔をするなウォーライラ。別にそんな深刻なことを考えていたわけじゃない。

……まあ、ちよつとした悩みというかな。大したことじゃないがな、そのことで自問自答をしていた」

「だから気にするな、とでも言うかのように曖昧な笑みを溢しながら再び視線を夜空に向ける隊長。

「いやいや、何だよその反応。そこまで言っただけで悩みのタネは言わないのか。

「というかその釈然としない表情、どう考えても大したことないわけじゃないだろう。

「その悩みって何ですか？ 私なんかでよければ聞かせてください」

「いや、本当に大したことじゃないんだ。言ったらきつと阿呆臭いと鼻で笑われる、だから……」

「い、い、か、ら。話してください」

「……つたく。遠慮なくなってきたなあ、お前。まあ嬉しいことだけだよ」

「そりゃあさうだろう。私だけ内情全部吐かせておいて自分だけだんまりを決め込むなんて反則、許されるわけない。」

何より、恩人である隊長が何か悩み事に喘いでいるなら、助けたいと思うのは道理だろう。

……本当、ちよつと前の自己中な私からは想像が付かない発想だけど。

でもまあ、いいだろう。できるだけ、自分の気持ちにはもう正直でありたいと、あの瞬間に誓つたのだから。

私の圧力に観念したのか、隊長はその月下に煌めく銀髪をかき上げながら、静かに開口し始めた。

「……本当に聞いて呆れると思うんだがな。俺も分からないんだよ。ただただ心がモヤつく……理由は皆目不明なんだが、たまに感じてしまうんだよ。どうしようもない空虚さが、俺の心を蝕んでいく感覚を。」

……笑えるだろう？ こんな曖昧な悩み……

というか、それ以前に……俺は、こんなにも満たされているのにな。

軍人として、民の笑顔を守ることを旨として働けて……仲間にも恵まれて、何不自由一つないはずなのに……」

吐き出された悩みの種、苦悩の言葉は、意外なことに私が今現在抱えているものとまったく同じものだった。

隊長も……こんな風に、正体不明の心のモヤモヤに四苦八苦することがあるのか。

とても意外だった。隊長はいつも真つすぐで、迷いがなくて……だから私のような半端者同様、そんな曖昧なことで一喜一憂する感性を持っていたんだなど、失礼ながらも驚きを隠せなかった。

だが悩みを聞くといった手前、驚いている場合ではない。では、その隊長の悩みの種が何かを明かす必要があるが、やはり情報量が少なすぎて如何ともし難い。

「……それって、どこから来る悩みとかも分からないんですか？ 仕事のこととか、自分の将来のこととか……」

「仕事のことではないと思う。それなら今頃、俺なら悩むより動いているはずだからな」  
「それは、まあ、そうですね。となると、プライベート……隊長自身に関することでしょうか。人間関係とか」

「今現在人間関係で悩んでいるということも無いな。瞬<sup>カブリコーン</sup>庄山羊のみんなはいい子ばかりだし、同僚もみんな俺の尊敬する誇るべき仲間たちだよ。」

……あー、まあ強いて言うならアレだよ。アンドレのセクハラ癖、あれ本当どうにかしたいよなあ。彼女でできないぞあれだと」

「あれは、まあ……病気みたいなものなんでどうしようもないかと」

むしろあれが彼のアイデンティティみたいなどころもあるし。馬鹿につける薬はな

いとはよく言ったものだが、むしろ彼はあのままでいい気がする。なんだかんだで事の善悪を判断できるいい子だし。

他に考え得る可能性……あ、そうだ。

「あれじゃないですか。結婚を焦っているとか」

「結婚………つて、俺がか？」

「あなた以外に誰がいますか」

「……結婚か。考えたこともなかったな……いや、でもまあそうか、結婚……」

言われてみれば確かに親父とお袋に孫の顔を見せてやりたいとは思うが……うん、なんかこれな気がしてきたぞ……

しかし結婚！ 結婚かあ！ こんな仕事馬鹿で冴えない男を貰ってくれる女人なんているのか……!？」

言いながら隊長は先ほど以上に頭を抱えて悶絶し始めた。

いや、何もそこまで深刻がる必要などないだろう。ていうか隊長レベルの男性なら引く手数多だろうに。

現に部下の女の子たちからは絶大な人気を誇っているし、街中を歩いているだけで女性から好奇の視線を向けられているし、まさかこの人自分がどれだけモテているか知らないのか？



……まあ、自分に驚くほど頓着がない人だからな。見た目と中身がよくても、自分への好意に対してまったくの鈍感である限り、きつとこの人は一生独り身なのだろうなあ、勿体ないなあ、と私はため息をついた。

「……今思えばアドラーの部隊長、恋をしていないのは俺だけじゃないか？」

ジェイスは言わずもがな結婚済み、臙はコールレイン元少佐にゾツコン、漣は閣下を未だに慕っている。ヴィクトリアもハートヴェインといい感じだと専らの噂だ。

……うおおお、そう考えると確かに俺だけ枯れているな!? いやしかし急に想い人を見つけると言われても今まで考えたこともなかったからなあ……! ウォーライラ、俺はどうすればいい!？」

「いや、どうすればいいと言われてもね……とりあえず、恋なんて狙ってできるものじゃありませんから、想い人が見つかるその時までどつしりと構えてればいいんじゃないですか。焦る必要ありませんよ」

「あ、ああ……そうか。そうだよな、恋愛なんて無理にするものじゃない、お前の言う通りだウォーライラ! 俺は今まで通りにしていれば何も——」

「ああ、でもまあ……隊長の年齢で結婚を考えるなら、確かにちよつと焦った方が正解かもしれないですね……」

「……マジかよ。駄目だ、これっぽっちも焦る気持ちがない」

凄い。隊長がかつてないほどに眉間に深く皺を刻んでいる。

隊長の中ではよほど深刻な問題に直面したらしい。

とりあえず隊長の中のモヤモヤはこれで払拭された……のかな？

根元まで解決とまではいかなかったが、種を暴けただけでも上等だろう。あとはまあ、隊長個人の問題だ。そこは隊長に頑張ってもらおうとしよう。

……でも、隊長の奥さんになれる人、羨ましいな。こんな素敵な人、早々にいないと思うから。

将来、隊長の隣に並ぶ女性はどんな人だろう……きつと、私と違って、素直で明るくて、帝国の未来のことを考えていて……って、あれ……？

なんで、私今……隊長の奥さんのことを想像して……胸が、痛んだんだろう？

ていうか、羨ましいって、これじゃまるで私が隊長の奥さんになりたいみたいじゃ

「……ウオーライラ？ どうした、顔赤いぞ」

「っ……………」

「やっぱり夜風で冷えたんじゃないか？ 上着貸そうか？ それとももう部屋に——」

「へっ、部屋に戻りますっ！ と、とにかく問題の種が見つかってよかったです！ 素敵

な人見つかるといいですね、それじゃあ私はこれでっ！ 隊長、おやすみなさいっ」

「え？ あ、ああ、お休み……風邪ひくなよー？」

真つ赤に染まる顔を夜の闇の中に隠しながら、私は足早にその場を後にした。

隊長の柔らかい声色を背中に受けながら……自分の気持ちを、何度も反芻はんすうして。

思考することを拒絶するように、私はそのままベッドに潜り込み眠りに落ちるのだった。

…

…

…

「……結婚、か。悪いな、ウォーライラ。きつと、それは見当違いだ」

リディアが去った後。アルヴィンは先までの明るい表情を霧散させ、再びその顔面に寂寞せきぼくたる感情を張り付けていた。

そして彼が発言した通り、アルヴィンの悩みの種は未だ闇の中、深い霧の奥に紛れている。

リディアの「結婚への焦りではないか」という指摘……なるほど、確かに面白い角度からの解釈ではあったが、確実にそれではないという確信があった。

というのもアルヴィンが今現在抱えている悩みというのは、もつと根源的なものであった。

いわば、自身のアイデンティティ。生きる理由、その指標。

そこへ、何か異物のようなものが入り込み、アルヴィンは形容しがたい不快感を覚えていた。

時たま感じる空虚感。これは一体何なのだ？ 俺が空虚さを覚えるなどあり得ない。だって俺は今幸せだろう？ 満ち足りているだろう？ これ以上何を望むというのだ？ 今以上の幸せがどこにある？

……まさか、俺は。俺はまだ、諦めていないとでもいうのか？

だとしたら、何を今更。くだらない。仮に満たされていない理由がそれなのだとしたら、論じる価値などありはしない。迷いなく切り捨てることができる。

……ああ。お前は本当に。まだ、そんなものに縋って生きようというのか？

「……一番という星が、お前はそんなに恋しいのか？ なあ、アルヴィン・ロバーツ」

泥の如く重く吐き出された言葉は、夜空の星々へと吸い込まれていった。

アルヴィンの心中を知る者はいない。本人さえ、知ることはない。

未だ覚醒めることなく、彼の勝利への道筋は、不明瞭なままだ。

——それが、リディアとアルヴィンの運命を決定づけることになるなど、この時、誰

も知る由がなかつた。

Chapter XVI “勝利”の在り処／Alvinn Roberts

「凄いなロバーツ、クラスで二番目の成績だ。お前は本当に優秀だなあ」

——知っていた。

「主席、ギルベルト・ハーヴェス。次席、アルヴィン・ロバーツ。貴君らの今後の活躍を祈っている」

——知っていた。

「ごめん、アルヴィン……実は、その……私、本当に一番好きだった人は別にいるの。貴方は二番目。今まで嘘をついていてごめんなさい」

——知っていた。

知っていた。知っていた。あれもこれもそれも、すべて全て総て……知っていたとも。

分かっていいたとも。俺は……アルヴィン・ロバーツという男は、未来永劫一番星に輝けない二番煎じだということなど。

俺が一番、痛いほどに分かっている。

……

……

……

俺が生を受けた一家——ロバーツ家は、代々軍人を輩出する由緒ある貴族の家系だった。

貴族の家系と聞けば、一昔前ならばいいイメージは沸かなかつただろう。

理由は明白。ある時期まで血統派が跋扈し、腐敗に満ちた国家運営をしていたからだ。

無論すべての貴族家系がそうであつたかと言われると首を縦には振れないが、おおよその貴族たちは血統派に属していたに違いない。何故なら単純にそちらの方が自分の利になつたからだ。

より楽をして甘い蜜を啜れる。そのことに関しての是非を問うことはしないが、そのために他者を蹴落とし、踏み躪り、悪事に手を染めることになんら躊躇しない悪鬼外道共……それが当時の貴族たちへのイメージだろう。

しかし、当然だがそんな血統派を良しとしない者らも多数いた。後に改革派と呼ばれる派閥である。

そしてロバーツ家は、その改革派に属していた希少な貴族家系であった。

曰く、「血の先天性で人の優劣を決めるなど痴愚の所業。人の輝きは個それぞれにあるものなのだから貴種に非ねば人に非ず、などという腐った固定概念は切り伏せねばならぬ」と。

俺が心から尊敬する父が、よく口にしていた。

父は、誇り高く気高い軍人であった。

悪を嫌い、誠実を尊び、誰にでも優しく、そして何より……帝国の民の笑顔の為に戦場を駆け抜けていた、俺の自慢の父だった。

俺は、ロバーツ家に生まれてきたことが誇りだった。

こんなに尊い志を持った一家の長男として生を受けたこと、感激の極みという他なく、その偉大な軍人の背中を負って、俺は定められていたように軍人を目指し始めた。

理由は勿論、決まっていた。



このアドラーに、光と笑顔を齎したいから。すべての国民に、笑って現在いまを生き、明日への希望を抱いてほしいから。

そうしてアルヴィン・ロバーツは、導かれるようにして軍人への道へと足を踏み入れた。

：

……

……

軍人を目指し切磋琢磨する俺の日々は、常に多幸感と向上心に満ちていた。

有難いことに才能に恵まれていた。努力することも苦でなかった。

神から……否、ロバーツ家の血が与えてくれたこの才能と、不断の努力があればどこまでも突き進んでいける。

俺は、アドラーを守る戦士になれる。その事実だけで心が躍り、俺はただ愚直なまでに研鑽を重ね、様々な経験と知識を己が五体に叩き込んだ。

そして士官学校を卒業するまでに、俺は未熟者ながらも立派な軍人へと成長することができたのだった。

だが、しかし……

「主席、ギルベルト・ハーヴェス。次席、アルヴィン・ロバーツ。貴君らの今後の活躍を祈っている」

——ここでもか。というのが俺の感想だった。

いや、勿論次席に選ばれたことは光栄でありとても嬉しかった。

こんな凄い連中が集まる中で、二番目に成績が良かったと認められた事実。自分なんかが本当にいいのだろうかという照れ臭さと、尊敬する親父へ一歩近づけたという喜びが胸の奥がいつぱいになった感覚を、俺は生涯忘れはしないだろう。

だが、二番。

そう。俺は何故か、生まれてこの方、一番になるという経験をしたことがなかった。

幼少期に通っていた学び舎でも成績はいつも二番目。必ず俺より優秀な成績を叩き出す奴が同じ教室に必ずいた。

無論負けじと俺も努力を重ねたが……結局その学び舎を卒業するまで、俺は「一番」になることはできなかった。

ずっと、深く刻まれたように「二番」の称号を与えられ続けてきたのだ。

だからこの士官学校では今度こそ……と負けん気根性を燃やしていたのだが。

ここでも駄目だったか、と、不謹慎ながら俺は肩を落としていた。

そんな俺の内心を知ってか知らずか、主席に選ばれたハーヴェスは、爽やかで……しかしどこか影のある儂げな笑みを浮かべながら、こちらへ手を差し出してきた。

「ロバーツ殿。貴君のような志高き男児とこうして肩を並べられる事実、心から嬉しく思う。軍に配属された後も仲良くしてもらえると光栄だ。共に、アドラーを光で満たしていこう」

「……ああ。こちらこそ、ハーヴェス。お前みたいな傑物と、俺なんか肩を並べていいものかと恐縮するばかりだが……これからも戦友としてよろしく頼む。お前からは多くを学んだ。これからもその背中を追いかけさせてくれ」

互いに大志を抱き、俺たちは熱い拍手を交わした。

……ああ、そうさ。そうだろう、アルヴィン・ロバーツ。

大事なのは一番とか二番とか、そんな数字的な冠じゃない。アドラーを守り、繁栄させ、民を幸せに導くということ。それが俺たちの……きつと軍人を志望してきた皆の悲願なのだ。

そこを違えて如何とするんだ。自身が冠する冠など、何の意味も持ちやしない。

そう自分に言い聞かせ、改めて熱く胎動する自身の心臓の音を感じながら……この日から俺は、アドラー軍人になったのだった。

…

……

……

「——というわけで、だ。アルヴィン君、君は第二西部駐屯部隊・鋼盾金牛タウラスに配属が決定した。階級は大尉だ。帝国の為に頑張ってくれたまえ」

「……西部駐屯部隊、そして……大尉、ですか」

何がというわけで、だ。

眼前の上官の発言に、俺は腸はらわたが煮えくり返りそうな思いだった。

これは士官学校で学んだこと……というか軍人でなくともこれくらいは常識なのが、アドラーにおいて西部と南部は最も治安がいいとされる地域だ。

完全無欠の安全地帯、というわけでもないのだが、やはり最前線の東部、カンタベリー聖教皇国付近の北部と比べればなんてことはない。

南部部隊と西部部隊は、血統派の貴族たちがよく配属になる部隊なのだ。

理由はもはや語らなくとも明白だろう。安全な場所から功績を挙げ、名前を上げやすく……利益を我が物にしやすいからだ。

俺も血統派否定の一族とはいえ、貴族の出自。しかも父親が現役で第九北部制圧部隊・魔弓人馬マジタリウスの隊長を担っているとあらば、体的に南部西部に配属させるのは如何に

も血統派のクソどもが考えそうなことだった。

しかも、大尉階級だと？　ふぎけるな。普通はよほどでなければ少尉階級からスタートを切るはずだ。

それを、貴族の血筋というだけで飛び級だと？　なんだそれは、どこまでふぎけている。

父が口を酸っぱくアドラーの血統派たちは腐っていると嘆きの言葉を漏らしていたが、目の当たりにしてよく分かった。

こいつらは恥知らずだ。軍人を何だと思っている。

目の前のこの上官も……なるほど、血筋だけの成り上がりというのがよく分かる。

何故なら、軍人らしい身体ではないからだ。筋肉がまるで発達していない。これならば士官学校に所属していた後輩たちの方がよほど立派な体躯をしていた。

しかも、何だそのふんぞり返ったような人を見下した態度は。

貴様はすべての部下や仲間たちにそんな舐めた態度を取っているのか？

そして当然のように貴族は優遇扱い。それ以外は東部戦線送りで、国の為に散るがい、と？

——ふぎけるな。こいつはどこまで人を馬鹿にすれば気が済むのか。

まさかこいつは、俺がお前ら血統派と同じだとも言いたいのだろうか？

そんな訳ないだろう。こちらがどういう思いでこの場所に立っているか、貴様のよう  
な恥知らずには永劫分かるまい。

怒りが臨界突破を迎えた俺は、毅然とした態度で上官を睨みつけながら、反論の言葉  
を口から吐いた。

「お言葉ですが少将殿。私は確かにロバーツ家出身ですが特別扱いしてくださいさ  
らなくて結構です。大尉の身分も今の自分には相応しくありません。皆と同じように少尉から  
始めさせてください」

「……な、何？」

「そして、第二西部駐屯部隊へ配属とのことですが……お断りさせていただきます。自  
分は、東部への配属を希望いたします」

俺の言葉を受け、鳩が豆鉄砲を食ったような愕然とした表情を浮かべる上官。

こいつは正気か？ とでも言いたげな表情だが、ああ、無論こちらは正気も正気。

安全地帯で気ままに気楽に功績を挙げたい……そう思うことは決して悪じやない。  
そういつた考えもあるのだろう、と思うが、悪いな俺はそうじやない。

帝国の為に、この鍛えた力を振るいたいんだ。民に笑顔を齎すために、本気で戦い、戦  
場を駆けたい。

その為には、やはり東部へ赴くのが一番分かりやすく、そして国の為にもなるだろう。

きつと東部では沢山の戦死者が出ている。人手不足に喘いでいるのは想像に難くない。

ならば、そこに手を貸すのが俺の役目だろう。それがアドラーの益になるなら、あとはもはや語るに及ばず、だ。

「し、しかしだ。君の実力ならわざわざ危険な東部に行かずとも安全な場所から功績を――」

「私が軍人を志したのは地位や名譽の為ではありません。アドラーすべての民の笑顔の為……それだけです。ですから忖度そんたく、ゴマ擦り、一切不要。

異論は何かありますか？」

「……………言っても聞かんだらうに。分かった、訂正しよう。

アルヴィン・ロバーツ君。君の配属は今日から、第六東部制圧部隊・血染バ処ル女ゴだ。階級は少尉。これで文句はないかね？」

「ありがとうございます。これより我が身は帝国の剣。そのすべてをアドラーに捧ぐと誓います」

「はいはい、分かったから。もう行ってくれたまえ……つたく、これだからロバーツの間は……」

上官の小言を真つ向無視し、俺は背中を向けて部屋を後にした。

そして、扉を開けたそこには、見覚えのある男の影が。

「……ハーヴェス」

「貴君なら必ずそう言ってくれろと信じていたとも。我々の配属は、同じ部隊だ。東部の地でもよろしく頼むぞ、ロバーツ少尉殿」

薄く微笑みながら語りかけてくるハーヴェス。その一言で、こいつも上官の提案をつっぱねて東部戦線への配属を希望したのだと俺は理解した。

それは、なんとも心強い。いや、こいつの気性からしてみれば確かにその行動は納得だ。

俺も口端に笑みを携えながら、ハーヴェスの瞳を真つすぐに見つめて。

「ああ。こちらこそだ、ハーヴェス少尉」

こうして俺、アルヴィン・ロバーツは東部に配属となり……そして、運命の邂逅をすることになるのであった。

…

…

…



「——クリストファー・ヴァルゼライド？」

「ああ。東部に配属になったのならきつと会えるだろう。

彼は凄まじい……俺も長いこと軍人をやっているが、あそこまで苛烈な男は見たことがない。まさしく、英雄の器に相応しいと言えるだろう」

東部配属が決まった夜。俺は報告がてら親父と会い、酒場で杯を共にしていた。

最初はいつもの如く血統派への不満やら愚痴を互いにぶちまけていたのだが、俺の東部戦線配属の話聞いて、突如親父がその男の名を口にしたのだ。

しかし、あの親父をしてそこまで言わせるとは。

よほどの男なのだろう。是非会ったときには友誼を結べたらいいな……などと、ある種軽い考えで邂逅の時を迎えた俺は、衝撃を受けていた。

——なんだ、この男は。

なんとという、鋼の如き輝きか。

語らずとも、その魂の煌めきを俺は一目で体感した。

その時は漠然とした所感だったが、友誼を結び、語り合い、共に戦場を駆けていくうちに確固として理解できていくものがあつた。

この人は、天頂に輝く星だ……と。そう、一番星。

俺がある意味、この世で憧れている称号を、この人は持っている。

まさに、英雄という器に相応しい。

悪を絶対に許さぬその強靱な意思。限界突破を具現するような努力と研鑽。国を憂い、慮るその愛国心。

すべて、どれを取っても規格外。

……憧れるな、という方が無理な相談だった。

俺はヴァルゼライド殿を心の底から尊敬し、共に戦場を駆け抜け、国の為に戦っているという事実が嬉しかった。

ヴァルゼライド殿だけじゃない。

ハーヴェスにアルバート。俺たちの後輩として入隊してきたジェイスも——最初は手の付けられない暴れ馬だったが、やがて丸くなったという経歴を持つ——全員が全員、誇り高き光の使徒だ。

こんな素晴らしい仲間たちと肩を並べて共に戦えるという事実。生きている、幸せだと、俺は感じていた。

だが、何故だろうか。こんなにも幸せに満ち溢れているのに……

俺の心には、拭い難い違和感の霧がかかっていた。

……それはやはり、俺が皆に比べて劣っているという実感があつたからだろう。

ヴァルゼライド殿、ハーヴェス、ジェイス、アルバート……俺は基本的にいつもこの

四人と行動を共にしていた。

いつも肩を並べている戦友だからこそ分かる。俺はやはり、ここでも二番煎じだと。武力や覚悟の熱量において、俺はヴァルゼライド殿とジェイスに勝てなかった。

知略に策謀、指揮系統の能力に關しても、ハーヴェスとアルバートよりも劣っていた。共に俺は二番煎じ。中途半端。俺はこの四人に勝てるものが何一つなかった。

だが、悲観しているというわけではなかった。

思うところはやはり多々あるが、初志を貫くことを忘れてはならない。

それに劣っているというのであれば、これよりも一層の精進を志し、いずれ真の意味で彼らと肩を並べるに相応しい男になればいいのだ。

そう、目指すべき指標として、彼らの背中を追いかけ続けなければならない。結果としてそれが自身を磨く行為になるというのなら、願ってもないことである。

何も迷うことなど有りはしない。

そしてやはりというかなんというか。

東部戦線において目覚ましい功績をあげていた俺たち五人は、いずれ名をあげその名を軍部で知らしめていくことになった。

特に名を馳せたのは、やはりヴァルゼライド殿。次点でハーヴェスだった。

彼らの異常な活躍に、二人はやがてこう呼ばれることとなる。

“化け物”だ、と。

軍部にとつては多大な利益を齎しているのだからその呼び方はどうかとも思つたのだが、まあ確かに破竹の勢いで功績を積み立てていく様は……そして何よりヴァルゼライド殿の掲げる鋼の心の在りようが、必然として畏怖の対象となつたのだろう。

どちらにせよ、俺の誇らしい仲間がどのような形であれ認められたことが誇らしかつた。

誇らしく、嬉しいはず、なのに。

心に霧掛かつた違和感は、一向に晴れる気配はなかつた。

……

……

……

「なんだ、ニコル、話つていうのは？」

俺の目の前で物憂げな表情を浮かべる茶髪のショートヘアの女性……ニコル・フルーリーは、東部戦線で出会つた、初めての恋人であつた。

初めはただの戦友だつた。だが、話す機会が多くなり、互いに徐々に惹かれていき、そして……愛を交わして、めでたく恋人になつたのであつた。

そして、恋人になってから数か月後。今こうして俺は突然ニコルに呼び出されてい  
た。

話があるということだったのだが……まあ、表情から察するに、そういうことだろう。

「ごめんなさい、アルヴィン。私と、別れてほしいの」

震える唇から紡がれた言葉は、どこまでも予想通りのものだった。

予感していたからだろうか。俺の心に漣せいでなみはまったく立っていなかった。

案外冷たい男だったのだな俺は、と心で苦笑する傍ら、俺は一番の疑問をニコルにぶ  
つけた。

「理由を聞かせてもらってもいいか？」

自分で言うのもなんだが、俺とニコルの関係は良好だったはずだ。

互いに国の為に戦いたいという熱い志を持ち、心行くまで語り合い、愛を契った。

だというのに別れたいというのは、きつと俺に何か過失があったということだろう。

分かれるにしても、せめてそのことだけでも謝罪を……と思っていた次の刹那、言い

づらそうにニコルの口から吐き出された言葉は、予想外のものだった。

「ごめん、アルヴィン……実は、その……私、本当に一番好きだった人は別にいるの。貴  
方は二番目。今まで嘘をついていてごめんなさい」

背筋が粟立つのを感じた。寒気が全身を襲う。吐き気が一気にこみあげてくる。

よりにもよって、一番聞きたくなくなかった台詞が、俺の愛する女性ヒトの口から投げ出された。

なんだそれは。俺が二番目だというならば何でお前は俺に告白したんだ。何で俺と恋人になることを選んだんだ。

いいや、じゃあそもそもその一番は誰なのか……などと、噴出する疑問に際限はなかったが、ああ、今はそれよりも。

——ここでも、なのか。

恋愛というカテゴリーにおいても、俺は二番目だという烙印を押されるのか。

どこに身を置いても二番、二番、二番……これは呪いなのか？

お前は、誰かにとつての一番になど永劫なれないという、神からのメッセージなのだろうか？

ああ、分かっている。一番や二番など、そんな数字的なものに惑わされるなど愚行だと……自分の中でも結論を出したはずだがしかし、ここまでくると何か運命的なものを感じてしまう。

俺は、永遠に二番煎じをなぞるだけの運命なのだろうか？ 俺は、誰かにとつての一番になれないのだろうか……

と、思考がマイナスへと振り切れそうになった瞬間、俺は思考を一旦漂白し、意識を切り替えた。

いいや、きつと考えすぎだ。

そうだ。二番手だからどうだという。だからといって俺の使命と願いは変わらない。アドラーの民に笑顔と平和を齎すこと……大事なそこだろう。

絶対的に、俺の順位付けの為じゃない。

だから、ニコルに掛ける言葉は決まっていた。

「……そうか。今まで無理をさせてしまっていたのならすまないな、ニコル。

こんな大したことのない男と愛を語ってくれたこと、本当に感謝に尽きんよ。

お前と恋人でいた時間は、俺にとつて得難き宝だ。だから、次はもつといい男を見つけてくれ。幸せになれよ。これからは戦友としてよろしくな、ニコル」

俺の言葉に、ニコルは黙って俯いたままだった。

さすがに俺も思うところはあがあるが、今口にした言葉は嘘じゃない。

きつとニコルとしては気まずいのだろう。だから言葉が出てこない。

今は一人にしてあげた方がよさそうだな……と、俺は踵を返して軍舎に戻ろうとした、その時。

鏡を叩き割ったような怒声が俺の鼓膜を殴りつけた。

「——アルヴェイン！　ここにいたのかよ探したぜ……！」

大声が響いた方へ視線を向ければ、そこには肩で息をしているアルバートがいた。

よほど切迫した状況であるのか、顔面は蒼白で眉間に皺が深く刻まれている。

「アルバート、どうした、何があつたんだッ？」

「ああ……今の状態の俺が言うのもなんだが、落ち着いて聞いてくれ……アルヴェイン、お

前の親父さんが——」

——親父が？　まさか——

嫌な予感が稲妻のように背筋を駆けた瞬間、最悪な予想が的中してしまった。

「——交戦中に大怪我して、意識不明の重体だつて」

…

…

…

「——親父ッ……！」

アルバートの言葉を受け、俺は飛ぶように電車で北部の地へと急行した。



本来であれば持ち場である東部戦線を離れるなど言語道断という他ないのだが、アルバート達が根回ししてくれるとのことで、その温情には心の底から感謝が尽きない。

俺は北部駐屯地の医務室の扉をぶち破るように開け放ち、親父の姿を探した。

意識不明の重体と聞いていたが、ベッドに横たわる親父は意識を回復させており、弱い視線で俺を見据えている。

ホツと安心すると同時に、信じたくない光景が瞳へと飛び込んできた。

「お、やじ……右腕と……左脚が……」

そう、右腕と左脚が無くなっていた。

肩の先から腕が生えておらず、左足に至っては付け根ごと持っていかれていた。

論ずる余地なく重症。いや、もはや致命傷と言つても過言ではなかつたし、生きていること自体奇跡とも言えたが、きつと気合と根性で耐え抜いたのだろう。

元来親父もそういう気性で、性分だった。ある意味ヴァルゼライド殿と根本からかかりの似た者同士なのだろう。

とにかく生きているという事実は喜ばしいことだが、しかしこれは……

「まあ、見ての通りだアルヴィン。ちよいとしくじつちまつてな……」

今日を以て、俺……フェリクス・ロバーツは、軍人を退役する。もはやこうなつちまつたら、気合と根性じゃどうにもならん。

せめて下半身が生きていれば義手義足で戦うこともできたが……まさかの後遺症で半身不随と来た。生き残つたのは実質首と胴体と左腕だけだ」

「……そうか。親父……それで、敵勢力は——」

「安心しろ。腐つても一応俺は部隊長だからな。きつちり残らず殲滅したさ。」

親玉も殺した。奴隸市が蔓延することは二度とないだろう。囚われていた少年少女たちも解放した……一応貰い手は探すつもりだが、何人かはうちで世話をしようと思つている。

構わないな、アルヴェイン」

「ああ、それは勿論。温かく迎えてやってくれ」

「無論だ」

そう、俺の父、フェリクス・ロバーツはここ数年、北部の地にて蔓延つていた奴隸市の解放の為に戦い続けていた。

貧しく、親御がない子供たちが路頭に迷つているところを漬け込み、その子供たちを奴隸売買の道具として商売している悪逆たる組織。その壊滅を目指し、親父は奮闘を続け、最近になってようやく組織の尻尾を掴んだ。

そして今宵ついにその組織の中核と正面衝突し、その悉くを壊滅に追い込んだらしいが……敵も一筋縄ではいかなかったらしく——どうやらアンタルヤの名だたる傭兵た

ちを片つ端から雇っていたらしい——こうして、親父の軍人稼業にも終止符を打たされたのであった。

「……無念だ。俺にはまだ、笑顔にするべき民が、沢山いるというのに。こんなところで途中下車とは……せめて血統派をどうにかしてから、引退したかったものだが」

言いながら、親父は後悔を噛みしめるように左腕の拳を握りしめた。

気持ちには痛いほどに分かる。親父は度々口にしていた。アドラーの未来を。そして、そのアドラーに巢食う悪徒共への怒りも。

まだまだ戦いたいだろう。アドラーをよりよい国へと変革させるため、もつと疾走したかったに違いない。

だから、親父の意思はこんなところで終わらせない。そう宣誓するために、俺は親父の手に、自分の掌を重ねて。

「安心してくれ、親父。親父の意思は、余さず俺が受け継いで見せる。まだまだ親父には到底届かない若輩の身だが、きつとアドラーを光と笑顔で満たして見せる。」

約束するよ、親父。必ず今より輝かしいアドラーを……俺たちで、築き上げて見せる」  
「……………ありがとう、アルヴィン。お前は自慢の息子だよ。」

お前が息子で、本当によかった」

俺の決意の言葉を聞くと、親父は強張っていた表情を弛緩させ、ようやく柔らかい笑

みを浮かべてくれた。

親父がこのような姿になり、軍人を退役してしまうという事実は無論悲しいが、だからといっていつまでも立ち止まっているわけにはいかない。

いや、むしろ焦らなければならぬだろう。

そんな俺の心情を代弁するように、親父は再び口を開いた。

「俺がいなくなったことによつて、血統派の連中はますます活気づくだろう。

奴らにとつて、俺の存在は目の上のたんこぶだったからな。それが消えるんだ、奴ら内心でガツツポーズを取っているに違いない。糞つたれが」

血統派への憤怒を籠めて罵声を吐き捨てる親父。

「そうだ、貴族の血筋でしかも部隊長で将官階級……そんな親父を、血統派の連中が快く思っているはずもなかった。

だからこそ親父は帝都に配置されず、中央から比較的遠い北部へと配属されたのだろう。そうすれば、帝都に巢食っている貴族の連中が首に刃を突き立てられる心配はほばないからだ。

「だから頼む、アルヴィン。これ以上血統派の連中を調子づかせないよう、頑張つてくれ。

恐らくだが、お前らは近々帝都に異動になるだろう」

「……何？ それは……」

「何、少し考えれば分かることだ。」

お前ら、東部戦線で大活躍らしいじゃないか。北部までその情報は届いているぞ。

だからこそ、だよ。そんなな目に見えて大活躍したら、上層部がよく思うはずもない。帝都に呼び戻して、これ以上功績を挙げられないよう、飼殺すつもりだろうさ」

「なんだと……!?!」

「ハーヴェスやお前はともかくとして、ヴァルゼライドやジェイス、ロデオンは貴族の出ではないのだろうか？ ならば余計に、というやつさ。貴族以外に功績を立てられ目立てるのを嫌うからな、血統派のクソどもは。」

……憤慨したくなる気持ちも分かるが、アルヴィン。これは逆に考えればチャンスなんだ。

帝都に行くということは、逆に血統派の連中の腹の中へ潜り込めるといことだ」

「……つまり、寝首を搔けるチャンスがいずれ巡ってくるかもしれない」

「巡ってくるんじゃない、その機会を作るんだ。アドラーの未来を、お前たちの手で切り拓くんだ、アルヴィン。」

きつとお前の仲間も、その助力は惜しまないだろう。特にヴァルゼライドは、血統派のような悪の化身を許すことなどできないはずだ。彼が率先して行動を起こすだろう、

見逃すことなく、彼の背中を追いかけろ」

燃ゆる想いを言葉に乗せて、その誇り高き意思を俺に継承してくれた。

確かに親父の言う通り、これはチャンスだ。帝都に潜り込むことができれば、飼い殺しを食らうことになったとしても、アドラーに巢食う根本の悪を断つことができる可能性が大幅に増えるということだ。

それが叶えばきつと俺の仲間たちは、血統派肅正に向けて各々が動いてくれる。アドラーをよりよい国へと繁栄させ、沢山の笑顔を民に齎すことができるだろう。

そう思うと、より心が弾んだ。こんなところで止まってられないとより強く確信する。

ああ、安心してくれ、親父。俺は一人じゃない。俺が思わず憧れてしまうような益荒男たちが、俺の隣にはいてくれる。

ならば恐れも不安もありはしない。必ず目指す未来のその先に、民の笑顔はあるはずだ。

だから迷うことなく駆け抜けよう。

帝国に、光を齎すために。

「……さあ、分かったらもう行くんだ、アルヴィン。俺のことは心配するな、この通りピンしているからな」

「馬鹿親父、片腕片足失ったやつが言つていい台詞じゃないぞ、それ」

「何、生きてるだけで重畳さ。」

「……なあ、アルヴィン」

「ん？ 何だよ親父、急にそんな優しい顔して——」

『アドラーの守るべき民と、そして仲間には優しく』が、ロバーツ家の家訓だ。どんな時でも、この言葉を忘れるな」

「……当たり前だ。一瞬も忘れたことはない。その家訓に薰陶を受けて、誇りを抱いたからこそ、俺は今こうしてここに立っているんだからな」

「……そうか、それを聞いて安心したよ。」

アルヴィン、お前の優しさは、ロバーツ家随一だ。きつとその優しさで、救える命が沢山あるはずだ。俺はその優つよさを、心から誇りに思うよ。

胸を張れ、アルヴィン。その優しさは、紛れもないお前の一番の武器だ」

親父の言葉を受け、俺はしばし呆然としていた。

初めて、誰かに自分のことを一番だと言つてもらえた。

お前の優しさは一番だ……と。ああ、確かに。自身の優しさに関しては、仲間内から

もよく褒められていた。

自分自身当然のことをやっているつもりだったので、今まであまり実感が沸かなかつたのだが、それでもきつとそれは俺自身の強さなのだろうと誇りも抱いていた。

それを、親父に、一番だと言ってもらえた。

感動が胸に沁みていく。嬉しかった。そう、嬉しかったんだよ。

今まで呪われたように二番手の称号しかもらえなかつた俺が、初めて誰かに……それも、俺の尊敬する親父に、一番だと認めてくれた。

心に沁みないはずがない。胸を打たれぬわけがない。

ゆえに、ならばその言葉に相応しい男でい続けられるよう、より一層今よりも飛翔せねばならぬと奮起するのが道理なのだ……

何故だ？ 俺の心は、ついにイカれてしまったのだろうか？

やはり俺の心の深奥には、拭い難い不完全燃焼が、泥土でいどのようにこびりついていた。



## Chapter XVII 天頂の星々／Heroes

その後。親父が予期していた通り、俺たちは帝都への異動が決定した。

……いや、正式に言えば俺とハーヴェスはやはり東部に残れという指令が下ったのだが……俺たち二人は、その決定を「冗談じゃない」と跳ね除け、ヴァルゼライド殿達へついていくことにしたのだった。

皆、考えていることはやはり同様だった。血統派の粛正。時代をよりよいものへと改革していく。そんな輝かしい願いを奉じる者たちは、必然として引かれ合っていた。

ヴァルゼライド殿を筆頭に、元から軍内部に存在していた改革派はより一層勢力を増していくこととなる。

そして、派閥間戦争が激化する最中、俺は第十北部駐屯部隊・瞬<sup>カブリッコーン</sup>丘山羊の隊長に就任した。

駐屯部隊という特性上、これからは帝都で頻繁にヴァルゼライド殿への助力をすることができなくなったが、例えば物理的な距離が離れたとて掲げる鋼の祈りは同じ空の下にある。

いつでも力を貸すからその時は遠慮なく頼ってほしい、と言うと、ヴァルゼライド殿

はいつもと変わらぬ鉄面皮で「その温情に、心からの感謝を」と頭を下げてくるのであった。

そして、俺が隊長を拝命してから数年後——アドラー至上最大規模の大事件が勃発する。

アスケレヒオス  
蛇遣い座の大虐殺。

アドラーの国民すべてを巻き込み、あの精鋭揃いの天秤ライブラでさえ半壊に追い込まれたという未曾有の大殺戮劇だ。

突如現れ暴走した二体の人造兵器……後に『魔星』と呼称されることになる奴らは、無作為にアドラーの民を虐殺し、その殺意で帝都を火の海へと変えた。

獅子が蟲を捻り潰すように蹴散らされていく数多の命。絶望がアドラーを包んだ。

十二部隊からも数多くの死傷者を出し、魔弓人馬サジタリウスは壊滅、天秤ライブラも半壊、臙に至つても片目を失うという重篤ぶり。

連絡を受け、すぐに俺も現場に急行した。この時ほど、自分の駐屯兵という立場を呪ったことはない。やはり帝都に残っているべきだったかと遅すぎる後悔を引きずりながら、これ以上の流血は許さないという誓いを胸に、俺は燃える帝都を疾走した。

瞳を穿つ、地獄に次ぐ地獄。

獄炎に焼かれ倒壊していく建造物群。記憶の表側に今もこびりつく、あの活気に満ちた風景の残滓は、微塵も残されていないかった。

人肉が焦げる脂の臭気が鼻を差した。見渡す限りの、死体、死体、死体——残酷なほどに堆く、生を略奪された肉の塊が、積み木のようにそこかしこに転がっている。

許せない、という憎悪の炎が胸を焦がした。

どんな理由でこのような虐殺劇を撒き散らしたのか知るところではないが、どちらにせよここまで無辜の民草を、俺の仲間たちを、愛国を陵虐され、黙っていることができないだろうか？

必ず殺すぞ外道な殺戮者共。

ああ、そうだ。こちらにはヴァルゼライド殿がいるのだ。すべての不可能を粉碎し、希望を齎すヒカリの徒が。

俺一人では役者不足だろうが、ヴァルゼライド殿と、そしてハーヴェスやロデオン、ジェイスが生き残っていれば……

必ず勝てる。いいや、勝つ。勝つのは俺達だ。これ以上、誰かの涙を流させないために。

そして、俺がようやく駆け付けた現場には——

「荒野に一人、英雄が立っていた。

傍らに転がる亡骸は、きつと件の殺戮兵器だろう。

まるでスクラップのように無残に解体され、今は沈黙を守っていた。

まさか、と思った。

まさか、ヴァルゼライド殿は……たつた単騎<sup>ひとり</sup>で、あの化け物どもを葬ったというのか

……？

たつた一人で、この地獄に終止符を打ち、すべての絶望<sup>ナミダ</sup>を止めてみせたというのか？

「——英雄だ」

俺が真にヴァルゼライド殿に瞳を焦がされた瞬間は、きつとあの時だったのだろう。

今でも鮮烈に覚えている。

黒天の下、あらゆる絶望と闇を振り払うように孤高に佇む光の英雄……すべての悲し

みと涙を両断するために生きているその男に向かって、俺は。

「俺は、英雄<sup>あな</sup>に、なりたい」

有らん限りの憧憬の言葉を、その雄々しい背中にぶつけたのだった。

：

……

……

あの後、ヴァルゼライド殿は総統職へと就任した。

当然だろう。暴走した二機もの暴走殺戮兵器をたった一人で鎮圧したなど、誰が聞いても偉業という他なく、彼は紛れもなく、言葉通りのアドラーを護った「英雄」となったのだ。

あの大虐殺により血統派の主要人物も一掃され、ヴァルゼライド殿が総統職に就いたことにより、今までの不平等で悪が跋扈していた悪徳政治は終わりを告げた。

ヴァルゼライド閣下は、新たな帝国の旗印として、厳格且つ平等な統治を開始する。これですべてがうまくいく。いや、それは言い過ぎか。だが少なくとも、帝国は今後、よりよい繁栄を遂げていくだろう。

ああ、本当に。ヴァルゼライド殿には心から感謝しなければならない。そして俺も、そんなヴァルゼライド殿が目指すよりよいアドラーの繁栄の為にも、更なる精進を極め、持てる力全てで尽力していかねばなるまい。

……ああ、そして。

「——総統閣下。すまない、この後時間はあるだろうか？ 二人きりで話したいことがあるのだが」

軍上層部が集結する円卓会議。それがつつがなく終了した後、俺はヴァルゼライド閣下に声をかけた。

理由は今しがた口にした通り、話したいことがあるからだ。相談、と表現したほうがいいのかもしれない。

無論ヴァルゼライド閣下は多忙の身だ。たかが俺一人に時間を割いている暇などないだろう。

だが俺はどうしても、ヴァルゼライド閣下に問いたいことがあったのだ。

……そう、あの大唐殺での偉業のことを。俺は、問わねばならなかった。

「控えろ、ロバーツ。総統閣下がご多忙の身であることは、貴様も知っているはずだ。散歩感覚で閣下の時間を搾取るな」

と、俺が声をかけた直後、針金のような視線と怒声を飛ばしてきたのは、総統閣下の副官にして第一近衛部隊・近衛白羊<sup>アレス</sup>の部隊長……アオイ・漣・アマツだった。

鉄面皮のような表情でこちらを睨み、閣下の隣で強く忠誠を誓うその姿はまさに鉄の女と表現するに相応しい。

ただ少し融通が利かない頑固者のきらいがあるため、度々ランスローや朧に食って掛

かっている場面をよく見かける。

もう少し柔軟な思考ができるようになるといいのだが、と余計なお世話ながらも思ってしまう。

こうなる展開は予想していたとはいえ、いやはや弱った。

さてどうやって漣に言葉を掛けて説得してみたものか、と言いかぐねていると、俺たちの間に割って入るように閣下が口を開いた。

「構わん、漣。俺の誇るべき同胞せんゆうの頼みだ。耳を貸さぬという選択肢は、端から俺には存在しない。

悪いが漣、席を外してくれ。ロバーツは俺と二人になることを望んでいる」

「……閣下がそう仰るのであれば。

ロバーツ、くれぐれも時間は取らせるな、いいな」

「ああ、分かっている。感謝する、漣、そして総統閣下」

俺が会釈したのを合図に、漣は仏頂面を張り付けたまま背中を向け、議場を後にした。

その場に残ったのは、俺と閣下の二人だけ。思えば、こうして二人きりになるのは随分と久しぶりだった。

「それで、話したいことというのは何だロバーツ。先ほどの議題で何か気になったことでも?」

「いいや、先の議題とはまったく関係ない。個人的な相談なのだが……つと、ああ、すまないヴァルゼライド閣下。今までの癖で馴れ馴れしく口をきいてしまったが、不快であれば敬語を使おう。どうする？」

ヴァルゼライド殿は俺にとつてはほぼ同期も同然。戦場を共に駆け抜けた回数も両手ではきかない。

ゆえに今まではフランクな感じで接していたのだが、今となつては彼は総統職……この国のトップだ。

そんな巨星を前に今まで通りの態度、というのやはり改めるべきだったかと思つたのだが、閣下は力強く首を横に振つた。

「むしろ今まで通りにしてもらえると有難い。本来俺のような取るに足らん男に、敬意など払う必要は絶無なのだから」

相も変わらぬ重苦しい表情でそう断言する総統閣下。

自分への自己評価の低さも相変わらさずのようだ。あれだけの伝説を次々に打ち立てておいてこの謙遜っぷり……ああ、そうだ。だからこそ、俺は。

「そんな寂しいことを言わないでくれ、総統閣下。

相談したいことというのは他でもない。俺は、どうやったら英雄あなたのようになれる？

俺は、ヴァルゼライド閣下たになりたい」



「そう、俺は貴方になりたいと願った。」

あの大虐殺の日に見た英雄の背中に、子供がヒーローへ持つような幼い憧れを抱いたのだった。

辛いとき、苦しいとき、悲しいときに。どこからともなく現れて、助けてくれる無敵のヒーロー。

すべての涙と絶望を光で焼き尽くす、護国の英雄。

俺も、そうなりたかったんだ。

すべての民の笑顔と平和を守るために。そのためには今よりもあらゆる意味で強くならなくてはならないから。

吐き出した万感の想いを、ヴァルゼライド閣下は強く咀嚼して。

「——愚行だ、ロバーツ。俺のような塵屑には成るんじゃない」

俺の宣した想いを、にべもなく切り捨てたのだった。

「何を言う、ヴァルゼライド閣下。貴方は塵屑などではない、アドラーを誰よりも愛し、憂い、そして守ってきた紛れもない英雄だ。そんな貴方に憧れるなどというのは無理な話だ。」

俺もあなたのようになって、少しでもこの愛するアドラーのために、国民の為に命を注ぎたい」

「いいや、ロバーツ。俺は英雄などではない。ただの螺子が外れた破綻者に過ぎん。

お前のような人格者が、わざわざそのような畜生道に堕ちる必要はないだろう。

このアドラーに、俺のような木っ端屑は二人もいらん」

俺が浴びせる賛辞の数々を、閣下は刀剣のような鋭さを以てして悉く両断した。

自身が浴びるべき称賛など、一切ないと断言するように。

「アドラーの為、そして民草の為にと言ったな。ならば余計にだ。守ると言う大志を抱いているのに、破壊者となって如何とする。

そう、俺はただ目の前に立ち塞がる障害を破壊しているだけの殺戮者だ。

止まれない。諦められない。己だけが流せばいい血や涙を、友や部下にまで背負わせて、苦しめて……そうして、他者の夢を轢殺しながらここまで来たのだ。

それを大罪だと知りながらも。俺は疾走することしかできなかつた。それ以外がでない、塵屑だからな」

「……それは」

確かに、ヴァルゼライド閣下には病的なほどに諦めの悪い鋼の精神性が伴っていた。

言うまでもなくそれはあまりに常軌を逸しており、だからこそ軍の者たちは皆閣下に

憧れ、焦がれ、彼の背中についていこうと決意したのだ。

だが確かに今しがた閣下が言った通り、彼が行ってきた数々の伝説……そのすべては「破壊」に基づいている。

「破壊」とはすなわち「暴力」だ。戦争においては、「殺戮」とも言い換えられる。

国を守るために戦うという軍人という職業上仕方のないことだが、それらは決して褒められていいものじゃない……良い風に言ったところで、「必要悪」と表す他ない。

そう、「暴力」なんてものは、なければならぬに越したことはないのだ。ゆえに、決して憧れていいものではない。

ゆえに、「破壊」することしか能のない自分などに成るんじゃない、と。閣下はそう伝えてくれているのだ。

「……だが閣下は、アドラーの為に……守るためにその力を振るっている」  
「俺にはそれしかできないからだ。」

それに言っただろう、俺は止まれないと。一度決意したら、決して諦めず、貫き通すまで光に向かって進み続けてしまう。例え目の前に、己が愛が立ち塞がったとしても。俺は迷いなく粉碎してしまうのだろう。

守るべきものの為に守るべきものを破壊するなど、本末転倒もいいところだろう。自覚しながらも是正できない。俺は無価値だ。地獄に堕ちて然るべき塵。

ゆえにロバーツ。頼む」

そこで閣下は、あろうことか真摯な所作で俺に頭を垂れてきた。当惑するこちらを余所に、重々しい言葉が吐き出されていく。

「俺のようにはならないでくれ。」

未来のアドラーに必要なのは俺のような破綻者ではない、お前のような、誰かに温かい光を与えてやれる優しき男なのだ。

誰かを壊す光ではない。誰かの道を照らしてやれるような光を持つ、そんな優しきお前のままでいてくれ、アルヴィン・ロバーツ。その優しき光で、どうかアドラーを導いてほしい」

俺に投げられる言葉の数々は、心の底からの願いが籠められていた。

ヴアルゼライド閣下ほどの人が、俺なんかに頭を下げ、そのままできてくれと言ってくれている……しかも、俺なんかにには勿体ないほどの称賛の言葉と共に。

ここまで言われて引き下がらないほど、俺も餓鬼ではなかった。

それに、閣下に言われて俺も思い直した。

そうだ。確かに閣下の在り方やその化け物じみたあらゆる強さを羨ましいと憧れることこそあれ、彼になろうなどというのは愚の骨頂だということに。

「大虐殺に見せられた光景が……光が強烈すぎて、どうやら瞳を焦がされていたらしい。大事なことを忘れていた。」

「俺の使命はアドラーを守ること。民草を守ること。そしてアドラーを幸せにすることだ。」

「そこに、俺が閣下のようなになるかならないかなどということは関係しない。まったくの無関係だ。」

「俺が何者であろうとも、ヴァルゼライド閣下のようなになれなくとも、この想いに曇りも濁りもありはしない。」

「閣下のようなになれなくとも、守るために力を尽くすことはできるのだから。」

「……すまない、閣下。どうやら瞳が濁っていたらしい。」

「頭を上げてくれ、馬鹿なことを言ってしまうすまなかつた。不快にさせたのなら謝ろう。申し訳ない」

「否だ、ロバーツ。聡明なお前のことだ、そう言ってくれると信じていたとも。」

「お前の優しきは、誰かを救えるものだ。胸を張れ、そして誇るがいい。」

「その優しさが、お前の何よりの武器であり、そして誇りだ」

「——ありがとう、ヴァルゼライド閣下」

こうして、俺が短くも抱いていた夢は、儂く硝子細工のように散ったのだった。しかし、後悔は微塵も無かった。

初心を思い出すことができ、閣下に勿体ないほどの称賛の言葉をいただけただけから、それは道理と呼べるだろう。

以降、俺の心の空虚感は鳴りを潜めていた。

それはヴァルゼライド閣下が逝去してからも変わらず、自分の初志を見失うことなく、ここまで走り抜けてきた……つもりだったが。

「……ジェイスとの模擬戦以降だ」

そう。制圧作戦の前日に行った、魔星と化したジェイスとの模擬戦。

あれ以降から、俺の心にまた謎の空虚感が飛来していた。

久しぶりに手合わせして改めて感じた、ジェイスの精神の完成度合。

燃える覚悟は猛火のようで、幾度も己が限界をぶち破りながら覚醒していく雄々しい姿に、気付けば俺は瞳を奪われていた。

そして戦いが終わったと同時に、清々しい表情でジェイスと握手を交わしながら、俺の心にはほつきかりと穴が空いてしまっていた。

……何故なんだ？ 何故、このタイミングで？

まさか、ジェイスをヴァルゼライド閣下の鏡写しとして見たからか？

かつての憧れに幻視したからと、本気でお前は言っているのか？

そんなはずはない。俺のヴァルゼライド閣下になりたいという夢は、もはや過去の遺物だ。

もはや目指してもなければなりたいたいとも思っていない。

……そして、ジェイスが去り際に残した俺への言葉が、心の midpoint にずっと引つ掛かっていた。

「違えるなよ、アルヴィン。お前の持つその優しさは『正しい光』だ。

『壊す光』になんて憧れる必要はない。その優しさは誇りだぜ。お前はお前のままでいてくれや」

何故ジェイスは、去り際にあんなことを言ったのだろう。

そして額面通りに受け取るなら、やはり俺はまだヴァルゼライド閣下への未練を捨てきれしていないというのだろうか？

天頂に輝く一番星に……届かぬ願いへ、まだ手を伸ばしているというのだろうか？

「……いいや、否だ。俺は俺のままでもいい」

例えそうだとしても、そんな想いは封じるべきだ。

そうだ、俺が誇るべきは皆一様に認めてくれる「優しさ」。曰く、他者を照らす光。それで上等だろう。自分の力で誰かが救われ、笑顔になるなら、それに勝る喜びなどありはしない。

俺がヴァルゼライド閣下である必要はない。一番星に輝いている必要もない。

俺の「勝利」は、アドラーの笑顔……それだけなのだから。

アルヴィン・ロバーツの願いはただそれだけ。それだけで、俺は幸せに満ちているのだから……

「……さて。いらん時間を過ごしたな。仕事に戻るとしよう！」

余分な思考を即座に切り捨て、先まで対峙していた書類の山と再び向き合った。

そうだ、悩むなんてらしくない。すべては些事だと蹴り飛ばし、行き止まったのなら力づくで押し通し、それでも駄目なら仲間たちに助けてくれと叫べばいい。

何も難しいことはない。生きるというのはそのうちのこと。

半端に揺れるのが人の心だ。それは俺だって例外はない。

こうして中途半端に揺れている己が弱さも受け入れて、胸を張って軍人として生きていこう。



その為にも、仕事には常に本気で向き合わねば。

己に渴を入れ書類群に筆を走らせていると、開け放っていた窓から地を割くような雷鳴が轟いた。

瞳を向ける。どうやらにわか雨が降ってきたらしい。

風も一際強くなり、窓ガラスを割ってしまったわんばかりに力強く吹き荒んでいる。

これでは書類が吹き飛ばされたり濡れたりしてしまう。そうなつてはたまらんと危惧した俺は急いで窓ガラスをすべて閉め切った。

そして、すぐには止みそうにない雷雨と強風が荒れ狂う曇天を、ガラス越しに見上げながら。

「……嵐が来そうだな」

不吉な予感を口端から溢し、晴れない心を引きずりながら仕事へと戻るのだった。

Chapter XVII  
運命はいつも唐突に／T  
h e n e x t h e l l

「ヴァルゼライドつてさあ、確かに凄い奴だけど……なんというか、見てるとおつかないよな。人間とは思えねえ」

「ああ、尊敬はすれど関わりたいとは正直思えねえよ。それを言ったらハーヴェスもだ。何だよあいつ、完璧お化けかつての」

「この前入ってきたジェイスつてやつも相当やばいって話だぜ。ヴァルゼライド二号とか言われてるとかなんとか」

「おいおい何だよ今年は化け物揃いかあ？ おつかねえつたらありやしねえ……」

それに引き換え……ロバーツ、お前は安心できるわ。

いや、ロバーツ、けなしてるわけじゃないんだぜ。お前はヴァルゼライドやハーヴェス達に引けを取らないくらいすげえよ。

ただほら、お前つて人情味があるつていうか、優しいじゃんか？」

——違う。

「それが凄く安心するんだよなあ。あとお前聞き上手だしさ。悩みとかすぐ聞いてくれ

るし、こうやって今だって愚痴にだって付き合ってくれてる。

今の部隊の中でお前のこと嫌いな奴なんて一人もいないって」

——違う。

「そのままできてくれよ、ロバーツ。本当にお前のその優しさには何度救われたか……  
ありがとうな」

「俺からもありがとう、だ、ロバーツ。またこうして一緒に酒飲もうぜ」

——違う。違う。

そうじゃない。そうじゃないんだよ。

俺は……俺は……

■ ■ に、なりたいんだ。

…

…

…

「

覚醒する。」

瞳にまず入ってきたのは見慣れた天井。自分がベッドに横になっているのだと知覚する。

髪をかきあげながら上体を起こした。

……朝だ。

朝に相應しい、爽やかな目覚め……とはいかなかった。

何だ、あの夢は。

あれは、俺が過去に間違いない経験したことがある景色だった。

東部戦線配属中だった当時、同期の仲間からヴァルゼライド閣下達への愚痴を聞いていたのだ。

いや、愚痴と言つても悪口の類ではない。単純に、『怖い』という話だった。だからどう付き合つたらいいのか分からない……とかそんな感じだったと思う。

問題は夢の中での俺だ。

……違う、とはなんだ？

俺は当時、そんな受け答えはしていないはずだ。

確かその時は、「付き合いつらいなら無理に付き合う必要はないだろう。ただ、みんないい奴なのには変わりないからそう煙たがらないでくれ」……的なことを言つたと思う。

そして何より……俺は、何になりたいと口ずさんだ？

不気味だ。何か、自分ではない何かが心の内側から浸食していく感触がする。

俺は、何かになりたがっている？ 何かになることを望んでいる？

その何かとは一体なんだ？ ……よもや、まさか……

「……………雨、止まないな」

大地を叩く強い雨音は、答えを返してはくれなかった。

…

…

…

「はああああアアッ！」

「……………ふッ！」

白刃が瞳の端で煌めいた次の刹那、鼓膜を切り裂かんばかりの鋼鉄音が響き渡った。

燃え広がる炎のように怒涛の攻めを披露するジュードくんの剣戟を、私は一泊ずつ遅

れながら捌いていく。

わざとそうしているわけではない。単純に、私がジュードくん<sup>ジュードくん</sup>に有利を取られているのだ。

ということはジュードくん<sup>ジュードくん</sup>がここに来て急激な成長を遂げ、私の地力を上回ったのか  
と言えば……そういうわけでもなく。

偏<sup>ひん</sup>にこれは、私の完全なる不調だった。

身体の調子が悪いとかではない。体のコンディション<sup>コンディション</sup>に関してはむしろいつも通りだ。

どちらかと言えば問題なのはメンタルの方だった。

自分でも理由は皆目不明なのだが、今朝起きた時から、何故か異様に嫌<sup>いや</sup>な予感<sup>よかん</sup>がするのだ。訳もなく吐き気がこみ上げ、背筋が粟立つ。

何か、不吉なことが起こる前兆を示唆するように、私の生存本能が悲鳴を上げているのが分かる。

では具体的にこれから何か起こるのかと言われたら……分からない。

今この瞬間までは、いつも通りの日常だ。それ以上でも以下でもない。

……ではこの拭い切れない悪寒の正体は何なのだ？

一体何が、私の恐怖心をここまで駆り立たせる……？

「——もらったッ！」

瞬間、裂帛の気合と共にジュードくんの剣突が真正面に走り、私が握っていた刀剣が弾き飛ばされた。

一泊置いてから剣が地面に落ち、鈍い金属音を奏でる。

そして、次の瞬間。

「……す、すげえ！ ジュードの奴、ウォーライラ少佐に勝っちゃった！」

割れんばかりの大拍手が巻き起こった。

ジュードくんを称賛する言葉の数々が四方八方から飛んでくる。

しかし、当のジュードくんの表情は納得がいかないように濁っている。

そしてやがて意を決したようにこちらへ近づいてきて、控えめに私の顔を覗き込んできた。

「あ、あの……自分の勘違いだったら申し訳ないのですが……ウォーライラ少佐、どこかお加減でも悪いのですか……？　なんだか今日は、いつもの剣のキレがないように感じました」

「え……ああ……」

どうやらジュードくんにはお見通しだったらしい。

心配そうにこちらを覗き込んでくるまだ幼さが残る瞳には、一切の汚れなき純真さが

伺える。

……いらぬ心配をかけたしまったようだ。

駄目だな。こんな曖昧な感情に振り回されてちや。馬鹿馬鹿しくてやつてられなくなってしまう。

一旦忘れて……とはいかないけれど、今は仕事に集中しよう。そうすればいずれ、この不快感も消滅してくれるだろう。

そう、信じて。

「……すみません。少し、考え事をしていて上の空になっていました。

もう一度打ち合ってもいいですか？ ジュード君もこのままだと、消化不良でしょう」

「あ、はい……！ ウオーライラ少佐が大丈夫でしたら、喜んで……！」

そう言うや否や、ジュードくんは弾けるように破顔した。

うん、本当に純粋で素直でいい子だな。

そんな彼への非礼を詫げるように、私は神速の踏み込みを以て強烈な斬撃を見舞おうとした——その刹那。

「——緊急事態！ 総員、今すぐ城門前に集合してくれ!!」



「……………え？」

血相を変えて訓練場に入ってきた兵士の大喝と、外で鳴り響く雷鳴が、綺麗なほどに重なった。

…

…

…

「……………何？ 来客だと？ そんな予定は入っていないはずだが」

「え、ええ……………何でも緊急の要件でアポイントメント無しで訪ねにきたとのことですが、如何いたしましょう……………？」

「……………訪問客は誰か、と問うのは愚問か」

数日前に発動した神祖滅殺計画。そしてこのタイミングでのアポイントメント無し  
の訪問。

言うに及ばずという奴だろう。間違いなくカンタベリーの手先だ。

裏で糸を引いているのがアドラーということを伏せるため、魔弓人馬マジタリウスは表向きには

強欲竜団が遺した技術思想を継承した人工進化論提唱団体…… 高度な機械技術による人体のサイボーグ化”を理念としていることにより日本を崇め奉る大和信仰を過去の遺物と断じており、カンタベリーへ敵対行動を取っている——ということになっている。

だがそのカモフラージュも時間の問題だろうとは思っていた。

いずれ機甲巨人化創星録の背後はアドラーだというのが遅かれ早かれ露見する。

ゆえにそうなってしまった時カンタベリーが何かしらのアクシオンは起こすだろうと読んではいたが、まさかこうまで直接的に乗り出してくるとは。

俺は小さく舌打ちを飛ばしながら、報告をしてきた兵へ向けて情報を引き出しにくく。

「ここを訪ねてきたのは騎士団の連中か？」

「は、はい。第三軍団・翡翠騎士団と名乗っております」

「第三軍団……ということは、黄金腕輪か。」

「よりよつてという奴だな」

「ファーストパラディン、シン・榊・アマツ……又の名を黄金腕輪。」

「第三軍団を率いる団長の名だ。」

「年齢六十を超える老体ながらも、鍛え抜かれた徒手空拳は星すら砕き、神をも穿つとき」

え言われている、カンタベリーが誇る傑物の一角である。

その実力は、第一軍団団長、ティールフィング斬空真剣ことウイリアム・ベルグシュライン、そして、総代騎士……否、神祖グレンファルト・フォン・ヴェラチユールに迫るほどとされているらしい。

「念のため尋ねるが、ドラウプニル黄金腕輪はいたか？」

「はい……加えて数十名の騎士たちと……そして、サードパラディン第Ⅲ位階聖騎士、ウルザブルン神聖魂泉も引き連れて」

「だろいな。ということとは、ほぼ交戦は避けられんか」

数十名の兵士と言っていたが恐らくその十倍近くは兵を引き連れているだろう。

この駐屯地付近に騎士達が潜伏しているに違いない。

奴らの狙いは、恐らく補給物資、そして増援の断絶。補給源を潰せば、自ずと既に敵地へと乗り込んでいるジェイス率いる神殺しの仲間たちを下しやすくなるのは道理だ。

徹底されているな。不安の芽は少しでも取り除いておくということか。

どうやら神祖というのも、案外小心者らしい。

だからこそ、それは非常に効率的に効果を表す。現に俺は、一枚してやられたと洗面を作り喰らされている。

だがまあ——それはそれだ。



しろ変わらんか……

分かった、アルヴィン。うちの隊員たちは好きに使ってくれていい。その代わりアルヴィン、貴様——勝手に殉職することだけは許さんぞ。必ず勝て」

「当たり前だ。勝つのは俺達——アドラーだ。見てろ、神祖滅殺を完遂したジェイスと北部の連中で、シャンパンタワーの中を閣下万歳と謳いながら泳いでやる」

『やめろ、想像するだけでむさ苦しくなる』

「ははは——それじゃあ切るぞ、臆。アドラー万歳。大統領閣下に栄光あれ」

臆の呆れるような溜息を聞き届け、俺は無線を切った。

すべての声が途絶えた隊長室で、雨音と遙か遠くで鳴り響く雷鳴だけが嫌に鼓膜を叩き付ける。

しかし、荒れ狂い涙を流している天空とは対称的に、俺の心は戦意と覚悟に燃えていた。

カンタベリーに、アドラーは、荒らさせない。

アドラーのすべてを守る。その為に俺は剣を執り、戦うのだ。

見ていてくれ、総統閣下。貴方が愛したこの国を、民達の笑顔を、俺は必ず守り切つて見せる。

鋼の覚悟を携えながら、俺は軍靴を高らかに鳴らし戦場へと足を運ぶのだった。

…  
 …  
 …

アドラー第十北部駐屯部隊・瞬<sup>カブリ</sup>庄山<sup>コリン</sup>羊が駐屯しているアムステルダム<sup>カブリ</sup>の王宮、その城門前では、虫を一匹も寄せ付けないような緊迫した空気が張り巡らされていた。

今も無言で相対している二人の男——我らが瞬<sup>カブリ</sup>庄山<sup>コリン</sup>隊長、アルヴィン・ロバーツと、第三軍団・翡翠<sup>ジエ</sup>騎士<sup>ド</sup>団長、シン・榊・アマツ……彼らが発する無言の圧に、私は息をすることすら忘れその気迫に呑み込まれかけている。

あの後、緊急招集をかけられた私たちを待ち受けていたのは突然のカンタベリーの騎士団の訪問だった。

しかも、あのカンタベリー最強が一角と名高い黄金<sup>ドラウ</sup>腕<sup>ウブ</sup>輪<sup>ニル</sup>の部隊とも聞けば、気分は最悪という奴だろう。

これから何が起ころうとしているのか……そんなことは馬鹿でも理解が及ぶ。

無論、戦闘……否、戦争だ。

だが、嫌だ。分かっている、必死に頭の片隅でもう一人の私<sup>カブリ</sup>がその現実を否定して

いる。

嫌だ、嫌だ。戦いたくない。戦いたくない。

何で、どうして？ もう少して地獄を抜け出せると思ったのに。軍人稼業ともおさらばと思っていたのに。直前で、こんな……

涙が溢れ返りそうになる私を置き去りに、雨足ばかりが強烈になっていく。

そして、一際強い雷光が瞳に閃いた次の刹那、濡れた白髪をかきあげながら口を開いたのは黄金腕輪ドラッグアップニルだった。

「不躰な訪問になり申し訳ない。本来であれば事前に連絡を取るのが礼儀なのだろうが、いや何、こちらも緊急の要件だったものでね。無礼を承知で勘弁願いたい」

不愛想な相貌から吐き出された声は見た目通りといった具合に低く、しゃがれていたものであったが有無を言わせぬ迫力も内包していた。雨音の中でもよく通る、老体とは思えぬ力強い声だ。

年齢は六十を超えていると資料で確認したことがあったが、そう思わせぬほどに身体が若々しい。というより、凄まじい筋量だ。

ロバーツ隊長やジェイス隊長もかなりガタイがいい方だが、下手をすると彼ら以上……相当鍛え抜かれた肉体なのだと一目で見取れる。

すべてが壯観、圧倒的の一言に尽きる。例えるならば、歴戦の獣王ライオンといったところか。

王者の風格というものをありありと感じる。

そんな思わず竦んでしまうようなプレッシャーに、しかし隊長は一切怯んだ様子も見せず、皮肉めいた調子で言葉を返した。

「いやはや、まったくですな。こうも急に訪問されては我々としても困ったものです。事前に仰っていただければ茶や菓子の用意もできたでしょうに」

「いや、そのような気遣いは結構。要件というのも、すぐに済むものでね——単刀直入にお伺いしよう。機甲巨人化創星録……この名前に聞き覚えはあるだろうか？」

——来た。

この場にいる兵士全員、心の中でそう呟いただろう。

機甲巨人化創星録……言わずもがな、ジェイス隊長が率いる魔弓人馬マジタリウスの神祖討伐作戦

特殊部隊の名称だ。

やはり、カンタベリーは裏でアドラーが糸を引いているということを嗅ぎつけていたらしい。

ちら、と隊長の顔色を伺う。

流石というべきか、隊長は真相をおくびにも出すことなく、手を顎に当てながら記憶を辿るように喋り出した。

「機甲巨人化創星録……確か強欲竜団ファブニルの後釜的なテロ集団でしたかな？ 人体のサイ



ボーグ化を至上のスローガンとし、それを提唱する過激派戦闘集団……確か、そちらは今奴らのせいで甚大な被害を被っているとか。心中お察し致します。いやはや、死して尚手の掛かる連中ですな、強欲竜団は……

……それで、その機甲巨人化創星録が、何か？」

アドラーはまったくの無関係だが、その質問に何の意味がある——？ 言外にそう言っているようだった。

もはや第三軍団がここ、アドラーの地へ上陸している時点で最悪の事態は避けられそうもないがあくまで隊長は何とか戦闘を回避しようと画策しているのだろう。

だから、徹底的に白を切る。それで乗り越えられたら儲けもの思っているのだ。

実際、当たり前だが流血は少なければ少ないほどいい。穩便に済むのならそれに越したことはないし、それはアドラーもカンタベリーも双方が思っているに違いないことだ。

「機甲巨人化創星録——アレは、そちらが差し向けた刺客でしょう。違いますか？」

しかし、そんな平和的解決を黄金腕輪は承認しない。白を切るなら暴き通すまでと、鋭き眼光が更に細められた。

「おかしな話ですな。強欲竜団の後釜というのであれば、どう考えても機甲巨人化創星録はアンタルヤが差し向けたものでしょう。」

第一、総統閣下が存命中ならいざ知らず、今このタイミングでアドラーがカンタベリーにテロ行為を行うメリットは皆無です。濡れ衣もいいところですね。

しかしアンタルヤが差し向けた手先だと仮定すると、奇妙なのは、何故今度はアドラーではなくカンタベリーに牙を剥いたか、という点ですね。強欲竜団はアドラーを駆逐することを主題に活動していた。

頭領の滅亡ダインスレイフ剣がうちの総統閣下にご執心だった、というのも関係があるみたいですが……

まあどちらにせよ、その件に関してはアドラーは無関係です。むしろ我々は被害者だ。お互いアンタルヤには煮え湯を飲まされてばかりで心労が尽きません」

我らに敵意はない、むしろ互いに被害者なのだから言い争うのは止そうと、ロバーツ隊長は肩を竦めながら言外に提案する。

その反応を受け、黄金腕輪ドラウプニルはその皺だらけの顔を一寸も歪めることなく、ふむ、と領きながら。

「つまり、アドラーにはテロ行為をする理由が絶無であり、機甲巨人化創星録フルメタルギガースはまったくの無関係であると……そう言いたいのかな？」

「ええ、まったくの事実無根でしょう。」

とはいえ、機甲巨人化創星録フルメタルギガースは我々にとっても看過できないテロ集団だ。こちらでも

綿密な捜査を行いましょう。強欲竜団フアウニルの時のようにこちらに火の粉を撒き散らしてこないとも限りませんからな。

何か分かれればこちらにも情報を提供しましょう。今日のところはそれで手を打って、お引き取り願えませんか？ 急に騎士団が来たとあつては、北部の民間人たちも気が気でなくなってしまう」

隊長がそう言い切ると、暫しの間沈黙が空間を支配した。

かつてない緊張感に心臓が張り裂けそうになる中、それを打ち破つたのはシン・榊・アマツの気の抜けた声だった。

「……そうですね。いや、疑ってしまい申し訳なかった。上からの命令なのでね、こちらとしても気乗りはしなかったのだが、いやはや、取り越し苦労で安心した」

「……え……？」

思わず声を漏らしてしまう。

な、なんだ……？ 一触即発の空気かと思いきや、黄金腕輪ドラウブニルはあろうことか、安心してのように肩を落とし喉をクツクツと鳴らしているではないか。

……もしかやこれは、戦闘を回避できたのか？

だとしたら何という行幸だろうか。戦闘はもはや避けられぬだろうと思っていただけに、この展開はむしろ願ったり叶ったり、ロバーツ隊長の話術とシン・榊・アマツの

物分かりの良さに感謝するばかりだ。

ああ、良かった……どうなることかと思っていたが、最悪の展開は避けられたらしい。良かった、本当に良かった……と、急速に冷えていく私の心とは対称的に。

「……隊長？」

ちらと伺った隊長の横顔は、研ぎ澄まされた刀剣のように鋭く、険しいものだった。刹那、異常を悟る。これで終わりなどではないのだと。平和的解決したなど、そんなものは甘い幻想であると。

ハツとして目を向ければ、依然として黄金腕輪ドラウブニルは何がおかしいのか喉を低く鳴らしているばかりだ。

彼の隣に佇む年若き少女——サードパラディン第三位階聖騎士、ウルザブルン神聖魂泉ことレナ・キリガクレと思われる——は先からずっと眉一つ微動だにすることなく、日本人形のような静謐と無感情を空気に纏っている。

……何が異常かと問われれば、この空気だ。

充滿していた緊張感は、弛緩するどころかむしろその逆を行っていた。

爆発寸前の花火のように、極限まで張り詰めている。

「ご協力ありがとう、鳴殺笛シューリングス。では——」

——次瞬、空気がビキリと罅割れる音を聴いた。

「——疾く、死ぬがいい」

核弾頭が如き殺意の熱を漲らせた声が鼓膜を駆け抜けた瞬間、天地を割るような衝撃がアドラー北部を震撼させた。

シン・榊・アマツの振りぬいた拳の一閃が隊長の影を貫き、大地を抉り飛ばしたのだ。まだ基準値アベレージと思われるのになんという規格外な身体能力……あまりの破壊力に思わずゾツとする。

撒き散らされる破壊の渦から飛び退くように回避行動を取りながら、隊長は神々に宣誓するように高らかに声を張り上げた。

「——総員、戦闘態勢に移れッ！ もはや話し合いで解決できる領域はとうに突破した！

！ 宗教徒共にこれ以上アドラーの地を汚させるな！ アドラー万歳！ 総統閣下に栄光あれ——！」

『アドラー万歳！ 総統閣下に栄光あれ！』

瞬間、光に狂った大喝破が騎士団を殴りつける。

地脈を奔り伝導する気合と根性、光の決意。アドラーを必ず守るのだという鋼の熱量を携えて、瞬<sup>カブリコ</sup>庄山羊の兵士たちは皆意気揚々と抜刀するのだった。

……私一人を、除いて。

「——くそつたれッ……!」

血が滲むほどに下唇を噛みしめて、私も遅れて腰に掛かるロングソードを抜剣した。何で、何でいつもこうなるんだ。

地獄の底で苦しんで、のたうち回って、抜け出したと思つたら、また次の地獄、地獄、地獄に次ぐ地獄……終わらない、終わらない、終わらない、無間地獄……

どこまで、この地獄という概念は私に付き纏えば気が済むのだろう。

もう十分に苦しんだだろう。もう十分に痛みに喘いだだろう。

まだ地獄の鬼たちは、私の絶叫が欲しいと哄笑を響かせるのか？

ああ、クソ、クソ、クソ、クソッ……!

「——ウオーライラ!」

瞬間、怨恨に我を飲まれそうになった私の鼓膜を撫でたのはロボーツ隊長の優しい声だった。

瞳を向ければ、そこには、これから戦争が始まるとは思えないほどに穏やかな顔をしたロボーツ隊長の顔があつて、そして。

「ウォーライラ、お前は民間人たちの避難を頼む。このままでは無辜の民草たちがこの戦いに巻き込まれてしまう。それだけは何があっても防がねばならない。

避難ルートは覚えているな？ お前が入隊して初日に作った避難経路だ、はは、懐かしいな」

「た、隊長……何を……」

「つと、お喋りしてる時間はもうない。頼んだぞ、ウォーライラ！ アドラーの民すべて、軍人の俺たちの宝だ！ 何が何でも守り通してくれ！」

早口にそう捲し立てると、今なお拡大し続ける戦火の中へと隊長はその身を投げ出していった。

……まさか、隊長はわざと……？

私が、戦いたくないのを見越して？ お前はもうこれ以上傷つく必要はないからと、身を案じてくれた？

だから、民間人たちの避難活動に注力してくれと……？

だとしたらこんな嬉しいことはない。何故ならこれで私は流血せずすむ。傷つかずに済むのだ。

いや、正確に言えば民間人たちの避難中に何人かの騎士たちと交戦になるかもしれない。

だがそれもはや誤差だろう。最悪、ドラウブニル黄金腕輪やウルザブルン神聖魂泉のような強者と刃を交えることにならないければ私はそれでもいいと思っている。

彼らと相対するだけで、死へのリスクが一段と上昇する。それだけは、私の幸せの為にあつてはならないことなんだ。

ゆえに私は戦場から踵を返す。既に救助活動を開始している子たちへ合流するべく足を走らせて——走らせる、べきなのに。

「……なんで。なんで、何で何で……動け、私の足ッ……！」

私の足は、一向に動き出す気配を見せなかった。

まるで私の身体自身が、行くなど総身を大地に縫い付けているかのようだった。

何で、どうして、と逸る気持ちの裏側で、しかし私はその理由を知っていた。

——私がここを離れたら、隊長はどうなる？

言うまでもなく、今この戦場における最強戦力は、隊長、私、ドラウブニル黄金腕輪、ウルザブルン神聖魂泉の四人だろう。

では、その私が抜けたとして、残った敵方の二人の相手をするのは誰だ？

問うまでもなく、隊長しかいない。隊長にしかできないだろう。いくら雑兵が束になったとて、あの二人どちらかさえ打倒するのは困難を極めるに違いない。

そんなカンタベリーの猛者である黄金腕輪と神聖魂泉を相手にして、果たして隊長は



無事に済むのか？

また明日、と気軽に顔を合わせることができるのか？

断じて否だろう。片方であれば撃滅は可能かもしれないが、どう考えても二人相手取って確勝が得られるほど、第三軍団もヤワではない。

となれば副隊長である私を戦場から遠ざけるなど、下策も下策。隊長自身の生存率を大幅に低下させる要因となっている。

……それなのに、あの人は……自分より、私なんかを優先して……

「……本当に、馬鹿隊長ッ！」

溢れそうになる涙と苦言を胸にしまい込み、今度は迷うことなく、止まることなく――私はロバーツ隊長が突っ込んでいった戦火の渦へ、自身もその身を投げるのだった。

# Chapter XIV 龍虎相搏つ／Capricorn VS Jade

「つまり貴方達は千年を生きる人智を超越した存在、『神祖』であり、新西暦が誕生してから今までというもの、このカンタベリーを統治してきた……それらの話を、信じろと？」

大聖堂に力強く響き渡ったのはカンタベリーが誇る最強が一角、黄金腕輪ドラウブニルと呼ばれる老拳士のしわがれた声だった。

咎めるような鋭い一声を受け止めたのは、玉座に涼し気な表情で腰掛けるカンタベリーの教皇……否、千年を生きる少年、神祖スメラギである。

並の者ならば聴いただけでも失禁を禁じ得ない圧力が籠められた肉声を受けてもしかし、スメラギの微笑は曇らず、歪まない。

まるで、総て識っていることだから焦る必要はない——とでも言わんばかりに、万物を見通すかのような両眼は、真つすぐにシン・榊・アマツと……その傍らに無言で待っているレナ・キリガクレに注がれている。

そして品定めするように顎を一撫ですると、散歩にでも誘うかのような気の抜けた口

調でスメラギは言葉を紡ぎ出した。

「聡明な君であれば信じてくれると思つてゐるよ。だからこそこうして君たちだけに召集をかけ、本来であれば秘匿の情報を開示している。僕は君たちを信じてゐるからね」

そう。今この場にいるのは神祖スメラギ、シン・榊・アマツ、レナ・キリガクレ、真実この三名だけだ。

他の者は蟻一匹とて存在してゐない。それはスメラギから直々に第三軍団を率いるこの男女に伝達があるということの意味してゐた。

それも、生半可なものではない。スメラギは、本来であればカンタベリー内でもほんの一握りしか知ることを許されてゐない己らの真実——神祖の實在を、腹を割つてシン達に開帳してゐた。

旧西暦が滅びてしまった過去から新西暦が誕生してから千年もの間、自分たちがどのように生き、そして何を背負いここまで進んできたのか。

このタイミングで現れてしまった最大のイレギュラー、今現在カンタベリーを脅かしている脅威、神殺しに關しても余すことなく話し尽くした。

スメラギの話に隙はない。矛盾を徹底的に潰し尽くし、有らん限りの説得力を内包させて最後まで話し尽くしてゐた。

そうしなければ、カンタベリーの騎士の中でも特に癖の強いこの男女は簡単に納得し

てくれないだろうと分かっていたのである。

現に、今こうして話し終えた後でもシンは訝し気にスメラギを睨めつけ、眉を岩石のように固めている。

一方レナはどうかと言えば、徹頭徹尾無言、無表情を貫いている。まるで、スメラギの話など心底どうでもいいと言わんばかりの態度だ。

緊張の空気が充満していく。

常人であれば卒倒は免れぬであろう重々しい空気が密度を高めていく中、唐突にシンは破顔し低い笑い声をあげた。

「いやはや、信じぬも何も……そのような話、信じるほかないでしょうに。

ずっと儂は疑問だったのですよ。何故貴方のような餓鬼が教皇陛下を務め、あのような若造が総代騎士を担っているのか……甚だ疑問だった。

無能かと言われればそういうわけでもなく、揃って傑物、化け物のような能力値を持つていた……儂より若い、童の分際で。

だが千年を生きているのなら納得だ。何故なら、長く生きていればいるだけ積める経験は多く、厚くなり、強固となる。つまり長く生きていればいるほど強くなり、人の上に立つことができるのは道理、この世の真理だ。

ならば神祖の實在、認める以外の愚行、何処にありましようや?」

「うん、ありがとう。君ならそう言ってくれるだろうと思っていたよ。レナ、君はどうだ  
い?」

「——シン様がお認めになる、というのでしたら、私もそのように。シン様のご意思が、  
私のすべてですゆえに」

「うん、君もそう言ってくれるだろうと思っていたよ。二人とも聡明で本当に助かるよ」  
シンは嗤い、スメラギは微笑み、レナは淡々と呟いた。

それぞれが抱いた思惑と感情は三者三様であつたが、これで条件は達成されたとスメ  
ラギはその慧眼を僅かに細める。

そう。今話したことは前座に過ぎない。本題はここからなのだ。

「そこでそんな君たちに折り入ってお願ひがあるんだ。今話した通り、僕たちは現在皇  
都に潜む神殺し達に手を焼かされている。

オーバードライブ  
限界突破率フルメタルギガースいる機甲巨人化創星録のバックがアドラーだということは、さつき話した  
よね?」

「むしろあのような光に頭を焦がされた戦い方ができるのはアドラーを置いて他にない  
でしょうに。まったく、光狂いという連中は甚だ忌々しい」

そこでシンは、光狂いという破綻者へ嫌悪を示すように侮蔑の言葉を吐き捨てた。

スメラギもそれに同調するように、「気持ちには分かるよ」とシンの言葉を肯定しながら話を続ける。

「そこでだ。皇都に潜む神殺し達は僕たちと斬空真剣率いる第一軍団で対処できるんだけど、念には念を入れておきたいんだよ。」

——君たちには、アドラーの北部に構える第十北部駐屯部隊・瞬圧山羊カブリコーンを潰してきてもらいたい」

「……なるほど。補給源、そして増援の可能性を潰しておきたいと。」

確かに今もアドラーの北部に増援が待機している可能性は大いに高いでしょうし、それこそ鳴殺シューリンクスが援護にこの地に降り立とうものならより面倒なことになるでしょうからな」

「その通り。もう既に天秤てんぺんの侵入を許しちゃっているのが手痛いところなんだけど、まあ傲然と言いのけてしまえばそれも誤差だ。」

これ以上状況が悪化しないためにも、よろしく頼まれてくれないかな？

——勿論、ただでは言わない。相応の報酬は用意するつもりだ」

そして、これから話すことが前座で話したことと連結してくるのだと言外にスメラギは告げるのだった。

然り。すなわち、シン達に与えんとする報酬……それは——

「もし君たちが今回の任務を完遂出来たら、君たちを新たな使徒として歓迎したいと思っている。」

本当は今すぐにでも洗礼をしてあげたいんだけど、洗礼行為は僕たちの力を削って行う行為だからね。皇都がこうなっている今、できるだけ自分たちの力を削ぎたくないんだ。

だから、すべてが解決したあとで、ということになるけど、どうだろう。向上心が強い君たちのことだ。そう悪い話でもないだろう?」

春風のような柔らかい笑みを携えながら、スメラギは二人に問いかけた。

シンは獯猛に犬歯をむき出しにし、決まっている、と前置きしてから。

「拝命致しました、教皇陛下……否、神祖スメラギ。」

そしてお約束致しましょう。儂こそが歴代最強の使徒となり、神々を支える柱になるということをしる

「おや、もう瞬圧山羊カブリコーンは攻略したも同然かい? 鳴殺笛シューリンクスは傑物だよ、しかも君の大嫌いな

光狂い属性持ちだ」

「所詮は気合と根性を抛り所にしかできん若造でしょう。経験も才能も積んできた修練も、すべて余さずこちらが上回っている。ならば負ける道理がどこにありますか?」

神に選ばれし黄金腕輪ドラウブニルの前に、醜アイギバーンき獣人のみすばらしい音色など、糞尿も同然。光で焦がして粉砕してくれよう」

「それは頼もしい限りだ。期待しているよ。レナもそれで構わないかい？」

「シン様が然りというのであれば。私に異論などございません」

「ははは、君は本当にシンのことを愛しているんだね。仲睦まじくて何よりだ。」

——では、第三軍団・翡翠騎士団ド团长、並びに副团长。

黄金腕輪ドラウブニル、シン・榊・アマツ。神聖魂泉ウルザブルン、レナ・キリガクレ。皇都を脅かす神殺しを

バックアップする瞬圧山羊カブリコーンの殲滅、並びに鳴殺笛シューリンクス、アルヴェイン・ロバーツの殺害を命じ

る。期待しているよ、二人とも」

『——我ら、神祖カミの御心がままに』

…

…

…

掻き鳴らされる鋼鉄の旋律。吹き上がる血飛沫。轟く喝破と大絶叫。



アドラー北部、旧オランダ領であるアムステルダム<sup>ダム</sup>の王宮前を中心とした区画全域には、筆舌に尽くしがたい鬪争の戦火が燃え広がっていた。

一秒、また一秒と時計の針が進むたびに呆気なく散華していく命たち。

然り、これが戦争なり。命を守るために、命を奪う行為。その究極。

今ここに、第十北部駐屯部隊・瞬圧山羊<sup>カプリコーン</sup>と、第三軍団・翡翠騎士団<sup>ジエード</sup>の血で血を洗う殺戮舞台の幕が上がっていた。

「おおおおおおオオオ——ッ！」

「吼えるな、童<sup>わっは</sup>が。反吐が出る」

「——」

そんな激闘の中、より多くの死体を築き上げ戦場を疾駆していたのは三人の男女だった。

一人は瞬圧山羊隊長、アルヴィン・ロバーツ。既に星辰光を発動し、流星のように弓矢を乱射しながら雑兵を次々に蹴散らし、二人の男女へ肉薄している。

その二人の男女とは、翡翠騎士団<sup>ジエード</sup>団長、シン・榊・アマツ、そして副団長のレナ・キリガクレであった。

シンはまるで虫を相手にしているかのような嫌悪した表情を隠そうともせず、そしてこれもやはり蚊でも払うような所作で通り過ぎざまに兵士の頭蓋を、心臓を、全身を——

—風船でも割るかのように拳で粉碎している。

そんな彼の前方を疾走するのはレナだ。踊るように宙を舞いながら、シンに降り注ぐ攻撃の雨の悉くを鋭剣<sup>レイピア</sup>で防ぎ、撃ち落としている。

浮かべる表情は徹底して虚無そのものだった。まるで日本人形、あるいは能面のように顔面のパーツを一つも動かすことなく、涼し気にシンの活路を切り開き、効率よく死体の山を量産していく。

「つれないじゃないか黄金腕輪、<sup>ドラウブニル</sup>神聖魂泉<sup>ウルザブルン</sup>！

神々の使いっぱしりの道具なんだろう？ なら俺の鳴殺<sup>シューリンクス</sup>笛とも遊んでくれよ、なあアツ！」

意識がこちらへ向くように、挑発をかけるアルヴェイン。

このような安い策に引っ掛かってくれるほど頭の弱い連中ではないことなど百も承知だが、これ以上彼らに好き勝手させてはいけない理由がアルヴェインにはあった。

—そう、殺されすぎているのだ。

戦闘が始まりまだ十分も経っていないが、この眼前の男女が撃砕した命の数は六十を突破していた。

驚異的な効率、そして殺人技巧だ。

……いいや、そんなことはどうでもいいのだ。何より、そんなことよりアルヴェインの

心が燃えている理由は……

「これ以上誰も、死なせてたまるか」

これ以上、仲間の死に顔は見たくない。ただその一点に尽きていた。

大地に眠る死に顔を、彼はすべて覚えている。

サンドラも、ジャンも、フランシスも、リユックも、みんな、みんな……俺の仲間だっ

たんだよ。部下だったんだよ。家族だったんだよ。

それを目の前でのうのうと殺され続けて、なあ——

「我慢できるわけないよなアアッ!!」

焼け付く嚇怒を引き絞り、渾身を籠めてアルヴィンは星の力を励起させた。

蜜に群がる蜂の如く、計三十の弓矢がシンとレナに降り注ぐ。

退路はない。回避は不可能。絶命とまではいかずとも、致命傷を叩き付けることがで

きるであろうアルヴィンの猛撃は——

「レナ。跳べ」

「承知致しました」

短くそう告げた瞬間、シンは酸素を深く吸い込んだ。そして——

「——シヤアアアッ!!」

裂帛の気合一閃。星ごと叩き割らんとばかりに炸裂した迅雷の震脚に、大地が悲鳴を

奔らせた。

稲妻のように大氣中に流れ出す衝撃波。一瞬で繰り出した破壊の波濤は、殺到していた弓矢の大群を刹那のうちに粉微塵に破砕してしまった。

「――なるほど。黄金腕輪ドラッグブニルは伊達ではないか。拳の極みはここにあり……と。しかも基準値アスレージでその威力……研ぎ澄まされているな」

一連の攻防を見届けたアルヴィンが漏らした一言は、素直な称賛だった。なるほど、これは分かりやすく強い。

小細工抜き、純粋な武芸だけで突出した傑物だ。もとよりそんなつもりはないが、決して舐めていい相手じゃない。

先に言った通り、問題なのはこれがまだ基準値の破壊力であるということ。

彼はまだ発動値に移行してすらおらず、当然星辰光も発動していない。

……というより、発動する必要がないと思っている節さえある。こちらなど容易く基準値で蹴散らせると踏んでいるのだろう。

ならばその傲慢、踏み躪る以外に手はないだろう。

自らの傲慢で溺れ死ぬがいいと第二撃をシンに奔らせようとした、瞬間。

「上だ。虚けが」

上空より、神聖魂泉ウルザブルンが飛来した。

先にシンの震脚に巻き込まれないよう跳躍した際、勢いそのままにアルヴィンの頭上まで移動していたのだろう。

照準はもう終えている。その煌めくレイピアの刃先をアルヴィンの頭部に突き刺せばチエツクメイト王手詰みだ。

だが無論、アルヴィンもそれに気づいていた。

だからあえて誘い出した。レナが剣先を振りかぶろうとしている背後、迫る三本の矢に彼女はまだ気づかない。

シンが一泊遅れて声を上げるが、もう遅い——！

「ッ……——！」

弓矢が穿通する寸前、レナは迫る殺気に身を振じらせた。

流石というべきか、咄嗟の回避行動だったにも関わらず三本の弓矢の直撃は許してしまったがいずれも致命傷を避けている。

だが、アルヴィンの攻撃はまだ終わりではない。貫通した弓矢はレナの血を吸い上げながら軌道修正——再び心臓に狙いをつけた。

そう、アルヴィンの能力は投射した金属の半無限操縦。弓矢に星の力が付与され続けている限り、死の風はどこまでも敵を追尾するのだ。

当然、シンはレナを守るべく行動を起こすだろう。このままでは言うまでもなく、レ

ナは絶命不可避である。

その隙を一気に叩き、二人に致命傷を叩きこむ。

しかし、アルヴィンの思惑は――

「レナ、そのまま突き刺せ」

「何ッ――？」

その一言で微塵にされることになる。

レナの心臓に迫る弓矢。そして同時にアルヴィンの頭蓋に落ちてくる死の鉄槌。

このままでは相打ちになることは必定。アルヴィンも死に、レナも死ぬ。

このシンという男は、敵を葬るために部下に死ねと命じたのか――？

「貴様――」

「死ね、シューリンクス鳴殺笛」

今、死のギロチンが振り下ろされ、二人の戦士の命が尽きようとした――その刹那、鋼の颯風が両者の間に割り込んできた。

「ッ………！」

弾かれるレナのレイピア。弾き飛ばされたことにより弓矢の着弾地点は座標からズレてしまいレナを仕留めるまでには至らなかつたが、おかげでアルヴィンの命も両断されることになった。

両者の間に割り込んできた乱入者。それは――

：

……

……

「――ウオーライラ……！」

今まさに隊長の命を破砕せんと迫っていた死神の刃を弾き飛ばしながら、私は血風吹き荒ぶ戦場へと躍り出た。

隊長の困惑する声。敵から投げられる殺意の感情。居たたまれない思いに、思わず愚痴と吐瀉物を漏らしてしまいうさだ。

自分でも本当に何をやっているんだという感想しか出てこない。らしくない。らしくないんだよ、こんなこと。

自ら地獄の渦中にその身を投げ出すなんて……まったくもって非論理的だ。普段の私ならあり得ない行動。愚行の極み。今でも逃げ出したい気持ちと必死に戦っている。

……けど……それでも、隊長は……隊長だけは……

胃がひっくり返るような不快感を抑えながら、私は大きく息を吸い込んで隊長をかば

うように剣先を構えた。

「民間人の避難はソフィーちゃんたち含む第九小隊のみんなに任せてきました。

私も戦います、隊長。常識的に考えてくださいよ、あんなの纏めて相手取って、いくら隊長でも勝てるわけないでしょう。光で脳みそ焦がされすぎです、総統閣下に心酔するのはいいですけど正常な思考回路くらい残しておいてください」

恐怖に痺れる舌先を無理やりに動かして、なるべく平静を保とうとする私。

我ながらなんとも情けない醜態ぶりだが、そこは平に容赦願いたい。こちとら、現場・経験は初なのだ。

いつかこういう日も来るだろうと思っていたけど、初の実戦、初の戦場……怖くない訳ないだろう。

でも、それでも、その恐怖心に勝るくらいに、私を突き動かす恐怖どうきがあつたから。

「ウォーライラ……お前、何で」

そんなの、決まっている。

「馬鹿隊長。私のせいで隊長が死んだ、なんてことになったら、寝覚めが悪いでしょう。もう私は、自分の無力のせいで大切な人を失いたくないんです。

隊長は、私の恩人なんですよ。死なせたくないって思うのは自然じゃないですか。思つて悪いですか。



第一、・隊長、私の幸せを見つける手伝いをさせてくれって言ったじゃないですか、約束

を反故にしたままお別れとか、最悪でしょう。男としてそれでいいんですか」

「……ああ、そうだな。そうなってしまったら、俺は総統閣下に顔向けできん。

すまん、ウォーライラ。そしてありがとう。俺自身が言ったことを、忘れてしまうとはな」

瞬間、私と隊長の瞳が重なる。

何故だろう。怖いはずなのに、私も隊長につられて口角が上がってしまった。

この人と一緒なら、きつと大丈夫だなんて思えてしまったから——

「ピンチな隊長を助けてくれ、ウォーライラ副隊長」

「——仕方がないんですから」

零れた一言は、自分でも驚くほどに澄んでいた。

重なる心に頼もしさを感じながら、私は果敢に大地を蹴り上げる。

私は神聖魂泉に、隊長は黄金腕輪に、己が得物を渾身籠めて振りかぶるのであった。

## Chapter XX 黄金腕輪／Draupnir

大地を濡らす雨風は、まるで天の慟哭が如く強烈な様相を呈していた。

広がる曇天は闇のようにどこまでも深みを帯び、第二太陽アマテラスの輝きを遮っている。

建物を殴りつけていく突風も、決して無視できないレベルの猛烈さを乗せたまま、戦場を駆ける兵士たちに水滴と血の匂いを運んでいた。

雷雨と烈風、剣と血と暴力が渦を巻き撒き散らされる地獄の窯の中——すべてを薙ぎ払う炎のように疾走する二つの影があった。

「黄金腕輪ドラウプニル！ どうした、男なら正面切って正々堂々勝負するのが筋だろう！ それとも隣に神聖魂泉ウルザブルンがいなければ何もできない腑抜けなのか貴様は！」

弦を引き絞り連続で弓矢を連射——天に轟く雷ごと貫かんとばかりに猛撃を浴びせているのはアルヴィンだ。

鷹の目の如き鋭い眼光と洞察力を以て、敵対する障害を確実に射止めてみせると戦意を滾らせ、星の輝きを放っている。

「糞餓鬼が。口の利き方を弁えろ。一体誰に向かつてものを言っている、神聖魂泉あんなものがいなくても、儂の強さは絶対だ。断じて濁りはしない」

対し、腫れ物に扱うかのような辟易とした態度を隠そうともしない——それでも、基準値アベレージの状態でアルヴィンの弓矢すべてをいなすという神業的な体捌きを披露しているのはシンである。

心の底から、アルヴィンという光狂いにかかわりたくない……接触したくないという思いが強いのか、追跡するアルヴィンから逃走するような形で、通り過ぎざまに雑兵の頭蓋を粉碎して回っていた。

その様子は、傍から見れば鬼ごっこそのそれに見えるだろう。追いかけるものと追われるもの。追う者はどこまでも必死に、熱量を携えて。追われるものはどこまでも冷め切り、呆れたように。

この二人の戦闘は、アルヴィンの一方通行状態となっていた。

「二対一ならまだしも、これは集団戦だぞ愚か者が。ならば雑魚から潰しておいた方が効率がいいだろう。長期戦を見越してなら尚のこと。」

近頃の若者はそんなことさえ知らんのか？ 浅学だな、その脳みそはかぎりなのか？

「ほう、つまりそれは俺を強者と認めてくれているというわけか？ お褒めにあずかり恐悦至極だ、神に選ばれた黄金腕輪ドラップニル様よオッ！」

「阿呆か。儂から見れば貴様らはすべて塵芥と同じ。若者の貴様らが、儂に勝てる道理

がどこにある？ 年長者を舐めるなよ塵屑どもが」

シンの眼前まで迫り、今まさに眼球を貫かんとしていた弓矢が木っ端微塵に砕かれた。

居合いのように繰り出された神速の肘打ちで迎撃されたのだ。名を、頂肘。ちやうちゆう

背後に迫る弓矢も同様——背筋による体当たりで無力化される。名を鉄山靠。てつさんこう

ならばと数を増やして弓矢を殺到させるも、腰を鋭く回転させた正拳突きに余さずずべてが破砕する。名を、冲捶。ちゆうすい

ここまでシンの技の多くを見てきて、アルヴィンはその正体に確信を得ていた。すべての技が絶技、神業。一打必倒、一撃多殺を旨としている。

間違いない。シンの扱う武術、体得している拳法、それは——

「——中国拳法。それも、一撃必殺を旨とする『八極拳』か」

「ほう。八極拳を知るか。浅学なりに、多少は学習しているようだな」  
書物でだが伝聞したことがある。

旧曆に存在したとされる中国という国家で誕生した中国拳法が一つ……超至近距離戦闘を想定し、実践的な殺人術のみを追求した、どこまでも破壊力に秀でている拳法だ。

前述した通り、八極拳を極めたならば当てる技どれもが絶殺、確殺。その技を受け五体無事などまずありえない。

そして眼前のシンという拳士は、当然のことながら八極拳を達人の領域まで極めているのだらう。披露された全攻撃、その破壊力がすべてを物語っている。

だからこそ発動値トライブのアルヴィンとも互角に渡り合えている。すべては積み重ねてきた修練と時間の成果。シンの束ねた経験すべてが、アルヴィンの命に爪をかけようとしていた。

「だが知ったところでどうにもならんがな。儂の八極に穴はない。星辰光アステリズムを使うまでもなく、貴様ら如き餓鬼、この身一つで充分に根絶やしにできる。若造どもが束になったところで、儂の経験いのちの厚みには勝てんのだよ。分際を弁えろ」

「……先ほどから随分な言い様だな。そんなにもお前は若者が嫌いか？ 年寄りの自分だけが可愛くて仕方がない——そう言ってる風に聞こえるが」

そう、アルヴィンは先からシンのある態度が気になっていた。

若者を悉く見下している。まるで、老齡の者にしか人権はないとも言わんばかりの過激な物言いに、アルヴィンは異様な違和感を抱いている。

この男の思想は、何かが狂っている。常人では及びもつかない狂気が、この男の胸中を満たしている。

そんなアルヴィンの予感を肯定するように、シンは鼻を鳴らしながら重低音を響かせた。

「そんなことは当然だろうが。長く生きた者の方が偉く、強く、賢く、価値がある。当然のことだ。儂に比べて貴様ら若造の命なぞ木っ端同然よ。火にくべる価値もない」

「……なんだと？」

吐き出された言葉が鼓膜を通り抜けた瞬間、アルヴィンは信じがたいものを見るかのような瞳をシンへと向けた。

しかし当のシンは、その向けられる視線こそ理解が及ばないとも言おうかのように言葉が続けていく。

「何を驚いている。まさか貴様ら、己に価値があるとでも勘違いしていたのか？ そんなわけなからう。年功序列という言葉を知らんのか？ 年若きゴミどもなぞ、年寄りを立てる薪のようなものにすぎんだらう。むしろ、我々の下地になれるだけ感謝するがいい」

言っている言葉の意味を、アルヴィンは理解できずにいた。

一体、こいつは何を常識を述べるかのように当然の口調でしゃべっている？

そのような狂気的な思考回路を、まるで、「生きていれば腹が減る」とでも言うかのような感覚でぶちまけられる？

「いつだって世界の主役は長く生きた者、つまり儂のような年長者だ。たかが世界に産み落とされて十や二十の淬かすに何の価値がある？ 重ねた経験も、費やした年月も、すべ

てこちらが上回っている。ならば総合的に価値があるのは儂らであろう？

儂は何か間違つたことを言っているか？」

「——間違つたことしか言っていないだろうが、老害」

アルヴィンの口から吐き出された感情は侮蔑そのものだった。

積んできた研鑽や技術には敬意を払う——だがしかし人間性に関しては別だ。アルヴィンはこのシンという男とは、永劫相容れることができない存在だとこの瞬間に確信する。

「鍛え抜かれた拳とは対照的に、頭の中は未熟なままだな黄金腕輪。ドラウプニル」

価値があるのは老いた方で？ 若者はそいつらの下地だと？ 拳句の果てに主役は年老いた年長者とは……呆れて言葉が出てこないな。俺はなるべく人の意見を尊重したいタチなんだが、貴様のその意見にだけは耳を貸せない。

むしろ逆なんだよ、よく聞け黄金腕輪。ドラウプニル 若者の下地になるのはむしろ俺達、年長者の方なんだよ。これからの世界を築いていくのはいつだつて若者、これから生まれてくる子供たちだ。そんな若人が生きやすい世界をつくるために、俺たちがその道筋を塗装し、照らして、これからの時代を担う者たちへ想いを継承していく……それがあべき世界の姿じゃないのか？」

それはかつて酒の席でジェイスと共に語つた偽らざる彼らの本音であつた。

無辜の民たちの笑顔を、若人たちの未来を守りたい。明日の笑顔を守りたい。だから俺たちは戦えるのだと。

自分たちの次の世代を生きる子供たちに、立派な大人になってほしい。そして胸を張り、笑顔の花を咲かせながら、年長者おれたちの足跡を超えていつてほしいと。

アドラーを愛した閣下も、そう思っているに違いない、と。

それなのに、この古いぼれた神の手先は。

「いつまでも己が主役だなどと——出しゃばるなよ老害め。アクマ

お前の時代など、当の昔に終わっているんだよ。年長者を気取るなら、黙って若人かれらの旅路を見守る余裕くらい見せたらどうだッ！」

それこそが少しでも長く生きている自分たちに課せられ使命だろうと説きながら、アルヴィンは星の力をより一層激烈に喚起させる。

少しでも言葉が届くようにと。お前のその考えは今この世界にとつては癌細胞ではないのだと。僅かでも改心してもらえたのなら、と優しさを籠めたアルヴィンの言葉の数々は。

「意味が不明だ。この世の言語で話せ」

空間に亀裂を刻む震脚と共に余さず吹き飛ばされた。

攻撃も、言葉も、想いも、一切がシンに届かない。



「誰が未来の話をした。儂は今現在の話をしている。現時点で最も価値のある人間は長く生きた者なんだよ。今しがた生まれた赤子に何の価値がある？ 何の経験も研鑽も積んでいない塵に。ただ糞尿を垂れ流すだけの虫以下の愚物だろうが」

「赤子が経験や研鑽を積んでいないのは当然だろうが！ 生まれたばかりなのだから。そんな赤ん坊が、これからのような道を進み、先人たちを超えていくのが楽しみであり、この世界の希望なんじゃないのか！」

「その赤子が歴史に名を刻むだけの偉業を成すという保証はあるのか？ 遙か未来に、その赤子が世界に役立てるといふ保証はあるのか？ ないだろうが、そんなものはどこにも。ならば若者など必要ない。何故ならば経験豊富な年長者たちだけですべてが事足りているからだ。すべてにおいて、若者は年長者に比べ経験不足、研鑽不足、命の厚みが違うんだよ」

「命の価値を経験値だけで測るな！ 第一貴様、若者を随分とこき下ろしているが……貴様にも若き時代があったはずだ。今よりも未熟な、今よりも青い、貴様が言う今よりも無価値な時代が！ そんな己の過去さえ、貴様は無価値と断じるのか！」

「ああ。過去の若き頃の儂など塵屑だ。だが若き頃の儂が得た経験値、積んだ研鑽は今こうして年老いた儂に役立っている。その点に関してはよくやったと言ってやりたい。

だが、重ねて言うぞ小僧。若き頃の己など何の価値もない。価値があるのは、今こ

うして完成している儂自身だ。過去の儂ではない」

シンの言葉を受け、アルヴィンは絶句した。

シンはあるうことか、今の自分と若き頃の己を別のものとして切り離して考えているのだ。

人生とは点ではなく線だろう。誕生した瞬間から積み重ねてきた経験が、今の自分を象っている。乖離して考える人間などそうそういない。

よって、シンが今しがたぶちまけている価値観は一般的な視点から見れば支離滅裂だった。断じて、シンの言う「年長者」が口にしていい論理的な思考ではない。

……そう、それは、例えるならば――

「だからな、儂は許せんのだよ」

「ッ！」

瞬間、シンの殺気が倍加して膨れ上がった。

今までアルヴィンから逃げるばかりだったシンが、初めてそれらしい攻勢行動へと移行する。まるで、『お前の存在が許せない』と言うかのように。流星のようにその鍛え抜

かれた最強の鉄拳を奔らせた。

「貴様ら、『光狂い』という存在がなッ!」

刹那に間合いへ踏み込んできたシンの魔拳がアルヴィンの影を穿通した。

爆散する大地。轟音が曇天へと吸い込まれていく。

続けざまにシンは第二撃へ移行、アルヴィンも負けじと迎撃の態勢へと移った。

「本来は年長者が若人に負ける道理などどこにもない、儂のような傑物なら猶の事。儂は神に愛された黄金腕輪ドラウブニルなのだからなア! それを何だ貴様らは……気合? 根性?

そんな抽象的な概念で軽々われわれ限界を超えられてたまるか! 道理に合わんだろうが、破綻者どもめ!」

想いの力で限界を超える? 彼我の実力差すら覆して? 致命傷すら知らぬと吹いて? 覚醒、覚醒、また覚醒と——ふざけるな貴様ら。それがどれだけ道理を外れた手段か分かっているのか?

長年積み重ねてきた経験の結晶を、たった一度の『覚醒』などというふざけた根性論で覆されるなど……あつてはならないんだよ、そんなこと!

「アドラーは狂っている。あの英雄を筆頭に、馬鹿げている、気が触れているとしか言いようがない。

儂の方が強いのだ! 儂の方が価値のある人間なのだ! それを気合と根性? 光

の覚醒？ 涙を明日に変えるため……う。馬鹿にしているのか、ふぎけるなアアツ  
！」

怒り心頭。シンの光狂いへの嫌悪が爆発するとともに、拳のキレも相乗効果で増して  
いく。

光狂いなどというこの世の法則から外れた怪物どもは、一切の生を認めぬというかの  
ように、シンは絶殺の拳で死の風を吹かせた。

そう、許せない。許せないんだよ。若者が自分を超えていくという現実が。何故なら  
自分の方がより長く生き、より長く修練を積み、より厚みのある人生を駆け抜けてきた  
というのに。

それを軽々と超えていく若者たちは何なのだ？ 年寄りの顔を立てるということも  
知らんのか？ 恥知らずが、死ねよ貴様ら、地獄に堕ちろ。

だからこそ初めはグレンファルトもスメラギも許せなかった。なぜあのような若造  
小僧の分際で国のトップにと……

しかし真実を聴けば、そういうことかという感想しか出てこない。

千年を生きる神祖？ ならば道理だ、儂はたかが六十しか生きていない、彼らから見  
たら赤子のような存在。叶う道理があるはずもなく。

ゆえに今後の忠誠は絶対だ。何故なら若造は年長者の言うことを聴くものだから。

シンはこの身果てる時まで神祖たちについていくと誓約を己に立てたのだ。

だがベルグシユラインは別だ。あの恥知らずは、自分より若造の分際で、第一軍団の団長を仰せつかり、しかも位階は自分と同じ第Ⅰ位階聖騎士……ファーストパラディン……本当に解せない。

自分を超える「価値」を持つている若者が許せない。

ティルフィン斬空真剣も。光狂いも。自分の経験総てを超えていく若者が、憎くて憎くてたまらな

い……！

そういう意味では、レナは非常に使い勝手がいい若造だ。若輩たる己が身分を弁え、年長者を立てるということを進んでしている。

自分の命令には絶対服従。逆らうという行為の一切をしない。自分の行為すべてに首肯し、黙ってこちらを慕ってくれている。

いいぞ、これぞ若者のあるべき姿だ。あれは本当に役に立つ若造だ……一番が儂なのだという世界の真理に気付いている。

嗚呼、嗚呼……そうだ、一番は儂だ。儂なのだ。

この世で神祖に次ぎ価値のある人間は、この儂なのだ——！

「まるで、餓鬼だな」

「……な、に……？」

瞬間。沸騰する脳みそに冷水をかけられた気分になった。

この目の前の男は、なんと言った？

「餓鬼だと言ったんだ。年長者がどうか、若者がどうか言っているが……結局お前は駄々をこねているだけだ。」

「自分が一番じやなきや我慢できないと吠え散らかしているだけなんだよ。年寄りのみつともない妬み僻み……悪いが、見るに堪えん」

シンの若者への辛辣な態度、年長者にこそ世界は重きを置くべきであり、主役であるという考え。それらすべては、『己が一番でなければ嫌だ』という我儘に帰結しているのだとアルヴェインは看破した。

ようは、自己顕示欲の塊。自分の方が優れていなければ嫌だという身勝手な物言い。そんな自己中心的すぎる考えの矛先に、罪なき若人たちが巻き込まれたというだけの話。アルヴェインも言った通り、ただシンは認められないからと駄々をこねているだけなのだ。

身も蓋もなく言えば、老害である。

「妬み僻みなどではない。現に、儂はカンタベリー一番の……」

「実力者、とでも言いたいのか？ なら訊くが、何故神祖たちはお前らをアドラー北部に

派遣させた？ 一番の実力者だと信頼されているなら、皇都の守護に回されているはずだろう。だが現実はどうだ？ 皇都の守護を担っているのは、斬空真剣率いる第一軍団だ。つまり黄金腕輪ドラウプニル、貴様よりも斬空真剣の方が信頼を置けると神祖は思っているわけだよ」

加えて、これは言いづらいことだが、とアルヴィンは前置きし。

「斬空真剣の方が認められている、信頼されているどころか……お前、捨て駒にされているぞ。神祖たちにいいように利用されているだけだ。」

皇都の守護を任せず俺たちの相手を命じたのは、『お前らはうちでは面倒見切れないから、アドラーの北部でひと暴れして相打ちにでもなつて死んで来てくれ』って意味なんだよ。

前例として、うちの諜報部隊隊長に元カンタベリーの手先のランスローって奴がいてな。そいつも初めは捨て駒感覚でアドラーアウラにスパイとして潜り込まされたのさ。

それで、使徒の洗礼とやらはお前も神聖魂泉ウルザブレンも受けてないのだろう？ ならそれが答えだ。お前らの力を信用してあえて、ということも考えられるが……さつき話した通り、そもそも信頼しているならここまでわざわざ派遣させない。

気の毒に思うよ、黄金腕輪ドラウプニル。神祖たちには、人の心がない」

事実、アルヴィンの口にした推察は的を得ていた。

そう、シンとレナは神祖たちに見限られていた。理由は単純、  
“扱いづらすぎるから”である。

シンもレナも、聖騎士の中では特に癖の強い男女だ。

実力は言うまでもなく折り紙付きだが、それ以上にプラスマイナスで考えたときにマイナスの側面が大きすぎる。

だが、無暗に処分するというのも得策ではない……ならば、と神祖は考えた。

神殺しのバックアップを行う瞬圧<sup>カブリコーン</sup>山羊、並びにアルヴィン・ロバーツにぶつけ、相打ちを狙おうと。

一方的に処分するよりも、こちらの方が手間もかからず、しかも敵戦力を削ぐことができる一石二鳥だ。

万が一、相打ちが叶わなかったとしてもあの鳴殺<sup>シューリンクス</sup>笛が相手なのだ。

五体無事に完勝とはまずならない……恐らく土壇場の覚醒により、最低でもシンとレナ、どちらかは死ぬだろう、と神祖たちは踏んでいた。

ベストなのは鳴殺<sup>シューリンクス</sup>笛とシンとレナ、三人の死亡だが……まあ、どう転ぼうがいい結果が齎されるには変わらないだろう、と。

こうして、第三軍団はアドラーの北部へと派遣を命じられた。

知らず内に、玉碎と言う名の爆弾を抱えさせられたまま……



「気の毒には思うが、同情はしない。どうあれお前らは俺達アドラーの敵であり、お前の価値観に同意はさせない。だから、討たせてもらうぞ、黄金腕輪<sup>ドラウブニル</sup>。」

お前の嫌う、若造の光とやらでなアツ！」

他者を平気で駒扱いし、道具のように使い潰す神祖たちへの怒りを露わにしながらアルヴィンは一層戦意を高めた。

そんな神祖たちの相手をしているであろう戦友——ジエイスマもきつと自分と同じ思いだろう。ならばこそ俺も負けてはいられない、勝つのは俺だと今まさにアルヴィンは覚醒は遂げ、神の手先の命を貫こうと星の力を振るつたのだが——

「——黙れよ糞餓鬼」

阿鼻叫喚の暴威が、空間全域へと迸った。

予備動作なく大地へと炸裂された震脚はかつてないほどの破壊の衝撃を発生させ、踏み抜かれた大地の破片が周囲の兵士へと飛散した。

アルヴィンが素早く部下たちの命を守ろうと弓矢を飛ばすが、しかし遅い。拡散した隕石じみた大地の塊は、敵味方分け隔てなくその命を軽々と奪い去っていく。

のみならず、震脚により発生した余波——つまり風圧に触れただけでも、兵士たちの全身の骨が粉碎された。

なんとという圧倒的暴力の具現か。明らかに、先ほどよりも破壊力が増している。すなわち、これより全身全霊、加減なし。遂にシン・榊・アマツは基準値から発動値へと移行したのだった。

「貴様、命がいらぬのなら初めからそう言うがいい。

よくも散々儂を侮辱してくれたな。儂が駄々を捏ねている餓鬼？ 儂が神祖に騙されている？ ふざけるな糞餓鬼が、何を分かった風に狂言を回している。千里眼でも得たつもりか貴様。

誰が何と言おうが、儂が一番なのだ！ これは世界の真理であり、誰にも覆すことはできん。ゆえに死ね、鳴殺笛。儂を愚弄したその罪、地獄で永劫悔いるがいい——  
創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

とうとう抜刀される黄金腕輪の真骨頂。

己が発動体——右手首に装着された、二つ名通りの黄金の腕輪に埋め込まれた結晶核を輝かしく発光させながら、シンは殺意の波動を具現させていく。

「賢しらなるかな悪神よ。屑にも劣る匹夫の身分で、我に勝つるとよく吠えた。

如何に小細工を弄そうが、我が鞆の腕が止まることなど未来永劫無いと知れ」  
発現する言霊には、徹底した嘲笑が内包されていた。

我が天下、しからばそれ以外の生命など凡愚にも劣る愚物であると。シンの内面が、言霊と共に世界へと流れていく。

最強を冠する戦士は此処に在り。なればこそ己を嘲弄したその重罪、裁いてやろう、直々に。

唸る拳に、星の力が収束していく。すべてを砕けと、咆哮するかの如く。

「劣弱極まる愚物の雑言、知らぬ間こえぬ卑賤ひせんなり。膿んだ瞳を見開いて、主神が選びしこの黄金こがねの腕輪をとくと見よ。

まさしくこれぞ至高の宝。天下に比肩するもの絶無、勇者の証は此処に在り」

振りぬかれた拳に。鞭のようにしなつた蹴り技に。周囲の命が散華していく。面白  
いほど、呆気なく。

シンは自身の技量を鼻にかけている節があつたが、やはりそれは口だけではなかつた。

こと技量に関しては断トツで群を抜いている——リディアやレナは勿論、アルヴィンでさえその高みに手を掛けることができない。

そこにこの高出力で駄目押ししとくれば鬼に金棒だろう。ただでさえ生身の肉体から発せられる破壊力でない拳の極みが、あらゆる隙を消し飛ばしていた。

磨き抜かれた技術の結晶と、天より恵まれた星の恩恵……まさしく神に選ばれた男の

すべてが、災害のように暴性を放散させながらアルヴィンへと襲い掛かる。

「滴り落ちる八の雫が、我が身を勝利へ導くのだ。選ばれし者の宿命が、大火を宿して廻り出す」

先まではアルヴィンがシンを追跡する形になっていたが、今はその逆だった。

アルヴィンは一定の距離を保ちながら弓矢を飛ばし、それに追い縋る形でシンは肉薄を続けている。

発動体ドライブの状態のシンの拳を直撃してしまえば、いくらアルヴィンと言えども重傷は免れ得ぬだろう。

覚醒で戦闘を続行することはできても、万が一頭蓋や心臓を吹き飛ばされてしまえばそこで終わりだ。

……そして、何より。

「ゆえに万物撃滅するのみ。我が道阻む蛆むしどもよ、覇者の栄光ひかりで散るがいい」

発動直前になっても、シンの星の正体の輪郭がぼやけているのがアルヴィンには不審だった。

自己強化の類？ 炎や水と言った自然現象を操作するもの？ その一切が、欠片も掴めない。

外界へも内界へも、あまりにも変化がなさすぎるのだ。何も起きていないように感じ

る。

それがとても不気味であった。この星の不透明さは何なのだ？　これから何が起る？　どのような殺し方を見せてくる？

ドラウプニル  
黄金腕輪の、星の輝きは――

「超新星――<sup>Metainova</sup> 転輪せしは黄金腕輪、<sup>Drokkakalfal</sup> 九滴の闇雫が如く！」

今、静謐たる必殺を纏う星として、現世に顕現を果たした。

遍く若造、愚者の群れよ。総じてこの黄金の輝きの前に死ぬがいい。

「――ッ……！」

異変はすぐに訪れた。

アルヴェインの鳩尾に、拳が突き刺さったのだ。

しかし、シンが直接殴ったわけではない。シンの拳の距離はアルヴェインから射程外である。拳の届く距離ではない。

しかし、確かに今アルヴェインは殴られたのだ。胸骨が砕け散り、苦汁が喉の奥から溢れてくる。

だが、それがどうした。知ったことではない。こんなものは掌の薄皮が捲れた程度の損傷だ、とアルヴェインは態勢を崩すことなく弓矢を速射――同時に既に投擲している弓

矢も旋回させシンの四肢目掛け操縦するが――

「軽すぎるわ、下郎」

シンの拳に触れることなく、すべての弓矢が撃墜された。まるで拳に殴られたかのよう  
うに。

同時に、拳の衝撃が再びアルヴィンの心臓めがけて飛来してきた。今度は紙一重に回避することができたが、この衝撃を飛ばすような異能は何なのだ？

前兆なき不可視の衝撃……不透明な能力……いや、自分は、この能力を知っている。

「審判者の、刑戮烙印……！」

然り、すなわち極楽浄土エリユシオン。元同僚が振るう星の力に非常に酷似した異能であった。

しかし、それはあり得ない。まったく同じ星の力が発現することは基本的にあり得ないのだ。能力資質に多少違いがあるならば話は違ってくるが、いややそもそも――

「俺は、衝撃を付与されてなどいないぞ」

審判者が所持していた異能は、攻撃の着弾地点に不可視の多重衝撃を張り付けさせるペー  
というものだった。いわば視えない爆弾を設置するということである。

だがその能力を発動させるにはそもそも物体に衝撃を与えなければならぬ。そう、一合でも交わらなければいけないのだ。しかし、シンの拳は一度もアルヴィンの身体に触れていない。ゆえに衝撃が付与されていたなどあり得ない話だろう。

であれば、拳の射程を伸ばす能力か？ 否、己の水月に一撃与えた際、シンは拳を振るう動作を取っていないかった。

弓矢を撃ち落とした際もだ。何の予備動作も無しに、中空で不可視の拳撃が乱れ飛んだ。

……ならば、答えは一つだと、アルヴィンの聡明な頭脳はその真実へといち早く辿り着いた。

「衝撃付着能力ならぬ、衝撃残留能力か——己が五体から発生した衝撃を物質ではなく、空間に固定し残留させる。あとは必罰の聖印セント・ステイグマと同じ原理だ、起爆させたいときに起爆させる……付属性ではなく干渉性に特化するところなるわけか」

「ほう、儂の異能の正体を見破るか。まあだからといってどうなるわけでもない。この星を煌めかせた以上、お前を待ち受けるのは昏き死のみだ」

Shin sakaki Amatsu

AVERAGE  
基準値：B

DRIVE  
発動値：AA

収束性：A

拡散性：C

操縦性：C

付属性：D

維持性：A

干渉性：A

シンの能力は、確かに本人が豪語する通り穴のないものだった。

出力、収束性、維持性、干渉性、並びに高水準。拡散性と操縦性も平均、唯一低いのは付属性のみと、まさしく傑物と評されるだけに値する恵まれた能力の持ち主だ。

加えてあの研ぎ澄まされた確殺の八極拳。あの拳から繰り出される破壊が不可視の衝撃となり襲い掛かってくるなど、冗談ではないだろう。

並の兵士であれば百、千と殺せるシンの総合力。怖気に佇んで然るべきだが、しかし

「昏き死だと？ 違うな。待っているのは、沢山の笑顔が燦然と煌めくアドラーの未来だけだ。悪いが爺さん——勝つのは、若造おれだ——!!」

「——ぬかせ恥知らずの小童がアアッ!!」

アルヴィンは覚醒を遂げる。次代の若者たちの未来を、これからも照らし続けるために。



そして二人の戦闘は第二局へと突入する。

果たして待ち受ける未来は昏き死か、光輝く笑顔の未来か——曇天から覗く<sup>アマテラス</sup>第二太陽が、戦いの行方を静かに見守っていた。

## Chapter XXI 神聖魂泉／Urttharbrunn

疾走<sup>はし</sup>る。疾駆<sup>はし</sup>る。走り抜ける。

黒煙と烈火が入り交じる地獄の景色を背景に、私と神聖魂泉<sup>ウルザブルン</sup>は雑兵の首を斬り飛ばしながら並走を続けていた。

地を蹴るたびに背後から飛んでくる断末魔。手首を振るうたびに、肉と骨を断つ振動が自身の心臓まで響き、得も言えぬ不快感が総身へと浸透する。

加えて、兵士たちの命を粉砕することに返り血を嫌というほど浴びるため、『自分が命を奪った』という罪悪感をこれでもかと刻まれるのは、包み隠さず言ってしまうえば最悪の一言に尽きた。

そう、殺人という行為を初めて体験した私の感想は、ただただ気分が悪いという俗物らしいものだった。

この行為が国を守るための防衛手段、必要悪というのは無理解しているが、この手法を平然と遂行できる軍人、ひいては殺戮者の思考が私は微塵も理解ができない。

だって、冷静に考えてほしい。

殺すということは、その人の人生を奪っているということだ。

その人のすべてを、こちらの都合で一方的に略奪しているということだ。

こんな理不尽なことがどこにある？ 他にあるか？

人を殺した。沢山殺した。沢山殺したから、俺には力がある。俺は英雄だ。殺した数だけ力の証で、力こそが英雄の証明なのだ……などと宣う馬鹿がいるなら、私はそいつを軽蔑するだろう。

殺人技巧……当然だが、無いに越したことはないんだ。

誰だつてきつと、まともな思考回路を持った人なら、好きで人を殺したがる人なんていないから。

殺した数だけ、流れる涙や零れる怒りと悲しみがあるのだから。

……それなのに、この目の前の少女は。

私と同様に雑兵の命を次々と刈り取りながらも、その顔面には一切の感情を浮かべていなかった。

悲しみとか、怒りとか、少しぐらい表情に滲ませてもいいはずなのに。

その人形のように端正な顔立ちに張り付けた感情は、徹底して無の塊だった。まるで、あらゆる感情が欠如し、心という機能が剥落してしまったかのような……彼女から

伝わってくるのは、底の見えない谷底のような薄気味悪い冷たさだけだった。

この少女からは、まるで人間味が感じられない。

人間と相対している感覚がまるでない。

やめろ、やめろ、やめろやめろ……そんな不気味な瞳で私を見るな。訳も分からず不安になる。

感情がないというのなら、何を支柱に貴女はこの戦場に立っている……？

守るべき何かがあるのか？ 譲れない正義があるのか？ ならばそれを少しでもいから覗かせてみる。吼えるなり吐き出すなりしてみればいい。

そんな……何も感じない瞳で。冷えた目線で。

「——私を、視るなッ……！」

真横から襲い掛かってきた兵士の手首と心臓を寸分違わず両断しながら、私は初めて彼女に言葉を投げかけた。

彼女との戦いが幕を開いてからの初めての会話、コミュニケーション。

そう、私たちはこの戦いが始まってからというもの、言葉を投げるところか一度も剣を交わしていなかった。

理由は、今の状況を見てもらえば瞭然だろう。

そう、互いに、互いの隙ができる瞬間を探っていたのだ。

戦場を並走しながら、互いが互いの部下達の首を撥ねていく。

そうすればいずれどちらかが仲間を守るために隙を晒し、致命の一撃を見舞うことができる。

敵対しながらも心が通った私たちはそうして殺戮劇を演じることと相成った。

すべては、眼前のこの難敵を攻略するために。

しかし、神聖魂泉に心の動揺は徹底して皆無だった。ゆえに隙など毛ほどもあるはずがなく。

部下のみんなの命が散っていくたびに心が揺れている私とは違い、彼女は抑揚のない瞳でただこちらを見つめるばかりで、仲間の死など一切斟酌していない。

どうでもいい。知ったことか。いや、もはやそんなことすら興味がないと考え、思考自体をしていないのかもしれない。

……よつてこの勝負、私に分が悪いのは言うまでもなく、ジリ貧なのは目に見えていた。

先に仕掛けた方が負ける……というのであれば、まず間違いなく先に仕掛けるのは私の方だろう。

何故なら私はもうこれ以上部下の子たちがが絶命するところ目の当たりにしたくな

い。

だが、それでは私は敗北する。取り返しよのない敗北が与えられてしまうのだ。

ならばやはり無理やりにも神聖魂泉の間隙をこじ開け、活路を見出さなくてはならないのだが――

「――ッ……！」

彼女の手首が、粉吹雪のように華麗に舞った。

奔る剣先の斜線には――ジュードくんの、首、が――

「――ああああアアッ！」

我慢の限界だった。後先など知らない。仮に今この場でジュードくんを見殺しにしてこいつに勝ったとしても、きつと遠くない未来に自分の行いに後悔する日が来るだろうから。

私はレナ・キリガクレの誘いにまんまと乗ってやった。奪うためではなく、守るために。戦場に吹く血風を背に受けながら、私は神聖魂泉に向けて大きく振りかぶった。

死角を突いた完璧な一閃。レナ・キリガクレの意識は完全にジュードくんの方へと注がれており、私の一撃を迎撃できるほどの余暇はなく、そしてはや間合いも詰められている。

本来ならばこれで王手。問答無用でチェックメイトであり、次の刹那にはレナ・キリ

ガクレの生首が中空へ花火のように散っているはずだが、しかし……ぐるり、と。

まるで得物を補足したカメレオンのように、神聖魂泉の首がこちらへと回転した。氷点下を思わせる極寒の瞳に射抜かれ、思わず全身が粟立ってしまった。

しかしそんなこちらの動揺もお構いなしに抜刀される鋭剣<sup>レイビテ</sup>、死の穂先。電光石火の如く意識をこちらへ切り替え剣先を奔らせることができたのは、彼女の驚異的な技量によるものだろう。意識をこちらへ切り替えたというよりは、意識を複数へ割いたうえで、私を本命として狙いをつけていたに違いない。だからこのように瞬発的に反応ができた。

でも、お生憎ね、<sup>サードパラディン</sup>第Ⅲ位階聖騎士様……！

「そんなの、こっちも読んでるのよー」

こちらの脇腹へ肉薄してきた剣先を回転蹴りで弾き飛ばす。

そう、こんなあからさまな誘いにこっちが乗ってやったのは、何も破れかぶれになつたわけではない。

様子見はそろそろやめて正面切つて殺し合おうじゃないの——という、私からの宣戦布告だった。

もう、こんな地獄はこりごりなんだよ。だから、早く終わらせたい。だから、早く死

んでくれ。

勝手だとは思わが、許してくれとは思わない。

結局この世は弱肉強食。自分が生き残り幸せになるには、外敵は駆除していかなきゃいけない。

だからこそこいつらもアドラーに喧嘩を売ってきたわけだし……いや、先に喧嘩を吹っ掛けたのはこちらかもしれないが、ともかく。

「——！」

神聖魂泉は私の一撃を受けて尚一切取り乱すことなく第二撃を放ってきた。無論私も応戦する。

よって必然的に正面切つての罅迫り合いへと移行——真の殺し合いの幕が開けた。

「ツ……！ すみません、ウォーライラ少佐！ 助かりました！」

「礼はいいので、意識を分散させてください！ それじゃすぐに墓の下ですよ、訓練の時も言ったはずです！ 神聖魂泉は私が相手取るので、ジュードくんは他の皆の援護を！」

「はい！ ウォーライラ少佐、ご武運を！」

火花が無数に弾け飛び剣戟繚乱の最中、ジュードくんの鼓舞を背中に受けながら彼がこの場から離脱したのを気配で感じ取った。



愚直でバカ素直な子だが、あれで中々センスがいい。どうかこの戦いで死なないでほしいという一方的な願いを籠めたのを最後に、私は再度眼前の死神に集中する。

——レナ・キリガクレ。

繰り出される攻撃のいずれも軽やか、流麗、美しさを感じ取れるほどに洗練されており、今更言うまでもなく毛ほども油断できない強敵だ。

一瞬の判断ミスが命取り。判断を誤ろうものなら、瞬く間に私の命は紙吹雪のように散らされてしまうだろう。

それほどまでに隔絶された強さを、この女は備えていた。

だのに、この女は……それを誇るわけでもなく、かといって卑下するわけでもなく。ただ淡々と、暗闇のような昏い無表情を携えて、死神の鎌を振り回している。

この女の、考えていることがまったく読めない。こいつは、何を考えている……？

「……解せませんね」

——と、そこで。

鈴を鳴らしたような玲瓏な声が、私の鼓膜をくすぐった。

初めて……そう、真正正銘初めて。神聖魂泉が、声を発したのだ。一切表情を動かすことなく、しかし心底疑問だという声色で、私に問いを投げかけてくる。

「何故貴方は、先ほどの雑兵を助けたのですか？ 貴方の想い人は、シューリシックス鳴殺笛ではないの

ですか？ それともそれは私のただの勘違いで、本命はさっきの雑兵なのでしょうか」  
「……は、はあ……!？」

ぶつけられた問いに、私は戦場に似つかわしくない素っ頓狂な声をあげてしまう。

初めて声を発して言葉を交わしたかと思えば、なんだそれは……？ ロバーツ隊長が  
想い人？ それともジュードくんが……って……

「……何を目的にそんなこと訊いてきているのか知らないけど、助けたのは、単純に私の  
可愛がつている部下だったからってだけ。本当は、他の子たちだって見殺しにしたくは  
なかった、けど……ごめんなさいね、私、他人を完全に平等に扱えるほど人間出来てな  
いから。どうしても優先順位つてもものがあるのよ。彼は、その中で上の方にいたってだ  
け」

本当ならば神聖魂泉との交戦中に殺された他の子たちも助けてあげたかった。

でも私は、それをしなかった。けど、ジュードくんは助けた。それはやはり、私が無  
意識化の中で部下の子たちに優先順位をつけてしまっていることが原因だろう。

ジュードくんとは普段から話す回数が多い。それなりにコミュニケーションを取っ  
ている。だが、他の殺されてしまった子たちはそうではなかった……言ってしまう  
ただそれだけ。依怙鼻屑とも言い換えられる、自分勝手な最低な理由だ。

神聖魂泉はその私の心の醜さを非難してくるかと思っただが……彼女は首を横に

振った。そんなことは聞いていない、と言うように。

「理解できません。それでは、先ほど助けた兵士は貴方の想い人ではなかったと？ ただの部下……他人、だということですか？」

「ツ……他人は言い過ぎよ、でも想い人でもない、言っただけでしょうがッ！」

「……？ 想い人でもないなら、何故守ったのですか？ そんな価値などないでしょうに。私はそれを、皆目理解できない」

「は、あ……？」

童女のように本気で分からぬと首を傾げる彼女の言葉に、きつと裏などないのだろう。この女は、今の一言一句を本気の本気で言っている。

……なんだそれは。それじゃ、まるで……

「……あなた、まさか……想い人以外の命なんてどうでもいいと……切り捨ててもいいものだ、そう言いたいのか？」

「そう言いたいも何も、それが人というものでしょう。愛する人が一人いれば、それでいい。他などすべて塵芥……いえ、私から言わせれば、シン様以外の人間など、路傍の石ころです。総じて、どうでもいい」

……先まで無表情だったその顔面に僅かばかりの微笑が浮かぶのを見て、私はこの女

の病的な闇を垣間見てしまった気がした。

この女は、歪んでいる。掲げる持論が、持ち得ている思想が、一般のそれとは致命的にずれている。

これ以上は駄目だ、この女に言の葉を紡がせるな。これ以上こいつの声に耳を貸している、こちらの気が触れてしまう。

先まではこの女の虚ろさに恐怖していたが、皮肉なことに、その中身が開帳されてみれば私は先ほど以上に神聖魂泉を拒絶していた。

この女の深淵が、怖くて怖くて仕方がない。今すぐその口を黙らせるべく、剣速の限界を振り切り怒涛の攻めを披露するが……その一切を無力化される。

刃は命に届かない。

「私は、シン様ただ一人を心から愛しております。あの人は他の人とは違う、まさしく神に選ばれた……天に祝福された特別なお方なのです。

他の凡夫とは一線を画している、他の男どもとは何もかもが違う……シン様こそが霊長類の頂点、究極、極点……嗚呼、シン様、シン様……愛しております」

「ツ……勝手に一人で悦浸ってんじゃないわよ、気持ち悪い！」

耳障りな音の一切を粉碎するべく一層の力を籠めて刀剣を振り下ろした。

頭蓋を裁断するべく放たれた唐竹割りには、しかし不発に終わる。逆にカウンターで裏

拳を側頭部に炸裂させられ、私は真横へと大きく吹っ飛ばされる。

「ぐ……………」

明滅する視界。飛びかける意識を必死に繋ぎ止め、宙を回転しながら地面へと着陸する。

迎撃の構えを取るも、神聖魂泉の追撃はない。

代わりに、口元を三日月に歪めながら酒に酔ったように独白を続けるのだった。

：

……

……

「この世に蔓延る凡夫の多くは、簡単に色香に惑わされる。そして流される。

女という墮落の蜜に群がる恥知らず、匹夫の大群。見るに堪えない、蛆のよう。

己を律し高まろうともしない、欲望塗れの塵屑ばかり…………でも、シン様だけは違う。違うのですよ。分かりますか？」

「…………分かってたまるかッ…………」

この世すべての男をこき下ろす罵声を真正面から受け止めたりディアは、反吐を吐くような心境でレナの言葉を切り捨てた。

なにゆえこいつは、あの黄金腕輪ドラッグブニルをここまで慕い、想っているのか？

先から勝手に耳に入ってくるアルヴィンとシンの会話を聞く限り、あの老拳士は老害という他ない自己中心的且つ傲慢な、所謂厄介な人種だ。

それを、何故ここまで……そんなリディアのもつともな疑問に回答するようにレナは大仰に手を広げながら己が想いの丈をひけらかしていく。

「それは哀れなこと……シン様は、愚直なまでに武芸のみを極め続けた。一切の煩惱を断ち切り、武芸だけを愛し、武芸だけを信じ、武芸にのみ己が生涯を捧げてきたのです。

なんと志の高い、一途な想いでしよう……誰にも媚びることなく、ただ一人で武術を極め続けた老齡の拳士を……私は愛しているのです。

人ではなく、武芸に恋をし、その身のすべてを捧げてきたあのお方の道程ぜんぶが……誰かを愛することを忘我の果てに置いてきたあのお方が、私は愛おしくて愛おしくてたまらないのです」

普通、男女どちらであれ人間であれば誰かを好きになる。惹かれていく。想いが結ばれる。

しかし、レナはそういった俗的な感情を持つ男を酷く嫌っていた。

否、嫌っている、というのは語弊があるかもしれない。無関心であったのだ。

理由などは特に存在しない。ただ単に彼女の好みの話であり、性癖の範疇の話である。

ああ、あの男は普通に恋をするのだな。女を好きになるのだな。愛を交わすのだな。ならば特段興味はない。俗な人間だつまらない。

世の中、くだらぬ男ばかりが溢れている。口を開けばやれあの女が可愛かっただの、彼女と愛を交わさせて気持ちがよかっただなど……

ああ、どうでもいい。

私が男に求めるものは、ただ一つ。

女などという俗的な欲望に見向きもしないこと。

身も蓋もなく言えば、『恋』や『愛』といった感情が欠如している男に、レナ・キリガクレは出会いたいと幼少の頃より想っていた。

己が恋心を寄せるとすれば、そんな男しかありえない。

レナは常々そう感じていた。しかし、同時に理解してもいた。そんな男が、この世にいるわけがないと。

よってレナにとってこの世の男すべては、『普通』であり、彼女にとっての『普通』とは、無関心……『どうでもいい』という感情を抱く以外のものではしかなかった。つまり、路傍の石である。

自身にとつての『特別』、つまり愛を捧げる存在以外に、レナは価値を見出さない。ゆえにこそレナの感情の欠如はそれが由縁であつた。すべてがどうでもいい、と。

しかし、そんな本来であれば幻想に散る夢が成就したのは、彼女がキリガクレの一族として一人のアマツの男の従者となった時だった。

その男の名は、シン・榊・アマツ。

武術に文字通りすべてを捧げ、『愛』が欠落した老爺であった。

——まさに、レナにとってシンは、白馬の王子に見えたであろう。

レナの理想がすべて詰まった……「愛など知らぬ、糞の役にも立たん」と鼻で笑うかのように傲然と言いのけてしまう無情の男であったのだから。

そう、だから。

「愛しておりませぬ、シン様。他の者などどうでもいい。愛を知らない貴方のみが、私自身の愛ゆえに」

レナの長年封じ込めてきた病的な「愛」が、花火のように爆発した。

もはやシン以外、瞳に何も映りはしない。

「……何、よ、それ……でも、それってアンタ……矛盾してるでしょうが……」

宿痾しゅくあじみた想いの丈を一切の斟酌なくぶちまけるレナに、今まで感じたことがないほどの恐怖を抱きながら、しかしリディアは果敢に反論の言葉を繋ぎ出した。

ああ、そうだ。こいつの「愛」は、根本からして破綻している。矛盾そのものなのだ。

何故ならば。



「『愛』を知らない、欠如しているってことは……あの爺、アンタの想いにも決して振り向かないってことじゃないの？　なら、アンタの想いの行く先はどうなるって言うのよ」

そう。シンに人を愛する心が欠如しているということは、当然レナのことも愛していないという裏返しになる。

根拠ならある。先のアルヴィンとシン、レナの一戦。シンは、アルヴィンを仕留めるためにレナを使い捨ての道具のように平然と切り捨てようとしていた。

レナがシン以外の人間をどうとも思っていないのと同じように、シンもレナのことなどどうでもいいと思っているのだろう。

ならば必然として、レナのシンを愛する心が成就する未来など、永劫訪れないのはもはや明白である。報われない恋心ほど哀れなものはない。

……しかし、このレナ・キリガクレという少女は。

「何を言うかと思えば——だから愛いのではないですか」

悪霊に憑かれたかのような邪悪な笑みを浮かべながら、迷いなく断言するのであった。

私の愛に偽りなし——そう、第二太陽かみさまに誇示するかの如く。

「私の想いが報われない？　だからどうしたと言うのです？　シン様は愛を知らないか

ら、愛に見向きもしないからこそ私は愛しているのです。

私が愛を囁いてそれで振り向こうものなら——笑止千万。私の百年の恋は露と散るでしょう。「愛」を愛でるあの方に、私は心底興味がない。そんなシン様に、価値などない。

だから、これから先の未来……どんなことがあるうとも、シン様には私のことなど見向きもせずただ己の為だけに駆けて欲しいのです。ただ己の強さと名誉だけを追い求め、どこまでも傲慢に、私の捧げる愛など『下らん』と足蹴にし、生息子きむすこの如く無邪気に……愛を知らぬままに無窮の未来を手にしてほしい……

ああああああああ、シン様……シン様シン様シン様シン様、なんて愛おしいなんて可愛らしい、未来永劫貴方の傍に侍らせてくださいませ愛しておりますシン様ああああアアアツ」

「——ッ……」

狂氣的に己が愛を咆哮するレナの姿を瞳に映し、リディアは言葉を失った。全身の血が引いていくのを体感できる。

今自分が戦場に立ち命のやり取りをしている事実さえ、今この瞬間のみ忘却の彼方に葬られていた。

それほどまでに、このレナ・キリガクレという少女が抱く愛の宿痾は底が昏く、恐ろ

しいものであった。常人、俗物の自分が到底理解できるものではない。否、理解してはいけないのだと強く己を律する。

そして、レナはそんな理解が及ばずただただ当惑し恐怖するリディアを見つめながら、それを憐憫するように目を細めながら次の言葉を口にした。

「……ああ。理解ができないのですね、可哀そうに。それもそのはず、シユールンクス鳴殺笛のような博愛主義者つまらない男を好くような、程度の知れる貴女には理解できない境地でしょうからね」

「……な、に……？」

あろうことか、レナはアルヴィンを侮辱するかのような言葉を吐き出した。つまらぬ男——と。その投げられた言葉の意味を咀嚼して、リディアは僅かに眉を歪める。

「だってそうでしょう。何ですか、あの男は。愛を振りまきすぎです。仲間がどうの、アドラーがどうのと……己が中核を担う愛は是これという一つがあればいいのです。大多数に注ぐものではない。浮気性なのか何なのか、アドラーにはそのような浅はかな気性な人間が多すぎます。限界突破オーバードライブも、かの英雄も……総じてくだらない。シン様の足元にも及びません」

アドラー軍人の多くは愛国心に溢れた者が多い。そして、同時に無辜の民草を心から愛し、彼らを守るためにその心血を注いでいる。

そんな心持ちを、レナは気に食わないと切り捨てた。曰く、「愛」という感情を安売

りしすぎだと。

愛とは、特定の誰か一人に捧ぐもの……不特定多数の「誰か」に注ぐものなどではないとレナは断言した。

確かに、レナの言うことは一つの真理とも言えるだろう。リディアとレナは存ぜぬことだが、かつてアドラーの英雄も、一人の少女と一人の魔星せいねんにその歪みを指摘された——「誰か」とは、一体誰のことなのかと。

不特定多数への愛情……ああ、それも間違いなく「愛」という概念に分類される尊ぶべき感情の一つだろう。

だが真に大事なものはそういった大多数へと向けられる普遍的な愛ではなく、個人へ向けた唯一無二の愛情……それが人間の誇るべき感情であり、真に「愛」と呼ぶべき感情なのではないかと。「愛」とうそういうものではないかとレナは言っているのだ。

リディアもその考えについては概ね同意せざるを得なかった。確かに、全体へ向ける愛情よりも、誰か一人個人へ向ける愛情の方が、重みがあり、価値があり、何より愛の厚みも増すというもの。

それは理解しているのだが……しかし、リディアがレナのことで気に食わないのは、他の部分にあった。

「アンタがああ爺を愛しているのは分かったわよ。愛についての持論も。どんな形であ

れ、自分の信念を持つているのは立派なことだもの。中途半端に揺れている私なんかよりもよっぽど上等な生き方をしてている……けどね……!」

瞬間、リディアは潜ませていた殺気を一気に開放しながら間合いを詰めた。

「自分の価値観以外は総じて認めないっていう、その見下したようなアンタの態度が心底気に食わないのよツ!!」

振りぬかれた憤激の一閃は、巨岩を思わせる密度の斬撃だった。

レナはその一撃を受け止めつつも、僅かに両膝を折り曲げる。

「別にどんな価値観があつたついても、それがその人の中の正義だつて言うんなら、私はそれを咎める資格も否定する権利もない。好きに思えばいいわよ。

でも、だからって自分の価値観が世界の中心で常識であり、それ以外の思想は全部塵だと切り捨てるのは違うでしょう! アンタ何様よ! 全能の神にでもなつたつもり!?

アンタだけの価値観を、他人に押し付けるなツ!」

鋼が軋み、火花が散る。怒りの叫びと共に。

そう、リディアが許せないのはそこであつた。どのような形の想いを抱こうがそれは各々の自由だが、だからといって他者の夢や価値観まで愚弄していい道理にはならないだろう。

尊重し合うのは理想だ。考えが自分とは合わないな、と感じたら距離を置くのもまた一つの正解だろう。だが、唾を吐くのはどうなのだ？ その一線を越えてしまつたら最後、きつと人と人は分かり合えなくなってしまう。

……いや、そもそもこの女は、分かり合う気がないのか。自分だけの世界が完成していればそれでいい、と。その中で永劫酔えていればそれでもいいのだと……そう言いたいわけか。

ならば、こちらとも言わせてもらおうとしよう。

「それを言つたら、私に言わせればアンタこそ男を見る目がないわつて話なのよ。趣味が悪いわ。あの爺が他の男とは違う？ 特別な存在？ そりゃあそうでしょうね、あんな糞老害そうそくいなもの！ そりゃ特別扱いしたくもなるわよ、悪い意味でね！」

世界を見渡せば、あんな糞爺よりも素敵な男なんて腐るほどいるわよ！

ジェイス隊長だつて、ヴァルゼライド閣下だつて……あんな奴よりよつほど人間できていて、素敵な男性よ。ロバーツ隊長だつて、あんな爺とは比べ物にならないほどにいい男なんだからツ!! あんな糞老害より瞬<sup>ち</sup>丘<sup>ち</sup>山<sup>ち</sup>羊<sup>ち</sup>の自慢の隊長を下に見るな！ 勝手に浸つて気持ちよくなつてんじやないわよ、この枯れ専ツ！」

有らん限りの熱を以て言葉を吐き出したと同時に、リディアは剣を真横に薙ぎながらレナを後方へと吹き飛ばす。

鋼鉄の甲高い音が一際大きく戦場へと響き渡ると共に、それとは正反対にレナの表情は再び虚無に覆われていた。

蕩けきった妖笑は見る影もなく雲散霧消し、矢継ぎ早に吐かれていた言の葉も鳴りを潜めている。

まるで幽鬼のようであった。魂の在り処すら感じさせぬ、虚無の極致。

その異常極まる様相を見てたたらを踏むリディア。やがて、沈黙を引き裂くようにレナは溜息に似た息混じりの声を呟いた。すべて、諦めたように。

「——やはり所詮他人は木っ端。分かり合うことなどできないのですね」

——氷刃ひょうじんのような、冷たく鋭い風が吹いた。

時間が凍り付いたかのような錯覚をした次の刹那、確殺の言霊が空間全土へと迸った。

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

紡がれ奔る起動詠唱ランゲージ。氷片のように吐き出された言葉の意味するところ、それすなわち、もはや加減は終わりだということに他ならなかった。

星の威光を以て、貴様のすべてを屠り尽くす。言外にそう告げ、勝利を謳う。レナ・キリガクレの本気が今ここに降臨しようとしていた。

「流転るてんせしは過去未来、人が歩むは現世いまなれば。」

その運命を支えましょう。我らの慈愛で、総ての旅路に幸福を」  
結ばれていく言の葉に熱など皆無であった。ただただ淡々と水滴のように大気へ零れていく言の葉の羅列。

このままではまずいと言われるまでもなく理解したりディアは颯風の如く地を掛けレナへと肉薄——斬撃乱舞を見舞いする……が、しかし。

「ゆえにこそ、黄金こがねの時代は終わりを告げた。

織られて綴るは数多の祈り。人の道に、汝ら神に住まう場所など有りはしない。

さあ、授けましょう捧げましょう。貴方こそ、私の愛する運命だから」

届かない、届かない。連撃の一切が無力化される。一太刀とて、彼女の懐まで届かない。

確かにリディアの剣術は極めて優秀であり、技量は帝国内でもトップクラスに位置する代物だ。だがしかし、リディアとレナでは決定的な差があった。

それは、リディアも理解している——実戦経験に他ならない。

ゆえに、レナと渡り合うことはできても決定打は与えられずにいた。このままでは永劫、レナの命を断ち切ることなど夢のまた夢である。

「天を駆けるその勇姿、誰にも邪魔はさせはしない。世界樹の祝福よ永遠に」

そうこうしているうちにも、詠唱は無慈悲に進行していく。



それすなわち、リディアにとつての死へのカウントダウンを意味していた。

発動させたが最後、一気にリディアが劣勢に陥るのは自明だろう。なればリディアがやるべき対抗手段はたった一つ。レナと同じく、星辰光を発動させるしかないのだが……リディアは何故か、未だにその決断に踏み切れずにいた。

「いざお行きなさい、雄渾たる我が戦士。あらゆる宿業を破砕したその後に、無窮の未来を手にしませう」

ゆえにすべてが手遅れとなる。詠唱完了——レナ・キリガクレの星の輝きが、今断頭の刃となつて顕現した。

「<sup>Metainova</sup>超新星——<sup>Dissir</sup>巡り流れよ<sup>Nornir</sup>神聖魂泉、<sup>Urtharbrunnr</sup>運命背負うは三柱女神！」

大気を殴りつけた星の衝撃は、すぐに異常となつて現世へと臨界する。

レナ・キリガクレの姿が陽炎のようにゆらゆらと揺れる——次瞬、泉の加護に祝福された女神が如く、<sup>ウルザブルン</sup>神聖魂泉の影が三つに分かたれた。

「——ッ……！」

発現した能力の正体を認識するより早く、レイピアの剣先が三方向からリディアに襲い掛かる。

二歩一撃の術理で放たれた高速の太刀筋——しかも本来は一刺しにしかなり得ないはずの攻撃が三方向からも……

さしものリディアも虚を突かれてしまい、一撃を防ぐことは叶ったが残り二撃の被弾を許し両脇腹を深く切り裂かれた。

「ぐあああ……!?」ぎッ、づううああアッ!!」

疾走する激痛を意地で捻じ伏せながら、リディアも素早く迎撃を開始——縦横無尽に刃を奔らせる。

——しかし、これらすべてが防がれる……どころか、防いだと同時に真横から、真後ろから斬撃が飛来し、更なる裂傷が刻まれた。

一体何が起こっているのか。

……ああ、そんなことは、視れば分かる。能力の正体を推理するまでもない、何故なら、目の前で展開されている事象がすべてだからだ。それ以上でもそれ以下でもない。

種明かしも糞もない、シンプルかつ不条理な星の煌きがリディアに牙を剥いていた。

「……分身体、創造能力……!」

然り。レナ・キリガクレが宿す神聖なる泉ウルザブルンの加護……その正体は、自身と発動体アダマントイトを起

点として同物質で形成された分身体を二体まで創造するという、シンプルかつ強力な星辰光であった。

一見すると地味な能力に感じることだろう。

自然現象を操れるわけでもなし。強烈な振動で対象を粉碎できるわけでもなし。どころか、肉体強化の類でもなければ光線一つも撃てないとかれば、いよいよ以て地味と言えるほかない能力に見えるのは無理ないことだが——それは断じて否である。

前提として、レナ・キリガクレは強者である。

世の男に対し諦観した姿勢を見せていたのは紛れもない事実だが、それでも己が戦闘術に關してはたゆまず腐らず磨き続けてきた。

ゆえにその手に握られている技量が卓越しているのは語るに及ばず。

こと技量だけに限定すれば、今この瞬間も皇都を守護しているカンタベリーのもう一人のキリガクレ——リナと比肩する領域にあるだろう。

そのような手練れの聖騎士の戦力が、単純な物量として三倍になるのだ。

これほどまでに分かりやすい力の計算式もそうそうないだろう。

Rena Kirigakure

<sup>A</sup><sub>V</sub><sup>E</sup><sub>R</sub><sup>A</sup><sub>G</sub><sup>E</sup>  
基準値 : C

<sup>D</sup><sub>R</sub><sup>I</sup><sub>V</sub><sup>E</sup>  
発動値 : A

収束性：B

拡散性：B

操縦性：A

付属性：D

維持性：B

干渉性：E

加え、能力のステータスも御覧の通り、付属性と干渉性を除けばすべてが高水準。  
つけ入る隙が徹底的に排除されている。

ゆえに――

「ぐッ、づ、ああああッ、うああああアッ……!?!」

リディアが劣勢に立たされるのは自明の理。

ただでさえ基準値の時点で、僅かとはいえレナに差を付けられていたりリディアが、本  
気を出した彼女に勝てる道理などもはや地平の果てを見渡しても残されてなどいな  
かった。

舞踏のように美麗に放たれる斬撃の雨霰あめあられは、容赦なく確実にリディアの生命力を削い  
でいく。

剣閃が奔るたびに開花する血の花畑。雨天に響くリディアの絶叫は、苦悶と絶望に濡れていた。

そんな獲物を淡々と無感動に追い詰めながらも、しかしレナはまるで意味が分からないといったように、悲鳴を上げ続けるだけの肉人形と化したリディアへ疑問の言葉を問いかけた。

「……何故、アステリズム星辰光を発動しないのです？ このままでは一方的に鬪り殺されるといことくらい、貴女にも分かりますよね？ それを何で……こうも一方的に刻まれ続けているのです？ 被虐趣味でもあるのですか？ 悪趣味な」

侮蔑の言葉を雨雫と共に受け止めながら、リディアは心の中でそんなわけないだろうと反論した。

リディアにはどうしても、星辰光を発動したくない理由があった。

そう、リディアは己が星の力を何よりも嫌悪している。何が何でも、発動したくないのだ。

反動値が高いのは言わずもがな、何で自身に宿った能力がよりにもよってあんなものなのかと、幾度第二太陽に怨嗟をぶつけたか数えきれない。

それほどまでに、リディアの能力というものは、強力なれど忌々しき呪具のような代物であった。



刹那、雨雲を蹴散らすように私は「覚悟」を咆哮した。

右手に握りしめていたロングソードを納刀——同時、背中に背負っていた大アダマンタイト剣を抜刀、これより、本命による戦闘を開始する。

「——ッ！」

裂帛の気魄きはくと共に振りぬかれる鉄塊剣の一撃。

レナ・キリガクレの反応速度を電光石火で振り切りながら、私は渾身の一撃を大地に向けて炸裂させた。

「ッ……ッ！」

直打クリーンヒット。無造作且つ豪快に放たれた鈍重なる死の大槌は、神聖魂泉の分身体のうち一体を木端微塵に完殺せしめた。

加え、空間を殴りつける激烈たる波濤に、レナ・キリガクレの攻撃の嵐が強制的に中断される。

……ああ。糞つたれ。本当に、心の底から嫌だけど。

今も、奥歯が砕けてしまうんじゃないかというくらい歯噛みが止まらないけれど。

「——やるしか、ないんでしょッ……！」

ならば手早く殺すまでと、水溜まりに血を吐き捨てながら——

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

最大最悪の『地獄』を宿した呪言<sup>じゆごん</sup>を、唾棄するよう<sup>じゆごん</sup>に呟いた。



# Chapter XXII 魔獣変造/Metamorphosis

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

闇のように噴出する、極大の殺意を乗せた起動詠唱。

雨空の下、まるで獣が慟哭するように、リディアは水溜まりを蹴飛ばしながら攻勢行動へと乗り出した。

「奈落の淵に追放され、苦悶に喘ぎ幾星霜。我ら闇弱極まる愚物には、この罰は身に重すぎむ」

レナは圧殺された分身体に代わる新たな影を創造した。そう、レナの星辰光は分身体創造能力。例え分身体が何度殺されようとも、二体までという上限さえ守れば無限に代用が効くのだ。本体のレナが殺されない限り、そのルールは絶対であり、ゆえにレナの星の力は強固なものとしてリディアの前に立ち塞がるはずだったのだが……なんだこれは？

「四肢を切り裂く鋼の斬光。臓腑を翳るは裁きの焰。

なにゆえこの身を刻むのか、我が生誕が罪ならば、どうか叫びに答えて欲しい」

分身体を創生した先から殺される。

創生、虐殺、創生、虐殺、創生創生創生創生虐殺虐殺虐殺虐殺——鉄塊剣を猛獣のよ  
うに振り回すリディアの闘争心——あるいは殺意が、天井知らずに上昇していく。

急激な戦闘能力の向上に、レナは眼前の彼女が特化型の星……つまり反動値が高い能  
力の持ち主だと即座に感知した。

でなければこの破壊渦の惨状が説明できない。

……いや、本当にそれだけか？ 分身体から飛散する血飛沫を総身に浴びながら、  
レナは疑問に首を捻らせた。

「赦して欲しい。助けて欲しい。希こいねがった安寧と神の慈愛は微塵と散った」

リディアが鉄塊剣を半円状に真横に薙いだ瞬間、分身体の上半身が見るも無残に解体  
された。骨肉の弾ける音が雨音に絡まり、虚空に吸い込まれた肉の塊は粒子となって第  
二太陽へと溶けていく。

リディアの剣捌きは、先とは見違えるものとなっていた。練度が上がった？ 否、逆  
だ——練度は、著しく低下していた。悪く言えば、剣術が雑になっている。

開放している殺意は先とは比べるべくもないが、剣の扱いに關しては酷いの一言に尽  
きた。何故ならさつきから、リディアは乱雑に、殺意の赴くままに剣を振り回している  
だけに過ぎないのだから。

あの流麗な剣捌きはどこへ行ったと言うのか。まるで使い慣れていない武器を使っている、あるいは、剣の重さに自身の筋力が追い付いていないかのような挙動の数々は、レナに不信感を抱かせるには十分すぎた。

もしや、彼女の星は。

「醜き獣人、災禍の化身よ。ならば今こそ、その慟哭で恐怖を齎せ。

醜き過去を引き裂くように、嘆きの覚醒は訪れた」

刹那、大雑把だったリディアの体捌きが嘘のように消滅し、平時の軽やかなものへと変貌を遂げた。

木刀でも振り回すかのような身軽さで、鉄塊剣を手足のように奔らせる。

レナの分身体も負けじと反撃、または防御の姿勢を取るが、余さずすべてが砕かれる。文字通りの、変貌。リディア・ウォーライラは、明らかに人の枠組みから外れようとしていた。

この信じられないほどの馬鹿力。豪榎磊落を思わせる怪力無双の超膂力……まさか彼と同じ、筋力増強能力？

いいや、きつとそれだけではないのだろう。それよりもっと、禍々しい“何か”に  
違いない。

リディアが今現在垂れ流している負の瘴気が、それを物語っていた。

あの豪榎磊落ミヨルニールのような、単純明快で神聖なる星などでは断じてない。

別に豪榎磊落のことなどどうとも思っていないが、リディアあと一緒にしてしまふのはさすがに忍びがない……それほどまでに、リディアの現出せんとしている星は、常軌を逸脱していた。

恐らく、今この場にいる誰よりも。

そして――

「流れる涙は誰が為に。ああ、我が愛しの牧羊神――どうかその手を伸ばして欲しい。

その優しい音色と光と共に、平和な大地を歩みたい」

詠唱完了。ついに、リディア・ウオーライラの禍星まがっほしのベールが今解き放たれようとしていた。

さあ――殺してやろう、悉く。

我が身全てよ、獣に堕ちろ。私を汚す悪魔ども、地獄に堕ちろ。

これが私の、魔獣メタモルフオシス変造。

「<sup>M</sup>超<sup>a</sup>新<sup>i</sup>星<sup>n</sup>——<sup>S</sup>魔<sup>a</sup>軀<sup>t</sup>變<sup>r</sup>造<sup>o</sup>。慟<sup>s</sup>哭<sup>i</sup>の<sup>p</sup>獸<sup>h</sup>人<sup>a</sup>、地<sup>l</sup>獄<sup>i</sup>に<sup>u</sup>響<sup>s</sup>け<sup>s</sup>怨<sup>e</sup>嗟<sup>t</sup>の<sup>a</sup>咆<sup>m</sup>哮<sup>o</sup>——<sup>r</sup>!!」

天へと注がれた呪いの咆哮が耳朶を駆け抜けたと同時に、目に見えた異常がレナの眼前で起こった。

リディアの両腕が、大木のように肥大化したのだ。

否、これは大木というよりも、むしろ熊か象……そう、獣の類の巨腕に変形したと表してもいいだろう。

それほどまでに生々しく、禍々しく、リディアの身体は劇的な変貌を遂げた。

そして——

「死ねえええええええ——ッ!!」

端麗な面貌に血管を浮き上がらせながら、リディアは炎を吐くように殺意を滾らせ  
た。

二メートル弱にまで巨大化を遂げた怪物の両腕がレナへと振り下ろされる。

レナは舌打ちを一つ飛ばして分身体に己が足を掴ませた。そして一回転しながら遠心力を利用して己が身体を射程外までぶん投げる。ぬかるむ大地に滑るように着陸すると同時、風船が割れるような音が弾け、二体の分身体はリディアの腕の下敷きとなり、哀れ無残な挽き肉にされていた。

鎌首をもたげるようにゆらりとレナが上体を起こすと、殺意が充満したりリディアの双眸そうぼうと視線が絡んだ。

レナは改めてリディアのその過剰肥大した腕へと意識を飛ばす。

——なんて、醜い。

レナの胸の中に生理的嫌悪の波が立った。いや、例えレナでなかったとしても、アレを瞳に映して好奇の感情を浮かべるものなど、この世に一人もないだろう。

リディアの両腕は、人らしい肉の質感を多少残しながら、しかしそのほとんどを獣のそれへと墮としていた。肌色は赤黒く変色しており、体表を走る無数の血管は、まるで蜘蛛の糸のように複雑に絡まり、脈動し、蠢いている。

掌にこびりついている肉の破片と鮮血が、より強烈にリディアの禍々しさを表していた。

そんなリディアの姿を網膜に焼き付けたレナは、やがて一言、当然の感想を呟くよう

に漏らすのだった。

「……まるで、化け物ですね」

「——黙れえええええツ!!」

“化け物”という単語が鼓膜に触れた瞬間、リディアの思考は茹った様に怒りに染められた。

変態した右腕を天高く抱えながらリディアは大地を蹴り飛ばし、瞬く間にレナの射程内へと入り込む。

すぐさまその口から吐き出る言葉を叩き潰さんと、右腕に握られた鉄塊剣がレナの頭上に隕石のように注がれた。

リディアの発動体アダマンタイトが着弾する寸前、レナは跳躍しながらその剣先を蹴り上げる。

反動を利用して宙に身を晒すレナ。一泊遅れて大地が粉々に爆散し、土煙が充満した。

リディアの視界が閉ざされた今、レナにとってはこの瞬間は絶好の好機であった。

リディアの星の正体は未だ全容が掴めないが、決して侮ってはいけない壮烈なものであるということはもはやその身を以て実感している。

ゆえに殺そう、今すぐに。決意したと同時に、レナは分身体を創造、刃を大地と垂直

に構え落下——奔る殺意の先には、リディアの五体が。

「ッ………！」

気づいた時にはもう手遅れだった。

まるで木々の枝をへし折ったかのような音が響いた次の瞬間、リディアの巨大化した左腕は根元から切断され、雨の雫の下で舞っていた。

絶叫を上げるより早く、更なる追撃がリディアの腹部を、右肩を——二方向からレイピアが貫く。

流れるように完璧な殺し方。確かにリディアの星は破壊力に特化しているようだが、ならばその土俵でわざわざ競う真似をしなければいけないだけのこと。

レナの星は小回りと応用が利く類の星なのだから、翻弄し、手玉に取り、嵌めて殺して終幕だ。

肢体から噴水のように血を流しているリディアは、もはや助からないだろう。今しがた受けた連撃により限界を迎えたのか、リディアの残った右腕も星の力が解除され、元の少女然とした細腕に戻っている。

終わってしまえば呆気ないものだったな、とレナは肩の力を抜いた。恐ろしく不気味で、禍々しさの極みと言える星だったが、我が愛の前には所詮毛ほどの役にも立たなかったという訳だ。



さあ、あとは止めを刺すだけだ。心臓に刃を突き立て、首を撥ねて完殺する。

そして残るは鳴殺シューリンクス笛のみ。

ああ、待つていてくださいシン様。貴方を銀河一愛しているレナ・キリガクレが、今すぐお傍に参ります。

貴方の無限の未来は、もう目の前です……と、喜悦に震えた温かい吐息を吐いた瞬間だった。信じがたい光景が、展開されることになる。

「何勝った気でいるのよ、神聖魂泉ウルザプフルン。そんなに爺のことで頭がいっぱいな？ 本当に、気色悪いわね」

聴こえてくるはずのない声音が空気を揺らし、息を呑んだ瞬間に剣先が円状に振りぬかれた。

分身体は二体とも首を撥ねられ消滅——レナ本体も腹部を深く切り裂かれ、破裂したトマトのような赤い液体を止めどなく滴らせた。

腹部を抑えながら後退し目線を上げると、そこにはなんと、すべての傷を完治させた万全の状態のリディアが、地に足をつけているではないか。

しかも、してやったりという風な皮肉な笑みまで浮かべて。

馬鹿な——あり得ない。

口中に広がる鉄の味に不快感を覚えながら、レナは目前の現実を正しく認識できずに

いた。

夢でも見せられているのだろうか。だって、あり得ない。そう、あり得ないんだよ。確かに私はあの女の左腕を切り飛ばし、その身体中の至る所に痛々しい裂傷を刻んでやった。

それが、何だこれは？ 斬り飛ばした腕が再生しているのは言わずもがな、致命に至る刺し傷や、かすり傷とも言える細かい裂傷まで、そのすべてが消滅している。

逆再生の映像を見せられているかのように、リディアの全身は完全回復を遂げたのだった。

「……貴女は、何？ 何だと言うのですか？」

思わずレナの口端から垂れたのは、そんな稚児が発するような曖昧な疑問だった。

その言葉を真正面から受け止めたリディアは、眉根を寄せながら非常に冷淡に、突き放すように声を投げた。

「アンタが言ったんでしよう、化け物つて。確かにそうよね、こんな能力。化け物以外の、何物でもない……糞つたれツ!!」

心の底から忌々しい——そう吐き捨てると共に、リディアは今度は両足に星の力を注ぎ、先の両腕のように過剰肥大させた。

丸太のように膨れ上がった足先で大地を踏みしめ、跳ぶ——炸裂弾も斯くやという爆

音と衝撃を引き連れて、リディアはレナの間に詰めてくる。

二人の距離がゼロに還ると同時、リディアは足の変容を解除——すぐさま腕の強化に切り替えた。

解き放たれた弩級破壊の一閃は、風圧だけでレナの躯体を地面へと叩き付けていた。血生臭い砂利を舐めながらレナは両腕をバネにして起き上がる。即座に分身体を生成し、化け物退治の命を下した。

あれを一秒でも長くこの世にとどめてはいけない。可及的速やかに殺し、地に眠らせなければ。

前後で重なりながら一直線に、勇猛にリディアに突貫した二体の分身体ノルニルは、しかし—

「邪魔」

リディアは左腕に握っていた自身の骨に星の力を注ぎ込み、穂先を槍のように尖らせた巨大な銛もりを形成——渾身籠めて、投擲する。

どこから骨を摘出したのかと問われれば、きつとレナに致命傷を与えられたあの瞬間だろう。左腕の断面から手をつつまみ、肉の束を掻き分けながら強引に骨の一本を抜き取ったのだ。なんとという狂気の沙汰か。

旧曆に存在したとされる滑空機を思わせる軌道を描き直進した死の穂先は、疾駆して

いた二体の女神の影を易々と貫通し、死に至らしめた。

二体分の死体を積み上げたにも関わらず中空を猛進する銛には減速というたが籠などは存在しなかった。

分身体の血を一面に撒き散らしながら、真つすぐに本命レナへと狙い違わず飛来する。

「チツ——！」

用済みとなった分身体を霧散させると同時、星の鼓動を再起させる。

レナを守るように召喚された二体の新たな分身体は、猛犬のように迫る銛をレイピアによる斬撃で雨空へと弾き飛ばした。

レナはこの忌まわしい星の正体を探るため、リディアがこの瞬間までに披露した技の数々を頭の中で列挙する。

肉体の過剰肥大。損傷の完全回復。己が組織の一部の武器化……すべて、自身の肉体を起点として星の力が発動している。

肉体強化能力？ 体組織過剰活性化能力？ どちらも否だろう。

この星はもつと、魔的でおぞましい、おおよそ人が振るつていい類の代物ではないのだと、レナはリディアの宿す魔獣の正体を見破った。

「肉体変造、創造能力。自分の肉体を自在に変形させ、時には創造することができる能力

ですか。

合点がいきました。何故そのように扱いつらいであろう大剣を発動体になっているのかも、傷口が一瞬でふさがったのかも。すべてが繋がった」

そう。リディアの星の正体、それは、己が肉体へ星の力を訴えかけ、自由自在に変造……作り変えてしまう、もしくは創造するという能力だった。

両手足が冗談のように巨大化したのも、致命傷が瞬く間に回復したのも、自身の骨が強力な武器となったのも……すべては、この星が成せる技なのである。

大剣が発動体というのも、この能力を使用することを見越してのものだった。

確かに基準値状態のリディアでは、この巨大な鉄塊剣を満足に扱うには筋量が足りていないだろう。ゆえに能力発動以前、無様な剣術を繰り広げていたのもそのためだ。そもそもこの鉄塊剣は、能力を発動させながらの使用のために調整されていたのだ。

平時の筋力でまともに振るえるわけがない。だが星を起動し両腕の筋力を増強させれば———ということはない。木の枝を振り回すが如く、軽々と破壊を振りまける。

傷口がすべて快復したのも、星の力を肉体に注ぎ込み体組織を“創造”したからだ。作り直した、とも言えるだろう。だから致命傷であろうともリディアは即座に欠損した肉体を作り直し、全快することができたのだった。



決して鳴りやまない痛苦の喇叭らっぱは、秒単位でリディアの生命を刈り取らんとしているのだ。

……ああ。何よりも、この能力は、本当に。

「改めて言わせてもらいますね、リディア・ウォーライラ。

貴女は化け物以外の何物でもありません。そのような醜い星、見るに堪えません」

「——うううああああアアアアアアッ!!」

下唇を流血するほど噛みしめて、リディアは鉄塊剣をレナの胴体へ振り下ろした。

直撃はしなかったが大腿四頭筋に深い裂傷を刻むことに成功。これで機動力を僅かに削ぎ落すことができるだろう。

しかしレナの表情に苦痛の二文字はない。瞳に浮かべる感情はひたすらに冷ややかなもので、あるいは侮蔑すら籠められていた。

ああ、そうだ。この力は“化け物”としか形容する言葉がない禍々しいものだとも。

反動差があるのはまだいい。心の底から嫌だが、この能力の本質に比べれば微々たるものだ。論ずるに値しない。

この能力の一番の問題点は、その“見た目”だ。

私とて一応は年頃の女なのだ。それなのに、発現した星の力はこんなに醜いもの。自

分の身体が自分のものでなくなるような、醜い獣へと様変わりしてしまう能力。

最悪だった。許せなかった。何故、よりによってこんな能力なのか。

強力なのは疑いようもないが、もっと他に無かったのかと第二太陽アマテラスを呪わずにはいられない。

ならばこんな星、二度と使用しなければいいと思っていたが……結局、この能力を使わなければ生き残ることなど、どだい無理。

だからリディアは、この星が手放せずにいた。自身の身体に宿るこの醜き魔獣の煌きこそが、己を守る最強の盾ということに、皮肉にもリディアは気づいてしまっていたから。

どうしようもなく嫌で嫌で、嫌いでたまらなくて、今すぐにも体の外に排出されて欲しい癌のような星屑だが、リディアが頼りにできる力は、これしかないのだ。

逃げ道など、どこにもない。

醜き獣人、災禍の化身は——ただ、泣き喚きながら雄叫びを吼えることしかできないのだ。

「ですが醜き獣人、化け物同士とてもお似合いですよ。貴方と鳴殺シューリンクス笛は。

地獄に生きる醜き獣と、光に盲めしいた獣人アイキバーン……結構なことではないですか。獣らしく、涎を垂らして交尾なさってはどうですか？」



「……ッ、……」

吐き出された悪罵あくばの言葉に対して、リディアの中の大切な何かが大きな音を立ててブチ切れた。この刹那だけ、五体を巡る激痛さえも忘却して……心をすべて嚇怒の焰にくべながら、リディアは腹の奥に力を籠めて有らん限り反駁はんぱくした。

「だから……私なんかと、隊長をッ！ 一緒にするなッて言ッてんだろおおオオオッ！！」

咆哮。そして、肉体を改造——殺意の華を撒き散らす。

巨大化させた両腕で地面を抉る、宙を裂く、壊す、壊す、何もかも。

かつてそれはアルヴィンに対して反論した言葉とまったく同じのものであったがしかし……そこに籠められた意味に、かつての自虐と皮肉はほとんど含まれていなかった。

否、深層的に含まれていた言葉の意味は、むしろ……

「私は確かに醜みにくいかもしれない！ こんな能力に、俗物としか形容しようのない精神弱者弱者っぷり！ 臆病おくびょうな怪物モンスターつてなじられたところで否定する材料なんてどこにもありやしないわよ……けど、けどねえ……！ 隊長は違うッ！ ロバーツ隊長は、醜みにくい獣人なんかじゃ断じてないッ！ 誰よりも優しい、愛に溢れた人間だッ！！」

誰よりも彼よりも、このアドラーという国すべてのことを考えてくれている、正真正

銘の人格者。光の後継者。

アドラーの民全員、余さず一人残らず笑顔になってほしいと本気で考え、そしてその実現のために命を賭せるほどの、本当に凄い人。

私みたいにどうしようもない人間にも救いの手を差し伸べて、諦めることなく愛を注いでくれた……私の恩人。尊敬する人。

まだ……まだ……まだ、まだ、まだ、まだ……語る言葉が足りないほどに、ロバーツ隊長は魅力に溢れた人なんだ。

私なんかと並べていい人じゃない。私が彼に追いつくためには、今よりももっともつと立派な人間になる必要があるから、間違ってもお似合いなどと言われたくはないのだ。

私なんかと並べて、その価値を下げないで欲しい。

ああ。むしろ、そんなこと言ったら……

「逆に、アンタたち主従はお似合いよ。交わっているように一切交わっていない……一人で勝手に完結してる、主も従者も子供みたいに独りよがりな自慰行為で満足しているだけのよ。アンタ、そのことに気づいているわけ？」

「」

リディアの攻撃の悉くを流麗に躲し、反撃の手を休めることなく与えながらも、レナは微かに動揺した。

己の「愛」がただの自慰と言われたことに、僅かながらレナの神経が逆なでされたのだった。

「あの爺は自分が一番でよければ何でもいい、それ以外は塵としか扱わないような老害。貴女はそんな、愛情を知らない爺に恋する生娘。振り向いてほしいとも思っていない。

これが自慰でなくて何だつて言うのよ。お互いに勝手に一人で完結しているじゃない。人の意見に耳を傾ける気もない、自分の世界だけで閉じている。

私が言えた台詞じゃないけど、人つて言うのは心を交わして生きる生き物でしょう？

「愛」なんていう概念はその最たるものじゃない。でもあなた達は一切心を交わしていない。特にアンタは、勝手にあの爺に自分の白馬の王子を重ねて触れるでもなく想いを告げるでもなく、ただ傍で見つめながら自分で自分の股をいじくるだけ……それが、言うに事欠いて、愛？ 笑わせないで。単にアンタたち、互いが互いを都合のいい道具としてしか見てないだけじゃない。そんなもの、セフレ以下よ。愛を舐めるな、処女。」

「……何を言っているのか、分かりませんね。まあ、獣に何を言っても、無駄——」  
「だからそれが——自慰行為つつつてんのよッ！ 人の話を聞けッ!!」

もはやこの女に何を言っても無駄だと知りながらも、リディアは怒りのままに言葉を重ねる。

届かずともいい。この女に道徳を説いてやろうなんていう気も更々ない。

ただこれは、自分の気持ちの問題なのだ。単純明快に、リディアはレナの信条、そして在り方が許せなかった。

ゆえにこそその歪んだ在り方に否と吼えながら、己が内側で暴れ狂う獣の痛みさえ捻じ伏せてレナへと果敢に突貫している。

すべては、その歪な価値観ごとこの女を叩き潰すため。リディアの女としての意地と矜持から、この女にだけは負けてなるものと炎のように猛っていた。

——だがそんな勇壮たる決意とは裏腹に、レナはリディアの攻撃を徐々に見切り始めていた。いや、そればかりではなく……

「なるほど。どうやら貴女の能力は、好き放題に身体を弄り回せるわけではないみたいですね。肉体改造が施せる箇所は同時展開で三つまで。加えて欠損を回復させるとなるとその分リソースを割くために肉体強化との並列展開は不得手……」

恐らく出力と収束性がもう少し高水準であれば際限無しに展開できたのでしようが……ないものねだりを言ってもしょうがないですからね。化け物は化け物らしく、惨めに最期を迎えてください」

リディアの星の特性を正確に看破され始めた。

そう、リディアの星は何も万能に好き放題身体を改造してまわれるという無敵の能力ではない。

無論、この星にも出力相応のキャパシティというものは存在するのだ。

だから、全身を異形の如く強化した上で欠損が発生した個所から虱潰ししらみつぶのように完全回復させるなど、不可能な芸当である。

いや、理論上であれば不可能ではないのだがそれは先ほどレナが指摘した通り、圧倒的に出力と収束性が足りていない。

魔軀変造<sup>Satyr</sup>、慟哭<sup>ros</sup>の獣人、地獄<sup>Met</sup>に響<sup>am</sup>け怨嗟<sup>orph</sup>の咆哮<sup>osis</sup>

AVERGE<sup>基準値</sup>

DRIVE<sup>発動値</sup>

A D

STATUS

集束性  
 拡散性  
 操縦性  
 付属性  
 維持性  
 干渉性

E C B A D A  
 A

この魔獣変造メタモルフオシスを完全に使いこなすというのであれば、最低でも収束性はもう一ランク上……そして出力に関しては最低でもAAAランク相当の能力値でなければ話にならないだろう。

しかし、それでもリディアの現在の能力値でも十二分に強力な星であることもまた間違いはない。

平均的な星辰奏者であれば、一切の歯牙にもかけないのは今更言うまでもないだろう。

……そう、平均的な星辰奏者であれば。

「ぐツ、があああア！ う、ぐうううウツ……！」

削る。削る。削られていく。命の端から次々と。

残念なことに、今現在リディアが相対しているレナ・キリガクレという少女は平均的な星辰奏者という枠組を遥か超越した強者だ。

だから、弱点が見えてしまえばもはや趨勢は決したようなもの。

レナはリディアの剛撃を軽々と躲しながら致命の一撃を間断なく刺し込んでいく。

レナが重視するのは一撃による必殺ではなく、連撃による捌り殺しだ。

攻撃の回転率を極限まで高め、一秒に当てられる攻撃の回数をひたすらに突き詰めていく。

その結果が、これだ。

リディアの肉体強化は今や右腕のみとなっており、その力のほとんどが決壊した肉体の回復に充てられている。

こうなってしまうえば、あとはこのまま捌り殺されるのを待つだけだろう。

こうして力を使い続けている今も、リディアの体力は消耗の一途を辿っている。ただでさえ発動しているだけで反動差で気がおかしくなりそうな激痛が全身を巡るのだ。

それに加えて必要以上に能力を行使させればどうなるかは火を見るより明らかで

……リディアの先までの破竹の快進撃は、氷水をかけられた炎のように鎮火してしまっていた。

このままでは負ける。そんなことは言われるまでもなく分かっている。

だが、負けるわけにはいかない。女の意地とプライドに賭けて、そして何より、己の幸せへの道をこんなところで途絶えさせられるわけにはいかない。

そうしたら私は、あの世で見守ってくれているであろう母に顔向けできなくなってしまう。

ならばどうすればいいか？ どうすれば、この絶望的状况を打破することができるのか。

……答えは、決まっていた。

もう一段、上の覚悟を貫く必要がある。

この能力を使用するだけでも決死の覚悟だったというのに、それ以上の覚悟が、この局面では必要だった。

正直、逃げ出してしまいたい気持ちでいっぱいだった。

できることなら、今すぐにも背中を向けてどこか遠い場所にまで隠れてしまいたかった。

それくらい、怖いことだけど。でも、死ぬよりはきつとマシだから……なんて、如何





それもそのはずだろう。リディアが踏み切った覚悟、それは……己が大腸を触手状に変形させ、自身の腹と背中を突き破りながら展開したのだ。

激痛、などという言葉で済ませられるレベルではない苦悶地獄だろう。想像するだけで常人ならば発狂してしまう光景だ。

大蛇のようにとぐろを巻きながら展開された触手上的の肉の束は、三体のレナを危うげなく捕捉、拘束することに成功する。

絡みつく生臭い体液の感触に不快感を露わにしながらレナは脱出を試みるも、それは叶わない。逆に猛獣の如き剛力で四肢をしめあげられ、全身の骨が悲鳴を奔らせた。

リディアの生涯最大決死の覚悟は、最高の結果を齎した。

能力の過剰励起のせいでこれ以上の星の行使は難しいだろうが、ほんの少し触手に力を籠めればレナの五体は果実のように弾け飛ぶだろう。

よって、リディアは決着を確信した。これ以上はもう覆らない。絶対的な勝利を掴んで見せたのだと、大苦悶の波の中でも僅かに口角を釣り上げた。

「じゃあね、異常性癖枯れ専処女」

実際、それは間違っていない。

確かにこの瞬間、リディアは間違いなく勝利していたのだ。現に、レナも敗北を悟っていた。ああ、自分は負けたのだな、と。シン様、貴方のお役に立てずに申し訳ござい

ません、と現世へと別れの言葉を刻んだのは確かなのだ。

だから、その勝敗が覆る可能性があったとするならばこれ以外ありえない。

第三者の介入。

刀剣のように鋭く繰り出された凶拳の十連撃に、リディアが展開していた触手は余さずすべて蹴散らされていた。

「……………え？」

腹と背から生えていた己が大腸の先が断絶される感覚。

苦痛よりも先に感じたのは全身の脱力に伴う虚無感であった。

レナに止めを刺すほんの僅かな刹那、突如割り込んできたシンの拳の嵐により、リディアの覚悟は粉微塵に打ち砕かれた。

大地に膝をついた瞬間、眼前に躍り出るシンあくまたちとレナの影。

何で、ここに黄金腕輪ドラウプニルが？ 隊長と戦っていたのではないのか？

ならば、隊長は？ 隊長はどうなってしまったのか？

……………まさか。ああ、まさか、まさかまさか……………まさか、か。

「私、負けたんだ」

どこか他人事のように眩いた次の瞬間、視界の隅で剣の切っ先と拳が舞った。

視界が暗闇に閉ざされる最中、それが、リディア・ウオーライラが最後に見た景色であつた。

Chapter XXIII さようなら、陽溜まりの  
貴方／Good bye dear rest

「おおおおオオオ——ッ!!」

「はああアアア——ッ!!」

流れる大気を引き裂くように、膨大な熱量を宿した鬼気迫る咆哮が轟いた。

同時、隕石が如く空中に乱れ飛ぶは無限とも思える大量の弓矢と絶拳の衝撃波。

それらがぶつかり破壊の渦を発生させるたびに、辺り一面の地形は原型を留められずに見るも無残に崩壊していく。

今も依然変わらず瞬圧山羊と翡翠騎士団の激闘はそこかしこで熾烈を極めているが、アルヴィンとシンの戦闘領域のみ周囲には兵士の姿は一人も見当たらなかつた。

単純な話、彼らの戦闘についていけるものが誰もいないのだ。しかも、下手にどちらかを援護しようと近づこうものなら余波だけで絶命するのはもはや火を見るよりも明らかである。

猛獣の縄張り争いに草食動物が横槍を入れるようなもので、そんな犬死をすることだ

けは御免こうむりたいと願っているゆえ、誰も近づかないし、近づきたいとも思わない。あの領域の殺し合いを演じられるのは、真にあの二人しかいないのだ。

そしてアルヴィンとシンの激烈たる攻防、果たして今現在どちらに天秤が向いているかと言えば——ほぼ互角ではあるのだが、微妙な僅差でアルヴィンが優勢であった。

というのも、理由はたった一つだけ。忘れてはならない。アルヴィン・ロバーツは温かな優しさを持つ好漢であれど——

「どうした黄金腕輪<sup>ドラウブニル</sup>！ 貴様の拳は確殺の極みじゃなかったのか！ ならば四発も直撃させておいて俺を止められないとは、異名の名折れもいいところじゃないのか？ 耄碌<sup>もうろく</sup>したのか爺さんよッ！」

彼は立派な光狂い。並の星辰奏者であれば一撃で二、三度は殺せるシンの魔拳をその身に四発も貫っているにも関わらず——それらを気合と根性により「些事」だと切り捨て、威勢よく命を燃料にくべながら攻勢行動へと乗り出している。

シンの繰り出した星の力により、アルヴィンの内臓は苺のように弾け、骨に至るまで木の枝のように折れてしまっていることだろう。当然、その重症による激痛など想像するだけで筆舌に尽くしがたい。

——ああ、だから、それで？

その程度のことか、一体なんだという？ こんなもの、掠り傷の内にも入らんし、痛

いと喚いていいようなレベルじゃない。

身体はまだ動かせる。星の力も絶好調。ならば止まる理由などあるはずもなく。

まだまだ、もつとだ、前へ前へ。目指す未来の為に、己がすべてを炎と燃やし、全力疾駆で駆け抜けよう。

まだまだ、まだまだ——もつと、もつともつともつともつと、前へ前へ前へ前へ！

「うおおおオオオオオ——ッ!!」

「チイツ……！　気が触れている……頭に蛆でも湧いているのか貴様！　狂気という言葉ですら生温いぞッ」

口の端から鮮血の花を咲かせながらも獰猛な笑みでこちらへ肉薄してくるアルヴイン<sup>きちがい</sup>を目にし、シンは実際に対峙してみても改めて光狂いという人種への嫌悪を露わにした。

冗談ではない。何だこの生き物は。

致命の一撃を与えられて、沈むどころか何故攻撃の勢いが加速する？

何故当たり前のように時間経過と共に覚醒を繰り返す？　彼我の実力差など誤差だと言わんばかりに、力の上下関係をちやぶ台返しのようにひっくり返せる？

すべてが道理を完全に無視している。

気合と根性などという曖昧且つ安っぽい概念だけでこの世の常識の悉くを粉碎して

いるその在りように、怖気と怒りが止まらない。

まるで自分が今まで丁寧に積み重ねてきた研鑽のすべてに、唾を吐きかけられている気分だった。

このような若造の、たかが気合一つで。儂の拳のすべてが無に還されるというのか？  
一切が届くことなく終わるといふのか？

——否だ。そんなことは、臆に一つ、否、那由他に一の可能性もあつてはならないのだ！

「いい加減にしろ屑にも劣る若造風情がツ！ 何故死なん！ 何故くたばらん！ 地に伏し儂を崇め己を塵だと自覚しない！ 四発だぞ？ 儂の八極をその身に受けて絶命しないなど、この世の法則を無視しているに他ならず！

恥知らずとはまさにこのことよ、世界の道理を弁える匹夫がアアツ！」

「はッ——お生憎だな老害風情が。内臓ぐちゃられた程度で止まる常識なんて、俺は持ち合わせていないんだよ。年寄りの常識で語るんじゃない、そつちこそなア——常識学んで出直してこいッ!!」

ガンマンの早打ちのように繰り出された両者の攻撃の応酬。

結果は相殺に終わったが、シンもアルヴェインも既に二撃目の構えを取っている。



そう、彼らの星の最大の特徴、長所にして共通点。

それは、物量の多さ……身も蓋もなく言えば、“数の暴力”による完封圧殺を得意としていた。

アルヴィンは、機関銃の如く弓矢を連射し、それら放たれた弓矢一本一本を余すことなく無限操縦することにより戦闘を行っている。

対してシンは自身の五体から繰り出される極みの拳と、それに付随する衝撃を大気中に残存させて、疑似的に無限の拳撃連打を発生させて戦っている。

数対数。物量対物量。無限対無限。

バトルスタイルが似通っている以上彼らの地力が物を言わせてくるわけだが、まったく同じという訳でもない。

手数による制圧力はアルヴィン、一撃の必殺性ならばシンと、強みも明確に差別化されていた。

よってどちらかと言えば一撃で仕留められる可能性が高いシンの方が相性的に有利であったのだが、御覧のあり様だ。

致命のダメージが致命として機能しない以上、いくら攻撃を浴びせたとして無駄なこと。

いや、無駄ではないしダメージは真実蓄積しているのだから牛歩と言わざるを得な

い。

こうなってしまうてはどちらが有利かなどは誤差でしかないだろう。

それを証明するように、先まで無傷を貫いていたシンに初めてアルヴィンの弓矢が直撃した。

右肩口を深々と抉り貫き、鮮烈な赤い液体を空中へと撒き散らす。

ついにシンの完璧なる八極の牙城を、アルヴィンの弓術が打ち崩し始めたのであった。

「調子に乗るなよ小童がアアツ!!」

よくも貴様如き凡愚が儂に傷をつけてくれたな——そう吼えるようにシンは意識的に星の回転率を上昇させた。

こんな糞餓鬼に本気を露呈させるのは屈辱以外の何物でもないが、それ以上の屈辱を身に刻まれたとなれば話は別だ。

これ以上自らの矜持に泥をかけられぬように、シンは大気中に残留させた衝撃すべてに星の力を流し込み、再び衝撃をその場で発生——させるのではなく、アルヴィン目掛け、それら衝撃のすべてを直線状に放射した。

「チィッ！ ふッ——！」

流星にあれらすべてを受けてしまえば絶命は免れないと思つたのか。

突貫するという愚行は犯さず、アルヴェインはあくまで冷静な思考回路を以てシンの猛攻に対処した。

牽制替わりに弓を十数発速射すると同時に横つ飛びに拳の雨を掻い潜る。

目標を捉えそこなった拳の衝撃群は後方に位置していた建造物に直撃——この世の終わりを思わせる轟音を響かせながら瓦礫の山が出来上がった。

そう、シンの星は大気中に残留した衝撃を再発生させるだけでなく、拡散性を利用して遠距離に放射することも可能だったのだ。

衝撃をその場にしか残留できないのであれば、シンがまだ衝撃を付与させていない領域で戦えばいい——シンが星を発露させた段階ではそう考えていたアルヴェインであつたが、その戦略はいとも簡単に崩された。

衝撃を飛ばせるのであれば、どこにいても同じこと。まさに四方八方、逃げ場なく八極の極みが襲い掛かってくるのならば多少なりとも捨て身を敢行し敵の間隙をこじ開けるまで。

そして、そう——何も能力に隠し玉があるのは、ドラウブニル黄金腕輪だけではないのだ。

「ツ……！」

アルヴェインの速射した弓矢を叩き落した刹那、異変が生じる。

シンの周囲一面に転がっていた弓矢の残骸が、一斉に励起し浮遊を始めたのだ。

そしてシンが迎撃の態勢を取るよりも一刹那だけ速く解放された弓矢の残骸たちは、その強靱な五体に無数の風穴を空けていた。

何が起きたのか理解できないシンを余所目に、アルヴィンは更なる追撃の弓を引き絞りながら、ただ一言だけ。

「これがお前の舐めていた若造の『可能性』だ」

渾身の一射を解き放つのだった。

アルヴィンの掲げる星の力は、「投射金属操縦能力」。

それは、己がアダマントタイトから投射した金属に星の力を付与し、半永久的に操縦するというもの。

そう、星の力が付与され続ける限り、だ。

ならば、例え操縦している弓矢が撃ち落とされようが手折られようが、それらも操縦できない道理がどこにある？

そう、アルヴィンの能力の真に恐ろしいのはそこであった。

例え投射した金属が撃ち落とされて破壊されようとも、原型を留めぬほどに粉微塵に

でもされない限り投射した金属に付属した星の力は生き続ける。

それこそ、スファイアレイザー滅 奏で星の力ごと粉砕しなければ文字通りアルヴェインの弓矢はどこまでも敵を追尾するのだ。

よつて真実、アルヴェインの奏でる鳴殺笛シユリシックスはどこにもあるはずはなく。

全方位弓矢に囲まれたシンの命運はこれにて尽きる――

「……まあ、そう簡単にいくわけもないか」

風穴から止めどなく血液を滴らせながらも、シンは一切の乱れなく繰り出した破壊特化の震脚によりすべての弓矢を文字通り木っ端微塵にせしめるのだった。

やはり、一軍団を統べる長は伊達ではないということか。そう易々とは命を獲らせてくれないらしい。

「ハッ……何が若者の可能性だ。そんなものはどこにもありはしない。常に無限の可能性を内包しているのはより多く経験を積んだもの、より長く生きた者だ。

何度言えば理解できる？ やはり若造というものはほとほと出来が悪い」

「俺には一生理解できんだろうな。貴様のあらゆる言葉を聴いた今でも、俺の考えは変

わらんよ。次代を担うのは新しい命たちであり、そして俺たちはそれらを守るために戦い続ける。それがアドラー軍人としての誇りであり宝だ。

受け継ぐという行為を放棄した貴様とは、未来永劫相容れないだろうよ」

「……胸糞が悪い。付き合いきれんな」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ投げやりに呟いたかと思つた次の瞬間——あろうことか、シンはアルヴィンに背中を向けて逃亡を開始した。

つまりは、戦線離脱。

予想だにしていなかったシンの逃走行為にアルヴィンは一瞬瞳目を避けられなかったが、疾風の速度で意識を切り替える。追跡を開始した。

シンの背中を追いかけながら弓矢を間断なく射続ける。

しかしそれらすべての攻撃は、シンを捉えるまでには至らない。シンが完全にアルヴィンへの逃走に意識を切り替えているからだろう。回避することだけに専念し、反撃してくるどころか、こちらを振り返る様子すら見せない。

……一体何を考えている？

まさか、シンは本気で逃げ切れるなどと考えているのか？

いや、ドラウブニル黄金腕輪ほどの手

練れがそのような甘い判断を下すなど、あり得ないだろう。

ならば自分を追尾させることにこそ奴の狙いはあるはずなのだが……

そう思った束の間、シンの魔拳が一人のアドラー兵士の頸部を乱雑に掴み上げた。

「ッ！ 貴様……！」

「そら、新しい命を守るのだろうか？ ならば有言実行して見せろ」

嘲るように低く呟いた次の刹那、シンは掴み上げた勢いそのままに兵士をアルヴィンに向かって放り投げた。

無造作に投擲された兵士……シエリル・スチュワートは一瞬の出来事に何が起きたのか把握できずに瞳を白黒させていたが、やがて自身が宙に浮いているのだと知覚する。

このまま落下し地面に激突すれば、重傷を負い戦闘続行は困難になるだろう。それだけは何とか阻止しなければと藻掻いて見せるが、中空に放り出されたことにより自由が全く効かない。

目線を動かせば、数メートル先に我らが隊長、アルヴィン・ロバーツが凄まじい剣幕でこちらに疾走している。

まさか、隊長は、私を助けるために……？

「いけません、隊長……！ 私なんかの為に……！」

自分如きの命など、見捨ててくれて構わないと。

隊長がわざわざ体を張るほど、自分の命の価値は重くないのだと叫ぶシエリルに、しかしアルヴィンは。

「部下の命を守るのに、いけないも糞もあつてたまるかッ！」

どこまでも真つすぐに、死の淵へ落下するシエリルへと両手を伸ばした。

「無事か、スチュワート！」

胸に抱えながらシエリルの安否を確認するアルヴィン。

戦闘による軽い外傷は見られるが、見たところそれ以外に大した怪我は負っていないらしい。

ならばよし。意識を刹那に切り替え、すぐさまシンの追跡を再開して――

「――隊長！ 避けてえッ！」

叫んだ時には、手遅れだった。

「脆いなア、鳴殺笛シューリンクス。群れなければ生きることすらできない若造は、だから脆弱なのだ」



顔面に迫る絶死の鉄拳に、アルヴィンは抱えていたシエリルを即座に後方へ突き飛ばした。少しでも彼女から危険が遠ざかるように。

シエリルの絶叫が遠くから木霊した次瞬、シンの拳は正確無比にアルヴィンの顎を貫いた。

否応なしに脳味噌が震盪し、意識が漂白される。

まずい、このまま追撃を加えられれば、一気に戦闘不能まで追い込まれる確率が上がってしまう。

であれば即座に、一秒でも一瞬でも早く意識を覚醒させなければ……！

焦燥に駆られるアルヴィンだったが、しかし数秒が経過した後にもシンの追撃は来なかった。

取り戻した意識で眼前に視線を飛ばすが、そこにシンの姿はない。

……何処にいった？ まさか、千載一遇のチャンスを放り投げて再び逃走したのだからか？

訝しむアルヴィンの意識を切り裂いたのは、シエリルの涙ぐんだ大音声だった。

「隊長！ ウォーライラ少佐が……！」

「——ッ!!」

脊髄反射で振り返る。

その遙か後方には、死の矛先を振り上げていているシンとレナの姿と——满身創痕で地に伏している、リディアの姿が。

シンはこう考えたのだろう。

どうせ鳴殺<sup>ニューリックス</sup>笛に致命傷を与えたところで、即死などするはずがない……それどころか、理不尽な覚醒をしてより面倒な事態になるに違いない。

ならば先にレナと共闘し鳴殺笛に次ぐ戦力、リディア・ウォーライラを潰しておいた方が得策であると。

鳴殺笛はその後、レナと共闘し確実な手段を以て殺せばいい。

これは個人戦ではなく、集団戦。ならば個人との決闘にこだわる必要がどこにあるというのか。

実際、シンのその考えは正しかった。集団戦において効率よく勝利するのであれば、潰せる存在は先に潰しておく限る。長期戦を見越してなら猶の事。

よってその戦略が今まさに、リディア・ウォーライラの死という最大の戦果を挙げようとしていた。

「ウォーライラアアアアアアアア——ッ!!」

シンとレナに向かいあらん限りの弓矢を連射しながら、アルヴィンは颯風の如く地を駆けた。

両足に焔が宿ったのかと見違えるほどの超疾走。

しかし、いくらアルヴィンとて間に合わぬだろう。

死神の刃は、まさにリディアの頭上に既に振り下ろされているのだ。

当のリディアも、呆然自失といった様子で動く気配をまったく見せない。既に星の力を使いつくしてしまったのだろう。

抵抗できる一切の手段を消失している。よって王手詰み<sup>チエックメイト</sup>。

どう足掻こうと、リディアの死亡はここに決定づけられてしまったのだ。

「——いいや、まだだッ！　まだ、俺はッ——」

しかし、アルヴィンは諦めない。

死なせない。死なせてなるものか。何故なら、俺は——

「お前の幸せを見つける手伝いを、まだ何もしてやれていないッ!!」

——そして、アルヴィン・ロバーツ決死の覚醒が、起こるはずのない奇跡を具象させ

た。

……

……

……

……おかしい。

何故、私はまだ生きているのだろうか。

ドラウブニル 黄金腕輪と ウルザブルン 神聖魂泉の影が瞳の中で揺れた瞬間、私は自身の敗北を悟り、瞳を閉じた

のに……激痛による死の感触が一向に訪れないのは、もしや痛みすら感じる暇もなく死んでしまったからなのだろうか？

いや、だがそれならば未だに感じる能力の反動差と大腸を断絶されたこの大激痛は一体何だというのだろうか？ 死んだというのであれば、その痛みを黄泉の世界まで引きずるのはおかしな話ではないのか？

だから私は、意を決して瞳を開いた。死んだという現実を突きつけられるかもしれない。い恐怖に抗って、緩慢に瞼を開くと、そこには……あり得ない光景が広がっていた。

「……………隊長……………？」

両手を大きく広げ、私を庇うように立っている血塗れのロボッツ隊長が、そこには、いた。

ドラウブニル  
黄金腕輪の拳は深々と腹部を抉り、ウルザブルン  
神聖魂泉のレイピアも右肩を痛々しく穿通している。

蛇口を捻った水道のように、隊長の全身から血液が止めどなく流れていく。

わざわざ口に出すまでもない。致命傷だ。このままでは、隊長は、死んでしまう。

「……………たいちよ、う……………？ 何で、私を、かば、つて……………」

「チツ。少々予定外だが、まあいい。手間が省けた。レナ、幕を下ろすぞ」

「御意に。助太刀、心から感謝いたします。シン様」

私の漏らした呆然とした呟きは、二人の悪魔の声音にかき消されてしまった。

そして響くは無慈悲で明快な死刑宣告。隊長の命が、地獄に流されようとしていた。

阻止しなければ、と全身の血が沸騰するも、いくら力を籠めても思うように身体が動かない。

隊長と同じく、私も紛うことなく致命傷だった。

「うううおおおおおオオオオオ——ッ!!」

「何ッ……?」

瞬間、噴火するような大咆哮が曇天を貫いた。

その声を発した張本人は、あろうことか今しがた甚大な負傷を負ったロバーツ隊長だった。

まさかまだ動けるとは思っていなかったのだろう。黄金腕輪と神聖魂泉は同時に目を見開き、たたらを踏む。

その間隙を突き、隊長は両腕を弓のように引き絞り渾身の力を籠めて二人をまとめて殴り飛ばした。

隊長の異常性極まる戦闘続行行為を目の当たりにし、シン・榊・アマツは吐瀉するかのような面持ちで怒号を飛ばす。

「糞つたれが……! まだ倒れないとは一体どういう原理なのだ!?! アドラーにこのよ  
うな気が触れた狂人が跋扈しているかと思うと戦慄が止まらん……!」

アレは目障りだ。早急に駆逐するぞ、手を貸せレナ!」

「私も同意見にございます。あれは新西暦における毒素のようなもの。切り捨てる以外

に選択肢はありません」

光狂いという人種の異常性を垣間見、より一層隊長への警戒度を強めアダマンタイトを構える黄金腕輪と神聖魂泉。

もはや戦況は絶望的だった。

言うまでもなく、私と隊長は共に致命傷。隊長は気合と根性でしばらくは戦い続けることができるかもしれないが、私は無理だ。多少の能力行使は無茶をすればできるだろうが、それも焼け石に水。糞の足しにもならないだろう。

対してレナ・キリガクレも重傷を負ってはいるが致命にまでは至っていない。

そして一番の問題がシン・榊・アマツ。隊長の弓矢で五体を貫き尽くされているが、戦闘行動に支障が出ているようにはとても見えない。今の隊長と私程度であれば、軽く捻り潰せるであろう。

だから、どう足掻いてもどん詰まり。

アドラーはカンタベリーに敗北したのだ。その結末は、もはやどうやっただって覆らない。

……ヘマをした私を、隊長が庇いさえしなければ……！

何で、私はいつもそうなんだ。

いつもいつも、無力で無価値で……誰かに守られることしかできない……!」

「……逃げろ、ウォーライラ」

その時、隊長の低い呟きが……けれども、優しさと温かさに包まれた声が、私の鼓膜に触れた。

……逃げろ、つて……それは……え……?」

「た、隊長……逃げろつて……でも、それじゃ、隊長は……!」

「死んでしまう、とでも言うつもりか? 安心しろ。俺は死なんし、勝つのは俺だ。だがウォーライラ……お前はもはや限界だろう。むしろ、よくぞここまで戦ってくれた。」

お前は俺の誇りであり、アドラーにとつての掛け替えのない宝だ。だからこんなところでお前の人生を閉ざさせてやる気など、俺には皆目ないんだよ。

必ず逃げ切れ、ウォーライラ。可能であれば無線で臍に救援を要請するんだ、いいな?」

口早に言い切る隊長には、かつてないほどの優しさと、そして……鬼気迫るものがそ



の顔面に張り付いていた。

ああ、隊長は真実、この戦いに勝つつもりでいるのだろう。その言葉に嘘はない。今でも隊長の瞳に宿る光は寸分も濁っていないし、それどころか勝利を諦めてやるつもりは毛頭ないというかのように猛々しく煌めいている。

だが、同時に頭の片方ではこうも考えているのだろう。

「自分は、この戦いで命を落としてしまうかもしれない」、と。

だから、私に今投げているのは、今生の別れの言葉だ。

今まで世話になったことへの感謝と、その想い。それらを短い言葉でまとめて、私に余すことなく伝えてきている。

「本当にありがとう、ウォーライラ。そして、同時に本当にすまない。お前の幸せを見つめる手伝いをさせてくれと息巻いておきながら……俺は結局何もできなかった。最後の最後まで不甲斐ない隊長ですまん。幾らでも恨んでくれて構わない。

……だがウォーライラ、これだけは約束してもらえるか？

——幸せになれ。お前の旅路に、数多の祝福が有らん事を祈っている

……さあ、いけ、ウォーライラ！ お前だけの幸せを見つげに行け！」

「……ロバーツ……た、い……ちよう……」

「——早く行けえッ！ ウオーライラアッ!!」  
「…………ツ…………」

ロバーツ隊長はそう大喝すると共に、黄金腕輪と神聖魂泉へ向けて一直線へと駆けだした。

その背中はどこまでも雄々しくて。どこまでも勇壮さに満ちていて。どこまでも優しさに満ちていて。どこまでも温かさに満ちていて。

…………どこまでも、大好きな人の背中…………だったのに。

「——ツ…………」

流れる涙を呑みこんで、私はその大好きな背中に背を向けた。  
地獄から、逃げ出すために。私の、幸せのために。

——さようなら。ロバーツ隊長。

せめて最後にと伝えたかった一言は、とうとう吐き出されることはなかった。

代わりに、本当にどこまでも臆病な自分を嘲る苦笑が、口の端から零れるのだった。

## Chapter XXIV 羽撃け、人界の青空へ／To the skyfield

「はあ……はあつ……は、あ……！」

今にも千切れてしまいそうなほどに重い両足を引きずって、私は死の匂いが濃く充満する戦場を幽鬼のように彷徨していた。

霞む視界で周囲を見渡せば、人形の如く魂の抜けた死体がそこかしこに転がっている。

刀剣で切り裂かれ、臓腑をぶちまけ白目を剥いて絶命している者。そもそも首から先が無くなっている者。銃弾によりしこたま風穴をあけられ失血死している者。燃え広がる炎により炭化してもはや人の原型すら保てず黄泉の国へ旅立ってしまった者。

死には多種多様であるが、その死に顔のいづれも、穏やかなものであるなどは断じて言えない。

呪いと無念と悔恨で溢れ、血と命のすべてが地獄の底へと流れている。

そんな死者たちを置き去りにしながら、この戦場では未だ鎮火することのない闘争の

戦火が烈々と燃え盛っていた。

あちこちから飛び交う大砲のような怒号。悪魔の悲鳴が如き断末魔。鳴り響く鋼の激突音、戦争を象徴する大音聲は、壊れてしまったラジオのようにいつまでもいつまでも雨音に絡まり不快な音色を奏でていた。

そんな地獄へ私は背を向け、無責任にも逃亡を敢行している。

軍人にあるまじき背徳行為。本来であればこのような敵前逃亡、許されるべくもないが……けれども赦して欲しい。

私は、軍人になりたくてなつたわけではない。

ただ給金に目が眩んで、盲目的に軍人になってしまっただけの、只の俗物。取るに足らない精神弱者の糞娘なのだ。

こんな凄絶極まる地獄で命果てるまで戦えなどと……どだい無理な話だったのだ。

そうだ。隊長も言っていたが、私はむしろよく戦った方だ……こんなにも、ボロボロになって……命を懸けて自らの星まで行使して……本当によく、頑張った。

ならばそれで十分だろう。それともまだこれ以上私に地獄を見ろと言うのか？ そんなものは御免こうむる。もう、こんな地獄には付き合いきれない……無理だ、無理なんだよ。私なんかじゃ、こんな地獄は重すぎる。

「ガハッ……ふ……ふ……」

星の力による反動でもう何度目か分からない吐血をした。

そう、私は未だに星の力を行使して自らの肉体を再生させながら戦場を歩いている。当然だ。黄金腕輪により与えられたダメージは甚大なものだったし、あのまま放置しておけば死亡していたのは火を見るより明らかだった。

ならばこそ文字通り最後に残った力を振り絞り、すべてのリソースを回復に回しているのだが……やはり、レナ・キリガクレに繰り出した決死の一撃でほとんど力を使いつくしてしまつたのか、その回復速度は緩慢なものであった。

断絶された大腸を優先的に回復させたおかげもあつてそちらはほぼ全快なのだが、それ以外の傷の塞がりほとんど完了していない。

かといって回復を早めるべく星の回転率を上昇させようものなら、更なる反動差が私の全身を蝕み、それこそ本気で絶命してしまうだろう。そうなつてしまつては元も子もない。

だから真実、今この状況は首の薄皮一枚繋がった綱渡りであった。

一瞬でも安心できる状況などではない。少しでも力の加減を間違えてしまえば、真実私はそこで生き途絶えるだろう。

そして今更再確認するまでもなく、ここは戦場だ。だから……ああ、ほら、言つた傍からだ。

「死ねえ、リディア・ウォーライラア——ッ！」

こういう危険もあるわけで。

威勢よく突っ込んできたカンタベリーの兵士を、私は乱雑に振り下ろした鉄塊剣の一撃の下に惨殺した。

冗談のような量の返り血と弾けた臓腑が顔面にこびりつく。

むせ返りながらその場で吐瀉した。ああ、それでも……進まなければ。逃げなくては。

「……何で、私ばかりいつも……こんな目に遭わなきゃいけないんだろう……？」

何でいつもこうなるのか。もはや幾度目になるかもわからない呪いの言葉を水溜まりに吐き出しても、いつも通り返ってくる答えはない。

私自身にも分からない。どこに答えがあるのかなんて。

どこにいても、何をしたらって。

私がいる場所すべてが地獄に変貌する。これではどうしようもないではないか。行く場所行く場所すべてが地獄で、私の居場所なんてどこにもない。

どこに身を置いてても、どれだけの努力を積み重ねても、すべてが地獄に塗り潰されて

しまうなら、私はどうすれば幸せになることができるの？

せっかくロバーツ隊長が差し伸べてきた救済の手さえも、地獄の悪魔に闇の淵へ葬られてしまうというのなら……ならば私の幸せは、何処にあるというのだろうか？

私は、どうやったら幸せになれるのだろうか……？

それとも私はやはり……未来永劫地獄に閉ざされたままで、幸せになることなど許されない醜い魔獣なのだろうか？

「……づ、あつ……!!」

瞬間。血と雨雫によりぬかるんだ大地に足を取られ、私は盛大に転倒してしまう。

赤黒く染まった液体と土が舌先にこびりつき、吐瀉物と涙が否応なく溢れてきた。

……なんて惨めだ。なんて塵屑だ。

哀れすぎて、見るに堪えない。

「……私……生きている意味なんて、あるのかな……」

神様が、私に永遠に地獄で生きろと言うのなら。幸せになるなど言うのなら。

そして真実、私の求める“幸せ”なんてどこにも無いと言うのなら。

こんな地獄で生き続けて、無限に苦しみ続ける道理などここにもないだろう。ならばいいっそ、死んでやろう。それがむしろ、私にとって一番の幸せなのかもしれない。

ああ、きつとそうだ。この残酷な地獄セカイからの解放。それこそ、私が望む幸せなんだ……そう思ってしまったが最後。私の右手は勝手に動いていた。

首元に、鉄塊剣の切っ先をあてがった。このまま深く突き刺せば、それで終わり。こんなどうしようもない地獄とはもうおさらばできる。

清々する。ようやく私は……幸せになれるんだ。

「……ごめんね、お母さん。許してください、ロバーツ隊長……」

震える声で、二人の名前を呟いた。

告げる想いは、深い感謝とそれ以上の謝意。

せめて、少しでも恩返ししたかったなあ、と現世の未練を胸の奥底で燻らせて……私は柄を握る手に、一層の力を籠めた。

……さようなら。リディア・ウォーライラ。

本当に、「幸せ」に恵まれない人生だったな。

心の中で呟いて、勢いよく剣先を深く押し込もうとした——その刹那だった。



——いいやそもそも、私の“幸せ”って何なのだろう？

急に浮上してきた根源的な疑問が、自刃の腕を寸でのところを押しとどめた。

……そうだ。私はずっと自身の“幸せ”を求めて生きてきた。

でも、じゃあその“幸せ”の正体って何？ 具体的には？ 私にとっての“幸せ”ってというのは、何だったの？

「……決まっている。私の幸せは、お母さんだ」

ならば何故、お母さんが私の“幸せ”なのか？

決まっている。私にとって、“大切に大好きな人”だからだ。誰よりも優しく、いつでも私の味方で、私を愛してくれた、何よりも掛け替えのない尊い存在。

だから一緒にいて、隣にすることができて、本当に幸せだった。

そう……幸せなんだ。

大好きな人の隣にいるということとは。

「――」

瞬間、脳味噌にかかっていたモヤが一瞬で取り払われていく感覚がした。

ずっと、見つからなかった答えに出会えた——そんな確信が、私の胸中を満たしていく。

ならばもはや、私のやるべきことは決まっていた。

「……行かなくちゃ」

短く呟き、立ち上がる。

瞳の濁りは、もはや感じない。

見上げた曇り空からは、僅かに、蒼い輝きが覗いていた。

……

……

……

「オオオオオオオオオ—— ツ!!」

「レナ、散開しろ！ 絶命してでもあの死に損ないの命を粉碎しろッ！」

「御意に」

飛び交う弓矢の大群に、宙を切り裂く剣先と拳。

あろうことかアルヴィン・ロバーツは、甚大な致命傷を負いながらも決死の覚醒を遂げ、シンとレナを同時に相手取りほぼ互角の戦いを演じていた。

いいや、互角と言うには少々語弊があるかもしれない。

こうして交戦を続ける今も、アルヴィンの身体には致命的な傷が刻まれて行っている。

レナの繰り出した剣突が脚部を穿った。シンの打ち込んだ絶拳が内臓を破壊した。だからどうした？ 勝つのは俺だ。

頭と心臓さえ破壊されなければ戦闘は継続できるといふ狂った考えのもと、アルヴィ

ンはごり押しでシンとレナに食い下がっているのだ。

こちらの方が、勝率が上がるから。その為ならこの身体の一つや二つ、喜んでくれてやる。それでアドラーを守れるなら。愛する国民達かぞくを守れるなら——！

「忌々しい……怖気が止まらん。貴様のその傷、もはや助からんぞ。いいやそれどころか未だこうして地に足をつけている現実さえも通常あり得ないことなのだ。常識的に考えて、死んでいなければおかしいのだ。

何が貴様をそこまで突き動かす？ 儂の拳で直々に殺されるのであれば、それ以上の誇りはないだろうに……なにゆえだ？」

「ボケたか、黄金腕輪ドラウブニル。最初からずつと言っているだろうが。

何が俺を突き動かすかなんて、そんなものは決まっているだろうが——この国を守りたい、この国を生きるすべての民に笑顔を齎たからしたい！ そんな掛け替えのない笑顔を守るために俺は永遠に戦い続けるんだよ！ この手に“勝利”を掴むまでなアツ！」

「……やはり理解が不能ですね。鳴殺笛シューリフス、貴方はとことん狂っている」

「狂っているのはお互い様だろうが。そして……ああ、そうだよな。お前らには一生涯解とけきれんさ。

自分の世界に閉じこもり、他者の心と一切交わろうとしないお前らには、一生

なアアッ！」

ただ自分の主義主張のみを絶対正義と信じ、それ以外を一切許容せず悪と断じる貴様らに、俺は負けない。

そう鼓舞するように、ここに来て更にアルヴィンの星の回転率が上昇した。

両者一步も譲らぬ熾烈を極める大激闘。

だがしかし、やはりと言うべきか——徐々に結末は近づいてきていた。

そう、アルヴィンの意志力が如何に気高く頑強なものであろうと、所詮は人間の肉体だ。

刻まれた数多の致命傷と滅茶苦茶な覚醒の連続に、彼の肉体には限界が訪れていた。

もうあと五分もしないうちに、アルヴィンの命の灯は跡形もなく消滅してしまうだろう。そうなってしまえば、アドラーの敗北はもはや覆りようがないものとなってしまう。

ああ、だから——

「<sup>ドラウブニル</sup>黄金腕輪、<sup>ウルザブルン</sup>神聖魂泉——俺と一緒に、地獄まで付き合ってくれや」

もはや己が死を回避できないのなら、せめて勝利はもぎ取ろう。

シンとレナの同時攻撃が、アルヴィンの命に照準をつけた。

——狙い通りだ。まんまとおびき出すことができた。

そしてアルヴィンも同様に、己の命を餌にして、シンとレナに死の照準を付けていた。この一合で、総てが決まる。勝つのは己だと、三者疑いもなく最期の一撃を解き放つ

——その、間際に。

一迅の風が、吹き抜けた。

「ガッ、ごオ——ッ!？」

「う、ああああア——ッ!？」

突如、三者の間に割り込んできた影が、シンとレナ——そしてレナの創生した二体の分身体——を巨大な両腕で殴り飛ばした。

虚を突かれたシンとレナは互いに無防備を晒し、殴られるまま遙か後方へと吹き飛ばされる。

そしてその場に残されるは、呆然としたアルヴィンと、もう一人。誰の登場であるかなど、語る必要はないだろう。

二人の遙か頭上には——雲一つない、晴れ渡る蒼穹がどこまでも広がっていた。

……

……

……

「ウォーライラ……！ 何で、戻ってきた？ お前は逃げろ、と……」

「——決まっていますよ。隊長」

呟いた返答は、自分でも驚くほどに澄んでいるものだった。

今も能力の無理な使用により全身が沸騰したように熱くて痛くて苦しいのに、そんなのが気にならないくらい、私は今、*“幸せ”* な気持ちに満ちている。

地獄のど真ん中に立ちながら、幸せを感じているのだ。

「私が、隊長の隣にいたいって、心の底から思ったからです。それ以上の理由がありませんか」

盗み見た隊長の表情は、呆気にとられたような間抜けなものだった。何か反論しようと唇を動かしたが、やがて隊長は諦めたようにふっと柔らかなく微笑んだ。

私の、大好きな笑みを浮かべて。

「物好きなのやつだな、こんなおっさんの隣がいいなんて。

だが、駆け付けてくれたことには礼を言わないとな。ありがとう、ウオーライラ」

隊長は私と肩を並べた。共に最後まで戦い抜こうと、無言で告げるように。

見据える正面には怒りの形相を浮かべた黄金腕輪と神聖魂泉。

今までの私なら恐怖に足をすくませて嫌だ嫌だと絶叫していただろうが、今はしかし。

「あは……あははは」

思わず笑いが零れてしまう。涙が溢れて止まらない。温もりで心が満ち満ちていく。もう何も怖くない。身体の奥から、無限の力が湧いてくる。

ああ、この感覚。久しく忘れていた、この感じは。



「お母さんと……おんなじだ」

すなわち、大好きな人を想っているときの多幸感が、私のすべてを包み込んでいた。

……なんだ。そうか。そうだったんだ。

どうして、気が付かなかったのだろうか。いや、気付いていないフリをしていただけか。

いつから……と言えば、きつとあの瞬間だったのだろう。

お前を守り抜くと……幸せを見つける手伝いをさせてくれと言って、私のすべてを抱きしめてくれたあの瞬間から。

私は——隊長のことが——

「好き。大好き。愛してる」

恥ずかしいから、聞こえないように……そつと、自分だけで噛みしめるように小声で呟いた。

ごめんなさい隊長。想いを伝えるのは、もうちよつと待っていてください。

ほら、私って臆病者ですから。いざつて局面でヘタれるの、隊長もよくご存じでしょ

う。

ていうかこんなドシリアスな場面で急に愛の言葉を囁いちやうほど、私メルヘンぶつちやいないので。

……ようやく見つけた、私の幸せ。

いや、答えはすぐ近くにあつたんだ。灯台下暗しとはよく言ったもので、近くにありすぎて逆に見つけ出すのにこんなに時間が掛かってしまった。

私にとっての……リディア・ウォーライラにとっての、「勝利」とは——

「大好きで大切な人が隣にいること。私の立っている場所なんて関係ない。例えそこが地獄だろうと、隣に『あなた』がいてくれれば、私はそれだけで幸せなんだから」

私は今まで、自分が幸せになれない要因は自分が身を置いている「場所」によるものだと思っていた。

劣悪な家庭環境、娼館、軍人機関……どこへ身を置いても待ち受けるのは地獄のみ。

でも唯一、その劣悪な家庭環境の中には、母と言う名の「幸せ」があつた。だから私は、多かれ少なかれ幸せを感じる瞬間があつたのだ。

大事なのは自分が今立っている場所などではない。

私にとって大事なのは、隣に誰がいるかということ。

軍を抜けられると決まってから謎に心が曇っていたのもこれが原因だろう。

知らずのうちに私はロバーツ隊長を好きになり、離れることを嫌がっていた。

無意識のうちに、この人の隣にずっといたいと願うようになってしまった。

それが私の、<sup>「しあわせ</sup>勝利<sup>」</sup>になつていた。

ならばもはや——迷いなど、あるはずもない。

「これが私の、<sup>メタモル</sup>蛹<sup>フオシ</sup>からの完全羽化<sup>」</sup>

己を屑だと決めつけ、地獄から這い出るために絶叫していた臆病な怪物はもはや存在しない。

今ここに然りと大地に立っているのは、己が定めた大切な人と共にどんな荒野でも歩んでいこうと固く決意した、一人の少女<sup>にんげん</sup>である。

蛹<sup>さなぎ</sup>の中で延々と自分を閉じ込めていた私は、今この瞬間真なる幸せを手に入れて——生えかけの翅<sup>つばさ</sup>で、人界の青空へと羽ばたいたのだった。

リディア・ウオーライラは——生まれ変わったのだ。

「糞、が。糞が糞が糞がアアツ！ 若造の分際でどこまでも儂を虚仮にしおつて……！」

立てレナアツ！ その命、悉く儂に捧げろ！ 貧弱たる若造ならばせめて最期の瞬間まで儂の役に立つがいい！」

「無論、そのつもりでございます、シン様。私のすべては、シン様のものでありますゆえに——それが私の、愛ゆえに」

「行くぞ、ウオーライラ。絶対に死ぬんじやないぞ。俺はまだお前と数えるほどしか酒を飲んでいないし、語りたいたいことが山ほどあるんだ。

それに……お前の幸せを見つけてやる手伝いも、まだ完遂していないしな」

「それならもう、見つけられましたよ。隊長」

「……何？ それは——」

「ほら、来ますよ隊長！ 構えてください！ 部下にこんな無理させて……これが終わったら、またご飯奢ってもらいますから！」

「——ああ！ その時は好きなだけ飲み食いして俺の財布を泣かせてくれや、ウオーライラ！」

永遠に心が重ならないシン・榊・アマツと、レナ・キリガクレ。

そして、重なる心にどこまでも喜びを見出せるアルヴェイン・ロバーツ隊長と、私、リディア・ウオーライラ。

「勝つのは、俺だアア——ッ！」

「シン様、貴方に勝利を——！」

何を寝ぼけたことを言っているのだろう。

どちらが勝つかなんて、決まっているでしょ。

『勝つのは——俺／私達だああアアアアア——ッ!!』

そして正真正銘——最後の戦いの幕が上がるのだった。

# Chapter XXV 創生せよ、己が勝利の真実を・ 上/True color

打って、薙いで、斬り結ぶ。深い裂傷を刻みながら、刻一刻と死の淵まで墜落していく感覚を味わっている私とレナ・キリガクレ。

互いに背負っている傷は致命傷。戦える時間はそう長くない。よって、勝負は一瞬で決するだろう。

そして勝利を手にするのは決まっている——私だ。

「愚かな人ですね。あのまま逃げていれば自分だけは助かったかもしれないものを、鳴殺シューリンクス笛のような下らぬ男の為にわざわざ死に戻つてくるとは……心の底から疑問に思いますよ。あの男のどこに、それほど魅力があるのですか？」

「あんたみたいな盲目に分かる訳ないでしょう、馬鹿じゃないの。ていうか、分かられて惚れられても困るのよ。」

恋敵は少ない方がいいし——ねッ！」

振り下ろした鉄塊剣の一撃で、分身体を一体粉々に打ち砕く。風圧でレナ・キリガクレ本体をともう一体の分身体を吹き飛ばしながら、私は更に追撃の構えを取った。

そして――

「自分の気持ちを受け止めて、見つけてあげられた今なら分かる。

……ううん、分かっていたけど、より鮮明に感じるようになったわ。

……貴女と黄金腕輪、本当に可哀そうよ。哀れでならない」

「……な、に……う？」

私の浴びせた言葉をレナ・キリガクレは不快に感じたのか、その能面のような表情を僅かに強張らせた。

ああ、己が愛の形を否定されたとても思っているのだろうか？

でも……そもそも前提からして間違っているのよ。

「貴女のそれは断じて『愛』なんかじゃない。百歩譲って『恋』になるかどうかってレベルなのよ、貴女の心は」

「何を馬鹿な。私の眞実の愛をそこら中に転がる俗なものと同列に扱わないでください。吐き氣がします」

「そこら中の恋する乙女たちからしてみれば、むしろ貴女と一緒にされたくないって気持ちで満場一致でしょうよ。

何回も言っているでしょう……貴女のそれは、どこまで行っても自慰なのよ！」

誰かに好きになった。恋をした。普通の人間であれば、その好きになった人に振り向いてほしいと願うだろう。一緒にいたいと願うだろう。手を繋ぎたいと願うだろう。涙も笑顔も分かち合いたいと願うだろう。

それこそが、所謂人が持つ感情の一つ……「愛」だ。「愛」とは、交わし合い、共有したいと願い生まれてくるものだ。

それを、振り向いても欲しくも無くて、何もかもを共有したいとも願わない……ただ、「貴女は私の理想の王子様だから、そのままでもいいと願うだけ」……「愛さないうでください、振り向かないでください、どうかどうか、そのまま」……なんて。

「貴女は結局、あの爺のことなんて愛していないの。自分の都合のいい自慰道具としてしか見てないのよ。」

自分を最高に気持ちよくさせてくれるから、それを恋愛感情と勘違いしちやつてるだけ。

……本当、馬鹿みたい。オナニーにハマりまくった餓鬼かってーの」

瞬間、レナ・キリガクレの虚無の面貌に、確かな激昂が浮かび上がった。



今までの千倍に匹敵するかの如く殺意の情動が総身の端々から漏れ出ている。

そんなに自分の絶対正義と抱えていた愛を否定されたのが勘に触ったのだろうか。だが私が指摘したことは事実以外の何物でもない。

確かに、振り向いてくれなくても構わないという種類の「愛」というものは存在するだろう。

例えばそれは、偶像への「愛」。ただ応援したいだけだからという無償の愛も、この世にありふれているのは事実である。

だが、レナ・キリガクレのそれはまたベクトルが違っている……というか、一線を越えすぎているのだ。

あそこまでいけばもはや押し付け、エゴイズムと言ったって本質的には間違いないだろう。

押し付けてしまったり自身の自慰道具にしてしまう時点で、もはやそんなものは愛でも何でもない。ただの「迷惑」。それ以上でもそれ以下でもない。

「できることなら貴女に教えてあげたいわよ。誰かを愛するっていう気持ちよさを。自慰なんかとは比べ物にならないわよ?」

「その必要はありません、閉口しなさい下女が」

依然として抑揚のない口調で反駁はんぱくしてくる彼女には、しかし先までの余裕然とした態度は見る影も無くなっていた。

攻撃の苛烈さが目に見えて上昇している。自身の胸の奥から湧き上がる憤激をそのまま力に変換し、解放しているのだろう。

三方方向繰り出される剣戟の一切に加減や遊びは皆目存在せず、一撃一撃に、必ず私の命を両断するという絶対の意志が乗せられている。

「口を開けば耳朵が腐るような甘言ばかり。

俗物が。何を知ったつもりで私の「愛」を愚弄するのですか。所詮貴女方の抱く恋慕の情など、性欲の延長。交尾して子孫を残したいという人間の本能による錯覚です。ですが私は違う。そんなものには必要はない。シン様と交わりたいなどと、どうして思うことができるでしょうか。私はあの方のお役に立ち続けることができれば——この想いさえ守れば、それだけでいいッ!」

「ついに自ら口にしたわね。交わりたいなんて思わないって。自分でも分かっているんじゃない。じゃあもうやめましょうよ。子供の「恋愛ごっこ」なんて。

本気であの爺が好きだって言うなら、その本気を魅せてみなさいよ。恋する乙女として、あの糞老害を振り向かせてみるッ!!」

「——黙れええええッ！」

ついに怒りが限界値を突破したのだろう。

レナ・キリガクレは、私の剛撃乱舞を掻い潜り、懐への潜入を敢行する。

同時、分身体を即座に二体形成——私の命を粉碎する死の包囲網が完成した。

零距离からの刺突三閃……もはや回避できる猶予はとうに過ぎ去っており、迎撃する

より早くレナ・キリガクレの死神の鎌は私の命に爪を立てるだろう。

このままでは死んでしまう。論ずる余地なく絶体絶命で、私が切ることのできる手札

もほぼ絶無に等しい。

ならばこのまま、敗亡の淵に墜落するのを受け入れるのか？

……答えは、否だ。

何故なら、ああ……そんなものは、決まっただけ。

「ね、隊長……勝つのは……私達なんだからッ!!」

最後の力を振り絞る。これが真実、私の最後の魔獣変造。

一度レナ・キリガクレを絶命の瀬戸際まで追い詰めた私の切り札……内臓を変形させ

た触手を、今回は手形に変造させて、三つの影に奔らせた。

残念だったわね、神聖魂泉。距離が零になったということは、何も貴方だけが私の命に手を掛けたということじゃないのよ。

逆もまた然り——貴女の命の射程内に、私も両足を踏み込んでいる！

背後から迫っていた二体の分身ルニルは危うげなく捕捉することに成功する。間髪入れずに力を籠めて、林檎のように握りつぶした。

レナ・キリガクレは即座に新たな分身を創造しようとするが、こちらの方が一手早い。

手形に伸びた最後の触手の一本は、レナ・キリガクレ本体の左腕を捕捉する。あとはこのまま力を籠めて、そのまま心臓ごと握りつぶせば、私の勝ちだと勝利へのイメージが実像を結びかけた瞬間、レナ・キリガクレは、信じられない行動へと打って出た。

「……………ッ！ 貴女、な、にを……………!？」

「言ったはずですよ。私は、シン様の勝利の為にすべてを捧げると。ならば腕の一本や二本、痛痒のうちにも入りません」

レナ・キリガクレは私に捕捉された左腕をあるうことか己が手で切り捨てたのだ。

まるで初めからそうするつもりだった言わんばかりに流麗な手捌きで、一切の躊躇なく、刃を奔らせ激みなく。

断面図から飛び散る肉片や血液に微塵も斟酌することなく、レナ・キリガクレは僅か

に微笑み、星の鼓動を再起させる。

私の心臓に、刃を突き立てながら。

「私の『愛』の勝利ですね。醜き獣人、リディア・ウオーライラ。地獄の底で、永劫眠りにつきなさい」

決着。覆しようのない勝負の結果が、今ここに刻まれようとしていた。

ああ、確かに。私は、レナ・キリガクレに敗北した。彼女がここまで計算に入れて私に一騎打ちを吹っ掛けたのかと思うと、確かに私はその勝負に乗った時点で敗北は避けられなかったのだろう。

この一合において、レナ・キリガクレは私の一手先を読んでいて、だからこそ勝利をその手にもぎ取った。

疑いようもなく。たった一人で、私に勝利したのだ。

……でもね、ごめんなさい。万年自慰中毒処女。

「私、最初から一人で戦ってるつもりとかなないから」

言つたでしょう。勝つのは、私達だつて——！

「——助けてくださいッ！ ジュードくん!!」

「——その言葉を、待っていました!! ウオーライラ少佐ッ!!」

「——ッ!? な、に……!!」

私の助けを求める声を聴き届け、レナ・キリガクレの背後で我らが瞬<sup>カブ</sup>圧<sup>リ</sup>山<sup>コ</sup>羊<sup>ー</sup>が一人、  
ジュード・シモンの剣筋が舞い踊つた。

気配を察知しレナ・キリガクレは弾かれたように振り向くが、もう遅い。

ジュードくんの振りぬいた太刀風は、狙い違わずレナ・キリガクレの右腕を根元から  
切り裂いていた。

噴水のように鮮血が中空へと乱れ咲くと共に、斬り飛ばされたレナ・キリガクレの右

腕と握られていたアダマンタイトが第二太陽の下で弧を描く。

それらを見上げながら、呆然とした表情を浮かべる神聖魂泉<sup>ウルザブルン</sup>。

そう、貴女は私には勝つたのかも知れないが——私達には、敗北したのだ。

「貴様アア——ッ！」

嚇怒の念に支配されたままジュードくんへ突貫しようとするレナ・キリガクレを、今は今度こそ捕捉することに成功する。今度は手形の触手ではなく……自分自身の両腕で、レナ・キリガクレの頭蓋を驚掴みにしていた。

「ジュードくん、ありがとうございます。助かりました」

「いえ、先に助けてもらったのは自分の方ですから。当然のことです。」

それに、ウォーライラ少佐が教えてくれたんじゃないですか。意識を分散させろつて。だからこそ俺は、少佐の危機に気づくことができました。

すべて、少佐の功績ですよ」

「買いかぶりすぎです。」

……成長しましたね、ジュードくん。さあ、あとは私に任せて、他の子たちの援護に向かつてください！ このお礼は、改めての機会に！」

「はい！……あと、少佐！」

「はい?」

「——少佐の星、滅茶苦茶格好いです。俺、大好きですよ」

「……悪趣味ですね。早く行つてください。お尻蹴飛ばしますよ」

などと、戦場には似つかわしくない……まるで姉弟が交わすようなやり取りを繰り広げ、改めて私はジュードくんの背中を見送った。

そして、再び私が対峙するべき真の敵へと向き直る。怒りの形相に濡れた、レナ・キリガクレに。

「待たせたわね」

「……き、さまッ……! 私の『愛』を、どこまでも虚仮に……! ゆる、さない……!」

両腕を失い、力なく藻掻くその姿は、まるで翅を挽がれた蜻蛉とんぼのようだった。

アダマンタイトも失つてしまい出力も基準値に低下……当然星の力に頼ることもできず、正真正銘レナ・キリガクレは私達に敗北したのであった。

「グ、ガア……こ、の……化け物め……ッ! 鳴殺シューリックス笛も、貴女も……醜き獣人同士、本当によくお似合いですよッ……!」

揃いも揃って、化け物があアッ……!」

もはや自身の敗北と死は避けられるものではないと悟ったのか、せめて最期にその心にありつただけの罵詈雑言を浴びせてやろうと考えたのだろう。



私の心に泥を塗ることができただけの悪罵を次々とレナ・キリガクレに対し……私は……ごめんなさい、少し前の私ならいざ知らず、今の私は、そんな言葉で傷ついてやれるほど繊細可憐な乙女じゃないの。

「勝利」しあわせを見つけた私は、そんな言葉で傷つくどころか、むしろ――

「隊長と同じなら……うん、そうだね。悪くない」

あの人と同じ……と言われた嬉しさの方が勝つてしまい、あろうことか笑顔を浮かべてしまうのであった。

想定した景色とは真逆のものに、絶句を禁じ得ないレナ・キリガクレ。

……そうね。貴女には一生分らないでしょうね。

だから――

「私の痛みを、少しだけ分けてあげる。これで、他人を知る」つていうことを覚えて逝くといいわ。

魔獣変造、メタモルフォシス付属性全開稼働――スクリーム・インフエクション激壊無間叫喚地獄

いざ、私の地獄で狂い哭け。



り。

「ガアアアアアアアアアア!! アア、アツ——アアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」  
 星の力を喚起させることに、彼女の全身の肉が見るも無残に、グロテスクな風貌へと改造されていく。

臓器はねじれ、骨は軋み、端正な顔面は小人ゴブリンのように崩壊した。

拳句の果てには腹部や背中、口腔を突き破り怪物の手足のようなものが木枝となつて生えてくる。

もう滅茶苦茶だ。レナ・キリガクレはもはや戦う意思を一切喪失し、ただ痛みに狂い哭くだけの肉袋と化していた。

「ギイ、アアア……!! だ、誰……か……わた、しを——」

「助けないわよ。だって貴女、誰も助けなかつたじゃない。それなら誰も助けたくないのは道理でしょ」

「——」

突き破られた喉の奥から、僅かに呼気の漏れる音がした。

「そうよね。いくら鈍感な貴女でも、私の今放つた言葉の意味くらいは分かるわよね。」

「私達は心ココロで動いているんだから。自分のことしか考えていない、心を交わすつもりがない奴に、手を差し伸べてくれる人なんかいないわよ」

かつて私も似たようなものだったから、分かるのだ。

自分さえよければいい……そうやって自分の殻に閉じこもり心を交わす意思のない者に、救いは永遠に訪れない。

だから人々は、心を交わし、繋ぐのだ。誰かに光を与えて、与えてもらうために。都合のいいときだけ利用できる“心”なんてものは……この世に存在しないのだ。

「ガ、グ……アア……最期に……教えてください、リディア……ウォー、ライ……ラ……  
貴女は、光狂いでは……なかった、はずです……」

それなのに、何故……まだ戦うことができたのですか……？ 貴女は先の私との一戦で……もはや能力を……使用できないほど、追い詰められたはず……まさか、土壇場で覚醒した……などと、やはり意味不明な根性論をかざすつもり、ですか……？」

「ああ……そんなこと。それこそ、簡単なことよ。覚醒でも何でもないわよ。だって私、未来永劫光狂いになんてなれっこないから」

そう。リディア・ウォーライラに光狂いの資格はない。きつと私は永劫、光の徒になることなどできやしない。

それでも……それでも私は、一応ほら……女の子だから。

「好きな人の為に、気合と根性を振り絞れないほど……女として落ちぶれちゃいないつもりだから」

見知らぬ誰かの為に力を振るったり、覚醒したりなんて、私には絶対真似できない。でも大切な人の……ロバーツ隊長の為なら、いくらでも頑張つてやるって思える。

恋する乙女は無敵なんだ。愛する人の為なら、どこまでも馬鹿を貫ける。

だから、さようなら。レナ・キリガクレ。

「じゃあね、レナ・キリガクレ。次生まれ変わったときは、ちゃんとした普通の恋する乙女になりなさい」

「……ああ。シン様。それでも、私は——」

儚く消え入りそうな言葉を最愛の人ドラウプニルに囁いたが最期、私と神聖魂泉ウルザブルンの決着が厳かに告げられた。

瞬間、限界を振り切った能力の行使に全身が叫喚し、私はたまらず膝をついてしまう。息が詰まる。頭が割れるほどに痛い。自身の内臓など、今やどういう有様なのか想像するだけで身の毛がよだつ。

だけど、それでも……

「啖呵切った手前……そう易々と寝たら、格好つかないもんね……」

まだ黄金腕輪ドラウプニルと激闘を繰り返している隊長の下へ援護に向かうため、震える両膝に渴を叩きこみ、奥歯を噛みしめ立ち上がる。

星の力も全力稼働——反動差により溶解する内臓以外の回復にすべてのリソースを回す。

早く……隊長のところへ……

「待つて、いてください……ロバーツ隊長」

……

……

……

「ハッ——ようやく限界が訪れてきたと見えるな鳴殺<sup>シューリンクス</sup>笛。とことんてこずらせおつて。もはやこれ以上の覚醒は望めまいッ！」

「舐めるなよ黄金腕輪<sup>ドラウブニル</sup>。俺はまだ輝ける……帝国の未来を守るためなら、何度でも立ち上がり戦える！ 勝つのは、俺達だアアア——ッ！」

拳と弓矢と雄叫びが、大熱宿して飛翔し、乱舞し、絡み合う。

それぞれの負けられない理由を心臓に抱えながら、シンとアルヴィンの戦いは空前絶後の領域に激化していた。

アルヴィンは元より、シンももはや出し惜しみなど微塵もしていない。己が内在する

戦力を総動員し、眼前の敵の絶対駆逐を目指して五体と五感を駆動させる。

結果として両者の攻防はほぼ互角を演じていたが、しかしそれも徐々に翳りを見せていた。

そうだ。既にアルヴィンの肉体は限界を迎えている。よって、この局面に来てアルヴィンの弱体化が始まってしまったのだ。

穴を穿たれてしまった酒樽が如く、時間経過とともに四肢の隅々から命の欠片が零れていく。

絶命は避けられないのは言わずもがな、それどころか、このままではシンに勝利することなど間違はなく不可能だ。それより先にアルヴィンの心臓が止まってしまおう。

そしてそうなった場合、もはやシン・榊・アマツを止まられる者は一人もいなくなるだろう。

リディアでさえ彼を止めるには役者不足。シンを相手取るのはアルヴィン以外に適役がいらないとなれば、そのアルヴィンが討ち取られてしまえばどうなるかなど、想像に易い。

容易く、瞬<sup>カブリコーン</sup>庄山羊は瓦解する。

全滅は免れない。

だから、アルヴィンだけは絶対に負けてはならないのだ。

負けられない。負けてはいけない。アドラー北部の最後の希望。護国の証。そんなことは、誰よりも分かっているから――

「うおおおおおオオオッ!!」

碎ける肋骨と崩れる内臓を真つ向無視して、アルヴィンはシンに食つて掛かる。

その姿はまるで、獲物の喉笛を必死に噛み切らんとする狼だ。

瞳に灼熱の業火を灯して、殺意の波濤を放射する。

必ず殺す。必ず護る。必ず、勝つ。

著しい弱体化を強いられながらも、アルヴィンは猛撃の手を休めることはなかった。

もはや覚醒できるほどの余力もないが、それでも決して諦めない。

帝国を生きるすべての者の明日を拓く為に、こいつを討ち取るまで止まる訳には――

「――ッ」

瞬間、アルヴィンの挙動がほんの一瞬完全に停止した。

無理もないだろう。いくらアルヴィンの精神が無限の熱を宿していようと、身体は素

直で正直だ。



キヤパシテイを超えてしまったダメージ量に、ほんの刹那だけ全身が絶叫を迸らせ、身体の動きが完全に止まってしまったのだ。

時間で視れば一秒、長くとも二秒。取るに足らない、本当に一瞬の出来事。

だが、達人同士の戦闘において、そのほんの刹那が命取りになるということは、アルヴィンもシンも承知のことだった。

ゆえに――

「――幕だ、シューリンクス鳴殺笛。これで理解しただろう、若造に未来を創造することなどできない。所詮貴様らは、我らねんちようしや神祖側の下地でしかないのだ」

木材をへし折ったような音と水風船が破裂したような生々しい音が溶け合い、青空の下に鳴り響く。

同時、シャワーのように噴出する冗談じみた量の鮮血。鉄臭い新鮮な血液は、蒼く輝く晴天とは真逆に大地を真っ赤に染めていた。

鋭く繰り出された渾身の貫手が、アルヴィンの胸部を無残にも抉ったのだ。

貫通したシンの右手には、まだ生気を宿して蠢動しているアルヴィンの心臓が握られている。

もはや覆しようがない。絶対的な決着の鐘が、ここに鳴り渡るのだった。

「…………ア…………ま…………だ…………」

血の塊で喉を詰まらせながらも、アルヴィンは必死に最期の抵抗を試みる。

総身に残ったありったけの戦意と熱と輝きを束にして、まだ俺は戦えるのだと奮起を計るが……

「……………ッ」

力を籠めた先から、すべての光が霧散する。もはや、身体がまったく言うことを聞かない。

どれだけ心ばかりが燦然と燃焼しようが、身体に一切の輝きが灯らない。

それどころか、五感までもがまともに機能しなくなり、今現在自分が感じている痛みや世界の音が、徐々に遠くなっていく感覚をアルヴィンは覚えた。

そうして長い思考の果てに、アルヴィンはようやく、自身の今置かれている現状を正しく認識するのだった。

「……………負けた、のか。俺は」

ぼつりと漏れた眩きは、誰の耳にも届かなかった。

戦場にはただ血生臭い風が吹くばかりで、その音ばかりが、今も勇敢に戦う戦士たちの鼓膜にこびりつく。

こうして、あまりにも呆気なく、第十北部駐屯部隊・カブリコロン瞬庄山羊隊長アルヴィン・ロバーツは、二度と這い上がってこられぬ闇の敗亡の淵へ叩き落されるのであった。

もはやアドラーに逆転の可能性はない。

徐々に光が失われていくアルヴィンの両眼が、それを何よりも物語っていた。

# Chapter XXVI 創生せよ、己が勝利の眞実を・ 下／True colors

——ああ。最後の最後まで、俺はこんな無様を晒すのか。中途半端なまま。何一つ、母国の為に、何も成せぬまま……

霧のように薄れていく意識の中でアルヴィンが浮かべた心境は、ひたすらに忸怩たる思いであった。

深い海底を思わせるほどの、自身の無力さへの自責の念。ただその一念だけが、アルヴィンの未練となり、胸中で漣を立てている。

心はこんなにもまだ戦えると吼えているのに、燃えているのに、輝いているのに……アルヴィン・ロバーツという脆弱な肉の器は、「もう限界だ、これ以上は動けない」と、情けないこと極まりない情弱を体現せしめている。

つまりはここが、アルヴィン・ロバーツの限界点。永遠に二番手に甘んじてきた無能な男の終着点だと強烈に自覚した。

アルヴィンは考える。もしここに立っていたのが自分ではなく、ハーヴェスだったら

？ ジェイスだったら？ または親父であったらば？ そして——ヴァルゼライド閣下であったらば。

間違いなく、燃ゆる覚悟を咆哮し、覚醒の復活を遂げていたであろう。

心臓を失ったから、それがどうした。ただ身体のポンプを失っただけであろう、ならば委細支障は無し……と。

紅蓮の光を双眸に宿し、より高みへと天昇したまま大上段に敵を切り伏せていたに違いない。

当たり前前に奇跡を具現させ、そして総てを守り抜く。かつて己が憧れた、光に墮ちた英雄譚。

そんなかつての憧れさえ、今は遙か遠く、指先さえも届かない。

瞳の奥に焼き付いた光の記憶が、ぼろぼろと力なく零れ落ちていく。

意識が、真つ逆さまに奈落の底へと墜落していく。

それを象徴するように、力強く握りしめていたアルヴェインの指が力なく解け、アダマントイトが地に落ちた。空しい金属音が寒々と木霊する。

そんな事実上の敗北を告げる残酷な音響さえ、今のアルヴェインには知覚することすらままならない。

世界から色が抜けていく。シンの哄笑も遙か遠くから聞こえてくる。痛覚に至って

は、もはや完全に五感から消滅していた。

結果巻き起こるのは、自我の崩壊。アルヴィンは、自分と言う存在すら忘却の彼方に置き去りにしたまま、冥界の扉を開けようとしていた。

俺は一体、誰だったのだろう。俺は一体、何になりたかつたのだろう？

ああ……そうだ。俺の勝利とは、一体何だったのだろうか？

結局それも分からずじまい。人生の瀬戸際に立たされた今となっても、アルヴィンは自身の「勝利」への解答が不明なままだった。

心はたまらず「それ」を求めているはずなのに。正体が分からないゆえ、伸ばした手はただ虚空を切るのみ。永劫届くことはない。触れることすらままならない。

やはり俺は、一番の星に輝きたかつたのか？ 永遠の二番煎じという呪縛から解き放たれ、ヴァルゼライド閣下と言う天頂の星になりたかつた？

皆の英雄になりたかつたのか？ それとも、それとも、ああ、それとも……

『それが凄く安心するんだよなあ。あとお前聞き上手だしさ。悩みとかすぐ聞いてくれるし、こうやって今だって愚痴にだって付き合ってくれてる。

今の部隊の中でお前のご嫌いな奴なんて一人もいないって』

——違う。

『そのままできてくれよ、ロバーツ。本当にお前のその優しさには何度救われたか……  
ありがとうな』

——違う。

……ああ。違う、とは、何が？

何故お前は、彼らのその言葉を受け、心に影が差した？ 違うと拒絶した？

『アルヴィン、お前の優しさは、ロバーツ家随一だ。きっとその優しさで、救える命が沢山あるはずだ。俺はその優つよさを、心から誇りに思うよ。

胸を張れ、アルヴィン。その優しさは、紛れもないお前の一発の武器だ』

——違う。

何が、どう違う？ 敬愛する父からもらった最上の称賛だ。胸を張ってしかるべきだろう？ だのに何故お前の心は依然として燻っている？

あの言葉が、お前は嬉しくなかったとも言うつもりなのか？

それともお前は——優こゝなしさなどいらなかったとしても、侮辱の言葉を吐くつもりか？

『違うなよ、アルヴィン。お前の持つその優しさは “正しい光” だ。

『壊す光』になんて憧れる必要はない。その優しきは誇りだけ。お前はお前のままでいてくれや』

——違う。

いいや、違くない。ジェイスの言っていることは正しい。俺は、今のままでいい。ヴァルゼライド閣下のような、『破壊の光』に憧れる必要はない……だが。

今思うに、ジェイスの口ぶりからすると、俺は今でも『壊す光』に憧れているということなのか？

だとしたら俺の真実は何だ？ 俺は……一体、何になろうとしている？

『俺のようにはならないでくれ。』

未来のアドラーに必要なのは俺のような破綻者ではない、お前のような、誰かに温かい光を与えてやれる優しき男なのだ。

誰かを壊す光ではない。誰かの道を照らしてやれるような光を持つ、そんな優しきお前のままでいてくれ、アルヴィン・ロバーツ。その優しき光で、どうかアドラーを導いてほしい』



——違う。

ああ、そうだ。違う……違うんだよ。

何もかもが違う。合ってはいるが、違うんだ。

皆が口に行っていることは、総じて俺の真実なんかじゃ断じてない。

俺が求めているものは、“優しき光”ではない。いいやそれどころか、“優しさ”などという温かい篝火なんかじゃ、断じてないんだ。

そうだ。俺は……俺は……  
 ■■■……に……

「ふん、ようやく逝くか。弁えろよ、餓鬼が。貴様のような男は、新西暦に生きていてはならんのだ。貴様らのような者が我が物顔で大地を歩くだけで、道理が捻じれる。世界が歪む。まるで歩く癌細胞よ。死んで当然とは思わないか、なあ？」

真理に至る刹那、更に深くねじ込まれたシンの剛腕がそれを遮った。

再び混濁するアルヴィンの支えたる自我、深層意識。粉々に霧散しかける自意識の中で、アルヴィンが答えに辿り着ける可能性はこれで零に還った。

彼の勝利は、もはや未来永劫訪れない。闇に溶けたまま、深い眠りにつくのだった。永久の眠りにつかんとするアルヴィンをその両眼に映し、シンは呵々大笑する。

自らの絶対勝利を確信し、己が誇りと勲章をこれでもかど天下に知らしめるかの如く、大仰に青空を仰ぎながら——すべての運命を決定づけてしまおう一言を口にするのだった。

「新西暦は神祖カミと人ミが歩む地平だ！ 貴様らのような光に狂った人外に住まう場所など  
在りはしないのだ！ 大人しく、地の獄舎で眠りにつくがいい——この、化物モノめ」

「

化物モノ。その二文字がアルヴィンの両耳に触れた瞬間、彼の世界は音速を超えて蘇よみがえった。

空洞になったはずの胸の真ん中が、地響きのように強くドクンと脈動した。

血が通う。熱が灯る。光が、輝きが、全身に帯びていくのをこれでもかと体感する。  
……ああ。そうか。そういうことだったのか。

俺は、優しき光になりたかつたんじゃない。一番星になりたかつたわけでもない。  
ましてや、ヴァルゼライド閣下自身になりたかつたわけでもない。

いいや、ある意味それは的を得ていた。半分合っていて、半分違う。

俺は、ヴァルゼライド閣下の英雄然とした姿に憧れていた訳じゃない。

真実は……むしろ、その逆で——

「俺は——ヴァルゼライドあなという名の、化物たになりたかつたんだ」

然り。それがすなわち、己が“勝利”の真実なり。

胸の奥に宿る悲願の大火を自覚したその瞬間、アルヴェイン・ロバーツの魂魄は猛々しく煌めきながら爆発した。

「いッ、おいおおオオ——ッ!？」

刹那、勝利を謳うシンの顔面に隕石を思わせる弩級の衝撃が飛来した。

骨が砕け、毛細血管が連鎖的にブチ切れる音を内側から聞きながらも、当のシンには何が起きたか理解が及ばない。

そんな白痴の如き無防備を晒す老拳士に対し、しかし嵐は鎮まりを見せるどころか加速していく。

シンを今しがた打擲ちやうちやくした衝撃、それは徒手による拳骨だった。

その一撃を見舞ったのが誰かなど、この場において一人しかいないだろう。

——そう。信じられないことに、心臓を失った仮死状態でありながら、アルヴィン・ロバーツは打撃の応酬をシンの五体に浴びせていた。

熱く振りぬかれた右ストレートが顎を砕く。続けてすかさず打ち込んだ膝蹴りに、老骨の軀体がくの字に折れ曲がる——のみに終わらず、間髪入れずに打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃——破壊乱舞の多重奏。人体を悉く損壊せしめる暴力の疾風は、文字通りシンの五体の隅々を壊し尽くしていた。

骨などもはや粉末状に砕け散らされ、内臓は無事な箇所がないほどにムース上に攪拌されている。血管に至っては、使い古された荒縄の如くずたずただ。無事な箇所を見つめる方が難しい。

一方的な肉詰めサンドバッグと化すこと十数秒、アルヴィンは勢いよく腰を回転させながら右拳を振りぬいた。

撃ち抜かれる黄金腕輪ドラウブニルの皺だらけの厚顔。破壊の弓矢とも見紛うほどの激烈な衝撃を与えられたシンは、無様にも錐揉みに吹き飛びながら大地に叩き付けられた。

「ぐッ——おッ、おおおおおオオオッ——!!」

瞬間、悪魔の如き形相で立ち上がりながらシンは異能を胎動させた。

ふざけるな。何の冗談だこれは。何故、儂がこのような汚辱に塗れなければならない。許さん。許さん、決して許さん——！

無限に膨張する怒りと屈辱のままに、シンは殺意を漲らせる。

中空に残留していた衝撃のすべてが、一斉に猛獣の牙となりアルヴィンへ襲い掛かった。

目測だけでも、その数、悠に三十は超えている。当然、現在瀕死状態にあるアルヴィンがあれを一撃でも受けてしまえば、即昇天は疑うべくもない。いや、それどころか今こうして大地に足をつけ戦闘を継続している事態すら異常なのだ。

そんな綱渡りの今、この局面はもはや絶望を通り越しているとすら言えるのだがしかし——アルヴィンは怯まない。どころか、進撃の足を止める気配がない。

立ち昇る闘気が、不退転であると告げている。

「ハッ、馬鹿が！ 死ねえええエ——ッ！」

儂の誇りに唾をかけた大罪、重く受け止めながら死ぬがいい——次こそはと真に勝利を確信しながら、シンは口元に三日月を描いた。

砂塵を巻き上げながら極大の爆発が巻き起こる。あまりの規模の衝撃に、疑似的な竜巻が発生し、余波で近辺の建物が瞬時に崩壊を起こした。

全弾命中——必殺を確信する。これで死んでいなければ、真に奴は“化物”だろう。だが理論上あれを全発食らって生き延びているなどあり得ない。それが可能なのは恐らく神祖とその加護を受けた使徒、そしてあるいは、彼の英雄くらいのもので……いや、さしもの英雄であれ、あの致命傷で先の剛撃を食らったとあれば絶命はまず間違いない——そう思った、束の間だった。

「……………は、あ……………」

シンの意識が虚無になる。まるで絵空事でも見ているかのような心地になり、現実を正しく認識できない。

これは、一体、何が起こっている？ 夢でも見ているのか？

シンの眼前には、信じがたい光景が広がっていた。

アルヴィンが全身から冗談のような量の血液を吹き散らかしながら——しかし、どこまでも狂気じみた笑みを浮かべ、砂埃を切り裂いてこちらへ突撃してきているのだ。

もはや、気が触れているなどと言う領域で済まされるレベルの話ではないだろう。

致命傷なのだろう？ 心臓をもぎ取られたのだろうか？ そして、先の拳の三十連撃を回避することなく、まともに直撃したのだろうか？

ならば何故動ける？ いやそれよりも何よりも……何故、まだ生きている……？  
何故当たり前のように生命活動を続けられ、それどころか嬉々としてこちらに向かつて疾走してくる……!?!?

「ち、近寄るなアアッ！ こ、のツ、薄汚い——」  
「化物だつて言うんだらう？ ああ、その通りだ」

再び、常人であれば五十は殺せるほどの威力を乗せた鉄拳が、シンの鳩尾へと深く突き刺さった。

とても基準値で繰り出されたものとは思えない出力に恐怖を覚えながら、シンは抵抗空しく倒壊した建造物の残骸へと吹き飛び、衝突する。

激しくせき込みながら血を拭い、屈辱に濡れる瞳を前方に飛ばす。そこには、邪悪とも表現できる凶暴な微笑を浮かべるアルヴィンの姿があった。

いや、彼は本当にあのアルヴィン・ロバーツなのか？ かつて彼を形成していた優しさの欠片が、微塵もそこには存在しない。

そこにあるのは、殺意へ奔る激情と、総てを壊すと言わんばかりの狂ったように輝く両眼だけだった。





誘う、シユールンクス恐慌の笛と知るがいい!

皆殺しだ、アドラーを荒らす宗教家ども——これ以上この地は荒らさせん。これ以上誰も、殺させはしない。俺がすべて残らず、守り通すツ!!」

そう。これがアルヴィン・ロバーツの真実。

一番になりたかつたわけじゃない。ただ、自分にはなかつた「破壊の光」を携えていたジェイスやヴァルゼライドという……「化物」に憧れていただけ。

羨ましかつた。そう、羨ましかつたんだよ。化物だと恐怖されているお前たちが。それほどの強さを兼ね備えていたお前たちが。

俺は、たまらなく羨ましかつた。

怖がられ恐怖されるということは、それすなわち人外の強さを兼ね備えているということの裏返しに他ならないだろう?

強ければ強い分、守れるものも多くなるだろう。アドラーも。この国で暮らす愛すべき民も。取り溢すことなんて、まずなくなるだろう。

対して、俺アルヴィン・ロバーツはどうだ? 今までの人生、「化物」だなどと恐怖されたことが一度でもあつたか? 誰かに恐れられたことがあつたか?

否、否、断じて否だ。そんな経験、一度だつて有りはしなつた。

皆一様に口を開けば、アルヴィンは優しい、温かい、安心すると……それはつまり、俺

が弱いということに他ならない。

帝国を守る器に非ず。そう無意識のうちに感じていたから、俺の心には終始モヤが掛かっていったんだ。

強くなりたくない。強くなりたくない。化物のように、誰よりもどこまでも。

恐怖されるほどに。化物だと疎まれるほどに。

何も失ってしまったわらないように。すべて守り通せるように。俺一人が嫌われてそれが叶うのなら、この優しさも温かさも、ものみなすべてくれてやる。

俺の誇るもの一切残らず、灼熱の修羅へと転じさせよう。

爆熱する光の覚悟を掲げながら、アルヴィンはアダマタイトを再装備——出力を基準値から発動値へと振り切った。

これが最後の覚醒だ。かがやき

ゆえにいざ、牧羊神アイギバリンらしく、屠殺の調べを奏でよう。

その命の煌きの悉くを恐慌の果てに突き墜とすため、さあ——

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

誰よりも一番の、化物に生まれ変わるのだ。

「開闢かいびやくの聲、天地に轟く。生まれ落ちた我が身を包むは、祝しゆくの音色と溢れる歓喜。神の喜悅は天を裂く」

詠唱の開始と同時に、アルヴィンは弓矢をシン一直線に構えながら爆速で大地を駆けだした。

迅雷の疾駆による激烈たる衝撃に、地盤が悲鳴を上げ、陥穿を穿たれていく。

只事ではないだろう。いくら星辰奏者とはいえ、地を駆けるだけで地面が陥没するなど、冗談ではない。そのような現実が罷り通るのなら今頃こちら一帯はとつくに不毛地帯の更地と化している。

まるで恐竜を思わせるほどの大進撃は、文字通りアルヴィンが人としての枠を外れ、化物の領域へと覚醒せんとしている証だった。

「満ち満ちていく神威の中で、しかしてなにゆえ？ 響く笛には、永劫熱が宿らない」

弾丸のように突貫してくるアルヴィンに気圧されながらも、シンも負けじと拳を構え

る。

確かに今の鳴殺笛シューリンクスは、驚異の化け物へと変貌を遂げた未知の存在でありその戦闘力も不透明だ。だが、誓って負けることだけはないとシンは己を鼓舞させた。

何故ならばあの致命傷——どんな奇跡を起こしたのかなど知りたくもないし理解できる気もしないが、もう二、三分と待たず光の魔法は解けるだろう。

そう思いながらも何度も理不尽な覚醒を繰り返してきたアルヴィンであり、その度に当惑を重ねていたシンであるが、今度こそはや光の祝福は得られまいと考える。

単純に考えて、心臓を失い活動できる時間など、いくら光狂いとはいえそう長くはないはずだ。

ならば時間切れまで待てばよく、ご丁寧に正面切つてぶつかり合う必要などどこにも無い。

ゆえにシンが選択したのは時間稼ぎによる小技の連発。大技をわざわざ狙いに行く必要などどこにも無く、だからこそ小賢しく、しかしより効率的な作戦に舵を切る。

さあ、どこからでも攻撃してくるといい。貴様の弓術など既にすべて見切っている。もはや放てる弓の数としてそう多くないのだろうか？ 同様に、操作できる弓の数も。

ならばその悉く、無に還してやろう。そして今度こそ天下に儂が最強だと知らしめてやるのだ。

シンはどのような攻撃に対しても対処できるようアルヴィンの拳措きよそをつぶさに観察していたが、しかし――

「は――?」

アルヴィンが先まで足を着けていた大地が爆散――次の刹那、彼はシンの間合いまで一気に肉薄していた。

飛蝗ばったを思わせるほどの超勇躍。シンの反応速度を光速で振り切りながら、都合何度目か分からぬ熱い拳を炸裂させた。

「抱きしめ交わした四肢から流れる、愛の結晶、微風そよかぜよ。

それが汝の奏でる音なら是非も無し――恐慌ならくの調べを爪弾こう」

枯葉の如く吹き飛ばされ、散々地べたに引つ掻き回されたシンはしばらく起き上がる事ができなかつた。反撃することすら遙か遠く、戦意さえ微塵に碎かれそうになる。

――儂は、こいつに、勝てない。

「ぐツ……お……お……お、 おおおオオオオオオオオオオ——ツ！」  
最悪な想像が実像を結びかけた瞬間、シンは天を裂かんばかりの大咆哮を爆裂させた。

——儂は負けない！ 若造に後れを取るなど、より長く生きてきた者としてあつてはならぬことなのだ！

そんな妄執めいた信念だけを胸に、シンは無様に駆けだした。  
もはや小細工などには頼らない。

極限状態に追い込まれた時こそ、やはり信じられるのは己が生涯を捧げてきた武のすべただけだろう。

勝利の確率？ 計算式？ 知らん知らん知らん、総じて些事だ、取るに足らない！

「儂はア——<sup>これ</sup>拳で勝つのみだああああアア——ツ！」

ここに、男二人の意地と信念と光が絡み、ぶつかり合う。

互いの守りたいモノの為に。正真正銘己が全魂魄をかけて、闘志が溶鉱炉のように煮えたぎった。





「約束された旋律ねがを響かせ、邪悪を滅ぼす笛となれ」

誰よりも優しかった羊飼いは、獄炎の光輝に焼かれ、怪物譚へと墜落する。

これが、アルヴィン・ロバーツの憧れていた光。その末路。

彼の願った、変身願望メタモルフォシスの到達点。

その名は——

「超新星Metainova——牧羊神Alshatpanの鳴笛音、屠殺Syの調べを爪弾inき給え——!!」

アドラー北部で吹き鳴らされた牧羊神アイギバインの笛シュリンクスの音は、過去最高の完成度で顕現した。

「なッ——」

「これは……!?!」

その時、今現在アルヴィンと相対しているシンのみならず、この戦場にいるすべての兵士たちが一人残らず天を見上げた。

そしてやはり例外なく、皆が動揺し、瞠目している。

一体、何を見せられているのかと。これは果たして、本当に現実の光景なのかと。狸に化かされ見ている夢幻であるならば、早く醒めてくれと一様に懇願するが……悪夢は一向に鳴りを潜めない。

どころか、未だにその数を増やしていく。

「……弓、矢……?」

そうだ。晴れ渡る蒼穹を覆い隠すように、無限とも思える数の鋼鉄の弓矢がそこに鎮座していた。

その数、百はおろか千を超えているだろう。

まさか、これらすべてを、アルヴィンが操縦しているというのか?

馬鹿な。もはやこれは一星辰奏者の星の行使力を超えている。千を超えるこれらの

弓矢を操縦するのに、どれだけの精神力が必要だと思ってる？

アルヴェインではそもそも出力が足りていないし、仮に無理にこのような芸当をしようものなら脳の回路が焼き爛れて即座に廃人になってしまいうだろう。

「だから、それで？」

しかし、そんなものは関係ないと、アルヴェインは嗤う。

「俺一人の魂いのちですべて守り通せるのなら——これほど安い取引はないだろうがッ!!」

大喝——そして星の鼓動を鳴動させる。

瞬間、空中に浮遊していた弓矢が一斉に動き出し、裁きの流星群が如くアドラー北部全域に降り注いだ。

問答無用、一切の容赦なく解き放たれた破滅の流れ星は、至極当然のようにカンタベリーの戦士たちの命を悉く地獄の底へ突き墜としていく。

そう、カンタベリーの戦士のみ、だ。これほどまでの無差別な絨毯爆撃、アドラーの兵士も巻き添えを食らっていない方が不思議と言えるのだが。

結果はむしろ、総員無傷。アルヴェインの機銃掃射による怪我人は、アドラーの者に限

り間違いなく零だった。

なんという操縦技術か。あれだけの数の弓矢を同時に、しかも正確無比に操作するなど、並大抵の者では……否、それどころか現存する星辰奏者では無理な所業だろう。

事実、アルヴィン・ロバーツにしかできない神業をここに披露していた。

蟲の大群に食い殺される稲穂の如く、次々に絶命していくカンタベリーの兵士たち。

もはや全滅は必至、免れない。

アルヴィンの最期に起こした変身譚で、アドラーの窮地は救われた——否、しかし、この男だけは、まだ敗北を認めてはいなかった。

「認めるものかッ！　認めはしない……儂が、このような小童どもに負けるなど、そのようなアツ！」

ドラウブニル  
黄金腕輪、シン・榊・アマツ。

両目を鬼神の如く血走らせながら、迫る死弓へ八極の技を秒単位で叩き込む。

それら一撃一撃が、弓矢を文字通り木つ端微塵にするほどの威力だ。二度と操縦することができないよう、真正銘すべての弓矢に己が全霊をぶつけている。

アルヴィンの絶技と、真正面から対峙しているのだ。

勘違いするな、どれほど覚醒を繰り返そうが、儂の方が強いのだと、天下に知らしめるかの如く。

しかし、シンの身体にも限界が訪れていた。

殺到する弓矢総てを捌き切れている訳では断じてなく、砕いた弓矢の数と同じだけ、シンの五体に破壊の光が突き刺さる。

このままでは消耗戦もいいところで、そう遠くない未来にシンは力尽きるだろう。

だが、シンの心は折れていなかった。それどころか、八極の回転率が上昇している。

光の覚醒？ 馬鹿な、あり得ない。何故ならシンは光狂いではない。光に焦がされるほど夢見がちではない、シンは徹底したりアリストだ。

彼は永遠に、光の徒にはなれないだろう。

ならば、彼を突き動かす原動力は何か？

簡単なことだ。それは、最初から一貫して言い続けている。

「若者如きに——儂が負けるかああああアアア——！！」

そう。すべては、その妄執めいた執念だけ。

負けたくない、負けたくない……駄々っ子のように意地を貫き通すシンの姿は、

いつそ哀れに見えただろう。

だが、そこには確かに信念があった。

どれほど歪んでいようが、歪だろうが、捻じれていようが、貫き通せばそれは絶対値として価値のある信念だ。

断じて軽率に否定できるものではない。

ならばこそその意地を最後まで貫き通したシン・榊・アマツという最大の好敵手に敬意を籠めて、今アルヴィンは終幕の一矢を放とうとしたその時——彼は、致命的なことへと思ひ至る。

——弓矢、切れ……！

懐から取り出そうとした弓矢が、既に底を尽きていた。軍服の至る所に潜ませていた予備の弓矢も同様だ。

ならばと意識を空間全土へ飛ばす——一本でも操縦できる弓矢はないかと探り出すも、見当たらない。

いいや、正確に言うならば十数本は見つけ出すことができたが、駄目だ、遠すぎる。

それらを操縦してシンの命を断つ前に、こちらの命が碎かれてしまう。

「万策尽きたと見えるな」

弓矢で総身を廻り尽くされ、もはや人体模型のような凄惨な有様になった血肉の塊――シン・榊・アマツが、第二太陽に被さるるように跳躍した。

未だ生きてるのが意味不明なほどの重篤ぶり。それはアルヴェインも同様だが、光に狂っていない分シンの方が異常と言えるだろう。

そのすべては、若者如きに、後れを取らないため。すべては我が生涯、誇りの為に。拳を強く、握りしめる。

「刹那の差で儂の勝ちだ。儂も貴様を討った後に死ぬことは業腹だが、今生は貴様に勝つただけで良しとする。

誇りに思え、シューリンクス 鳴殺笛」

そして、緩慢な所作で振り下ろされる決着の断頭台。

緩慢な動きとは言え、今のアルヴェインにそれを回避できるだけの余裕はない。既に下半身の動きは九割がた完全に停止している。

部下たちが愛する隊長を守るべく疾駆するも、間に合わない。

——ここまでか。

だが、本懐は果たした。黄金腕輪は、自らを討ち取って間もなく、絶命するだろう。ならば案ずることは何もない。守り通した。ならば結果、それはアドラーの勝ちだろう。

愛する部下達を残して先に逝ってしまうのは……少し寂しいが。

お前たちならば、俺がいなくても大丈夫だ。長生きしろよ。アドラーを……無辜の民草たちを、よろしく、頼む。

そう切願し、瞳を閉じかけた——その瞬間。その声は、アドラーの空へと響き渡った。

「隊長おおおおおおオオオオオ——ツ!!!」



「——ッ！」

眠りかけていた瞳を見開き、空を見上げる。

そこには、シンより更に高く——天まで届けとばかりに軽やかに宙を舞う、少女の姿が。

少女は両腕が千切れんばかりに大きく振りかぶり、こちらへ何かを投擲してきた。

巨大な鉄の塊——少女のアダマンタイトである大剣だった。

アルヴィンは瞬時に少女の意図を汲み取った。

その鉄塊剣を素早く弦に構え、弓柄ゆづかを強く握りしめる。

投射するつもりだ。無論、本来ならば不可能な芸当だろう。

あの質量の刀剣を飛ばすなど理論的にどう考えても不可能で、傍から見れば正気を疑う光景だ。

……それでも。アルヴィンであれば、それが可能だった。

何故なら、彼の星は「投射金属操縦能力」。

弓から投射したという事実が付随すれば、それが金属であればどれほどの重量を備え



それが、若造の俺からの助言だ」

お前が思っているほど、未熟や若さや青さと言った不完全さも悪くない。

盲目になることなく、次の世界ではもつと己が世界を広げてみるというアルヴィンの助言は、しかし。

「……………儂は、神に選ばれし、至高の黄金腕輪。ドラウプニル

——若造の助言など、誰が聞いてやるものか」

これだから若造は嫌いだと……………シン・榊・アマツは、最期の瞬間まで己が信条を曲げぬまま現世との繋がりを断った。

「勝、……………つた……………」

シンの昇天を見届けたアルヴィンは、ゼンマイ発条の切れてしまった人形のように仰向けに転倒した。

もはや、大地の冷たさすら感じられない。空の青さも、何も視えない。今度こそ、俺は死ぬ。

疑いようもない。魔法が解けたのだ。光の祝福はこれにて時間切れ。むしろ、今までよく動き回れることができたなど我ながら驚くばかりである。

守り通すことができた。

悔いは、きつとないのだろう。

ああ、だが、強いて言うのであれば。

「ジェイス……親父……そして……ヴァルゼライド閣下。すまない。約束だが……守ることは、できなかつた」

そのままの、優しいお前でいてくれという願い。

そんな温かな願いすら踏み躪り、己は破壊の光へ手を伸ばし、虐殺の獣へと変貌した。きつと自分は、あの世で閣下に殺されるだろう。

後から追いついた親父やジェイスにも、しこたま殴られるに違いない。

だが、これでいいと感じた。

心に掛かっていたモヤは、もはや毛ほども感じない。

不謹慎ながら、アルヴェイン・ロバーツは今過去最高に満たされていた。

だからこそ、醜き暴虐の獣……邪悪の化身は、ここで大人しく眠りにつくべきだろう。シンの言った通り、己は生きていてはいけない存在なのだ。

誰もから恐れられる化物になりたいと切に願ったアルヴェインだが、俯瞰してみてもそんな願いは間違っていると彼自身も分かっている。

分かっているながら、止められなかった。光の宿痾しゅくゎ。その成れの果て。

だから死ぬべき。新西暦の未来の為に。

アルヴェイン・ロバーツは、穏やかに瞳を閉じた。

その瞼の裏に、温かな光が無限に降り注ぐ、帝国の未来を夢に見て……

# Chapter XXVII ヒカリ差す世界へ／Our light

気が付けば、俺は真つ白な空間へと浮遊していた。

見渡す限り、地平の彼方まで広がっているのは無限とも思える「虚無」だった。真実  
ここには、何も無い。

浮遊していると言ったのはまさにその通りで、この空間には地に足を着ける大地とい  
う概念が存在していなかった。

それどころか、熱すら感じない。自身の身体の重ささえも、一切何も感じられない。  
すべての概念が遮断された空白地帯。

瞬時に俺は、ここは現世と幽世の境界線なのだと悟った。

いや、もしかしたら既に黄泉の世界……こういった無の極致こそ、俗に言われる地  
獄という概念そのものなのかもしれない。

どちらにしろ、俺は……アルヴィン・ロバーツは、戦死した。

無事、アドラー北部を守り通して。本懐を遂げて、死ぬことができたのだ。

……名誉の戦死、と言っているのかは、非常に微妙なところだが。

というのも、最期に見せた、あの苛烈な己の戦う姿……あの化物としての自分を、部下の全員がその網膜に焼き付けたことだろう。

きつと、恐怖したに違いない。恐怖されるほどに強くなりたいと願ったのは俺自身であるしそこに関しては悲願成就と言っても差支えはないのだが……あくまでそれは、俺個人としての感想だ。

やはり、家族同然の部下の皆に、あのような醜いところを見せてしまったのは非常に忍びない。心に傷でも残してしまつたらどう謝罪すればいいだろう、などと考えたのも束の間。

「……いいや。きつと大丈夫に違いない。瞬<sup>カブリコーン</sup>圧山羊の皆、強く気高いアドラー軍人だ」  
俺が思っているより、しっかりした奴らだ。ならば不安に思う要素など一つもないだろう。

明日に向けて、アドラーの未来の為に、今日と変わらぬ疾走を続けてくれると強く信じて……

「醜<sup>はいぼくしや</sup>き獣人は……大人しく舞台から退場するとしよう」

そうして俺は瞳を閉じて、この虚無の空間に溶けることを選択する。すなわち、素直

に死を受け入れる。

アドラーは、俺がいなくても大丈夫だ。臙に、漣に、ジェイス、ヴィクトリア……他にも、他にも……俺が胸を誇れるだけの奴らが、沢山いる。

だから、アドラーの明日はきつと無限の笑顔に溢れている。それだけは、心の底から確信できた。

その笑顔の中には、なあ……

「——ウオーライラ」

きつと……いや、絶対に。お前の笑顔もあると信じて。

……ああ、本当に……最期まで、面倒かけた部隊長で申し訳なかったけど。謝罪なんて聞き飽きているだろうから、最期に、一言だけ。

「ありがとう」

ウオーライラに……そして、アドラーのすべての人々に、深い感謝を捧げて。

俺は、安らぎの光に包まれながら永久の眠りに身を任せようとして……その次の瞬間に、その違和感は俺の全身を殴りつけた。

「ッ……!?!」



無重力だった空間に、突如抵抗できないほどの重力がのしかかってきた。

それも、上からではない。下からだ。

まるで、突風に弄ばれる木の葉のように、俺は徐々に上方へと持ち上げられていく。何が起きているのかまったく理解できない。

何だ？ 一体何が起こっている？ まさか今から地獄に叩き落とされるというのか？ ならば下に墜落するのが道理だと思っただがこれは一体どういう理屈でこうなっている？

まったく現状を理解できずに当惑する俺を余所に、どこからか少女の声が響いた。

——……………う……………ツた……………ちよう……………

何て言っているのかまったく聞き取れない。しかし、誰かの名前を呼んでいることだけは薄ぼんやりと理解できた。

……………まさか。

「……………俺を、呼んでいるのか……………？」

そう眩いた瞬間、何者かに強烈な力で両腕を掴まれた。

瞬間、頭上に降り注ぐ太陽の如き光の渦。

眩しさに目を細めた次瞬、俺の身体は一気に光の向こう側へと引き上げられるのだつた。

……

……

……

——……う……ちよう……

誰かが、俺を呼んでいる。

——……ツた……口……ちよう……！

少女の声だ。それも涙に濡れた、相当に逼迫した声色である。ただ事ではない空気をありありと感じられた。

——……ロバーツ隊長……!!

熱い水滴が、俺の臉に降り注いだ。

どうやら少女は泣いているらしい。

一体何に涙を流しているのだろうか？ どちらにせよ、誰かが泣いているのであればそ

れを止めるのが軍人の責務だ。

場所が地獄だろうと天国だろうと、その役目が変わりはない。

だから俺は、鈍い痛みの奔る全身に鞭を振るい、緩慢に瞳を開いた……その、先には。

「ロバーツ隊長ツ!!」

「——……ツ……ウォー……ライラ……？」

俺の右手を宝物のように握りしめ、大粒の涙を雨のように溢して泣きじやくるウォーライラが、そこにはいた。

現状を把握できない。俺は死んだのではなかったのか？ どうしてここにウォーライラが？

まさか……ウォーライラも死んでしまったのか？

最悪な想像が脳裏を過った刹那、しかしそれは違うと煌々とした輝きが証明した。

「……第二太陽」  
アマテラス

俺が見上げるウォーライラの泣き顔……さらにその先に、変わらぬ光を地上に注ぐ第二太陽が、そこにはあった。

つまり、ここは現世。紛れもない現実で、どうやら俺は死に損なってしまったのだと自覚する。

いや、しかしそれはあり得ない。自分で言うのもなんだが、あんなに深刻に人体を破壊し尽くされて生きているなど、もはやどのような奇跡が舞い降りてもあり得ないだろう。死んでいなければ逆におかしく、なぜ自分は今こうしてまともに呼吸できているのか？

無論身体の節々はまだ激痛の悲鳴を上げているし、満身創痍なものには変わらない。

放っておけばやはり死んでしまうのは疑いようもないが、しかし失ったはずの心臓がちゃんと血を通し脈動しているのはどう考えても不可思議なことこの上無くて……

「よか、った……ロバーツ隊長……目を、覚まし——ゴッ、こふつ、ガ、アアアッ……！」

その瞬間、ウォーライラが激しく咯血した。

俺の胸にぶちまけた血の塊には、粥状に溶けた内臓の一部が痛々しく浮かんでいた。

そして自身の身体の違和感によりやく気付く。

俺の身体の傷は、徐々に塞がっていた。つまり、回復している。

これによって導き出される結論なんてものは、一つしかなく——

「ウォーライラ……！ お前、星を使っているな!? やめろ、今すぐ解除しろ！」

そう、ウォーライラは自身の星辰光を全力で行使し、俺の損壊した肉体を回復させていた。

星の力を注ぎ込むたび、ウォーライラはむせるように血を吐き散らかし、その激烈たる反動差に四肢を振らせている。

見てみれば、ウォーライラもボロボロだ。致命傷とまではいかないまでも身体の隅々に裂傷が刻まれており、見ているだけでも痛々しい。

いいや、それよりも何よりも、今心配すべきはウォーライラの内部器官だろう。あれほど長時間の能力行使、内臓系に甚大なる負担が課せられているのは言うまでもない。

外傷はある程度能力で回復できても、反動差による身体へのダメージは到底殺しきれるものではないだろう。

このまま能力を使い続ければ——ウォーライラは、死んでしまう。  
駄目だ、それだけは絶対に！

「ウォーライラ、これは隊長命令だ……！　今すぐに星辰光アステリズムを解除しろ！　俺なんて見殺しにしてい！　自分の命を優先にしてくれ、頼む……！」

「お断り、します……！　まだだ——隊長、私は貴方を諦めないッ……！」

俺の哀願を真つ向無視し、ウォーライラは願うように自身のアダマントタイトを強く握りしめ、全力で星の力を稼働する。

やめろ。やめてくれウォーライラ……！　俺にそんな価値なんか存在しない……！

「お願いだウォーライラ……！　俺なんかのためにその尊い命を犠牲にしないでくれ……！　俺にそんな価値はない、ないんだよ決して！

お前が命を賭けるだけの価値は、アルヴィン・ロバーツにありはしない！ 幸せになるんだろう、ウォーライラ!? だったら、こんなところで——」

「——うるさいツ！ 価値がないだなんて、そんな悲しいこと言わないでくださいよ馬鹿隊長ツ！ そんな訳ないでしょう!!」

その時、有無を言わせぬウォーライラの悲痛な叫びが俺の鼓膜を殴りつけた。

実際に覗かせたウォーライラはその言葉通りに……本当に、悲しそうな瞳をしていた。

「……だが、事実だ。俺は、歪んだ憧れを抱いた醜い『化物』だ。黄金腕輪ドラウブニルも言っていたが、この新西暦に生きていいような存在じゃない。どう考えても、悪性の異分子だ。だったら、いつそこで大人しく死んでしまった方がいい。俺のような危険な男は、アドラーに必要ない」

そもそも俺は死の瀬戸際で、軍人としての本懐ではなく己自身の欲望を優先させたよな男だ。

結果的にその覚醒がこの北部を救うことになったとはいえ、それも結果論だ。綱渡り

だったの言うまでもない。

俺が暴走してカンタベリーだけでなく同胞を射ち殺していたかもしれない可能性は、ゼロではなかったのだ。

ならば結論は簡単に出せるだろう。死ぬ運命にあるなら、それを潔く受け入れるべき。

部下の命を投げ捨ててまで、俺自身は生き延びてやろうなどと思うほど、俺は情のない男じゃない。

だがウォーライラはそんな俺の願いは聞き入れない。それどころか、ニヒルな笑みを浮かべて。

「死んだ方がいいって、誰かに言われたんですか？」

「……何……？ ウォーライラ、それは……」

「敵国の奴らじゃなくて、アドラーの誰かに。仲間に、私達に！ 隊長は死んだ方がいい奴だって、言われたのかって聞いてるんですよ！」

「……それは、言われていない。だが——」

「ああもう本当に面倒くさい人だなあ！ 周りをよく見てみてくださいよ！ みんなのことが見えないほど、隊長は無慈悲な人なんですか！」



「……みんな……？」

言われて、俺は首を動かしながら一帯を見渡した。そこには……

『死なないでください!! ロバーツ隊長!!』

」

傷だらけになった血塗れの部下達かぞくが、皆一様に瞳に涙を浮かべて俺を囲んでいた。死なないで欲しい——心からの願いを、大唱和しながら。

「ロバーツ隊長……! 死なないでください! また剣の稽古つけてください! 俺、もつと強くなりたいんです!」

「隊長、おいてかないでください……! また一緒に呑みに行きましょうよ……帝国の未来はつて、また話聞かせてくださいよお……!」

「アドラーにはロバーツ隊長が必要なんです……! ううん、瞬圧山羊カブリコーンの隊長はロバ―

ツ隊長じやなきや、私嫌ですよ！ 私、まだロバーツ隊長と一緒にアドラーを守りたいです……!!」

次々に飛んでくる部下達の涙声。それらすべてに負の感情は一切なく、それどころか聴こえてくる音色のすべてが、俺に生きて欲しいと願っている。

紛れもない、温かな光の声。俺に死んでほしいなどと願っている隊員は、ここには一人もいなかった。

「……生きて欲しい。生きて欲しいんですよ、隊長。瞬<sup>カブリコ</sup>庄山羊の皆、隊長に死んでほしくないって本気で、心の底から願っているんですよ。

何でだか、分かりますか、隊長？」

その時、ウォーライラの声色が一際柔らかな優しさに包まれて。

「みんな、隊長のことが大好きだからです。愛しているんですよ、嘘偽りなく。本気で、心の底から。」

それは、隊長がみんなのことを同様に、心の底から愛していたからですよ。隊長が隊員一人一人に真摯に向き合って、優しい光をみんなに与えてくれたから……みんな、隊

長のことを大好きになった。貴方は、みんなにとつての「光」だから」

「……ッ……しかし……俺は、そんな光よりも……最期の最期で、破壊の光に手を伸ばした。そんな俺を、許せないとは思わないのか……？」

「だつて隊長そんなこと言つておきながら、その「破壊の光」とやらになり切れてないんですもん。」

言つてましたよね、隊長。「守り切る」……つて。壊す、殺すじゃなくて、守る……なんて。如何にも隊長らしいです。結局最後の最後まで隊長の心を占めていたのは、その温かな優しい「光」なんですよ。

しかも、本当にあの場にいた私達全員を守り通してみせるなんて……それで、なんで許せないとか、死んでほしいとかいう話になるんですか？ 私達、隊長に命を救われたんですよ。命の恩人……ううん、今回のことだけじゃなくて、ロバーツ隊長は、みんなにとつての恩人で……

ああ、もう面倒くさいですね。

……つまり、隊長はどこまでいっても、隊長なんですよ」

すなわち「優しき光」であると……ウォーライラはどこか呆れたように呟く。

そして涙を流し続ける隊員たちを一瞥し、まるで寿ぐように、言葉を優しく紡ぎ出した。

「これは……貴女が掴んだ勝利ひかりですよ。

胸を張ってください、隊長。貴方の旅路は輝いているんです」

「

泣き笑うウオーライラに対して、咄嗟に言葉を返せない。

吐き出そうとした言葉は、否定の言葉だったのだろうか。その答えは自分ですら定かではないが、確かなことが一つだけある。

「……親父。ジェイス。ヴァルゼライド閣下……貴方達の言葉は、間違っていないかった」

優しき光は他者を救うという言葉。

それは紛れもない真実であったと、俺は身を以て体感している。

何故ならば、俺は今、皆の与えてくれている「優しき光」に触れて、年甲斐もなく熱い涙を流していた。

心が震えて、血潮が熱く滾ってくるのを止められない。

否応なしに、しとどに溢れ返る雫の大粒は、紛れもない歓喜の証だった。

俺は、こんなにも、愛されていたのか。

そして、俺の「光」は……こんなにも多くの人々を救っていたのか。

そのことが、嬉しくて……たまらなくて……我慢なんて、できるわけもなくて。

だからこそ、俺は気付いてしまう。

俺自身の、真正正銘の真実に。

俺は、化物に憧れていたつもりだった……だが、俺はどうやったって、英雄はげものには成り切れない人間だった。

だって、そうだろう？

「やっぱり俺は……優しい光こっちのの方が……いいなあ……」

誰かに恐怖を与え、破壊を撒き散らすよりも、温かな光に触れている方が己の勝利しあわせになるのが、アルヴィン・ロバーツの真実に他ならないのだから。

誰かを壊す光ではなく、誰かを照らす、優しい光。

歪んだ憧れはもういらぬ。今俺がここにいる場所とそこに差す光こそ、真実俺の求

めていた幸せしやうりに他ならなかった。

頬を濡らす雫の温かさに、疑いようなない充足感が胸の中に萌芽する。

何処まで行っても、誰かを壊す光にはなりきれない、中途半端な光狂い。

そんな自分が、今は何よりも誇らしかった。

……

……

……

熱く涙を流す隊長を瞳に映して、私は己が身を苛む激痛すら忘れたまま、自然と口角が吊り上がるのを感じた。

ああ、私……笑っているんだ。そして隊長は泣いていて……なんだかおかしい。いつもは立場が逆のはずなのに。

私、うまく笑えているかな。可愛く笑えているかな。

こんな局面でこんなことを考えるのは不謹慎だと分かっているけど、高鳴る心臓を止められない。

柄じゃないと自覚しつつも、やはり好きな人の前だと、どうしても不安になってしま  
う。

生きて帰ることができたなら、笑顔の練習しなきゃだなあ、なんて考えて……  
ふと強く握り返された隊長の指先に、私の意識は飛び跳ねた。

「なあ、ウォーライラ……」

「なんですか、隊長」

隊長の回復作業を休めないまま、平静を装って言葉を返す。

両の口端から血塊が零れたが、気にしない。隊長はまだ重症だ。能力の使用を途切れ  
させるわけにはいかない。

「今更何だが……いや、本当に。何から何まで面倒かける隊長で申し訳ない」

「本当に今更ですね。まったくですよ」

「いつも俺の尻拭いさせてばかりだ、本当にありがとうな」

「それが副隊長の務めって分かってからは、もう諦めてます。お気になさらず」

「ははは、耳に痛いな。だが安心しろウォーライラ。お前の気苦労もこれで終わりだ。

必ず二人生きて帰って、今度こそお前の幸せを見つける手助けをしよう。その為にまずは軍の退役手続きを——」

「馬鹿隊長。阿呆ですか。鳥頭なんですか？ 私の言ったこと忘れないでくださいよ。言ったでしょう、幸せなら、もう見つかったって」

貴方の隣にいたいとも。

「……ああ、そういえば、言っていたな。すまん。なあ、ウォーライラ……その幸せって……」

「……本当、隊長って鈍感クソバカ野郎ですよ。だから、えつと……つま、り……ガツ、ゴホツ——」

「ツ、ウォーライラ！」

瞳の奥で稲妻が弾けた次瞬、私の意識は灰色に混濁した。

光の速度で血の気が引いていく。世界との繋がりを断たれたような喪失感が四肢を貫いた。

どうやら、真正正銘の限界が訪れたらしい。

踏ん張りが利かなくなり、地面に沈んでいく私の上体。視界の隅で揺れる隊長の切迫



した表情。

私に向けられた深刻な瞳に、死の瀬戸際にも関わらず嬉しいという無垢な感情が浮上してしまふ。

……ああ。でも、もしかしたら、私はもう助からないかもしれない。

あれほど無理な能力の過剰使用。自身の内部が今どうなっているかなど、考えたくもないし、仮に考えたところでどうにもならない。それにそんなこと、今更恐ろしいなんて思わない。真に恐れるべきは……ロバーツ隊長に、この想いを伝えられないまま死んでしまうことで。

でも、なんて言ったらいいのだろう。

思えば、これが私にとっての初恋。だから勿論、今まで告白なんてしたことない。

……ああ、駄目だ。気の利いた言葉の一つも出て来やしない。一秒だって、時間はな  
いというのに。

素直に、好きだ、愛していると伝えようか？　しかしそんなありきたりな言葉で、この鈍感馬鹿隊長は私の想いに勘付いてくれるのだろうか？

「……ううん、そうじゃ、なくて」

やはり、そんな言葉では相応しくないと、自らの中で結論付ける。

……ああ、そうだ。彼は、私の運命そのもの——アルヴィン・ロバーツ。ならば捧げる言葉は、最初から決まっていた。

——いつの日か貴方がくれた愛の言葉で、貴方の心も温めよう。

「私は、貴方に出会えたことを心から感謝しています。

生まれてきてくれてありがとう、ロバーツ隊長」

「ウォーライラ——」

涙を流し叫ぶ隊長を最後に、私の視界は闇に包まれる。

……お母さん。私、幸せになれたよ。

ありがとう、ありがとう、ありがとう……

そして、私の意識は、真つ暗闇の世界へと転落していった——その、間際に。

「ええ、私も幸せよ。

リディア——ありがとう」

母の祝福に満ちた涙声を、確かに聞いたのだった。

## Chapter Final 貴方と生きる新西暦

## (せかい) / Silverio Metamorphosis

死者の魂は、安らかに眠らせるべきである——

この言葉に異を唱える者はほぼいないだろう。

死生観という神秘的且つ抽象的な概念に対し、その考え方や捉え方は千差万別だ。

「これだ」という絶対的な思想や結論付けがないからこそ、「死」という概念は神秘性の塊であると無意識下に人々の心に植え付けられている。

ゆえに人々は「死」を恐れ、時には尊んできた。それは切っても切り離せない、人として生きるための宿命であり共通認識だ。

そう安易に固着化させてはいけない概念であるからこそ、そういった一定の共通認識、暗黙の了解というものは重要である。

そう、死者への鎮魂とは静謐で厳かであるべきなのだ。

ここは、そんな人々の「死」という概念への願いが凝縮された場所。

晴れ渡る蒼穹とは対称的に、その空間には一面として灰色が広がっている。流れる空  
気もどこか重たく、肺が冷えてしまうほどに冷たい。

ここは集団墓地。

死者の魂を安らかに彼岸へ還す場所であり、人々が鎮魂を捧げる神聖な領域だ。  
そんな墓地の一角に、その男はいた。

—

中腰の状態で両目を閉じ、静かに……そして深く哀悼を捧げているのは、アドラーが  
誇る黄道十二星座・瞬圧山羊隊長、アルヴィン・ロバーツその人だった。

彼が両手を合わせている墓石には、“Warlyla”と刻まれている。

彼は今日、墓参に訪れていた。

八か月前にアドラー北部で巻き起こったカンタベリーとの大激戦……そして、神祖滅  
殺作戦。その戦死者たちを弔うためだ。

アルヴィンは己が業務がどれだけ多忙を極めようと、月に一度は必ずこの墓地に訪れ  
るようにしていた。

母国のために命を賭けて戦ってくれた英雄たちへ、深い敬意と感謝を捧げるために。

そして、その意志は己が引き継ぐ、だから安心して眠りについてほしいと、数多の魂に安心を与えるために。

長い追悼を捧げていたアルヴェインが、ややあつて瞳を緩慢に開いた。

その表情からは、今彼がどういった感情を胸中に抱いているのかは伺い知ることにはできない。

ただ儚く揺れる瞳の光は、墓石の文字のみを静かに映していた。

深いため息を一つ吐き、アルヴェインが立ち上がる。

視線はいつまでも墓石を捉えたままだ。

そうして冷たい空気に包まれながら墓石の文字を見つめること数分、アルヴェインは、ふつと優しい微笑を浮かべながら口を開いた。

「……母君殿。貴女のご息女は、とても立派ないい子だ。貴女の教育の賜物でしょう。

できれば、ご存命のうちに一度お会いしたかった」

紡ぎ出される言葉は、嘘偽りの全くない真つすぐなものであった。

心の底から吐き出される深い感謝と、そして愛。

アルヴェインはどこまでも真摯に、真心を籠めて、死者の魂と向き合っている。

「俺は、ウオーライラと出会えた運命に感謝しています。

——ウオーライラを生んでくださり、本当にありがとうございます。俺は、あの子に救われた。数えきれないほど、何度も、何度も。

だからこそ……いいや、例え、そうじゃなかったとしても。

ウオーライラの未来は、俺が命を賭けて守ります。アドラー軍人の名に懸けて、ここに誓います。

だから、どうか、安らかに」

再びアルヴィンは瞳を閉じ、深い哀悼を捧げた。

優しい熱を宿した誓いの木霊が墓地の空気に溶けようとした、その間に——

「隊長」

——優しい風が、二人の間を吹き抜けた。

……

……

……

私の声に、隊長が振り返る。

その力強い瞳と目線が合って、私は思わず破顔した。

ああ、この人は本当にお母さんの魂と真剣に向き合ってくれたんだということが、ありありと伝わったからだ。

まあ、憂うまでもなく隊長はそうしてくれると信じていたが、やっぱりいざ実際にしてもらおうと、嬉しくなるし心が震える。

きつと、お母さんも喜んでくれているに違いない。そうであって欲しいと願う。

私の姿を認めた隊長は柔らかな表情を作り、吹き抜ける風に銀髪を揺らしながら言葉を



投げてきた。

「そつちはもう終わつたか？」

「はい、お陰様で。全員分追悼してきました。

……隊長も、ありがとうございます。母もきつと、喜んでいると思います」

あの瞬<sup>カブリ</sup>山<sup>リ</sup>羊<sup>コーン</sup>と第三<sup>ジ</sup>軍<sup>エー</sup>団<sup>ド</sup>の全面戦争から早八か月……晴れ渡る青空を見上げながら、私は過去の出来事感慨深く反芻していた。

あの激闘の後、私は能力の反動差の影響で気を失い、すぐさま北部駐屯地の医療班へと担ぎ込まれた。

出鱈目すぎる星の過剰励起に、私の内臓は煮詰めまくったスープのような惨状になっていたらしい。

だが、それでもさすがアドラーが誇る医療班というべきか。私は今こうして五体無事に大地に両足を着けることができています。

それでも、三日ほどの意識不明状態、星<sup>エス</sup>辰<sup>ペラ</sup>奏<sup>ラント</sup>者の回復機能を以てしても一か月は絶対安静を言い渡されたくらいには危篤状態だったわけだけでも……

過ぎ去ってみればいい思い出……なのかもしれない。もう二度とあんな無茶な星の

使い方はしたくないけど。

ともかくにも、生きているだけで重畳だ。こうして今も隊長の隣に立てているという現実には、心からの感謝を神様に捧げる。

「時の流れは早いものだな、ウォーライラ。あれから早八か月か……ジェイス達は、本当によくやってくれた。彼らの活躍無くしては、新西暦の平和は無かつただろうな」

私と同様に、隊長も八か月前の出来事を振り返る。

そう、私達が第三軍団と死闘を繰り広げていた最中、神祖滅殺という本命の作戦は無事完遂されたのだった。

一時は世界そのものが結晶化してしまうという空前絶後の事態に、私は絶望を通り越して乾いた笑いしか出てこなかったのだが……

これも一重に、神祖滅殺という難行を成し遂げてくれた英雄たちのおかげだ。隊長の言った通り、彼ら無くしてこの平穩は得られなかった。

だから本当に、心の底から感謝している。だって、私はまだ、生きていたいから。

「……しかしウォーライラ。今更問うべきことじゃないのかもしれないが……お前、本当に軍人を続けるという選択を取って良かったのか？ 俺に気を遣っているなら、無理す

ることはないんだぞ？」

その時、隊長は言いづらそうに視線を外しながら私に問いかけてきた。

いや、本当に今更過ぎるし、何度も言ったじゃないですか。

「何度も言わせなくてください。私は軍人を続けます。それが私の『勝利』しあわせですから。

……それに、私が抜けたら、誰がロバーツ隊長の手綱を握るんですか。ただでさえ北部の隊長格はジェイス隊長とロバーツ隊長とかいう両方ストツパーがぶつ壊れた光狂いなんですから、私みたいな常識人がいないと崩壊するでしょう。色々」と

「ははは、違ういな」

清々しく笑う隊長とは対称に、私は頬を赤く染めていた。

本音を言えば、貴方の傍にいたいから……貴女の隣と言う場所が、私のとつての幸せだから……とは、未だに言葉にできずにいた。

いや、八か月前のあの戦いの時、一応面と向かつて伝えたはずなのだけれど、案の定この馬鹿隊長、私の想いにまったく気づいていなかった。

多分友愛の情かなんかと思っっているのだろう。無論隊長へ捧ぐ思いの一つにそれも加味されているのは違いないが、それ以上に私は『女』として隊長に言葉を捧げたのだ。

それなのに微塵も勘付いた様子がないとか、本当に何なんだこの人は。朴念仁という

言葉ですら生温い。

ちやんと言葉にして伝えなければと常々思つてはいるのだが、なんか改めて想いを打ち明けるとなると羞恥心と恐怖心が勝つてしまい、結局今日まで至つてしまつてゐる。

我ながら情けない限りである……まあ、それはそれとして。

他にも、私が軍に残つた理由がもう一つだけあつた。

それは、不自由な生活を強いられている子供たちの救済。

具体的に言うくと、貧困により満足な生活を送れなかつたり、親に虐待され愛のない環境で育てられている子供たちを助けたい。

それは軍人と言う立場を利用して出来る、私の唯一の叶えたいことだつた。

すべては、もう私みたいに惨めな想いをする子が生まれてしまわないように。

世界には地獄だけじゃない、確かに温かくて優しい光も差しているんだと、少しでも彼らに教えてあげられることができたのなら。

私がかつて、その光に救われたように。

今度は、私が救つてあげる番だ。光とは、繋ぎ、結び、受け渡していくものだ。

つまり、光は伝染する。私は、隊長から与えられたこの優しい光で、新西暦の“誰かを救つてあげたい。

それが、今私が軍人として駆け抜ける理由。隊長もそんな私の願いを聞き届け、満面

の笑みで「俺にもぜひ協力させてくれ」と言ってきた。

あの隊長の太陽のような笑顔は、しばらく忘れられないと思う。

「……変わったな。私も」

爽やかに吹き抜ける風に乗せ、小声で呟いた。

ああ、本当に私は変わった。

少し前まで、こんな世界は地獄そのもので、生きていくことそれ自体が苦痛だったの  
に……今では、こんなに世界が輝いて見える。まるで、魔法にかけられたみたい。

新西暦のすべてが愛おしく見える……なんて言うには、ちよつと大袈裟が過ぎるけ  
ど。

それでも、今はこの新西暦が、少しだけ愛おしく感じる。優しく、抱きしめてあげた  
いくらいには。

「……隊長。最後にもう一回だけ、母に挨拶してもいいですか？」

「ああ、勿論だ。存分に言葉を交わすといい」

隊長に促されるまま、私は母の墓前の前に立つ。

手も合わせない。瞳も閉じない。ただ真つすぐ、墓石に刻まれた母の名前を優しく見つめて。

「お母さん。私を産んでくれてありがとう。私、今幸せだよ。本当に……心の底から、幸せ。」

お母さん……お母さんは今、幸せかな。お母さんは、私の幸せが自分の幸せって言うてたけど……そうだったら、嬉しいな。……ううん、きつとそうだよ。私、お母さんのこと信じているから……だから……」

思わず、熱い涙が溢れてくる。声が震える。視界が滲む。

でも、ちゃんと伝えなきゃ。想いは、言葉にして初めて伝わるものだから。

出し惜しみなんてする必要はない。溢れだす想いを、そのまま音に乗せて……私は。

「お母さん、大好き。愛してるよ」

流れる涙を呑みこんで、万感の想いを溢れさせながら、私は母の墓石を強く抱きしめた。

愛してる。大好き、大好き、掛け値なしに、心の底から本当に……

願うなら、いまずぐ逢いたくなるほどに。また私に微笑みかけて欲しい。優しい言葉を掛けて欲しい。私の頭を撫でて欲しい。

際限なく溢れかえる母への想い。この想いが錆びていくことなんて一生ない。私は死ぬまできつと、母のことを想い続ける。

だからこそ、私は生きていかなくちや。

それが、母の願いでもあるのだから。そして、私自身の願いでもあるのだから。

懸命に藻掻いて苦しんで……光と共に駆け抜けよう。

きつと、大丈夫。私は独りじゃないから。

「……お待たせしました、隊長。そろそろ行きましょうか」

「もういいのか？」

「はい、想いは全部、伝えましたから」

「……そうか。それじゃあ急ぐとしよう！ 今日待ちに待ったジェイス達との飲み会だ。噂の終焉吼竜……いや、スカイフィールド殿達にもようやく会えるかと思うと胸が

高鳴るな、ウオーライラ！」

「で、でもスカイフィールドさんって光狂いなんでしょう……？ うわあ、嫌だなあ……ジエイズ隊長やロバーツ隊長みたいな人がもう一人増えるのか……」

そう、このあと私達は帝都に向かい、ジエイズ隊長率いる神殺しラグナロクに携わった面々との食事をする予定だった。まあ、所謂打ち上げという奴である。

事後処理や何やら、各々の多忙を理由に先延ばしにされてきた“打ち上げ”だが、ようやく今日念願が叶うというわけだ。

私はちよつと胃が重たいというか、滅茶苦茶緊張しているんだけども。

いやだってそうだろう。事前情報を聞く限り、まともな人が一人もいなさそうな雰囲気なんだから。

唯一、現第一騎士団ダイアモンドの団長を務めているザンブレイブさんという人だけ常識人の匂いを感じたのだが……重度の下戸らしく、お酒を交えた食事会になるだろう今日においてはまったくアテにならない。

つまるところ今日の飲み会、私しかストッパー的存在がいらない恐れがあり……いや待つて何その地獄。やっぱり帰ってもいい？ さつき世界がちよつと愛おしく感じるとか言っちゃったけど撤回させてもらっていいかな。やばい、マジで泣きそう。

……まあ、でも。



「——とか言いながらウオーライラ、お前、笑っているじゃないか。実際のところ、ちよつと楽しみなんじゃないか？」

「——ご想像にお任せしますよ。ふふっ」

貴方の隣なら、どんな世界でも輝いて見えるから。

何故って、貴方は、私にとつての“一番星”だから。

貴方のくれる光があれば、きっと私はもう、迷子になることなどないだろう。

光を導しるに、どこまでも歩いて行けると信じているから。

だから私は、弾む気持ちをそのままに、隊長の左手を自身の右手に取った。

そして隊長の手を引いて駆けだす。戸惑う様子が伝わってくる隊長に構うことなく、私は一瞬、大好きな人に振り向いて。

「ほら、早く行きましょう——アルヴェイン隊長」

新西曆<sup>セカイ</sup>で一番、大好きな人の名前を囁いた。

……ああ、でもきつと鈍感な隊長のことだ。事も無げに、「ああ、そうだなウオーライ」  
「ラ」とか言っちゃうのだろう。私の気持なんか微塵も気付かずに。

本当、罪作りな人だよなあ、と視線を前方へ向きなおそうとした、その瞬間に。

「ああ、そうだな——リディア」

「

……世界は目まぐるしく変化していく。

時には魂が引き裂かれるような苦しみを味わい、世界の不条理さに涙を流し絶望する日もあるだろう。

だがそれでも、光差す場所は、どこかにきつと存在するのだ。私はそれに気づくことができた。

月並みな言葉ではあるが、世界はきつと、自分が思っているよりもほんの少しだけ優しいのだ。私はそう信じている。

そう信じていることで、自分自身も成長し、時には変革すら齎して……そうして、見える視界せかいも変わっていく。

これが、私の変わる世界<sup>メタモルフオシス</sup>。

リディア・ウオーライラが地獄を抜け出し掴み取った、真の勝利<sup>しあわせ</sup>。

地獄<sup>なみだ</sup>の先にも笑顔<sup>はな</sup>は咲くのだという、真実の幸せ<sup>しよろり</sup>に他ならない。

貴方と一緒になら、どんな新西暦<sup>セカイ</sup>も怖くない。共に歩んでいける強さが確かに私達にはあるはずだから。

この光がある限り、どこまでもどこまでも飛んでいけると……信じているから。

「……? どうした、そんな呆けた顔をして。俺、何かまずいことを言ったか?」

「……うん、何でもありません。隊長らしいなって思っただけです」

「なんだよそれ。褒めているのか?」

「——ねえ、隊長」

「うん?」

だから、この優しい光で、この新西暦<sup>セカイ</sup>を包んでいこう。それが、私達が望む、みんなにとつての優しい世界。すなわち、笑顔の光に溢れた新西暦<sup>セカイ</sup>。

貴方となら、そんな新西暦<sup>セカイ</sup>を創り出していけると……変えていけると、信じているから。

「私、アルヴィン隊長に出逢えて幸せですよ。私を変えてくれて、ありがとうございますごさいます」

「——そんなの、こちらこそだ。俺と出逢ってくれてありがとう、リディア」

そして私たちは、生えかけの翅つばさで、不器用に——けれど、どこまでも高く、光輝く新西暦みらいへと飛翔する。

優しい新西暦せかいを創り出すための第一歩を——二人同時に、踏み出したのだった。

r  
i  
c  
o  
r  
n  
〈

シルヴァリオ

メタモルフォシス

F  
i  
n

〉シルヴァリオ

ラグナロク

S  
i  
d  
e  
:  
C  
a  
p